GARASU NO BARA • YUU GODAI

KADOKAWA HORROR BUNKO

五代ゆう

玻璃（ガラス）ノ薔薇（バラ）



角川ホラー文庫

五代ゆう（ごだい　ゆう）
奈良県生まれ。小説家。『はじまりの骨の物語』で第四回ファンタジア長編小説大賞受賞。著書に『機械じかけの神々』『遥かなる波濤の呼び声』『〈骨牌使い〉の鏡』『晴明鬼伝』などがある。



H
97-2
Y629
五代ゆう
玻璃ノ薔薇
角川ホラー文庫

玻璃（ガラス）ノ薔薇（バラ）

五代ゆう

KADOKAWA HORROR BUNKO

角川ホラー文庫
13073

玻璃（ガラス）ノ薔薇（バラ）
五代ゆう
角川ホラー文庫
13073



玻璃（ガラス）ノ薔薇（バラ）

五代ゆう

角川ホラー文庫
13073

【一九二九年十月二二日・午後四時十二分】

——尚美さん、

君は、はたしてこのメモを読むことができるのだろうか。いや、この手帳を手に取ることがそもそも君に可能なのだろうか。だがとにかく、君がこの文章を目にしてくれることを期待して、この記録をつづることにする。……

今、すわっている机はしっかりした樫（かし）材の重厚な品だ。真鍮製（しんちゅうせい）の銘板には読めないドイツ語で何か書いてあるから、おそらく高価な輸入品なのだろう。

椅子も同じらしい。ゴブラン織りの椅子のクッションが心地よく腰を支えている。さっき、階下で大時計が四時を告げた。ひらいた窓から見えるのは、風に葉を鳴らす松の枝と、残照に映える海の風景だ。潮騒がここまで響いてくる。

部屋はだいたい八畳から十畳程度の大きさで、漆喰（しっくい）の壁に飴色（あめいろ）の腰板がよく映える洋間になっている。天井には、小さいながらしゃれた形の電灯がそなえられている。机と同じ

く、どっしりしたベッドが背中がわの壁に押しつけてある。
そしてこれを書く手の横にはガラスの火屋(ほや)のついたオイルランプと、さっき持ってきてもらった、最新の新聞が乗っている。日付は、一九二九年一〇月二一日。本土から船で持ってきてもらうので、新聞や雑誌は一日遅れになってしまうと言われた。
すると今日の日付は、一九二九年一〇月二二日ということになる。
一九二九年。
だが、そんな馬鹿なことがあるはずがない。
尚美さん、僕と君は、たしかに二〇〇三年に生きていたはずだ。
二〇〇三年、東京の東日タイムズの文化・学芸部記者、影谷貴史。
そして君、片桐尚美、僕の、つまり影谷貴史の、取材協力者。
——二〇〇三年の十月、僕たちは、住む人もなくなった瀬戸内海のある孤島に二人で上陸し、そこにあるはずの廃墟(はいきょ)を尋ねたはずだったね。
廃墟はたしかに、存在した。想像していた以上の荒廃ぶりだったが、僕たちは、何かが見つかることを期待して——いや、言いなおそう、まるで何かに引きずり込まれるように、二人してその中に入っていったのだったね。
いま座っている机を、僕は覚えている。この机は二階の、そうだ、抜けかけた階段をぎしぎしいわせながら上っていった、突き当たりの部屋にあったはずだ。そばには、虫に食

われて朽ち果てた椅子が、折れた足を上にして転がっていた。カビで黒くなったカーテンが、しめった空気の中で海藻みたいにゆらいでいた。

だが、いまそのカーテンは金糸をきらめかせて海風になぶられ、僕が座っている椅子の脚はしっかりと体重を支えて折れることなど考えられない。磨きぬかれた机の上板は鏡のようになめらかだ。ひび割れてひどく焼けこげ、土埃と鳥の糞だらけだったあれが、本当に、これと同一のものだというのか？……

さっき、廊下で君の姿を見かけた。

驚いて声をかけたが、君には、僕のことがわからないようだった。君は——なんといったらいいのだろう、まるで、プロジェクターで空中に投影された人物のように見えた。影のようになかば透きとおり、宙に浮いているように見えたんだよ。

立ちすくむ僕の数メートル先にいきなり現れた君は、しばらくぼんやりと視線を宙に投げていたが、急におびえたように立ちあがって、手で耳をおおった。

君の唇が動くのが見えたが、声は聞こえなかった。恐怖に引きつった顔で何ごとかを叫んだ君は、僕を見もしないでこちらへ向かって駆けだした。

ぶつかる！　と思った瞬間に、現れたときと同じように、唐突に君は消えた。

僕は唖然として立ちすくみ、それから君が消えたあたりに見えない落とし戸でもありはしないかと懸命にあたりを探しまわった。

もちろん、そんなものはどこにもなかった。
君はどうしてしまったんだ、尚美さん?
そして、僕たちは一体どうなってしまったんだ?

とにかく、最初から順を追って書いていくことにしよう。
考えをまとめなければならない。
僕たちに何が起こったのか、君は、いったいどこにいるのか——。

僕、東日タイムズの記者影谷貴史と、君、片桐尚美が最初に会ったのは、まだ残暑のきびしい九月の初めのころだった。
よく晴れた午後で、ツクツクボウシがやかましく鳴いていたことを覚えている。待ち合わせ場所の喫茶店に現れた君は、予想以上にきれいな人だった。どぎまぎしてコーヒーをこぼしかけた僕を見て、まあ、と目を丸くし、それからくすりと笑って、さりげなくティッシュを差し出してくれた。
あれで随分と話しやすくなった、と言ったら、実は私もそう思ってたの、と小さく舌を出していたね。昭和の未解決事件を追うなんて、いまどき流行(はや)らない企画をやる人っていい

うのはきっと、いい年のおじさんかお爺さんに決まってると思ってたから。まさか、私と同じくらい若い人だなんて、予想もしていなかったのよ、と言って。

そうかもしれない。ただでさえ、十代の犯人が引きおこした残虐事件や、無差別通り魔や、ストーカー殺人や、テロやその他やっかいなことが連日起こっている二十一世紀の世の中に、――しかも、三大新聞には負けるとはいえ、けっしてマイナーではない東日タイムズの記者が――、今さらほじくり返したところで何の益もないような、昭和も初期の迷宮入り事件について書こう、だなんてね。

僕自身、よく企画が通ったものだと思ったよ。平成になって十五年、元号がきりかわってすぐなら回顧ムードでOKだったかもしれないけれど、昭和は遠くなりにけりなんて言葉さえばからしい今の風潮からすれば、時代遅れもいいところだからね。

でも、僕はどうしても書いてみたかった。入社のとき、記者としては花形の社会部や政治部を辞退して、わざわざ文化・学芸部配属を希望したのは、そこなら少しは「遊び」を許してくれるかと思ったからだ。遊びと言っちゃ悪いが、つまり、一見役にたたなさそうな企画でも、受け入れてくれる余裕があるかと考えたのだった。

新聞記者になりながら、僕の興味は、今現在の世相とか、政治とかにはまったく向いていなかった。ごく小さいころから、僕の目はいつも過去に向いていた。

とくに日本の、大正から昭和、二度の大戦をはさんだあの時代に、たまらないほどに心

惹かれた。ガス灯に照らされながら、石畳の道をそぞろ歩くモダンガールや、粋にきめたステッキの紳士を想像してうっとりしたものだ。

開化の東京、輝くモダニズム、そしてその裏に隠れる湿った闇と狂気！　エロ・グロ・ナンセンスと称されるあの時代のほの昏い文化に、僕はなぜか、母の胎内のような快さを感じずにはいられない――。

なぜかはわからない。ただ、あの時代の空気に触れていると、なんだか故郷に帰ったような懐かしい気分になるのだ。

君にも笑われたけれど、僕はどうやら、二十一世紀という時代にはあるまじく古風な言動をするらしい。高校までのころは、級友からだいぶ妙な目で見られたものだ。大学のときにはさすがに気をつけていたし、毎日同じ人間と同じ教室に通うわけではなかったので、さほどあやしまれなかったみたいだけれど。

それに、僕が施設で育ったことを大学の友人たちは知らなかったしね。――ああ、これは君にはまだ話していなかったかな。

僕には、家族がない。僕はとある、身寄りのない子供のための施設で育った。

両親は生まれたばかりの僕を路上に放り出して姿を消した。それ以来、噂も聞かない。

施設の保育士さんと学校の先生と、それから図書室にあった手ずれのした江戸川乱歩の少年探偵団シリーズに、僕は育てられたようなものだ。

だから、言動が古風になるのも仕方ないことかもしれないね。……江戸川乱歩は僕にとって、偉大な父のような存在だった。小栗虫太郎は遥かなあこがれだった。夢野久作にいたっては、ほとんど神に近く思われた。

当時の小説誌である「新青年」の怪奇小説や探偵譚再録をむさぼり読み、それでも足りずに、休日になると神田の古書店街をあさって、古い雑誌を掘り出してきては読みふけった。情報誌の映画欄を隅から隅まで眺め、無声映画やトーキー初期作品の上映会には時間と金の続くかぎり通った。

ほかの授業では居眠りしても、歴史の授業だけは身を乗り出さんばかりに真剣に聞いた。大学ではもちろん史学科に入るつもりだったが、定員オーバーではじかれて、哲学科なんて所に入らざるを得なかったときは大いに落ちこんだ。

しかし、そこで知り合った先輩が引っぱってくれたおかげで、このご時世に、ぶじ東日タイムズに入社することができたのだから人間何がさいわいするかわからない。

何年かたっていくらかの実績をつみ、ようやく何か新しい企画を提案することが認められるようになったとき、僕は部長にこう言ったのだった。

「今の世の中だって、いきなりこんな風になってるわけじゃないでしょう。今と昔が地続きなのはたしかなんだから、昔の残虐事件を調べることで今の時代を理解することができるんじゃないでしょうか。『現代の心の闇』なんてものを解くのは社会部の奴らに任せて

おいて、僕らはもっと、その根っこの所を掘り返してみるんですよ」
——いまだによくあんな子供っぽいたわごとが通ったものだと思えてならないけれど、とにかく僕の企画は編集会議を通過し、『昭和未解決事件簿』なる連載コラムの執筆が、秋からの僕の仕事となったのだった。
　そして、その取材で会った最初の相手が、片桐尚美さん、君だったわけだ。

「この手帳なんです」
と、君は言った。
テーブルに置かれたのは古い革表紙の手帳だった。男持ちらしく、大判で重い。かなり年がたっているのか、表紙は表面がひび割れて崩れかけている。
黄色くなったページは、水に濡れたせいか波打って膨れあがり、開くとぱりぱり音をたてた。中には小さな文字でずらりと文章が書きつらねてあったが、水でインクがにじんでしまって、ほとんど読めなくなってしまっていた。
「わたしの祖父の家にあった品です」と君は続ける。
「祖父はわたしが小さいころに亡くなったそうですけど、その祖父が、ずっと大切に保存していたものだそうです。このあいだ祖母が亡くなって、あと片付けを手伝っていたら、祖父の使っていた部屋の机の引き出しからそれが出てきて……」

話を聞きながら、僕はページをめくっていった。ところどころ、文字の判別できる箇所がある。
『玻璃ノ薔薇……』と書き手は記していた。
『アリスの落とし戸……双子の姉妹……うつろな目の夫人……毒入りワイン……マントの怪人……女……うさぎ穴……狂疾の血……キネマ屋敷……』
「キネマ屋敷」ゆっくりと言って僕は顔をあげた。
「『キネマ屋敷連続殺人』のことですか？」
「わたしは、そう思います」
しっかりと僕の目を見返して、君は答えた。

キネマ屋敷連続殺人事件――。
それこそは、僕が初めての連載企画でトップに使おうと思っていた、有名な未解決事件の通称だった。
昭和四年、つまり西暦一九二九年の十月、とある小島でそれは起こった。
この島に別邸を持っていた、当時の映画界――この場合、活動写真という言い方をしたほうがふさわしいように思うが――その活動写真の、買い付けや制作を手広くやって大儲けした芳野堂伝衛門という大物興行師が、別邸の一室で、毒を呑んで死んだ。

その時ちょうど別邸には彼の一族も集まっていたらしいのだが、まるで当主の死にさそわれるように、つぎつぎとその中から五人の死者が出た、と伝えられている。

伝えられている、という言い方しかできないのは、その五人の男女というのが誰で、どんな状況でどうやって死んだのか、ということが皆目わからないからだ。

孤立した島で、しかもほとんどが血縁者ばかりで構成されたメンバーで起こった連続殺人。スキャンダルを恐れる縁者たちがよってたかって事件を隠蔽(いんぺい)し、真実は圧殺されてしまった。結局ほとんど捜査もなされないまま、資料は闇に葬られている。

その後、第二次世界大戦の混乱を経たことがよけいに真相をわかりにくくした。いまだに公式の資料には、この事件のことは記載されていないはずだ。そのとき集まっていた家族というのが、誰と誰なのかということさえ定かではないから徹底している。

だいたい、最初の死者である芳野堂伝衛門なる人物が謎の人だった。

第一次世界大戦が終結したあと、いきなり映画の世界に現れた彼は、血みどろの怪奇映画や、毒々しい怪物と半裸の女の登場する幻想映画を企画し、それを若くて無名の監督に安く作らせて、手広く小屋にかけて人気を得た。

芸術的には最低の評価を受けても、エロ・グロ・ナンセンスの文化に酔う人々にはおいしい御馳走(ごちそう)そのものだった。ずいぶんと人気を得たようだ。

当時のフィルムはほとんど残っていないので、僕も彼の作品を見たことはない。しかし

一本だけ、名前の残っている作品がある。
『玻璃ノ薔薇』というタイトルのその作品は、ジャンル的には幻想映画にはいるのだろうが、芳野堂伝衛門が、初めて自身で監督として撮ったものだという話だ。
真偽はやはりわからないのだが、陰鬱（いんうつ）なムードただようその作品はたしかにほかの俗悪なしろものとは大きく違っていて、不完全な断片しか残っていないにもかかわらず、マニアの中ではけっこうな評価を得ている。
僕も一度、ファン同士の上映会で見てほほうと思った。残っているのはオープニング、主人公らしき青年が黒いインヴァネスに身をつつんでとぼとぼと歩いていく場面や、中盤でかたき役の怪人がヒロインをさらって逃げていくところ、それに、終わり近くの主人公とかたき役の対決のシーン、二人の頭上で砕け散る巨大な薔薇窓のシークエンス程度だが、画面やカット割りの仕方があきらかに素人ばなれしている。
どうやら彼自身は、それなりに才能のある人間だったらしい。技術的に進んだ海外作品にも彼は積極的に目を向け、買いつけたフィルムをよそから引き抜いてきた人気弁士に語らせ——このころはまだ映画には音声が入っていないサイレントが主流だったから、音楽や台詞（せりふ）は上映しながら人間がつけなければならない——物見高い東京の人間の心をとらえて、ほんの四、五年の間に巨万の富を得た、という。
また、見世物小屋やサーカス（これもできれば「曲馬団」と呼びたいところ！）にも手

を出し、てき屋の大御所と組んで、浅草(あさくさ)や上野(うえの)の盛り場で大々的に興行していたらしい。こちらも相当の金になったようだ。人気弁士を引き抜いてもほかの興行師に報復されなかったのは、てき屋を通じて裏社会に太いパイプを持っていたおかげだろう。あるいはそれが、のちの悲劇を呼び寄せるもとになったのかもしれないが——経営者としてもかなりの手腕を持っていたらしく、死の直前に起こった金融恐慌も、取りつけ騒ぎが広がる中、たいした痛手も受けずに乗り越えたようだ。

しかしいずれにせよ、伝衛門自身はほとんど人前に出ることはなく、富豪となったのちも、死の場所となった島の別邸で人目を避けるようにして暮らしていたらしい。

そして、彼の死後半年ほどたった一九三〇年、ニューヨークの〝暗黒の木曜日(ブラック・サーズディ)〟に始まる世界恐慌の猛威が日本にも到り、傾きかけていた芳野堂家の家運は、今度こそ完全に息の根を止められたのだった。

おぞましい記憶に支配された島にはもはや住む人もなく、死んだ主人の亡霊が徘徊(はいかい)すると恐れられた屋敷はいつか近在の人々に『キネマ屋敷』と呼ばれるようになり、海上に亡霊のごとき姿をさらして朽ちるに任された。

あとには不吉な噂のまつわる廃墟(はいきょ)と、何本かのフィルムが残るばかり——。

「で、あなたはこの手帳の持ち主、つまりあなたのお祖父(じい)さんが、キネマ屋敷殺人に関係

しているのではないかとお思いになるんですね。失礼ですが、お祖父さんのお名前は」
「――光太郎。片桐光太郎といいました……」
君はそう言うと、記憶をたどるように窓の外の雑踏に目をやった。
「小さいころのことはあまり憶（おぼ）えていませんが、父母によれば、祖父はわたしのことを可愛がってくれたといいます。わたしも、とても背の高い人の膝（ひざ）で飛び跳ねていた記憶があります。その時、私を見ていたそのひとの目が、笑っているのにひどくさびしそうで、子供心に印象的でした――それで、憶えていたんでしょうね。
祖父も、人嫌いな人でした。いつも、何かをこらえているような顔をしていたと祖母から聞いていています。昔、刑事をしていた時期があったそうですから、ひょっとしたらその時に、事件にかかわったのかもしれません。
もし、この手帳に記されているのが祖父の手記で、祖父の心を苦しめていたことがキネマ屋敷の事件に関することであるなら、どういうことか知りたいんです」
「でも、僕だって、たいしたことは知っちゃいません。むしろ、あなたのほうが知っているかもしれない」
正直なところ、連載のトップバッターにこの事件を持ってくることには決めたものの、あまりの資料の少なさに往生していたところだった。各種図書館はもとより、大学教授や連絡のついた郷土史家や市井の研究家などにも情報を求めてみたが、役に立ちそうな資料

がいっこうに見つからない。
事件の起こった場所が孤立した島だったし、当時の縁者も関係者も、ほとんど何も語らないままその後の足取りすら消している状態なのだ。記者仲間や、インターネットの掲示板などにキネマ屋敷事件の情報もとむ、と流しておいたのだが、やはり成果はあがらず、腐っていたところだった。君が、事件の内部資料になりそうな品を持っているとメールを送ってきてくれたのは、僕にとっては救いの神だったのだ。
「ええ、でも、一人で調べるのは心細いでしょう？　正直、こういうことには縁がないから、どこから手をつけるべきか見当もつきませんし。影谷さん、あなたに、わたしの戦友になっていただきたいの、――もしよろしければ、だけど」
はにかんだような君のほほえみを見たときには、もう、僕の心は決まっていた。

あとのことはもう、君も知っているね。
僕たちは手分けして、君のお祖父さんのもとに残っていた記録を調べた。お祖父さんはやはりキネマ屋敷の関係者だったらしく、散逸してしまっていた当時の記録や、新聞記事の切り抜きなどが続々と見つかった。
つけ加えるなら、君はとても優秀な戦友だった、尚美さん。僕が君にとって、同様であったことを祈るばかりだ。

やがて僕たちは、芳野堂家の別邸跡――キネマ屋敷の所在地を特定した。それは瀬戸内海、淡路島の西十キロほどのところに位置する、小さな島のひとつだった。

住む人もないまま、松島だの、沖島だのまちまちに呼ばれていたその島は、今ではほとんど忘れ去られていた。戦時中には旧日本軍の高射砲隊が接収したこともあったそうだが、例の阪神・淡路大震災のときに、地殻変動にあって大半が海に沈んでしまったらしい。今ではもう地図にも載っていないが、高台にあったキネマ屋敷の跡だけは、奇跡的に、いまだに水の上に姿を見せていることがわかった。

僕と君は、淡路島の宿で借りたボートでかつての島に向かった。宿の人間は、キネマ屋敷という名前さえ知らないようだった。ただ幽霊屋敷という評判はあるらしく、以前、肝試しに行った観光客が帰ってこなかったことがあるとかで、「お客さんたちも気をつけたほうがいいよぅ」と真顔で忠告された。

ほんの十分ほどで、廃墟は僕たちの前に姿をみせた。

ボートを手近な岩にしっかりと固定し、波の打ち寄せる廃墟をよじ登った。海藻とフジツボでほとんど原形もわからなくなっているテラスの階段を。

連続殺人の行われた家は歳月の重みに耐えきれず崩れ落ち、屋根の残骸が傾斜を転がり落ちて波に洗われていた。

屋敷がどんな威容を誇っていたのか、想像するのは難しかった。むき出しの柱や梁が、

巨大な生物の骨格のように黒くなってそびえ立っている。満ち潮には廃墟はなかば水につかってしまうらしく、御影石らしき建材には横一線に変色したあとがある。

残っていたのは玄関ホールと二階の一部で、それ以外のところは腐食がはげしく、入るのは危険そうだった。何か残っていると期待したわけでもないが、僕たちはとにかく、あの古い革の手帳を解読しながら、見てまわれるかぎりの場所を見てまわった。

ひどい悪臭は海鳥の糞（ふん）のせいらしい。そこここに、石のようになった糞のかたまりが石筍（せきじゅん）めいて盛りあがっている。ちょうつがいの壊れたフランス窓がかたむいてぶら下がり、曇ったガラスが死魚の目のように僕たちを見つめていた。鳴きかわすカモメの声と、舌なめずりするような波音と、足音のこだまと——。

「寒いわ」と君が身震いし、「風が強いからね」と答えた気がする。

そしてふと頭上を見上げたのは神の意志か、それとも悪魔のいたずらだったのか。

僕にはわからない。ただ言えるのは、灰色に曇っていたはずのその日の空に、まばゆい光を見たこと。

そして、その光が、玄関ホールの上でなかば腐りかけていた鉄の飾り格子を透かして、白くぎらぎらと燃えていたこと——

いや、あれはただの格子なんかじゃない、薔薇（ばら）窓の枠だ、ステンドグラス——

あの意匠は——たしか、どこかで——……
そんな考えが頭をよぎり、そのあいだに、馬鹿にゆっくりとした動きで、ホールの天井部分の切石がバランスを失って崩れ、僕たちの上に落ちてくるのを見ていた。
不思議と恐怖はなく、ただしびれたような心地で、君のあげている悲鳴は耳にとどかず、ああ、これはサイレント映画だ、僕はあの映画の中にいる——『玻璃ノ薔薇』、そうだ、あのステンドグラスのデザイン、まさしくあの作品で主人公とかたき役を見おろしていたやつじゃないか——どうしてこんなところに——そう思いながら自分ではとてもスローモーに思える動きで君を抱きしめ、目を閉じ、こんなところに不用意に君を連れてきてしまったことを詫び、瞼の裏ではげしく回る色——色の渦——まるで薔薇のような、薔薇のような——を見つめ、そして、そして。
そして。

さっきからずっとノックの音がしている。
前の部分を最後まで書いてからドアを開けに行くと、さっき、最初に目覚めたときに入ってきて、体調を尋ねて飲み物はどうかと訊いた男が立っていた。
新聞を持ってきてくれたのもこの男だ。怪奇俳優のマックス・シュレックを思わせる鷲鼻に爬虫類めいた冷たい目をしている。りゅうとした燕尾服に身を固めた男は、さっきと

まったく同じように、鼻の横から見おろすような目つきでじろりと僕を見た。
「もうご気分はよろしいですかな、和弥様」
と男は言った。僕がうなずくと熱のない口調で、
「では、よろしければ、もう皆様階下にお集まりですので、お召し替えの上、一階の居間のほうへおいでいただけますでしょうか」
「わかりました。でも僕、これ以外に服を持っていないんですが」
「ご心配なく。ふさわしいお召し物を、こちらで用意させてございます」
まるで「おまえの持ち物などはなから当てにしていない」と言っているような口調だった。「ああ、そうなの」と僕は言った。できるだけそっけない口調にしたつもりだったが、相手は毛ほども応えた気配はなかった。
「じゃあ、着替えて三十分ほどしたら行きますよ。皆さんにはお詫びしておいてください。それから、さっきは新聞をありがとうございました、蜂谷さん」
「どうぞ、蜂谷とお呼びくださいませ」
男の眉がぴりっと震える。
「わたくしは芳野堂家の執事、そして和弥様、あなたさまは、当主伝衛門様のお子様の一人であられるのです。どうぞ、そのことをお忘れなさいますな。以前にどんなご身分であられたにしても、今は、芳野堂家の立派な若さまであられるのですから」

蜂谷は出ていった。

僕はベッドに座りこみ、げらげら笑いつづけて、しまいに涙が出てくるまで笑った。

そうなんだ、尚美さん、おかしいだろう？

僕はどうやら、二〇〇三年から一九二九年へ、七十年以上の時間を飛び越えた――だって、そうとしか考えられないじゃないか――だけでは飽きたらず、謎のひと、芳野堂伝衛門の、その忘れられた妾腹の息子なんて役割にはまりこんでいるらしいんだ。

この屋敷の執事であるという蜂谷は、僕のことを和弥様と呼ぶ。

七瀬和弥、というのが、今のところの僕の名前らしい。

芳野堂伝衛門は死んだ。

自室で毒入りのワインを口にし、今朝、死体で見つかった。

見失われていた息子である和弥（僕だ！）は、父と久しぶりの再会をするために呼び寄せられてこの屋敷に到着したのだが、会うべき父は、もうその時には冷たくなっていた。ショックを受けた和弥はその場に昏倒し、ひとまず部屋に運ばれて、やがて意識を取りもどしたらしいのだが、まさにその瞬間から、僕のここでの記憶が始まっている。二〇〇三年の、僕、影谷貴史の意識が、だ。

蜂谷の話からすると、僕の意識が目覚める前にも七瀬和弥なる人間が存在していたはずだが、今のところその気配はどこをさぐっても見あたらない。服装は二〇〇三年に君と廃

墟に入ったときと同じ、カジュアルシャツと綿パンツという格好だから、意識だけ飛んできて七瀬和弥の肉体を奪った、というわけでもなさそうだ。
しかし蜂谷は僕と入れ替わる前の七瀬和弥を見ているはずなのに、いきなり奇妙な服装に変わった和弥を見て、おかしいと思わなかったのだろうか。
一九三〇年前後といえば、三一年の満州事変に始まる日中戦争から第二次世界大戦へと、日本が軍国主義の泥沼に転げ落ちていく時期にあたっていたはずだ。二〇〇三年ではごくオーソドックスなかっこうだったとはいえ、この服装は、今この時代にしては妙に見えなかったのか？
だいいち、僕と和弥という男は似ているのか？　蜂谷は僕を和弥だと信じて疑っていないようだが、そんなに僕と和弥はそっくりなのだろうか。
だけど……
いや……
……ああ、考えていると嫌になるな。まさに理性への挑戦だ。タイムスリップでもたいていだっていうのに、人間の入れ替わりまでやっちまったっていうのか、僕は。
とにかく、まずは君のことだ。尚美さん、君はいったいどこにいるんだ？
僕はあまりサイエンス・フィクションにはくわしくないけれども、昔読んだいくつかの怪奇短編で、次元の狭間（はざま）に落ちてしまった人間のエピソードを読んだことがある。もしか

して、君がおかれている状態はそういうものなのか？　見えるが、声は聞こえないし、さわれない。君のほうも、僕の存在を確かめられないようだ。

……むろん、いまの僕にできるのはただ推論することだけなのだが。

尚美さん、僕はなんとかして君を助ける。

もし、このメッセージを読めていたら——読めていることを切に願うけれども、どうか気を強く持って、助けを待っていてくれ。

どうやら今日、この時点というやつは、あの『キネマ屋敷連続殺人』のちょうど幕開けにあたる時期のようだ。

僕には、これが偶然とは思えない。

この、僕がメモを書き付けている手帳が何か判るかい。君が見せてくれた、あの古い革手帳だよ。

目をさましたとき、自分が何を握りしめているのか気づいてどんなにびっくりしたか——なにしろあのぼろの手帳が、まったくの新品になって手の中にあったんだからね。

中を開いてみると、やはりと言うべきか、書き込みはすべて消えていた。

けれども、この部屋の机の上にあった万年筆のインクの色があのにじんだ書き込みのものとよく似ているのを知って、ひょっとしたら、と思ったことがある。

——もしかしたら、あの手帳の書き込みは、他ならぬ僕がしたものなのかもしれない！

とっぴな考えだと思うかい？
でも、なんだかそんな気がしてならないんだ。
いったいなぜ僕たちが七十年の時を越えて飛ばされてきたのか、君がそんな可哀想な状況になってしまったのか、理由はまったくわからない。
でも、この新しくなった手帳は、二〇〇三年の僕たちと今の僕たちを結ぶ、大切なリンクのような気がする。
この手帳が、君が持ってきたあの手帳と同じ文章を書き込まれ終わったとき、はじけたゴムのように、時間はもとに戻るんじゃないか。
よじれた時はまたつながって、僕たちは、元の世界に戻れるんじゃないか——
——どうしても、僕にはそんな気がしてならないんだよ、尚美さん。

とにかく、七瀬和弥として僕が周囲に認識される以上、今からはじまる事件に巻きこまれることは避けられないようだ。
どうせ逃げられないなら、飛びこんでいって真相を暴いてやる。
これを書いているうちに、そういうふうに腹がすわってきた。
ドアがノックされている。着替えを届けに誰か来たみたいだ。
また、戻ってきたら続きを書くことにする。

僕は必ず謎を解いて、君を助けて二〇〇三年に戻る。
だから——待っていてくれ。

【一九二九年十月二二日・午後九時三十分】

まだ血の臭いが鼻から抜けない。
白状するが、尚美さん、僕はこの事態になったとき、少しばかりわくわくしていなかったといえば嘘になるんだ。因縁を感じさせる一族！　孤島に建つ陰鬱なる洋館！　そこで起こる、謎に満ちた連続殺人！　なにしろ、小さな時から読みつづけ、あこがれつづけてきたあの世界——パノラマ島に黒死館、ドグラ・マグラ、乱歩や小栗や久作が描きつづけてきたあの小昏い世界の住人に、自分自身がなってしまっているんだからね。
もちろん、君にとってはわくわくするどころの話じゃないだろうし、こんなことを言うのは無神経なことだとわかっている。でも僕が、いささかならず興奮していたのは、本当のことだというのを知っておいてほしい。
こんな話を今さら書くのは、それがどんなに愚かしいことだったかというのがよくわかったからだ。
殺人というのは、今まで僕が文字で読んで想像していたようなのとはまるで違っていた。これを書きながらでも、目をかっとひきむいて空をつかんでいた死体の顔が瞼に浮かぶようだ。切り裂かれた喉から噴き出す血がドロドロと床に溜まり、不気味に光を反射してい

た。あたりに凍りつく、顔、顔、顔……カタカタと映写機だけが何ごともなかったように回り続け、スクリーンには、この屋敷とまったくうり二つのゴシック式教会の威容が、うずくまるモノクロの怪物のように映しだされている――

とにかく、順を追って書いていくことにしよう。先の部分を書き終えて、ペンを置いた直後からだ。

「ああ、あなたが和弥さまですのね」

僕が扉を開けたとき、そこに立っていたのが誰だったかわかるかい。

なんと、それは君だったんだよ、尚美さん。つややかな黒い髪を古風なクレオパトラ・カットにして、婉然（えんぜん）とほほえんだ顔はたしかに君そのものだった。

「尚美さん！」僕が思わず叫んだのもわかってもらえると思う。

「君、いったいどうしたんだ？　どうやってこっちの世界に出てこられた？　それに、その格好は……？」

「あらあたしの名前知っててくだすったの、うれしいわ。和弥さまっていいお方ねえ」

そう言って、するりと部屋に入ってきた。手には大きな紙箱と靴店の名の入った箱、櫛（くし）やひげそりなど男性用の身だしなみ道具一式などが捧げられている。彼女はベッドの上にいそがしくそれらを並べながら、

「今日からあたしが、和弥さまのお身回りを受け持つことになりましたのよ。どうぞ、ナオミとお呼びになってね。何でもお言いつけになって、可愛がってくださいましな」

茫然(ぼうぜん)としている僕に振り向いて、にっと笑った。臙脂色(えんじいろ)に塗りつぶされた唇から、真珠のような歯がのぞいた。

僕は夢を見ているような気分で、うながされるままに髭(ひげ)を剃(そ)り、シャツを着替えて、椅子に座って髪を整えられるにまかせた。

その間も、何度もまじまじとナオミの顔を見ずにはいられなかった。まったく、見れば見るほどそっくりなんだ。切れ長の目も、つんととがった鼻も、少し受け口な唇も。――けれども、しばらく見ているうちに、違いもだんだんわかってきた。

ナオミには、君には感じられなかった、どこか頽(くず)れたにおいがあった。肌は一度も日に当たったことがないかのように白く、濃く紅を塗りこめた唇はたったいま血を嘗(な)めてきたかのようにぬれぬれと光っていた。黒ラシャのワンピースに白いエプロンという、伝統的なメイドのお仕着せに身を包んでいたが、僕の視線に気づいてにんまりとする笑顔にはしたたるような媚(こ)びがあった。大家のメイドにはふさわしくない、甘ったるい物の言い方もなにか違和感をつのらせる。

てきぱきとした動きはたしかにこういう仕事には慣れているらしい迷いのないものだったけれど、それでもふとしたとき、ぬれた舌に内臓をなめずられているようなおかしな感

覚が走らなかったとはいえない。身を固くしている僕をどう思ったのか、ナオミはしきりにニヤニヤしながらブラシを動かし、さあできた、と言って僕を立たせた。
「随分と立派に見えましてよ。大層いい男ぶり、あたし惚れなおしてしまうわ」
ナオミのからかうような物言いは聞き流したにしても、姿見の中にあらわれた僕自身――この場合は「和弥」なのだろうが――は、たしかにちょっとしたものだった。ナルシシズムの傾向は持っていないと思っていたが、糊のきいた白いシャツに、一目で高級なものとわかるスーツと革靴を身につけた男の姿は、まさに大富豪の父の死後、親戚たちに対面する息子にふさわしい見物に思えた。
「では、こちらへいらして。皆様のところに御案内いたしますわ」
ナオミについて廊下に出た（彼女については君と区別するため、以下、『ナオミ』と表記することにする）。廊下は男が四、五人は並んで歩けそうな広いもので、床には国会でおなじみの赤い絨毯がぴっしりとしきつめてある。天井にはひかえめな小型シャンデリアが等間隔に並び、煌々と光を投げかけていた。
この時代に、こんな島でどうやって電気を供給しているのか不思議だったが、あとで聞くと、屋敷の地下に大型ボイラーが設置してあって、それで得た動力で発電機をまわしているらしい。広く切られた窓から暮れかけた中庭が見えた。僕がいたのは、渡り廊下でつながった別棟の一間だったようだ。洋風に刈り込まれた植え込みや花壇の中で、庭師だろ

う、腹掛けをした何人かの人が働いているのがおぼろげに見えた。

ナオミに導かれて鉤(かぎ)の手になった廊下を進み、広いホールにつづく階段に立ったとき、僕はつい棒立ちになってしまった。

目の前に、あのステンドグラスがあったんだ。僕たちが初めに見たときにはすっかり割れて枠しか残っていなかった、あのステンドグラスだよ。

屋敷の正面玄関らしい、きっちりと閉ざされた樫の大扉の真上に、残照をすかしてそれは荘厳な光をはなっていた。時間を飛び越えるのと同時に見た、あの窓――サイレント映画『玻璃ノ薔薇』に登場したのと同じ品だ。

デザインとしては、有名なパリのノートルダム寺院の正面に掲げられたものに近いかもしれない。もちろん大きさはずっと小さいけれど、芸術女神(ミューズ)たちらしいギリシア風の女性像を中心に、さまざまな色彩の色ガラスが車軸状に広がり、全体として、一輪の巨大な燃える薔薇がそこに咲いたような様相をみせている。ステンドグラスのことを日本語で「薔薇窓」というらしいが、まさにそれにふさわしい美しさだった。

光の薔薇をうっとりと見上げながら広壮なホールを横切り、両開きの大きな扉の前にいきついた。扉の横で、執事の蜂谷氏がいらいらした様子で待っていた。

「皆様お待ちかねでございます」

つっかかるような調子で彼は言った。

「ではさっそく、皆様にご紹介させていただいてよろしゅうございますか」

「ああ、うん――」

反射的にナオミを振り返ろうとしたが、いつのまにか彼女はいなくなっていて、広い玄関ホールには僕と蜂谷氏以外誰の姿もなかった。

どこへ行ったのだろう、と妙に思ったが、その時には扉を開けた蜂谷氏が僕を中へ引きずり込んでいたので、それ以上追及することはできなかった。

部屋は食堂に続く喫煙室のようで、凝った草花紋の絨毯の上にどっしりしたソファが並べられ、奥で大きな暖炉がちろちろと炎をあげていた。煙草の薫りがほのかにした。中では男女とりまぜて七、八人の人間が低い声で話し合っていたが、蜂谷氏に連れられてきた僕を見ると、数人がさっと立ちあがった。

「彼かね」

最初に立ちあがった男が尊大な口調で言った。

彼は暖炉のそばの一等席にふんぞりかえって、退屈そうに一座を睥睨（へいげい）していた。集まった中ではいちばん年長で、四十代のなかばに見える。がっちりした身体は男盛りの脂ぎった精気を発散して、周囲を圧倒していた。

近くの椅子に顔色の悪い女性が小さな男の子を抱くようにして座っていて、探るような目で僕を見つめた。男の子は手に小さなブリキの飛行機を持っていて、部屋の雰囲気には

無関心な顔で、唇をとがらして何か呟きながら飛行機を飛ばすかっこうをしていた。
「さようでございます、偉雄様。この方が七瀬和弥様、あなた様の義弟君に当たられる方でございます」
「何が弟だ。おい、貴様」
と僕にとげとげしい視線を向けて、
「どうせろくでもない奴にあることないこと吹っこまれてきたんだろうが、いいか、芳野堂の長子はあとにもさきにも俺一人だ。そのことをよく憶えておけよ」
「まあ、お兄さま、仮にも初対面の方にそんなことおっしゃるべきじゃありませんわ」
甘い声で、彼の隣にいた女性が止めに入った。
言葉は丁寧でも、僕のほうに向けた目は彼女がお兄さまと呼んだ男と同等に、氷のように冷たかった。目つきはそのままに、彼女は僕のほうに親しげに頭をかたむけて、
「ごめんなさいね、和弥さま。あたくしたちみんなまだ気が動転していますの、だって昨晩お父さまがお亡くなりになったばかりなんですもの。あんまり急な話で、どうしていいかわからないんですわ。新しい弟が見つかったと言われて、楽しみにしてきたらこれですものねえ。何があったのか知りませんけど、こんな時に死ぬなんてお父さまもあんまり思いやりってものがなさすぎますわ、貴方そうお思いになりません」
「はあ……」

立て板に水とまくしたてられて、僕は返事ができなかった。返事のかわりに、僕は相手の上気した顔をまじまじと見つめた。

実に綺麗な女性だった。大きな濡れた瞳が印象的な、パッと目をひく美女だ。すらりと背が高くて姿勢もよく、鴇色のドレスに大ぶりなイヤリングを光らせている様子は一座の女王といったところだ。

彼女の言葉によると、死んだ芳野堂伝衛門は、見失っていた息子と対面するのと同時に、ほかの家族や知り合いにも息子を披露する腹づもりをしていたようだ。ここに集まっているのは伝衛門の息子と娘、仕事上の知り合い、家族の友人などといった関係の人々であるらしい。

それにしても、仮にも実の父親が死んだことに対して、「思いやりがなさすぎる」とはなんという言いぐさだろう。そこには肉親の死の悲しみではなく、やっかいな知り合いの不作法をさげすむ程度の感情しかこもっていなかった。

しかし、それは彼女に限った話ではないらしく、てんでに葉巻を手にしたりグラスをもったりしている人々の上には、悲しみに沈んだ空気はどこにも感じられなかった。かわりにそこに漂っているのは、なんともいえない猜疑心に満ちた、不安な空気だった。なぜだろう。僕は内心いぶかしんだが、その疑問も、彼女の次の言葉で氷解した。

「とにかく、こんなことになって貴方には申しわけありませんけど、今、神戸からお父さ

まの顧問弁護士の先生に来ていただくように連絡させていますの。今夜、ここへお着きになるはずですわ。

弁護士さんがお父さまの遺言書を開封して、貴方の処遇はそれから決めさせていただくことになりますけれど、よろしいですわね。もちろん、今後のことが決まるまではこちらに逗留していただいてけっこうですから、そのことは心配なさらないでよろしいのよ」

最後まで一息に言い切ると、彼女は勝ちほこったような顔で僕を見た。

なるほど、家長の伝衛門が死んだのだから、当然遺産争いの問題が発生するわけだ。要するに、彼女は僕が遺産相続権を主張することを警戒して、妾腹の息子などがあとからしゃしゃり出てきても権利など認めないということを宣言しておきたかったらしいのだ。

反論するほどのこともないので、僕は黙っていた。

「当てがはずれて気の毒だったな、小僧」

アームチェアにどっしり腰を下ろした『お兄さま』が毒々しく笑った。

「おやじがどんな遺言を残したのか知らないが、どっちにしろ跡継ぎで遺言執行者はこの俺だ。身の程知らずなことを抜かしてみろ、無一文で島を出ていくことになるからな。せいぜい、態度には気をつけることだ」

「貴子様、和弥様に、皆様のことをご紹介いたしましょうか」

それまで、影のように後ろに控えていた蜂谷氏が低い声で割って入った。

高慢に唇をめくれあがらせて部屋中をねめつけていた彼女は、驚いたように目を見張ると、ああ、そうだったわねと呟いて、ちょっと考えるような仕草をみせた。
「いいえ、どうせだからそれはあたくしがします。蜂谷、おまえは下がって食堂の支度をいそがせておいで。今夜は仮にもお父さまのお通夜なんですからね。それから離れのあの方にも、降りてきてお食事をいっしょになさるよう申し上げてきて。今夜くらいはあの女だって、家族のふりくらいしてみてもいいときだわ」
蜂谷氏は深く一礼してさがっていった。貴子様、と呼ばれた彼女は、再び僕に輝くような笑みを見せて、それでは和弥さん、と言った。
「まず、あたくしは芳野堂貴子と申します。芳野堂伝衛門の長女で、女優をしておりますの。よろしくお願いいたしますわね」
女優、と聞いて、なにか納得したような気がした。彼女の、いちいち人目を惹く動作や表情になにか計算されたものを感じて違和感があったのだが、女優というならそれも判る。
もしかしたら、二十一世紀でスクリーンの中に彼女を見たこともあったのかもしれない。
そっけなく、よろしくお願いします、と返した僕に、貴子さんは拍子抜けしたようすでしばらくこちらを見つめていたが、やがて気を取り直し、
「あちらの、暖炉のそばに座っているのが芳野堂の長男で、偉雄お兄さま。あたくしとは九つ離れております。新世界キネマの社長で、芳野堂家の事業の動かし手よ。それからそ

のそばに座っているのが、奥さまの蓉子さまと、お子さまの偉哉君」

あとで聞いたところによると、新世界キネマ社というのがこの芳野堂家の事業の中心になっている会社で、映画の撮影から配給、興行その他、けっこう手広くやっているらしい。紹介されても偉雄氏はそっぽを向いたままだったが、蓉子夫人は黙って礼をし、息子の偉哉君も、母親にうながされて飛行機をおろし、ちょこんと頭を下げた。

「そして向かって左手にいるのが、下の二人姉妹の加奈絵と茉莉絵——二人は双生児なのよ、よく似ているでしょう。神戸の女学校に通っているの、今は特別にお休みをいただいて帰ってきているのだけれど」

それまであまり注意を引かれなかったが、壁にかかった中世風の狩猟図を織りだした大きなタペストリーの下に、セーラー服姿の女学生が二人座って小さくなっていた。ぱっと見にはどちらがどちらかわからないくらい似ていたが、加奈絵と紹介された一人はいくらか顔立ちがきつく、刺すような視線で僕のことをにらみ返した。

だがもう一人、茉莉絵と紹介されたほうは、おずおずと僕を見つめ返すと、ほんのりと頬を染めてうつむいてしまった。僕はめんくらった。彼女がうつむく瞬間にうかべた笑みは、まるで親しい人間に長い空白のあとで再会したときのような、しごく懐かしげなものだったからだ。

しかしそれ以上は注意をとどめておくことはできず、続いた紹介に僕はたちまち気をと

られた。
「で、右手に集まっていらっしゃるのがあたくしの、ほほ、何ですか、将来をお約束した方で、映画監督の芳川虚彦さん——」
彼を紹介するときには、高慢そうな美貌がまるで少女のようにうっすらと頬を染めた。
芳川虚彦は剃刀で削いだような顔立ちのすらりとした美男子で、落ちくぼんだ目に熱っぽい光がちらちらするのはものの創り手の常かと思われた。しかしこれは確かに、彼女と並んだら絵のような夫婦になるだろう。
「それからお友だちで、活動弁士の野々村海道さん——」
「野々村です。よろしく」
グラスをもった手を呑気らしくあげたのは丸い黒縁眼鏡をかけた、どこかマンガっぽい風情の若い男で、かなり聞こし召しているらしく色白の首筋を真っ赤にしていた。
「大阪やなんかで、しがない活ベン仕事をやってるろくでなしなんですがね、和弥さん、あなた、僕の事ア聞いたことありませんか……これでもちいとは知られた名だと、そのなんだ、自負しておるんですがね。『サンライズ』、例の外国ものですがね、あいつを先日京都でやった時なんぞは我ながらなかなか上々吉の出来だったと思うんですが」
「さあ、すみません、僕は東京のほうの人間なんで……」
「おっとっと、そいつは失礼、江戸のお方だったんですかい。こいつはお見それいたしや

した、ときたもんだ」
しゃっくりしながら人なつこげに笑っている。
「僕も実は江戸の産(さん)でしてね、お懐かしいや。そうするとお仕事のほうは、何をなすってらっしゃったんですか」
「ええ、そうですね、文章のほうを少し……。まだ駆け出しもいいところでしたが」
「こいつは驚いた。すると、作家先生ってやつですね」
まさか未来から来た新聞記者だなどとは言えず、ぼかして答えた僕に、野々村氏はびっくりするような大声で笑った。周囲の人間、ことに偉雄氏の眉(まゆ)をひそめたのにもおかまいなしにふらふら立ちあがってきて、僕の両手をつかんで振りまわす。
「どうです和弥さん、あなた僕のために何か一本いいのを書いてみちゃくれませんか。どうもこのごろの脚色屋ってのは無粋で、野暮(やぼ)ったくていけねえや。開化東京の水でお育ンなったあなたなら、場内の紅涙絞らざるは無しって大当たりものをお書きになれるんじゃないかと思うんですが、ねえ、ひとつ考えてみちゃくれませんかね」
「野々村さんったら、もうそれくらいでお止(よ)しなさいな。……ご免なさいね和弥さん、この人ったら呑(の)むといつもこうなのよ。それでこちらが、お父さまの古いお知り合いで、伊原遼次さん」
見かねた貴子さんが割って入り、最後の一人を指し示した。

それはごま塩あたまの、貧相な顔をした小男で、年ももう五十近くに見えた。背中を曲げ、グラスをかかえ込むようにして中身をすすっていたが、紹介されているのに気がつくと、あわてたように立ちあがって僕の手を握った。
「伊原です、よろしく。……どうも災難でしたな、ええ、和弥君でしたか。せっかく生き別れのお父上に会えるとお思いになったのが、とんだことで」
「はあ、いえ、僕もなにしろ急なことでしたから——」
としどろもどろになっていると、
「伊原さんはね、兵庫県警の刑事さんでいらっしゃるのよ」
横から貴子さんが、揶揄するような口調で言った。僕は驚いた顔をしたのだろう。こちらをまっすぐ見つめながら、彼女はあざけるように、
「だから和弥さんも、せいぜいこの方に対しては丁寧にしておおきになるほうが賢明ね」
口調が甘ったるいだけ、そこにこめられた悪意は強烈だった。僕は背筋に冷たいものが走るのを感じた。
「ああ、いや、いや」伊原氏は苦笑しながら両手をあげて、
「私は、ここへ仕事をしに来たわけじゃありませんよ。……久しぶりに長い休暇が取れたので、どこかに安く泊まれる宿はないか、つまり、はっは、貧乏刑事のとぼしい財布でも心おきなく骨休めできるところはないかと考えて、そうだ、昔お世話になった芳野堂さん

を頼ってみようと考えたところがこの始末なもんですからな。どうぞ他のかたがた同様、心やすくしてやってくださいよ、和弥君。刑事じゃからとて何も、罪のないものをひっくくったりはいたしませんからな」

「では、芳野堂氏の死を調べにいらっしゃったわけではないんですね？」

僕はすこし愕然とした。

「じゃあまだ、警察のほうには報せていらっしゃらないんですか？　この屋敷で、変死事件があったことを？」

「む、む、それは――いやあ、はっはっは」

伊原氏は口ごもり、ばつの悪さをごまかすような調子で笑い飛ばしてみせた。

「それはむろん、君、いつかは警察にも報せなきゃいけないだろうが、私は今は職務を離れているわけだし、それに、御家族の方がなるべく事をおおやけにはしたくないとおっしゃるものだから。ねえ、貴子君、偉雄君」

「変死などであるものか。あれは、ただの自殺だ」

暖炉のそばから、偉雄氏が怒ったように吐き捨てた。

「第一、部屋には内側から鍵がかかっていた。――あの男は、もうずっと昔から頭がおかしかったんだ。われわれ子供や下仕えのものを全員家から追い出して、自分一人で、こんなへんぴな別邸などにたてこもって。

しかもこの一年ばかりは、終日地下室に垂れ込めたまま一歩も外に出ず、馬鹿げた仮面で顔をかくして、わけのわからないうわごとばかり並べていたそうじゃないか。……悪魔が来る、悪魔が来る、薔薇の悪魔が血の花を咲かせにやってくる——と」

一瞬、喫煙室は不気味に静まりかえった。

たった今、その言葉を口にした偉雄氏にしてからが、ぱっと口をつぐんでうそ寒い顔をしてあたりを見回したが、じきに、肩をそびやかして居丈高な態度に戻った。

しかし、その小さな目がきょときょと怯えたように動いているのを僕は見逃さなかった。貴子さんも顎をそらして、文句があるなら言ってみろと言いたげに室内を睨んでいたが、その美しい頬が、いささかならずそそけだっているのははっきりと判る。

「皆様」

指で触れられそうな緊張が高まる中、食堂へ続く扉がさっと開いた。蜂谷氏がそこに、深々と頭を下げて立っていた。

「お食事の用意がととのいました。どうぞ、食堂のほうへ——」

もしこの食事の席で新たな犠牲者が出るのではないかと予想したなら、その考えははずれたことになる。夕食はなごやかとは行かずともそれなりに順調に進み、誰も喉を押さえて苦しみだしたりはしなかったし、血を吐いて倒れこんだりもしなかった。

ヴェネチアから直接輸入したという大シャンデリアの下の、二十人掛けの長い大テーブルに僕を入れて九人の人間が座り、給仕をうけた。子供の偉哉君は別に食事をしているらしく、姿は見えなかった。

料理はかなり本格的な西洋料理のコースで、味もなかなかなものだった。とても空腹だったことに気づいた僕は、一時観察はやめにしてせっせと食べた。

食べながら、料理を運んでくるメイドの中にあのナオミという娘の顔が見えないかどうか探したのだが、見つけることはできなかった。まあいい、僕の身の回りの世話をするといっていたから、また会う機会もあるだろう。新入りの僕は偉雄氏夫妻や、貴子さんたちよりずっと下座に座らせられたが、偉雄氏のさげすみの視線や、貴子さんの毒々しいあてこすりにさらされないだけずっと気楽だった。

「おや、ひとつだけ、席が空いていますね」

ここでも調子よくワインをあおっていた野々村君が、だみ声でそう指摘した。

「ちゃんとセッティングもしてあるのに。どなたか、いらっしゃってない方でも？」

「あ、それは――」

偉雄氏が苦虫をかみつぶした表情をし、貴子さんがとりなそうといそいで口を開きかけたとき、食堂の扉が細く開いて、陰気な顔をした老女が顔をのぞかせた。

「あら、おキクさん、絢子さんは？――」

立っていった貴子さんが顔を近くに寄せ、低い声で何か言い合っていたが、やがてしぶい顔でうなずくと扉を閉めた。老女は食堂には入らず、どこかへ行ってしまった。

「お義母さま、今夜もおいでにならないのかしら」

ななめ向かいの席でうつむきがちにフォークを動かしていた、末娘の茉莉絵さんが誰にともなく呟いた。隣にいた姉娘の加奈絵さんがふんと鼻を鳴らして、

「何よ、絢子義母さまがこういう場にいらしたことなんて一度もないじゃない。そんなの、今に始まった事じゃないわ」

「でも……でも、今夜は、お父さまのお通夜なのに。……新しいお兄さまだって、初めてこちらにいらしてるのに。……」

細い、泣きだしそうな声に、僕は胸をつかれた。ほかの人間はいざ知らず、この茉莉絵という子だけは家族の中でただ一人、父親の死んだことを素直に悲しんでいる。

視線を感じたのか、茉莉絵さんが顔をあげた。ぱっと頬をそめ、顔をそらしたが、一瞬はにかむように笑った顔がずいぶん子供っぽくて、僕はまた妙な気分になった。

「その、絢子さんというのは誰か、ご存じありませんか」

茉莉絵さんに話しかけるには距離が開きすぎていたので、隣で酔いつぶれていた野々村君に僕は話しかけてみた。部外者である彼に聞くのも妙な感じだが、この席では、僕とまともに口をきいてくれそうな相手は、酔っぱらいとはいえこの人しかいない。野々村君は

いい気持ちで鼻歌を歌っていたが、薄目を開けて僕を見ると、
「ああ、そりゃ、絢子夫人のことですね。……芳野堂伝衛門氏の、三人目の細君ですよ。確か、つい二、三年前に結婚したばかりじゃなかったかなあ。今じゃ、悲しみに沈む未亡人ってわけですが」
「三人目、ですって。では伝衛門氏には、さきに二人の妻がいたということですか」
「ええ、そうですよ。君、お聞きになってないですか。そいつはいかんですなあ」
蚊帳の外におかれた僕の状態は、彼の義侠心をおおいに刺激したようだ。もともとゴシップ好きでもあるらしい野々村君は、酔っていながらもさすがの名調子で、僕がまだ聞かされていなかった芳野堂家の家族について解説してくれた。
まず、一人目の妻が、緋沙子夫人。……これは偉雄と貴子の兄妹を生んで、二十年ほど前に死んだ。死因は心臓発作だということだが、たいそう美しい女で、しかも非常に奔放なところがあり、夫の仕事がはなやかな映画や見世物業界なのをいいことに手当たりしだいに浮気をしたあげく、ある朝、ベッドの中で冷たくなっていたという。
伝衛門氏は美しい妻を溺愛しており、どんなに乱行が過ぎても文句ひとつ言ったことはなかったようだが、それでも行状が行状だったので、堪忍袋の緒を切らした夫に殺害されたのではないかという噂が当時ないこともなかったらしい。もっとも、これは伝衛門氏のアリバイがしっかりしていたのと、裏社会を通じて警察に影響力をもつ友人のおかげで、

表だって取りあげられることはなかった。

そして二人目の妻が、百合絵夫人。……茉莉絵と加奈絵の双子姉妹の実母が、この女(ひと)になる。

彼女はどこか四国のほうから流れてきた酌婦あがりの女だったらしいが、やもめとなった伝衛門と一夜の関係を持ち、その時できた女の双子をたてに結婚をせまった。

伝衛門氏は嫌がりもせず、むしろすすんで彼女と再婚し、二人の娘もきちんと籍に入れた。成金とはいえ義理堅いのはたいしたもんだと言われた半面、何かうしろぐらいことでも握られてるんじゃないかと囁(ささや)かれたという。

彼女が死んだのはそれから七年後、奇(く)しくも、僕たちが今いるこの別邸でのことだったそうだ。彼女が娘たちと寝起きしていた離れの建物から深夜、とつぜん出火し、娘たちは救助されたが彼女ひとりは逃げ遅れた。死骸(しがい)は黒こげになっており、焼け残った歯をしらべてやっと百合絵夫人本人だと確認できたくらいらしい。

母を亡くした姉妹は強い精神的衝撃を受け、とくに妹の茉莉絵のほうはかなり深刻な状態でしばらく入院もしたらしいが、今は回復して、神戸のほうの全寮制の女学校にはいって勉強しているのはさっき貴子さんが紹介したとおりだ。

「——そして三人目が絢子夫人になるんですがね、このひとがまた……」

「あら野々村さん、貴方(あなた)和弥さんとずいぶんお仲良しのようね」

上席から、とげとげしい貴子さんの声が飛んだ。
偉雄氏がとがめるような目でにらみつけ、野々村君はいっぺんに恐れ入って、席に縮こまってしまう。僕も思わず首をすくめたが、ええい、ここでひきさがっていては何もわからないままだと度胸を決めて、声をあげた。
「お義姉さん、さっきそこの戸口に来ていたお婆さんはどなたです？」
お義姉さん、の一言に貴子さんの眉がはげしくふるえた。美貌に亀裂のように嫌悪感が走るのをいささか痛快な思いでながめながら、
「そういえば僕はまだ、お父さんの死に顔も見せてもらっていない。食事のあとにでも、できればお義母さんにお目にかかってご挨拶をし、お悔やみだけでも述べたいのですが」
「貴様、調子にのるな」偉雄氏が怒声を張りあげた。
「お義姉さんだと。お義母さんだと。財産目当ての騙り風情が、身のほど知らずに――けがらわしいにも程がある。いい気になるなよ、貴様、俺のことをお義兄さんなどと呼びおったら、その場で首をへし折ってやるから――」
「あなた、あなた、皆さん見ていらっしゃいますから……」
怒りに顔をどす黒くしている偉雄氏を、妻の蓉子夫人が必死になって抑えようとする。まだ三十そこらと思われる年齢なのに、ひどく世の中に疲れたような印象があるのは、きっとこういう場面でいつも夫のなだめ役をさせられているからなのだろう。

「わかりました」
なんとなく夫人が哀れになって、僕はおとなしく返事をした。
「お気に召さないようでしたら改めます。しかし、お父……、芳野堂伝衛門氏は、今はお独りなのですか？　このお家の奥さまは、今はどなたで、どちらにおいでなんですか」
「死んだ父の妻は、絢子さんとおっしゃいます。あたくしたちと同様、ここにおります。父が死ぬ前に、家族の中でここへ連れてきたのが、唯一、彼女なんですわ」
とがった声をいっそうとがらせて、貴子さんが言った。父の妻、であって、義母、ではないんだな、と僕は思った。
「まったくいい年をして若い嫁などもらって、いい恥さらしだ」
偉雄氏が腹立たしげに口をとがらせた。夫人がけんめいに袖を引くのを払いのけて、
「仮にも妻だというなら、多少無理をしてでも人前に出てきて責任を果たしたらどうなんだ。だいたい、おやじが死んでいるのを見つけたのもあの女だというじゃないか。そうだ、気鬱だなどといって部屋に閉じこもっているのも、実は何か後ろめたいことがあるからなんじゃないのか。こんな島で、年寄りの相手をしているのがつまらなくて、若い男でもほしくなって、それで邪魔になって、おやじを……」
蓉子夫人はもう声も出なくなって、ぶるぶる震えながらうつむいている。恥ずかしさのあまり、首筋が真っ赤に上気していた。

加奈絵・茉莉絵の姉妹は慣れているのか、知らん顔してパンをちぎっている。刑事の伊原氏は聞いていないような顔で目だけをきょろきょろさせ、貴子さんの許婚(いいなずけ)の芳川虚彦氏は、心ここにあらずといった風情でほとんど皿に手をつけないまま、あらぬ方をぼんやり見つめている。

「お兄さま。めったなことをおっしゃるものではありませんわ」

貴子さんがおそろしく冷たい声で言った。偉雄氏ははっとしたように口を閉ざし、いまいましげに唇を嚙(か)むと、手酌でワインをがぶ飲みした。

貴子さんは僕に向きなおり、なおも切り口上で、

「和弥さん、さっきのばあやは六条喜久代といって、絢子さんのご実家から彼女についてきた使用人です。父の遺体はあたくしたちで浄(きよ)めて、二階の寝室に安置してありますが、あなたとの対面は弁護士の先生がいらしてからということにさせていただきたいと思います。こうなっては、あなたの処遇もいろいろと考えなければなりませんしね」

苛立(いらだ)たしげに舌打ちし、「そう、それから、絢子さんは父の死にたいそうショックを受けられて、昨日からほとんど部屋からお出になりません。

まあ、もともと、あまりお体が強くなくて、しょっちゅう寝込むような方ですけど。あたくしたち娘や息子とも顔を合わそうとなさらないから、今は貴方がお会いになろうとしても、まずむりでしょうね」

「あの凄い婆さんときたら、まるで姫君を守るドラゴンってところだからなあ」
野々村君がくすくす笑いながら呟き、貴子さんの視線を受けてすばやく席に沈みこんだ。どこまでも道化にできている人だ。僕は肩をすくめて、そうですか、と返事をし、皿のソースをこそげるのに集中するふりをした。
「皆さん、いかがかしら、弁護士の先生を待つあいだ、活動写真などご覧になっては」
デザートになったとき、しんとした食卓の空気を入れかえるように、華やいだ声をあげたのはやはり貴子さんだった。ここでは、彼女が音頭をとるようだ。偉雄氏はさっきの失態が今になって後悔されてきたのか、むっつりした顔でコーヒーをすすっている。
「へえ、ここには、フィルムを映す設備があるんですか」
「ええ、もちろん。父が今の資産を築きあげるには、活動写真の制作と興行が大きな役割を果たしていたことは皆さんお聞き及びでしょうけど、父は引きこもってしまう以前は、自宅で、会社の作品があがってきたのを自分で検分したり、外国から買い入れためずらしいフィルムをお顧客さまを集めて上映したりしていましたの。趣味で撮った作品なんかもございますしね。
　こちらの別邸はむかし、神戸の外国人居留地に住んでいたイギリス人が保養のために建てたものだと聞いていますけれど、そのイギリス人が本国に帰るとき、懇意にしていた父が譲り受けたのだそうですわ。ごらんの通りの本式の西洋風で建ててありますから、新世

界キネマ社の映画を作るときにも、ずいぶん役にたったようですのよ」
「ああ、そうか、わかった」刑事の伊原氏がぽんと手を叩いた。
「こちらのお屋敷に寄せていただいたとき、どうもどこかで見おぼえのある建物だと思っておりましたが、ひょっとして、あの『玻璃ノ薔薇』につかわれた建物というのはここではないのですかな。お屋敷の正面にある、あの大きな色ガラスの窓、ありゃあたいそう見事ですが、活動を見たときも、あいつが実に印象的につかわれていたもんです」
『玻璃ノ薔薇』――。
そのタイトルを耳にしたとき、なぜかぎくっとしたことを書いておいたほうがいいと思う。このあと、何が起こるかをむろんその時の僕は知るはずもなかったが、美しいひびきを持つその言葉が、まるで毒を塗った剣のように耳に突きささってきたのだ。
貴子さんは女王然と微笑んだ。
「あら、伊原さまはあれをご覧になってくださったのね」
「ああ、もちろんですとも、ありゃあああんたの最近の出世作ですしなあ」
伊原氏はおおいに照れた様子でごしごし顔をこすりながら、
「わたしゃどうも娯楽にはうとくて、部下の若いのにさそわれて行ったんですが、あれであんたがなすった花売り乙女のあわれさ、けなげさ、胸にせまってまったく大したもんでしたよ。もちろん、黒衣の怪人と主人公との対決にも手に汗握ったが――」

「ほ、ほ、ほ、そんなに褒めていただくとあたくし、消えてなくなりたくなってしまいますわ。……では、そうね、ここにはせっかく関西一、二の人気の名弁士がいらっしゃることだし、あちらで『玻璃ノ薔薇』でも上映して愉しんでいただきましょうか。

あれは伝衛門手ずから撮った最初で最後の作品ですし、父の通夜の演目としてはぴったりだわ。それに映画に使った建物のなかで、それを映した作品を観るというのもいい趣向じゃないかしら、ねえ、虚彦さん」

と許婚を顧みるが、虚彦氏のほうはあいかわらずぼんやりしていて恋人に呼ばれているのも気がつかないようだ。虚彦さんったら、と強くつつかれて、はじめて目が覚めたようにまばたいて、ああ、とため息のような声を出した。

「そうだね、そうするのがいいかもしれない。野々村君、君、やってくれるかい」

「やるのはやぶさかじゃあありませんがね、どうも、新時代の活動写真界を席巻しようって新世界キネマ社の看板女優と、若き名監督の目の前じゃあ、気がひけるなあ。しかもそれが、目も当てられないほど目下、アッアッ恋愛中のお二人ときては」

おどけた口調のおかげで、張りつめた雰囲気だった食堂のそこここで、ほっとしたような笑い声がもれた。

「あら……嫌よ、そんなこといっちゃ」と貴子さんが身をよじり、甘えるように恋人に身体を寄せる。だが、虚彦氏のほうはやはりうつろな目で、許婚を抱き寄せるでもなくぼう

っとしていた。
「それではコーヒーがすんだら、皆さん、遊戯室のほうへお移りくださいな。さっきの喫煙室を出て、ホールをはさんでちょうど反対側の部屋ですの。——蜂谷、皆さんを御案内してね。それから地下室から誰かに言って、映写機とスクリーンを運ばせなさい」
遊戯室というのは広大な中庭に面した広い部屋で、サンルームもかねているらしく、庭に面した壁がすべてガラス張りになっている。庭灯に照らされて、美しく整えられた西洋風庭園が臨めた。
その窓に、黒いカーテンがひかれて上映準備が整えられた。遊戯室の名にふさわしく、本格的なカードテーブルと撞球台（どうきゅうだい）——つまり、ビリヤード台だが——も備わっていたが、邪魔なので男性陣が総出で壁に押しつけて場所をあけた。
「演台にはこちらのサイドテーブルでよろしゅうございましょうか、野々村様。なにしろこちらでは、サイレントのままフィルムだけをごらんになることがほとんどでございますもので——」
「ああ、いいですよ、気になさらんでください。お世話になった芳野堂の大旦那のお弔いですからね、せいぜいリキを入れて弁じさせていただきますよ。それより、台本の……」
準備が進んでいくのを後ろの席でのんびり眺めながら、僕が考えていたのは、あの『玻

璃ノ薔薇』の完全なフィルムを僕が観ると知ったら、二十一世紀で知り合ったファン仲間はどんなにうらやましがるだろうという程度のことだった。なにしろ、幻の名作として知る人ぞ知る作品なのだ。興奮しないというほうが嘘になる。

　このときの僕はまだ、傍観者の気分でいたのだった。だが今となっては、その呑気(のんき)さを呪わずにはいられない。どうしてもっと気をつけていなかったのだろう、いつかはここで殺人が起こることを知っていたのに、どうしてそれを警告しなかったのだろうと、胸をかきむしられる思いがする。

　もちろん、あの時そんなことを言ったとしてもだれも信じはしなかっただろうけれど、何かができたはずだという気持ちがどうしても捨てられない。『玻璃ノ薔薇』というタイトルを聞いたときの、なんともいえないひやりとした感触――あれを僕は、無視すべきではなかった。すべては、このフィルムが上映された瞬間から始まったのだから。

「皆様、お待たせいたしました。それでは始めさせていただきます。野々村様、どうぞ、よろしくお願いいたします――」

「おっと合点、……ええ、それでは、本日こちらにおあつまり頂きました紳士淑女の皆様方、これより弁ずるこの物語、時は中世、所は泰西……」

　蓄音機から流れる低い音のオーケストラ音楽とともに、上映は始まった。

さすがに関西で人気を一、二と称するだけあって、いい喉(のど)だった。張りのある声で滔々(とうとう)

と物語を進行させていく野々村君の声に、僕はじっと聞き入った。

壁に張られたスクリーンの上で、モノクロの人物がひそひそと歩いていく。二十一世紀でも観たおぼえのある、ファーストシーン、インヴァネスに身を包んだ主人公が、失意の様子で荒涼とした道を歩いていくシークエンスだ。

二十一世紀では断片的なフィルムから想像するしかなかったのだが、はじめからじっくり見ると芳野堂伝衛門は、一九二〇年にドイツでつくられて評判になったサイレント映画の古典（とはいえ、ここではまだできて十年足らずなのだが）『カリガリ博士』にかなり影響を受けたらしい。異常に強い白黒のコントラストと、見る者の不安を誘う微妙に歪(ゆが)んだ撮り方の建物、人工的なセットの輪郭などがよく似ている。

ストーリーは、原典では眠り男ツェザーレとなっていた役柄が仮面の怪人になっているほか、『巨人ゴーレム』や『吸血鬼ノスフェラトゥ』、『オペラの怪人』などの外国製怪奇映画から受けたイメージを合成したもののようだった。

中世ヨーロッパであると説明されるある村に、予言をすると称する不気味な人形をたずさえた男がやってくる。人形はさまざまな予言をし、人気を博するが、それをあやぶんだ村の領主は人形と男の追い出しをはかる。

しかしその夜、領主のもとに人形と同じ仮面をつけ、黒衣を身にまとった怪人が現れて、彼を殺害する。男は黒魔術師であり、悪魔をとりつかせた人形を使ってあちこちで人を殺

して回っていたのだった。
外国から帰還したばかりの、領主の息子である主人公は、友人ともどもこの興行師を怪しみ、その正体をあばこうとするが、悪魔の飼い主はなかなか尻尾をつかませない。そうこうするうちに、黒魔術師は主人公の恋人である村の貧しい花売り乙女を見初め、手に入れようと悪魔人形に彼女をさらわせる。
だが、乙女の清らかな心にうたれて改心しようとした彼は、契約の破棄によって勝手に動き出した悪魔人形に殺されてしまう。乙女はそのまま悪魔人形の手に落ち、主人公の青年は、今や廃墟となった領主の館で待ち受ける悪魔と戦うため敢然と立ち上がる……
夢中になって観ていると、いきなり、いい匂いのするものがふわりと舞い落ちてきて首に巻きついた。びっくりして声をたてようとした矢先、練絹で頰を愛撫するような声が、
「ああ、ここにいらした。こんなに暗いところで、貴方、お寂しくないかしら」
「ナオミ！」
思わず大声を立てそうになって、あわてて声を低めた。前で伊原氏が不審そうに振り返るのが見えたからだ。
「今までどこにいたんだ？　食堂で君を見つけられるかと思ったのに、いなかったね」
「あら、あたしのこと気にしててくだすったの。うれしいわ」
クスクスと笑い声が伝わってくる。振り向こうとしたが、背中から首にまわされた腕が

すめる。身体がかっと熱くなった。

「君はいったい誰なんだ、ナオミ？　君は僕の知ってるある人に似てる、あまりにも……」

「まあ、そんなことより、あちらの活動をごらんになったら？　お好きなんでしょう、それに、あたし、貴方に色んなこと教えてあげられてよ」

後ろから伸びてきた手のひらがそっと頬を挟み、スクリーンのほうへ向けさせた。羽毛に撫でられているようなしっとりとした感触に、僕は抵抗する気をなくした。

それに、『玻璃ノ薔薇』を観たいというのもいつわりのない気持ちだった。物語は進み、野々村君の弁は熱を増していった。ナオミは僕の背中にぴったりと寄りそい、顔は見せぬまま、芳野堂家の人々についての知識を吐息とともに僕の耳に吹きこんだ。

「すると、この作品で芳野堂貴子が有名になったというのは本当なんだね」

「ええ、それまでは、人気はあっても大手の松竹や日活からは敬遠気味にされていたから――いくら今は勢力があっても、新世界キネマ社なんて新興会社の、しかもそこの持ち主の娘なんてややこしい紐のついた女優を、どこも進んでは使いたがらなかったのね。

でも、『玻璃ノ薔薇』の乙女役で、評論家からとても高い評価をつけられて、それで大手も見なおす気になったみたい。貴子さんはこの機に、恋人の芳川虚彦といっしょに新世界キネマを離れて、もっと大作を作れる場所にうつりたい腹なのよ」

大正元年に、映画配給の大手四社が集まってできたのが「日本活動写真株式会社」、通称「日活」で、時代劇を得意としていた。これに競合するのが大正九年にできた「松竹キネマ合名社」、つまり「松竹」。時代劇の日活に対し、こちらは現代劇が柱だった。

このほかにも日活から独立したマキノ省三がつくった「マキノ映画製作所」や、俳優の阪東妻三郎が作った日本最初の俳優プロダクション「阪妻プロ」などがあったが、やはり大きな会社に身を寄せているほうがよい役が回ってくる確率も高いし、大作を任せられる可能性も大きい。貴子さんは自分のためにも、新進監督である恋人のためにも、強みではあるが足枷（あしかせ）でもある新世界キネマ社を捨てて新天地に移りたいのだ。それには、社主である父親の死は、渡りに船だったということだろうか。

「――で、芳野堂偉雄は新世界キネマの社長ということになっているけれど、本当は映画になんかぜんぜん興味がないの。それをいうなら、働くこと全般に対してまったく興味がないのね。ただ、人に威張りたいがためだけに、社長の座にしがみついているんだわ。あの人の好きなのは、お酒と若い女と、それから、威張ることだけ。

どっちにしろ、経営に対してほとんど権力は持っていないの。本当の社長は死んだ芳野堂伝衛門で、あの人は飾りものなのね。

でも、あの人、それががまんできなかったらしいの。二年前に東京の郊外に広い土地を買って、新世界キネマ所有の撮影所を作ろうとしたのよ。ほとんどの映画会社は京都に撮

影所をもっていて、そちらではどうしても勝てないもんだから、東京に自社専用の豪勢な撮影所を作って、見返してやろうと思ったらしいんだけど。
　ところが、そこへあの金融恐慌がやってきて、なにもかもがおしまいになっちゃった」
「失敗したのかい」
「なまじ、父親に内緒で事を運ぼうとしたのがいけなかったのねえ。悪いやつに騙されて、お金だけ持ち逃げされちゃって、会社の収支にひどい穴を開けたの。
　平気そうな顔をしているけど、内心では、だらだら冷や汗をかいているはずよ。遺産、遺産って目を血走らせているのも当然だわ、だってそれがないと、新世界キネマ社は確実に倒産するの、そんなくらいに追い込まれているのよ」
「加奈絵ちゃんと茉莉絵ちゃんはどうなんだ。彼女たちにも何か事情はあるかい」
「まあ、あの娘たちはまだ女学生ですものねえ、……でも、加奈絵さんは、最近女学校でフルートの才能を認められて、もしできるなら外国へ行って本格的に音楽の勉強をしたいと思っているようよ。そのためには、もちろん、お金がいるわねえ。
　妹の茉莉絵さんは、どうかしら、お二人のお母さまが火事で亡くなってから、少し気鬱のけがあって——少しばかり心の発達が遅れているってもっぱらの評判だわ、もっとも、ごくごく無邪気なお方だから害はないと思われてるみたいだけど」
「芳野堂伝衛門は自殺したと家族は考えている。彼が自殺するような原因は何かあったの

か、君は知っているか？」

「さあ、どうかしら。新世界キネマの経営が傾きかけているのは知ってらしたでしょうけど、この一、二年ほどは、ほとんど外の世界のことには関心をお持ちでないようだったから、もしも倒産したところで気がつきもしなかったんじゃあないかしら。

　でも、何かにとても思い悩んでいたのは確かだわ。いつもお顔を変な仮面でかくして、とくに奥さまの絢子さまだけ連れてこの島に引きこもられてからは、終日部屋にこもって映画ばかり観てくらしてらしたの。それも、たった一本だけ、いま貴方が観ている『玻璃ノ薔薇』だけを、繰り返し繰り返し、ね——」

　笑いをふくんだナオミの声を聞きながら、僕は考えこんだ。

　家長の芳野堂伝衛門は昨夜、自室で毒入りのワインを飲んで死んだ。

　部屋には内側から鍵がかけられていた。

「だが、彼は僕——見失っていた息子の七瀬和弥——を、わざわざ呼び寄せていた。家族も、息子に対面させるようにと呼び集めていた」

　僕は呟いた。

「呼び寄せておいた人間に会わずに、自殺するのは不自然だ。やはり彼は誰かに殺されたと考えたほうがいいんだろうか。……だが、それは誰だ？　妻の絢子夫人か？　死を看取ったという彼女だろうか？　あるいは執事の蜂谷？　使用人の中の誰かか？」

「――それとも、一族を屋敷に集めてから、自殺する必要があったのかも」
うたうようにナオミが言った。
「なに？」僕はぎょっとして振り返ろうとした。
「肉体を捨てて悪魔になるために。これまで、ずっとやれずにいたことの仕上げをするために。自分を縛る一族の血を、ぜんぶ根絶やしにするために――」
「ナオミ！」立ちあがろうと僕はもがいた。
「ナオミ、君は何を言ってる？　君はいったい何を知ってるんだ？」
クスクスという笑い声が返ってきた。笑い声だけが。
「――そうだ、それに、君はどうしてそんな話を知っている？　どうして僕にそんな話をする？　屋敷のメイドの君が！　どうして僕が、この事件を調べようとしていることを、知っているような口をきくんだ！」
無我夢中で振り返ろうとしたとき、ああっと前で声があがった。
スクリーンではいつの間にか、『玻璃ノ薔薇』がクライマックスを迎えようとしていた。画面の奥で待ち受ける主人公に向かって、黒衣の怪人が不気味な後ろ姿を見せてじりじりと近づいていくところだ。背景は巨大な薔薇窓のあるゴシック式の洋館、僕たちの今いるこの屋敷が、くろぐろと聳（そび）えている――
野々村君の名調子がとまどったように揺れたのはその時だった。

そのまままっすぐ主人公のもとへと向かっていくはずの怪人が、足をとめ、クルリとこちらを振り向いたのだ。

カメラの方向、つまり、観ている観客の方向を。

「あっ、あの顔は――」

僕が聞いたのは、この声だった。こちらを向いた怪人の顔は、三日月形に笑った目と、耳まで裂けた口を持つ、凍った笑いの道化面だった。

「そんな、どうして？　あの面は、お父さまの――」

貴子さんのうわずった声がひびいた。

スクリーンの中の怪人はこちらに完全に向きなおり、三日月形の笑みを顔に貼りつけたまま、ダッと走りだした。

まるで、スクリーンからこちらの世界に飛びだしてこようとでもするかのように。笑ったままの白い仮面がぐんぐん近づいてきて大写しになり、いきなり、スクリーンがまっ暗になった。

ぎゃっと短い声がした。すぐにそれは水にストローを入れて吹いているようなゴボゴボという音に変わり、女性の悲鳴が交錯した。

「どうした!?」

僕はどなりながら前へ出ようとした。その僕に、はげしい勢いで誰かが突き当たった。

とっさに相手をつかんだ手がぬるりと滑った。白い顔がぶつからんばかりに目の前に迫り、真っ黒な口が狂気のようにニタニタと笑った。僕は倒れた。後ろのドアが弾けるように開き、黒い影が外へ走り出ていくのが見えた。

僕は尻をついて茫然とすわりこみ、ホールのシャンデリアの光で、手についた紅いものを信じられぬ思いで確かめた。

血だ。

「灯りを！　灯りを！……」

誰かがスイッチを手探りし、パッと灯りがついた。

悲鳴が爆発した。

「あ、蓉子さん、しっかり……」

紙のような顔色になった蓉子夫人がくたくたと床へくずおれた。

双子の姉妹は抱き合って泣きじゃくっている。壁のスイッチに手を触れた野々村君はそのまま凍りついている。誰も動くものはない。スクリーンになためにに血しぶきが飛びちっている。

どす黒く絨毯を染める血溜まりの中に、芳野堂偉雄が横たわっている。

その喉は何か鋭利な刃物で、ぱっくり大きくかき切られていた……

【一九二九年十月二三日・午前八時十二分】

——尚美さん、

昨晩はおかしなところで途切れさせてすまなかった。あそこまで書いたところで力つきて、机の上で眠ってしまったんだ。

もっとも、よく眠れはしなかったけどね。異様な夢を見て、一晩中うなされた。仮面やら、薔薇(ばら)やら、おかしなものがいろいろ出てきたよ。

思った以上に、ショックを受けていたんだな。情けない話だけれど、あの時の情景を思いだすと、今でもちょっと手が震える。……

とりあえず、あのあとあったことを以下にまとめておく。

偉雄氏が殺されているのを見た一同は、それこそ大恐慌に陥った。双子の姉妹はそうそうに部屋へ追いやられたけれど、蓉子夫人は意識を取りもどすが早いかヒステリーを起こして金切り声で笑い出し、結局蜂谷氏が持ちだした鎮静剤を与えられてこれも部屋へと運ばれた。お子さんの偉哉君がその場にいなかったのがせめてもの救いだと思う。

貴子さんと蜂谷氏、刑事の伊原氏は現場を調べるためにあとに残り、僕と野々村君、芳

川さんが三人で屋敷の周辺を探したが、あの黒衣の怪人の姿はどこにも見つけることができなかった。屋敷の正面は粗い砂利がいちめん敷きつめてあって、足跡を探そうにも跡そのものがつきにくい状態になっている。血痕（けっこん）その他の遺留品を見つけようにも、懐中電灯さえない時代に、薄暗いカンテラの光ではとても無理だった。

探しあぐねて屋敷に戻ると、偉雄氏の死骸（しがい）には白いシーツがかけられ、貴子さんたち三人が、そばに立って何か声を低めてこそこそ話し合っていた。

「やあ、何か見つかりましたか」僕たちが戻ったのを見て、伊原氏が声をかけた。

「駄目です、跡形もありゃしません。天に昇ったか地に消えたか、どっちにしろ、明るくならないとこれ以上探すのは無理ですね。ああ疲れた」

とそばの椅子に腰を下ろそうとした野々村君だったが、そこにもべっとりと返り血が飛んでいるのに気づいて、ひゃあっと悲鳴をあげて立ちあがった。薄気味悪そうに尻を払っているのを一瞥（いちべつ）して、芳川さんが、

「とにかく、こんなことが起こっては警察に報（しら）せないわけにはいかない。刑事さんがここにいらして助かりましたよ。至急、警察に連絡してくださいませんか、蜂谷さん」

「いいえ。駄目よ」

驚いたことに、そう答えたのは貴子さんだった。今にも透きとおりそうに顔色をなくした貴子さんは、切れるほど唇をかみしめてしっかり両手を組み合わせていた。細い指に、

くっきりと筋の形が浮いている。……

「ばかな、もう表沙汰にするとかしないの問題じゃないだろう。殺人があったんだ、貴子さん。君の兄さんが、喉を裂かれて殺されたんだぞ、しかも、君の目の前でだ。これはもう家族の中だけで済む問題じゃない、すぐに警察に来てもらって、犯人をつかまえてもらわないと――」

「いいえ駄目、駄目なの」

貴子さんの声は悲鳴のようだった。「これを見て」

その時になって僕たちは、部屋の中に今まで見たことのない人物がいるのに気がついた。三つ揃いのスーツを窮屈そうに着込んだその人物は、すり切れた折カバンをしっかり胸にかかえ込んで、怯えたウサギのような表情で、ひっきりなしにあたりをキョトキョト見回していた。

「弁護士の小笠原先生よ。さっき、あなた達が表にいるあいだにお着きになったの」

「弁護士?」芳川さんが憤然と一歩前に出た。

「法律にかかわる方ならよけいに、今の状況がどういうことかおわかりになるでしょう。貴子さん、もう、家の体面とかそんなことを気にしている場合じゃないんだよ。一刻も早く応援を呼ばないと、犯人が――」

「お願い、虚彦さん!」

貴子さんがそんな声を出すのは初めて聞いた。今にも泣きだしそうな顔ですがりつきながら、貴子さんは、手にした書類を芳川さんに押しつけた。
「これを見て。これを読んで。駄目なの、今、外と連絡をとったら、誰かをこの島に呼んだりしたら、何もかもがおしまいになってしまう……」
芳川さんはただごとではない貴子さんの顔をけげんそうに見ていたが、書類を受けとって、広げた。野々村君が当然のような顔をしてのぞき込み、僕は一瞬躊躇したが、今の自分はここの息子の七瀬和弥であることを思いだして、いっしょにわきから覗いてみた。
僕には法律用語はわからない。だが、そこにあったのが、死んだ芳野堂伝衛門が遺した遺言書であるらしいことは察しがついた。
『――以下ニ述ブル要件ニ違反シタル者ハ遺産相続ニ関スル一切ノ資格ヲ失フベシ、一ツ、コノ文書ノ開封セラレタル瞬間ヨリ以降三日間ノ間、別邸ノ島ヨリ足ヲ踏ミ出シタル者ハ全テノ権利ヲ失フベシ、二ツ、同ジク期間内ニ外部ノ人間ヲ島内ニ引キ入レタル者ハ全テノ権利ヲ失フベシ、三ツ、……』
漢字にカタカナがまじった読みづらい文章をたどっていくと、そのような言葉が目についた。僕は愕然として顔をあげた。
「こいつは……」野々村君がうめくような声を立てた。貴子さんは顔をおおい、ぶるぶる震えながら芳川さんに寄りかかっていた。

「こんな……こんな遺言書があってたまりますか」
芳川さんが怒りの声をあげた。
「小笠原さんとやら、これが本当にここで公開されるはずだった伝衛門氏の遺言書なんですか？　ここにはそれらしいことなんか何も書いていないじゃないですか。こんな馬鹿げたものを信用するわけにはいきません。何か、ほかのものを間違えて持っていらっしゃったんじゃないんですか？」
「そ、そ、そんなことは」
元来小心者らしい弁護士先生はしきりに額の汗を拭いている。
「確かにこれが伝衛門氏から託された遺言書に間違いありませんで……はい、書式もきちんとそろっておりますし、内容はどうあれ、効力を持つことは確かでありまして……はい、私も、まさかこんなことになっているとは思いもよらず……ましてや、ええ、まさか、偉雄氏が……こんなことになっていらっしゃるとは、とても——」
「もういい、あなたには頼まない。伊原さん」
はげしい口調で芳川さんは言い、黙って立っている伊原氏に向きなおった。
「あなたならおわかりになるでしょう。刑事さんなら、早く職務を果たしてください。早く調べないと、残っている証拠も失われてしまうことになるんじゃないんですか」
「はい、まあ、しかし——そうですな——」

伊原氏は腕を後ろに組んだまま、動こうとはしなかった。小さな目をずるそうに瞬かせながら、死体と貴子さんたちを交互に眺め、

「私ももちろん職務を果たしたいのはやまやまですがねえ、やっぱり、休暇中の身で、あまり大きな騒ぎに巻きこまれることは避けたいのですよ」

「伊原さん、あなたという人は——」

「貴子さんからもあらためて、そのう、大ごとにはしないでいただきたいとの、たってのご要請もいただきましたことですしな——ねえ、蜂谷さん——」

「旦那様の御遺言は絶対でございます」

地の底の洞窟から聞こえてくるような声で蜂谷氏が言った。

僕たちは思わず彼を振り返った。血の臭いの充満する遊戯室の中で、彼の幽鬼のような顔が、無表情に僕たちを見返していた。

「御遺言は開封され、効力を持ちました。これより三日間、島からお出になった方は、芳野堂家の財産に関するすべての権利を失われます。理由はどうあれ、自分から外の人間を引き入れた方も同じです。たとい警察といえども、島内に立ち入ることは許されません」

「ばかな、人が死んでいるんだぞ？　殺人事件なんだぞ、これは！」

「旦那様の、御遺志でございます」

蜂谷氏の唇は真一文字に引き締められたままだった。

「話にならないな。行こう、貴子さん」
芳川さんは吐き捨てるように言って、貴子さんの手を引っぱった。
「こんな頭のおかしな人たちに付き合うことはない。確か、昼に本土からの定期船が来るんだったたな。それに乗って、ここを出ていくんだ。こんな人殺しのうろうろしているところに、いつまでも居られるものか」
「待って！　お願い、待って……」
歩きかけた芳川さんを、引きずられるように貴子さんが止める。
苛立（いらだ）った顔で貴子さんを振り向いた芳川さんだったが、彼女の必死の面持ちを見ると、さすがに胸に応えたらしく、足をとめた。貴子さんはうつむき、しばらく荒い息をついていたが、ようやく唇をかんでしゃっきりと背中をたててみせた。
「和弥さん。あなた、お父さまの死に顔を見たいとおっしゃっていたわねえ」
僕のほうを見もせずに、そう言った。
「いいわ。これから見に行きましょう。蜂谷、おまえ、伊原さんといっしょに死体の番をしていておくれ。ひとまずどこに安置しておくかは、あとで決めます」
蜂谷氏は深々と礼をした。その様子からは、仕える主人の家族が殺されたという衝撃はどこにも感じられなかった。
貴子さんを先頭に立てて僕たちはむごたらしい殺人現場を抜け出し、階段をあがって、

母屋の二階にあがった。貴子さんが放そうとしない芳川さんはともかくとして、野々村君までのこのこついてきたのには少々あきれた。
「君、部屋へ帰っていなくていいのかい。人殺しがうろうろしてるんだぜ」
低い声で言ってやると、血の気のない顔ながらにっと笑って、
「だって、あんなことのあったあとで一人でいろっていうのかい。みんなで一緒にいたほうがはるかに安全じゃないか。それに、こんなに面白い台本ははじめてさ。何しろ、自分自身が登場人物の一人なんだからねえ、見逃すなんてできっこないよ」
「あきれた野次馬根性だな。こいつは君のお得意のサイレント映画じゃないんだぞ」
「お互い様さ」
引きつり気味で片方の目をつぶってみせる。僕はつい笑ってしまった。どうやら、このお調子者の陽気な青年を、僕は好きになりかけているらしい。
二階は一階のホール吹き抜けを取り囲む形で通路があり、ホールを見おろす側は、階段部分をのぞいて唐草を彫刻した手すりがついている。いくつかの立派なドアが並んでいたが、どのドアもしんと静まりかえっていて人の気配はなかった。
あるドアの前で、貴子さんは足を止めてノックした。ドアが開くと、中から灰色の髪をひっつめにした老婆が顔をのぞかせた。
「なんでございましょうか」

「おキクさん。絢子さんはもうお休み？」
「さようでございます」
おキクと呼ばれた老婆の顔は能面のようだった。
「なにやら階下でどたばた騒がしいようでしたが、何かございましたか」
「いいえ、お休みならいいのよ。また明日、蜂谷をよこして話させるわ。おやすみ」
そっけなく言って、貴子さんは顔をそむけ、扉を閉めた。すきまから大きなベッドと、その上に横たわっている人影がちらりと見えて、ドアは閉まった。
「こちらよ。こちらがお父さまの書斎」
貴子さんはもう振り向きもせずに、僕たちをべつのドアに導いた。ひときわ立派な装飾が施されたそのドアは、確かに一家の家長の居室にふさわしいものに思われた。
「こちらに昨日の朝、あたくしとお兄さままでお父さまを安置したの、身体を拭いて、服をととのえて……」
語尾は不明瞭に口の中で消えた。ノブを回す手がひどく震えていた。貴子さんは焼けた石でもつかむような慎重な手つきで、ゆっくりとドアを開いた。
灯明のつもりか、中には小さなオイルランプだけがともっていた。ぼんやりした黄色い光の中に、ベッドの白いシーツが浮かびあがっている。
「ああ！」

室内のようすを一目見たとたん、貴子さんがよろめいた。芳川さんがあわてて差しのべた手に、耐えかねたように倒れかかる。

「ど、どうしたんだ、貴子さん」芳川さんの声もひどく動揺していた。

「ここに、君のお父さんの亡骸が寝かせてあるんじゃなかったのか。だが――だが、ここには……」

「お父さまがいない！」

大きくあえぎながら、むせぶように貴子さんが言った。

「ああ、どうして？　確かにお父さまはお亡くなりだったわ、身体だって冷たかったし、すっかり固くなって、かちかちの蠟人形みたいになってた……なのに、どうしてなの、どうして誰もいないの？　あの仮面はなに？　どうして映画の怪人が、お父さまのと同じ仮面をつけていたの！……」

ついに貴子さんの矜持も限界を迎えたらしく、かん高い声はもう裏返りかけていた。まだ信じられぬ思いで僕はベッドに近づき、枕の上から仮面を取りあげた。

仮面はなめらかな磁器製で、三日月形に笑った目と、耳まで裂けた逆三日月の口を持っていた。あの、『玻璃ノ薔薇』の怪人がつけていた仮面――いや、『玻璃ノ薔薇』から、まるで抜け出るようにあらわれたあの殺人者の仮面と、同じものだった。

ベッドにはそれ以外何もおかれておらず、白いシーツにはしわ一つない。

僕は野々村君を見あげた。
たぶん、救いを求めるような目をしていたと思う。
「この、仮面は――」
野々村君はゴクリと喉を鳴らした。そして、黙って壁をさした。
僕は仮面を手にしたまま、そちらを見た。
壁に、大きな肖像画が掛かっていた。大きな肘（ひじ）掛け椅子に腰掛けた人物の絵だ。きちんと正装し、ステッキを膝（ひざ）に立てかけた立派な紳士の像だったが、そこには一つだけ異様な部分がある。
「これが、芳野堂――」
すすり泣く貴子さんを支えて、芳川さんが黙ってうなずいた。
僕はあらためて手の中の仮面に目をおとした。
芳野堂伝衛門。
昨夜、服毒死したはずの謎の男は、ニタリと笑う仮面の顔をして、絵の中から僕たちを空洞の瞳（ひとみ）で見つめかえしていた。

昨夜起こったことは、だいたい以上だ。
そのあとは半狂乱になった貴子さんを蜂谷氏に預け、僕たちはそれぞれに自室に戻った。

もうへとへとだったし、僕自身の神経もそろそろ限界に近かったからだ。でも、部屋に戻ると、高ぶった気持ちが押さえられなくて、ペンを執らずにはいられなかった。けっきょく体力の限界が来て、気絶同然で寝てしまったけれどね。

そういえば、さっき書きながら思いだしたけれど、遊戯室であの殺人が起こったとき、ナオミもその場にいたはずなのに、またいつの間にかいなくなっていた。彼女には謎が多すぎる。彼女は本当にここの屋敷のメイドなのか？　そのうち、蜂谷氏に確かめてみよう。あの人も、何か素直には答えてくれなさそうな気がするけど。

フィルムから飛びだしてきた怪人、仮面の当主、消えた死体、奇妙な遺言――考えなければならないことがたくさんありすぎる。

だが、どうにかして謎を解かなければ、そしてこの手帳を埋めなければ、未来へ帰ることはできない――そんな気がする。

考えなければならない。

そして、生き残らなければ。

野々村君がドアの外で呼んでいる。どうやら昼食らしい――書いている内にずいぶん時間がたってしまった！　あまり食欲はないけど、食べなければ身体がもたないね。君はちゃんと食べているのかい、尚美さん？　そこでもお腹がすくのかい？

しかし、彼はほんとうに面白い男だ。野々村君のことだけどね。僕が未来から来た人間だと言ったら、いったいどんな顔をすることだろうな。
戻ってきたらまた続きを書く。待っていてくれ。

【一九二九年十月二三日・午後五時四十二分】

だいぶ風が強くなってきた。外はもう真っ暗だ。
こんな時に嵐がやってくるなんて、神様だか悪魔だか知らないが、とんだサービス精神を発揮してくれたものだ。まるきり嵐の山荘じゃないか。野々村君に言わせれば、まさに舞台が整ったということになるらしいが、冗談じゃない。カットの声がかかったら血糊(ちのり)をぬぐって立ち上がるわけにはいかないんだぞ。いささか神経を疑うよ。彼はいい奴だが、まったく、弁士根性というかなんというか……
まあ、愚痴はよしておこう。今日あったことを書いておく。
昼食の席に出てきたのは、僕と野々村君の二人だけだった。メイドの姿はなく、蜂谷氏がひとりで給仕役をこなした。双子姉妹は先に食べたときかされたが、他の人たちはとても起きられる状態じゃないらしい。
あんなことがあったあとだから、みんな一緒にいた方がいいんじゃないかと思うが、いまの立場ではそう言うこともできなかった。途中で青い顔の芳川さんが降りてきて、自分と貴子さんの二人分の食事を盆に乗せ、早々に部屋へ戻っていった。
「貴子さん、どうなんですか。具合のほうは」

「少し熱がある。昨日の衝撃のせいだと思うけれど……」
答える芳川さんも、気の毒なくらいげっそりしている。
蹌踉と食堂を出ていく芳川さんを見送って、そういえば、と野々村君が言った。
「伊原さんはどうしたんだい。あの人も食欲がないのかな？　それとも先に食べたとか」
「伊原様はまだお部屋でお休みでございます。ずいぶんお疲れのご様子で」
皿を片づけていた蜂谷氏がていねいに答えた。
「へへえ」意地悪そうに野々村君が片方の目を細める。
「そりゃあ、ずいぶんとお疲れだろうともさ。……後学のために聞いときたいんだけどね、蜂谷さん、あんた伊原さんにいったいいくらつかませたんだい？　そら、最初がワの字で、その次にイの字と続くやつさ」
「何のお話かわかりかねます」
蜂谷氏は眉一つ動かさなかった。
「わたくしは芳野堂家の執事として、旦那様のご命令に従うだけでございますので」
「ああそうかい、……へっ、立派なもんだね、まったく」
気抜けしたように野々村君は椅子に沈み込む。
「蜂谷さん」ちょっとしんとした雰囲気をとりなしたくて、僕は声をかけた。
「本土からの船というのは、だいたい何時ごろに来るんですか」

「どうぞ蜂谷とお呼びください、和弥さま」
そうやんわりと釘をさしておいてから、ちょっと首を傾けて、
「さようでございますね、いつもは三時か四時近くになるかと存じますが、今日は夕方から天候が崩れるそうでございますから、少し早く、二時ごろには到着するのではないかと。野々村様――」
コーヒーを飲んでいる野々村君にさぐるような目を向け、
「もし島をお出になるのでしたら、今後三日間はこちらに船はまいりませんので、午後のこの船が最終になるかと存じます。使用人の多くも今朝いとまをとりまして、皆本土のほうへ帰るようでございますし、ご用意なさるならお早めになさったほうがよろしゅうございますよ」
「いや、僕は行かないよ」
のんびりとコーヒーを飲み干して、野々村君は言った。
「野々村君」僕は驚いて身を乗り出した。
「野々村君、君は芳野堂の関係者じゃないんだろう。遺産うんぬんにはかかわりがない以上、あんな遺言書なんかに縛られることはないんだぜ。関係のない君が、こんな殺人のあった場所に残るのは危険だよ。昨日の犯人だって、まだそのへんに隠れているかもしれないのに」

「うん、そうだな、つまり、まだ事件は始まったばっかりってことだ」
妙に浮き浮きした調子で野々村君は言い、それから急にまじめな顔になって、
「冗談はさておき、ねえ和弥君、昨日会ったばかりでこんなことを言うのはなんなんだが、僕はなんだか君が気に入ってしまったんだよ。いや、けっして妙にはとらないでほしいんだが、つまり君は、僕の考える理想的なロマンの主人公てわけさ」
「ロマンだって？」
「そうさ、謎の死をとげた大家の当主、いがみ合う家族、奇妙な遺言、その渦中に帰り来たる失われていた息子――は、は、だから僕としちゃ、ぜひ最後までこの一幕を見届けてだね、将来いつか書くかもしれない大ロマン探偵譚（たん）の糧にしようってわけなんだよ。
トーキーなんてものが輸入されはじめて、弁士なんて仕事はもう先細りになるのが目に見えてるからね。廃業したあと生きてくためにも、いろいろ仕込みが必要だし」
「おい、いいかげんにしろよ、君」
思わず声を荒らげながら、僕は内心冷たいものが走るのを感じた。これまで愉快でお調子者とばかり思っていた彼の目は、恐ろしいくらいに笑っていなかった。
マンガめいた丸い黒縁メガネの奥で、二枚の鏡の破片のような眸（ひとみ）が光っている。見間違いだろうか？　僕は声をはげまして、
「仮にも一人人間が殺されているんだから、そんなちゃかすようなことを言うもんじゃな

い。奥さんの蓉子さんや、偉哉君の気持ちを考えろよ。貴子さんだって寝込んでしまったし、あんまり無神経じゃないか」
「そうかな？　いや、そうだったな。いや失敬失敬」
しばらく食い入るように僕の顔を見つめていてから、噴きあげるように野々村君は笑った。
「そういえば、偉雄氏は君のお兄さんでもあったんだっけな。まったくこれは僕が悪かった、遺族の前であんな話をするのは、いくらなんでも配慮ってものがなさすぎる。どうかひとつ、勘弁してくれたまえよ」
「まあ、それは――」
不承不承、僕はうなずかざるを得なかった。なんというか、僕自身にも後ろめたいところはあったので――偉雄氏が殺されるまでは、確かに僕も一編の探偵小説を読むような気持ちでいたことは否定できないし、なにより、僕は七瀬和弥ではない。妙な事情で今の立場にはまりこんでいるとはいえ、真に芳野堂家の息子である和弥とはべつの人間なのだから、それを隠している時点で皆に対しては負い目を負っている気がする。
ほんとうの和弥はどこへ行ってしまったのだろう、という疑問が再び頭を走りぬけた。もしかして、僕が時空の果てからここへ落ちこんできたことによって、どこかへはじき飛ばされたか、消えてしまったのか――もしも消えてしまったのだとしたら、それは一種の

殺人にはならないのだろうか？
「わかったよ、野々村君。でも、できれば今のような考えは人にはもらさないことだね。どんな誤解を受けるかしれやしないから」
　背筋の冷や汗をごまかすように僕は言った。
「しかし君言うところの大ロマン探偵譚だがね、もし、その結末が、語り手たる『渦中に帰り来たりし息子』が犯人だというものになっていたらどうするつもりだい」
「やっ、そいつは気がつかなかった。クリスティだね。『アクロイド殺し』だ」
　ぴしゃりと額をたたいた野々村君は、もういつものひょうきんな顔に戻っていた。
「その場合は仕方がない、己が不明を恥じながら黙って殺されることにするよ。もっともしっかり幽霊になって、最後までしぶとく見守らせてもらうけどね。
——さて、食べたんだったら伊原氏を起こしてきて、みんなで昨夜の現場検証としゃれこもうじゃないか。今の人数じゃ、山狩りなんてやるだけ無駄だ。他にすることもないんだし、僕あ一生に一度でいいから、天眼鏡(てんがんきょう)をかまえて床をはいずり回って、ほうとかああとか言ってみたかったんだ」
　けっきょく伊原氏を起こすことはできなかった。野々村君と僕が二人してどんどんドアを叩いても、中からは派手ないびきが聞こえてくるだけで、返事どころかますます大きく

なるばかりだった。

もしかして伊原氏も殺されているのではという心配があったとしても、たちまち吹き飛んだ。僕たちはどちらからともなく顔を見合わせ、苦笑して階下へ戻った。

遊戯室はまだ昨夜の乱れた様子のままになっていた。偉雄氏の死体はさすがに片づけられて、蜂谷氏のさしずで地下室に安置されていたが、絨毯(じゅうたん)にしみこんだ血はどうしようもなく、そのままだ。倒れたり、投げ出された椅子の列が、昨夜の僕たちの狼狽(ろうばい)と恐怖をありありと物語っている。

できれば死体も調べたかったが、それは蜂谷氏が断固拒否したのではたせなかった。遊戯室は前にも書いたとおり、大きな窓から中庭を一望できる明るい部屋で、ボウリング・レーンが三本か四本は引けようかという広さに、ひときわ豪華なロココ風の装飾が目をひく。往時、はなやかな時代には、ここでダンス・パーティなども催されたにちがいない。

映写機は隅に片づけられていたが、かかったままのリールから、溶けてちぎれたフィルムが垂れさがっていた。止めたままにされたせいで、セルロイド製のフィルムが映写ランプの熱で溶けてしまったのだ。

カーテンを開いた窓からはさんさんと明るい陽光がさしこんでいる。午後から天候が崩れると蜂谷氏は言っていたが、その言葉を疑う好天だ。小型のヴェルサイユ宮といった感じに刈り込まれた西洋庭園を赤や白、ピンク、黄といった色も品種もとりどりの薔薇の花

が、星のように咲き誇っていた。

二人して絨毯や壁を調べたが、みんながあわただしく出たり入ったりしたせいであたりはひどく踏み荒らされて、何か遺留品があったとしても見分けがつかなくなっていた。

ヒントになりそうな血痕（けっこん）やピン、ハンカチ、その他、気をひくようなものもなにひとつ落ちていない。いささかがっかりした。

「残念だなあ。せめて死体を調べられれば、何か手がかりが――少なくとも、どんな凶器が使われたかわかるかもしれないのに」

ついそんな台詞（せりふ）を吐いた僕に、野々村君は、

「僕はぎゃっという声が聞こえたんで、テーブルを回って椅子に近づきかけていた。前にいたからみんなよりも近くで傷を見たが、かなり切れ味のいい刃物で一刀のもとにすっぱり、という気がするな。飛びだしてきた奴は一瞬のうちに――」

言いながらずっと動線にそって指を動かし、

「僕の、ええと、左側をかすめて椅子を蹴散（けち）らしながら後方のドアへ走っていった」

「そうか、君はあの時スクリーンの横で、テーブルを演台にして弁士をしていたんだっけ――野々村君、君、あの時みんながどういう配置で座っていたか憶（おぼ）えていないか。僕はいちばん後ろで考え事をしていたんで、どうもはっきりしない」

「そうだなあ――」

野々村君はべっとり床に残った血溜まりのあとを薄気味悪そうに見て、つま先立ちながらスクリーンのそばへ回った。

降ろしっぱなしのスクリーンには固まって黒くなった血しぶきがべっとりと滴をたらし、横にはあの時演台がわりにしていた小さなサイドテーブルが横倒しになっている。テーブルにも、血しぶきが点々と降りかかっていた。そこに立って、野々村君は室内を見回しながら、

「僕はここに立って、台本に目をやっていた。――あの時、椅子は三つずつ三列に並んでいて、偉雄氏はいちばん前の席の、ど真ん中にふんぞりかえってたね」

倒れた椅子を一つ一つ指ししめしながら、

「で、その向かって右隣に蓉子夫人がいて、伊原氏は二列目の左側、その隣に、芳川さんと貴子さん。加奈絵ちゃんと茉莉絵ちゃんは椅子にはつかずに、撞球台に二人並んでもたれかかっていた気がするな」

「ああ、そうだった。三列目には、僕一人しか座っていなかったから」

思いだして、僕はうなずいた。壁に押しつけた撞球台によりかかっていた二人と目があったのだ。僕がお座りよと手招きすると、茉莉絵ちゃんのほうがぱっと顔を輝かせ、来ようとするそぶりを見せたが、加奈絵ちゃんのほうが厳しくとめたので、悲しい顔をしてまた元に戻ってしまったのだった。

「スクリーンから客席の一列目までは、二、……三メートルってとこか」
「演台から手をのばして喉をかっ切るにはちょいと遠い距離だね」
皮肉っぽく野々村君が言った。
「手がとどく距離にいたのは二列目にいた貴子さんと芳川さん、伊原氏、それに、隣にいた蓉子夫人に――」
「おいおい……」
「――まあ、言わせてもらえば偉雄氏が殺されたのはスクリーンがまっ暗になってなにも見えなくなったあの瞬間だと思うが、その時も、僕だけはランプで手元を照らしていた。台本を読まなければならないんだから当たり前だが」
と、またひょうひょうとした調子に戻る。
「だから僕、野々村海道は、あの時なにか妙なまねをしていたら誰かの目にとまっている可能性が高い。何しろ一人で明かりのそばにいたんだからね。
それにスクリーンの光もあるから、もし他人の喉に手をのばしたりなんかしていたら見られる危険が十二分にある。これは観客にしても同じことだ、しかし、あの瞬間――」
喉をぐいと切る仕草をして、
「怪人の影で画面がまっ暗になったあの瞬間、闇に乗じて隠し持った刃物を出し、隣の、あるいは前の、後ろの、人間にサッと斬りつける。飛びだしてきた黒い影にみんなが気を

とられている間に凶器を隠し、自分もワアワア騒ぐ。騒ぎに乗じて隠した凶器を始末し、あとは何食わぬ顔をする」
「じゃあ君は、あの飛びだしてきた黒い奴が犯人だとは思っていないんだね？」
「さあね、どうだか。ま、あいつが犯人なのかもしれない。ひょっとしたらね」
野々村君はちょっと肩をすくめた。
「しかし、人殺しをしようって奴がわざわざあんなこけ威しな格好で、こけ威しな登場の仕方をするってのはどうも納得いかないね。ああいうスタイルをとるっていうなら、当然、それなりの理由がなくちゃならない。
その場合、もっとも考えやすいのは、何かほかのものから人々の目をそらす、目くらましだ。そうするとあの黒い奴の役目は、ほんとうに殺人を遂行した奴の、カムフラージュを果たすことだったというのが僕のいちばん納得できる答えさ。もしかしたら、あの席にいたうちの誰かが前もって衣装を用意しておいて、さっとかぶって飛び出すふりをして、外で脱いで戻ってきた、ということだって考えられないわけじゃない。
むしろ、そうだったほうが自然だね。スクリーンの後ろに人が隠れられるような余地はないし、もし隠れていたとしてもすぐにわかる。スクリーンの端は床から離れていたんだから、そこからにょっきり足が出ていたら、これは誰でもおかしいと思うだろうよ」
「なるほど、だから君はあまり怖がっていないんだな？　少なくとも、『島内に潜んでい

るかもしれない黒衣の殺人者』に対しては」
僕の言葉に、そのとおりとばかりに野々村君はにっこりした。
「うん、あいつの役割が偉雄氏殺しの真犯人から人目をそらすことなら、もうその役割は果たしたんだから今ごろは変装を解いて知らん顔をしているはずだ。そいつが誰なのか、という点に関してはまだ謎のままだけど、頭のおかしな人殺しの怪人なんてものを、恐れる必要はもうあまりないと思うな」
「じゃあ、その真犯人は誰だと思うの？」
「まだなんとも言えないね。動機がはっきりしないわけだから、容疑者の確定もしづらいよ。いちばん考えられるのはもちろん芳野堂家の遺産争いだろうけれど、早合点は禁物だ。こんな手の込んだことをする以上、もっと何か、込み入った事情が隠れていてもおかしくないからね」
はきはきと喋(しゃべ)る野々村君を見ていると、彼は、どうも人に見せているよりずっと頭のいい男なのではないかという気がしてきた。
おどけた言動や派手な仕草で隠してはいるが、ただ怯(おび)えたりショックを受けたりしているだけの他の人々より、ずっと冷静にものを考えている。さっき、僕を見据えたときの強い眼光を考え合わせても、ただの道化者ではないと思えてならない。
見つめる僕の視線に何を感じとったのか、「あっはっは！」と低い声で笑うと、野々村

君はがらりと口調を替えて、
「さあ、これで僕の灰色の脳細胞の中身は示したわけだから、こんどは君の推理を聞かせてもらえませんかね、ええ和弥君、いやさ和弥センセイ。君だって物書きのはしくれなら、何か考えてることくらいあるでしょう。もったいぶらずにご開陳願いますよ。僕ばかり喋らせておいて、いざ推理が外れたときに僕だけ笑いものにしようってえ魂胆はなしに願いますぜ、先生」
「僕は——」
考えながら、僕はゆっくりと口を開いた。
「僕は、今君の言ったことにほぼ大筋において賛成する。あの黒衣の怪人が、わざと人目をひくように演出されたものであることは間違いないだろう。あの怪人自身が殺人者ではないというのもたぶんただしいと思う。ただ、気になるのは——」
「ふんふん、気になるのは？」
「あの黒衣の怪人、正確には、映画の——『玻璃ノ薔薇』からいかにも飛びだしてきたかのように演出されたあの怪人が、仮面をつけていたことだ」
「仮面？」ぽかんと野々村君は口を開いた。
「しかし、そいつは衣装の一部として、顔をかくすために——」
「もちろん、それもあっただろう、だが、問題は、それがどうしてわざわざ芳野堂伝衛門

のつけていた仮面と同じデザインのものが選ばれたかだ。
　しかも犯人は、伝衛門が生前にみずから制作し、くり返し見続けていたというフィルム『玻璃ノ薔薇』から怪人が飛びだしてくるように仕向けた。死んだ伝衛門と同じ顔をした悪魔が、伝衛門の作ったフィルムから出てくるんだ。まるで、彼の妄念が凝った亡霊の出現を思わせるシチュエーションをとって。
——そしてまさに、伝衛門の死体は消え失せている。何故だ？」
　野々村君はあっと小さな声をたてた。僕はうなずいた。
「犯人が誰で、どんな目的を持っているかはわからないが、そいつは犯人はよみがえった、芳野堂伝衛門の亡霊だと人に思わせたがっているんだ。
　むろん信じる奴は少ないにしても、恐怖感を与えられることは確かだからね。現に貴子さんは、父親の死体が消え、同じ仮面をつけた怪人が暗躍していることにひどくショックを受けている。あのおかしな遺言書のこともある。
　僕には、あの怪人の登場は、犯行から人目をそらすのと同時に、ほかの人々に対してプレッシャーを与えるための芝居と思えてならない。遺産を足枷（あしかせ）にして逃げ出せなくした犠牲者たちを、ゆっくり、じわじわいたぶるための」
「では君は、和弥君」
　とても低い声で、野々村君が言った。

「君は、偉雄氏だけでは終わらないというのかい。もっと他に、人殺しが続くと――」

喉を絞められたような声だった。大ロマン探偵譚云々を口にしていた野々村君だったが、ほんとうに人殺しが続くとまでは思っていなかったらしい。

僕は黙って彼を見つめた。胸の中では、そうだ、あと四人が死ぬ、もしも僕の知っているとおりなら――という言葉が、口に出せないままぐるぐる回っていた。

どう言えばよかっただろう！　キネマ屋敷連続殺人――芳野堂伝衛門の死を皮切りに、次々と五人の男女が殺された。誰が、どうやって殺されたのかはわからないのに、ただ、死の事実と数とだけが僕にはわかっているのだ。

一人目は死んだ。次は誰だ？　ひょっとしてそれは僕かもしれない、あるいは、目の前に立っている青年かもしれない。

「野々村君、やっぱり君は、島を出たほうがいいかもしれないよ」

囁くように僕は言った。野々村君の顔色が変わった。

「和弥君、君は何か知っているのか？　知っていて、僕に――」

「二人とも、こんなところで何をしているの？」

野々村君の言葉はドアのほうから飛んできた声でさえぎられた。

閉めておいたドアが大きく開いて、一夜でひどく瘦せたような気のする貴子さんが、きつい目でこちらを睨みつけていた。後ろに蜂谷氏が直立不動で立ち、隣には芳川さんが、

気づかうような表情で付きしたがっている。

「今日の定期船がついたそうよ。三日後までは、これが最後。逃げ出すなら、お早くご用意なさった方がよろしいわね、和弥さん」

定期船と名前は大層だが、実のところは漁船に毛の生えた程度の小船にすぎない。朝、神戸を出航して淡路島の各所を回り、神戸にもどる途中で、芳野堂の別邸のあるこの島にも立ち寄るように契約がされているとのことだった。貴子さんたちといっしょに玄関を出ると、館の真正面に広がる入り江と、そこにゆっくり近づいてくる蒸気船の白い水脈がまぶしく目の前に広がった。

――僕が芳野堂家別邸、のちのキネマ屋敷の外観をまのあたりにしたのは、このときが最初だった。

少し雲の多くなり始めた空を背景に、ゴシック風の石造りの洋館がそびえ立っている。建築学にはくわしくないので細部の名称はわからないが、とにかくすべてが直線と直角から成っている建物だった。保養のために建てられた、というのが信じられないほど、陰鬱(いんうつ)な感じがした。見上げていると、暗い色をした壁がゆっくりこちらへ崩れかかってきそうな錯覚に陥る。よく言えば重厚、悪く言えば威圧的なデザインは、ここで起こったこと、起こるであろうことを知らずとも、いささか心胆寒からしめる眺めだった。

一抱えもあるような四角い柱が重そうな屋根を支えている。灰色の石材が潮風にさらされて黒くなっており、ところどころに、緑青の吹いた銅の緑色が見えた。大きくせり出した車寄せの上には石の手すりのついたテラスがあり、その真上に、玄関ホールからも見えたあの大きな薔薇(ばら)窓が、今は暗く沈んで午後の弱い陽光をあびている。

あとで聞いたところによると、この別邸の島の大きさはせいぜい三キロ四方といったところで、そのほとんどは松林やボウフウの茂る荒れ野で覆われているらしい。土壌に塩気が多いので、そんなものしか育たないそうだ。屋敷の庭は別に土を運んで入れさせたので植物も育っているが、敷地を少しはなれるとまことに荒涼とした風景が広がる。

屋敷の裏手へ出てしばらく行くと、二十メートルはあろうかという断崖(だんがい)絶壁にたどりつく。二十一世紀で見たときは、この断崖が島のなかばあたりまで崩れてきて、屋敷のほとんどを海の底に引きずり込んでいた。断崖の下には黒々とした荒磯がひろがり、潮の満ち干に見え隠れしながら、まっ白な泡を飛ばしているということだった。

島の船着き場へは、粗い砂利を敷きつめただらだら坂が曲がりくねりながら延びていた。僕たちは息苦しい緊張の中、砂利を踏んで道を下っていった。

「あなた荷物を忘れていてよ、和弥さん」毒々しい口調で貴子さんが言った。

「空手でお帰りになるなんて、腕利きの詐欺師としてはちょっと手落ちじゃなくって」

「いえ、僕は帰りません。ほかに、行くところもありませんし」

「まあ、度胸がいいのね。もしかして、自分は殺されないとわかっているから？」
ぎらぎらと輝く貴子さんの目はまるで熱病にかかった人のようだった。
「そうするとそれは、貴方が犯人だからってことなのね？」
「ちょっと、貴子さん」
芳川さんが眉をひそめたが、貴子さんはやめなかった。僕が答えないでいると、勝ちほこったように唇をゆがめて僕を指さし、
「そうね、そうなのね。お兄さまは、きっとあなたが殺したんだわ。あなたはあたくしたちを殺しにここへ戻ってきたのね、そうだわ、そうなんでしょう」
「貴子さん――」
芳川さんがとがめるように腕をとるのを振りはらって、
「あたくしたち兄妹をみんな始末してしまうまで島から出ていかないつもりね、でも、そんなわけにはいかないわ、お父さまから何を吹きこまれたか知らないけど、あたくしだって黙って殺されやしない、見ているがいいわ、何が悪魔よ、何が呪われた子供よ――悪魔は貴方のほうだわ、貴方が、お父さまとぐるになってあたくしたちを集めたのよ、殺すために、みんな、殺してしまうために！」
「貴子さん！」
芳川さんが声を荒らげて腕をゆすると、貴子さんははっとしたように目をしばたたいた。

一瞬泣きだしそうに顔をゆがめて芳川さんを見つめたが、すぐに立ちなおって、呪い殺しそうな目で僕を見つめ、恋人を押しのけて荒々しく坂道を降りていった。
「だいぶ参ってらっしゃるみたいですね」
ぼんやり恋人を見送っている芳川さんに、僕はささやいた。
「え？　え、ああ」
芳川さんは夢からさめたようにまばたいてほっと吐息をした。
「そうなんだ。無理もない、父親が変死した翌日に、実の兄上が喉を切られて殺されるなんてね。しかも、父親の死体はどこかへ消えてなくなってしまうし、おかしな仮面の怪人なんてものまで現れるし。君が気にしないでくれるとうれしいんだが、和弥君」
「大丈夫です。ある意味、ああいうふうに言われるのも仕方のない立場ですから」
そう言いながらも、僕は引っかかるものを覚えずにはいられなかった。
貴子さんの口走った内容によれば、彼女は、僕がまるで芳野堂伝衛門の命を受けた刺客だと——他でもない、父親自身の亡霊が自分たち子供を殺そうとしているというような考えにとらわれているらしい。
妄想だろうか？　だが、あの黒衣の怪人といい、その怪人が伝衛門のつけていたのと同じ仮面をつけていたことといい、死体が消えたことといい——貴子さんに、そういう恐怖をかき立てることがあの芝居の目的だったとすると、いったい何のために？

「芳川さん、ちょっとお聞きしたいんですが」
前を歩く芳川さんの背中に、僕は声をかけた。
「芳野堂伝衛門という人は、なんですか、仮面をつけていたんですか？」
「ああ、つけていたね。関係者の間では有名な話だったよ」
上の空でそう答えてから、芳川さんは妙な顔をして僕を見た。
「君は、どうやら自分のお父上のことについてはあまり知らないみたいだね」
「はあ、なにしろ、母親が早くに死んだので。父親のことは、聞いたこともありませんでしたから」ちょっと胸をどきつかせながらそう返事しておいて、
「なぜそんなことをしていたのか、ご存じありませんか」
「そうだな、噂では、関東大震災の時に顔に大やけどをして、その跡を隠すためだったと聞いているけどね」と芳川さんは言った。
「それまではわりと闊達な性格で、社交界や経済界の会合なんかにもよく顔を見せていたみたいだけど、その仮面をつけるようになってからはほとんど人前には姿を見せなくなったそうだよ。
よく撮影現場の視察に来ているのを見たけど、それもすっぱりなくなったな。奥さんだけを連れて、別邸に引きこもっていると聞いたのは一年ほど前だ。その時には偉雄氏は東京のほうに移り住んでいたし、貴子さんも別にアパートを借りていたけど……」

芳川さんはちょっと言葉を切り、身震いした。
「今思えば、貴子さんはその時、伝衛門氏がこの別邸にいるという話を聞いてずいぶん怯えていたようだったな。彼女と偉雄氏は小さいころはこの屋敷で育ったと聞いているのに、懐かしがるようすもないし、お父さんの顔を見に行こうともしない。
こんなことを言うのはなんだが、和弥君、君のお披露目というこの会合に来るのも、できれば来たくないようなそぶりをしていたよ。彼女にとってここは、あまりいい思い出のない場所らしい。結局、その恐れは当たってしまったわけだけれど……」
芳川さん自身は伝衛門とあまり会ったことはないようだった。つきあいも、娘の恋人というだけで挨拶さえほとんどしたことはないらしい。思いきって僕は訊いてみた。
「こんなことを訊くのは失礼かもしれませんが、貴子さんとは、どういういきさつでお知り合いになったんですか」
「妙なことを訊きたがるんだね。そんなこと、今関係あるのかい」
ちょっと気色ばんだが、怒るのも大人げないと思ったのか、渋々、
「『玻璃ノ薔薇』がきっかけだ。あの作品は伝衛門氏がみずからメガホンをとったが、その時、僕が助監督を務めて、それで主演の貴子さんと知り合いになったんだ」
「公開は、たしか昨年でしたね。その時にはもう、伝衛門氏は仮面をつけていた?」
「つけていた。すでにここに引きこもったあとだったんだ。主演を貴子さんにするという

取りさげると脅されてむりやり連れてこられたとあとで言っていたよ。そうそう、ロケの場所がこの屋敷になったのも、伝衛門氏が屋敷から動かずに撮影ができるようにという理由からだったと聞いたな」

思いだしたようにくすりと笑って、

「あの時の現場は実に妙だったな。肝心の監督は現場に姿を見せず、部屋に引きこもったままで、執事が持ってくるメモにしたがって、僕が役者たちを動かすんだ。

そして出来上がったフィルムを伝衛門氏に見せ、それで気に入ればよし、気に入らなければ何度でも撮り直しだ。どれだけフィルムを無駄にしたかしれやしない。時間と労力は言わずもがなだが、まったく往生したものさ。金だって大分かかったろうにね」

しかしそこまでしてなお、芳野堂伝衛門は『玻璃ノ薔薇』を撮らなければならなかった。それは何故だ？

「もちろん、『玻璃ノ薔薇』のもともとの話は、あんな怪人が飛びだしてくるようにはなっていませんよね」

「当たり前だろう、君。あんな妙な場面があってたまるものか。誰だか知らないが、あのフィルムは別のものにすり替えられていたんだ。わざわざ同じようなメイクの同じような役者を使ってあんなものを撮るなんて、趣味の悪いにもほどがある――」

「――ねえ芳川君、昨晩偉雄氏が殺されたとき、君と貴子さんはたしか偉雄氏の後ろの席にいたね？」

野々村君がじれたように話に割り込んできた。

「ああ、そうだ」

びっくりしたように芳川さんは振り返った。

「でも、それが何か？」

「何か、気づいたことはありゃあしなかったかい？　妙な動きとか、物音とか――」

「さあ、僕は、スクリーンに集中していたから……」

と言いながら、芳川さんはしばらく考え、

「これはまっ暗になった一瞬の間のことだからなんとも言えないけれど、暗くなった一瞬、左の頬を、何か薄くてフワリとしたものがかすめた気がするな。

みんな総立ちになっていたから誰かのスカーフか、カーテンか、それともカーテンの端がかすめたんだろうと思っていたが、よく考えてみたら、カーテンにしては薄地だったし、あの席には、そういえばスカーフをしていた人はいなかったようだな」

「カーテンは分厚い刺繍入りのやつだったしね！」

野々村君が手を叩く。

「ちょっとやそっと騒いだくらいじゃフワッと持ち上がるはずもない。……ねえ和弥君、

あの怪人のマントは、カーテンの裏側に重ねて隠してあったとは考えられないかな。別にほんの一瞬人目をくらませられればいいんだから、それほど厚地である必要はないし、服の裏地に使う程度の薄い生地ならそんなに目立たないだろう」

「なるほど、だが仮面は？　僕はあの怪人が仮面をつけていたのを見てる」

「だからさ、その仮面だってなにも瀬戸物である必要はないじゃないか。要は、伝衛門老人のつけていたのと同じデザインの仮面であればいいんだろう。芯を入れたサテンか、それともいっそ厚紙でも形なりに切っておけば上出来だ。軽くて薄いそいつを衣装といっしょに隠しておけば、あとで始末するときだって楽だ。燃やすか、ほどいてばらばらにしてしまうだけでいいんだから」

「君たちは、あの席にいた誰かが怪人に変装して皆をおどかしたと考えてるのか？」

芳川さんは僕たちが急に気が変になったとでも言いたげだった。

「ええ、おかしいですか？　少なくとも、映画の中の怪人が飛びだしてきて人を殺したなんて考えるよりはずっと合理的だと思いますけど」

「それはそうだが、しかし誰が？　何のために？」

「それがわからないから僕たち考えてるんです。でも、芳川さんの頬――左の頬――に、そういう布らしきものが触れたとすると、それがほんとうにカーテンに隠されていたと仮定しての話ですが、隠し場所から取りだしたのは、芳川さんの座っていた位置よりも窓側

に座っていた誰か、という可能性が高いですが――」

「僕より、窓側に座っていた人物……」

考えるように口ごもり、芳川さんは眉（まゆ）を逆立てて僕たちを睨（にら）みつけた。

「君たちは、貴子さんが偉雄氏を殺したと思っているのか？」

「いえ、違うんです、そんなことは思ってません」

僕はいそいで言葉をついだ。

「これはあくまでも仮定の話なんです、それに――」

「それに、あの怪人が偉雄氏を殺したかどうかもまだ決まっちゃいないぜ、芳川君」

僕の胸ぐらをつかみかねない芳川さんの剣幕に、あわてて野々村君がわって入った。

「そういきり立たずに、落ちつけよ。それに、君より窓側にいたのは貴子さんだけじゃない、蓉子夫人だって窓側の席にいたんだ」

「ああ、それは結構だ。すると君たちは、偉雄氏を殺したのは実の妹か、でなければ殺された本人の妻だというつもりなんだな。もうたくさんだ、失礼する」

芳川さんは言い捨てると、もう姿の見えなくなっている貴子さんを追いかけて、駆け足で桟橋のほうへ降りていってしまった。あーあ、と野々村君がため息をつき、僕の方をむいてひょうきんな顔をしてみせた。

「怒らせちまった。どうも今のはメイ探偵としちゃまずかったぜ、ワトスン君」

「ちぇっ、勝手に決めるなよ。自分のほうがホームズのつもりでいやがる」

僕は言い返したが、おかげで滅入った気分が少し救われた。やはり、他人に嫌疑をかけるようなことを言うのはいやな気持ちがするものだ。

ましてや、恋人に殺人の疑いがかけられては誰だっていい気はしない。芳川さんはどちらかというと、僕にかみつく貴子さんをなだめてくれるほうの人だったし、気を悪くさせてしまったのがなんだかとても申しわけなかった。

僕と野々村君が桟橋までたどりついた時には、食料品などの荷揚げが始まっていた。白い蒸気をのどかに吐き出す小型船から、野菜や水といった島では手に入らない品をつんだ艀がおろされて、がっちりした男たちが汗で肩を光らせながらせっせと働いていた。

「ああ、こいつァいけねえ、曇ってきやがった」

いつのまにかすっかり雲に隠れてしまった太陽を見上げて、水夫の一人が舌打ちした。

「今夜は時化るぜ。おいてめえら、さっさと運んでしまわねえか」

さっきまでうすい雲がかかっているだけだった空は急速に暗さを増し、真っ黒な雨雲がたれこめて、今にも泣きだしそうになっていた。

その空の下を、思い思いにカバンを提げたり、風呂敷包みをかかえたりした屋敷の使用人たちが、そそくさと艀に乗り移っていった。たぶん、給料といっしょに口止め料もたっぷり渡されているのだろうが、うつむきがちに歩を進める彼らの顔は、何かに追われてい

るかのようにかたく、こわばっていた。

「ひい、ふう、十四、五人はいるかな」つま先立ちで野々村君が首をのばした。「屋敷にいた奴ら、ほとんど震えあがって逃げだすらしいや。安楽に上げ膳、下げ膳で過ごせると思ったのに、期待はずれになっちまったなあ」

「野々村君、君、ほんとうに帰らなくていいのか。これが最後の機会かもしれないぜ」

「くどいなあ、君も。和弥君こそ、そんなに目を皿みたいにしてじろじろ見回して、ひょっとしたら内心はあの中にまじりたくてたまらないんじゃないのかい」

島を出ていく人の列を見ていたのは、その中にナオミの姿を探していたからなのだが、ただ曖昧な顔で笑っておいた。なかば予期していたことだが、ナオミは列の中にはいなかった。彼女がまた現れるだろうことを、根拠もないのに僕は確信していた。

「あ、ありゃあ誰だい。誰か船に乗ってくるぜ」

乗客を満載した艀が定期船につくのと入れかわりに、べつの艀が海面に降ろされた。船頭のほかに、ひとりの人間が舳先にまっすぐ上半身を立ててすわっている。服装からして、どうやら女性らしい。

「おやっ、あれは——」

野々村君が驚いたように身を乗りだすのと、桟橋に立っていた貴子さんがひきつるように息をのんだのはほぼ同時だった。

芳川さんはここからでは後ろ姿しか見えないのでわからないが、貴子さん同様驚いているらしく、貴子さんの耳に口を近づけて何か早口にしゃべっているようだ。

艀はどんどんこぎ寄せてきて、乗っている人の顔もよく見えるようになった。長身の若い女性で、白いブラウスに紺のツー・ピースを上品に着こなしている。大きな白いつば広の帽子をななめにして、悠然と船が着くのを待っていた。

「沢松君、君、どうして――」

桟橋にあがった彼女に駆けより、いちばんに口をきいたのは芳川さんだった。

驚きと怒りで口もきけないのか、貴子さんはまっさおになってぶるぶる震えている。沢松君、と呼ばれた女性は婉然（えんぜん）とほほえんで、

「だって、芳川さんがとても景色のいいところへご旅行なすったときいたものですから。……こんどの映画のことで、ぜひご相談したいこともございましたし、それであたくし、ぶしつけかとは思いましたけど、思いきってこちらまで足を延ばさせていただきましたのよ。いけませんでしたかしら」

と言って、それからはじめて気がついたような顔で貴子さんを見やり、まあ、と大きく目を見ひらいてみせた。

「こちらの方もご一緒でしたのね。気づかなくて、どうも失礼いたしましたこと。あたくし、いつも頭の中でお芝居のことを考えているでしょう、それで、どうしても他の人のこ

とが目に入らなくなってしまうのよ。どうぞお目こぼしなすってね、貴子さん」
「ここは芳野堂家の私邸ですわ。私有地ですのよ、艶子さん」
貴子さんの声を聞いて僕はぞっとした。それまで、たいていきつい調子の物言いは聞かされていたけれど、その時の貴子さんの口調ときたらまるで、言葉の一つ一つが研ぎあげられたかみそりみたいに青白く光っていたからだ。
「あら、そうでしたの。いやだわ、あたくしったら、すっかりとり違えてしまって。でも、お船はもう帰ってしまったし、ご迷惑でもこちらにご厄介になるしかないわねえ。ねえ芳川さん、あなた、あたくしを追い出すようなことはなさいませんわよねえ」
堂々とそう言い放つと、彼女は芳川さんの首にこれ見よがしに腕を巻きつけた。
「よさないか、沢松君。みっともない」
さすがに芳川さんは引き離したが、それでも、つやつやした唇をゆがめてにやにやしながら貴子さんを見つめるのはやめない。貴子さんはまっ白になるほどこぶしを握りしめ、唇をかんでいる。空中に飛びちる火花が、僕の目にも見えるようだった。
「誰なんだい、彼女。どうやら貴子さんたちの知り合いみたいだけど」
僕は野々村君に囁いた。
「沢松艶子だよ。女優の」
野々村君は声を殺して囁き返した。

「芳野堂貴子が『玻璃ノ薔薇』で人気が出るまでは、文句なしで新世界キネマのトップスターだった女だ」

僕は思わず彼女を見つめ直した。

貴子さんの、美しいが整いすぎて冷たく感じる美貌にくらべて、沢松艶子は、見るからに肉感的なラテン式の美女だった。まつげが濃くて小鼻がふっくらと丸く、唇もぽってり厚くて、南国に咲く香りの強い蘭を連想させる。ツー・ピースの上からでもわかる胸や腰のふくらみは、二十一世紀でも相当の人気を集めるだろう豊満さだ。

「貴子さんが芳川君と婚約する前は、芳川虚彦の恋人は彼女だというもっぱらの噂だったんだが……」

ぼそぼそと野々村君は続けた。「こいつは、荒れそうだな」

にらみ合いを続ける三人の男女を前にして、僕もまた、えたいのしれない不安が胸中にせり上がるのを抑えられなかったのだった。

夕食の席には、いま島にいる――生きている――人間が全員顔をそろえた。ただし、まだショックから回復しない蓉子夫人と息子の偉哉くん、それに、あいかわらず部屋から出てこない絢子夫人とばあやのおキクさんの計四人は除いてだが。

貴子さんと芳川さんのカップル、加奈絵・茉莉絵の双子姉妹、僕、野々村君、それから

驚いたことに伊原刑事。なんとなく、もう島を出ていった気がしていたので、何食わぬ顔で座ってナプキンを首に巻いているところを見たときはびっくりしてしまった。
「ほんとうにすばらしいお屋敷ねえ、あたくし、びっくりしてしまってよ」
テーブルの正面には弁護士の小笠原潤吾氏が立って落ちつきなく視線を動かし、わきには執事の蜂谷氏が控えている。偉雄氏と蓉子夫人がむかいあって座っていた席は空いていたが、その蓉子夫人のいた席のほうに、大輪の蘭の花のような美女が陣取って、一人でしゃべったり笑ったりしながら、さかんに飲み食いしていた。
「それに、このお料理もおいしいし。これ、おじさまがお作りになったの？」
「恐れ入ります。さようでございます」
「そうお」
頭をさげる蜂谷氏に流し目を送ると、人目もはばからず桃色の舌でぺろりと舌なめずりをした。押しだまったまま、フォークを取ろうともしていない貴子さんを横目で見て、
「あら、あなたお食べにならないの、貴子さん？」
「あなた、ここへ何をしにいらっしゃったの、艶子さん」
テーブルクロスの上で組み合わせた貴子さんの手はわなわなと震えていた。必死に低くたもとうとしているが、ともすると醜く声はひびわれた。
「芳川さんはあたくしの婚約者として、親族だけの集まりに加わるためにこちらにおいで

になっているのよ。あなたのことなんか、誰も呼びゃしないわ」
「それはそうねえ。でも、あたくしのほかにも、親族じゃなくてここに来ている人がいるようよ。野々村さんや、そちらのおじさまだってそうでしょ」
　さっきから、皿に隠れるようにしてちらちら視線を送っている伊原氏にむかってまつげをぱたつかせて見せる。伊原氏は手もなく笑み崩れた。
「いやあ、私も、あつかましく寄せてもらった先であんたみたいなべっぴんさんとお近づきになれるとは思っていませんでしたなあ。とんだ余禄というところで、あっはっは」
「あら嬉しい、あたくしも、おじさまのこととっても素敵と思いましてよ」
　まばゆいばかりの笑みをひらめかせておいて、それをそのまま芳川さんに向ける。芳川さんはまったくの無表情で、目を合わそうともしなかったが、貴子さんがはっきりと顔を引きつらせたのを確かめた艶子さんは、満足げに目を細めた。
　もしできるなら、貴子さんはもちろん蜂谷氏も、今すぐ沢松艶子を島から追い出したいところだったろう。しかし、それができない事情があった。
　桟橋から、言い争いながら坂をあがってきた貴子さんたち三人は、口論しながらポーチをあがって玄関ホールに入った。僕たちはあっけにとられてついていったが、玄関扉をくぐり抜けようとしたとき、艶子さんのかん高い声が耳にとどいて息をのんだ。
「まあ、素敵なお屋敷だことねえ、こちらの部屋なんて……あら、あれ、何？」

それに続いてふたつの悲鳴と、芳川さんの必死の制止の声が響いた。聞こえてきた方向を知って、僕と野々村君は愕然とした。偉雄氏の死の検証をしたあと、僕たちは遊戯室にもとどおり鍵をかけておくことを忘れてしまっていたのだ。

あわてて行ってみると、室の扉は大きく開いていた。中では貴子さんが芳川さんに倒れかかってようやく立ち、奥のほうで艶子さんが、床に広がった黒い染みの上にかがみこんで、熱心に見つめていた。身体を起こした彼女の目はぎらぎら輝いていた。

「沢松君——」喉のつまったような声で芳川さんが言った。

「これ、血ね」

ほとんどうっとりとして彼女は囁いた。「そうでしょ？」

「違うわ」貴子さんは呻いたが、もはや艶子さんはそんなことを耳に入れるつもりはないようだった。多少青ざめた顔ながらも、彼女はまっすぐ立ち上がり、勝ちほこった様子で貴子さんの前に立ちふさがった。

「どうやらあたくしも、皆さんのお仲間にしていただかなければならないようね？」

……その後、自分の色香を存分に駆使した彼女は、伊原氏を通じて何があったのかの話をあっさり聞き出してしまった。蜂谷氏は醜聞を内に収めておくためにも、いやでも三日間は彼女をここにとどめておくしか方法がなくなった。

ここにいさせてさえくれれば、殺人のことは口外しないと誓いはしたが、どうやらその

条件の中には、芳川虚彦のそばに近づけてもらうことも含まれていたらしい。芳川さんに対する彼女の態度はきわめて露骨なもので、貴子さんでなくとも、気恥ずかしさのあまりいたたまれなくなるようなたぐいのものだった。
「いいかげんにしたまえ、沢松君。ここには、若いお嬢さんもいるんだぞ」
「あら、ごめんなさいまし。でも、あたくし、別にやろうと思ってやっているわけじゃありませんのよ。なにしろあたくし、こちらの貴子さんとちがってがさつな育ちなもんですから、お嬢さまがた、どうぞお許しになってねえ。……」
茉莉絵ちゃんは顔を真っ赤にしてうつむいている。加奈絵ちゃんは怒ったように唇を引きむすび、敵意に満ちた目で艶子さんを睨(にら)みつけていたが、その敵意は貴子さんのものとは少々違うもののように思えた。ひょっとしたら、酌婦上がりだったという彼女たちの母親をどこか思い出させる部分が、沢松艶子にはあったのかもしれない。芳川さんは冷然とした態度を保つことですべてを受け流していたが、貴子さんの憤怒(ふんぬ)と焦燥は時間とともにひどくなるばかりだった。
「いったい彼女は何がしたいんだ？」
張りつめた雰囲気に耐えきれなくなって、僕は隣の野々村君をつついた。彼は目の前で繰りひろげられている光景を正視できずに、皿の上にのしかかるようにしてひたすら料理を口に運んでいる。

「彼女は芳川さんを取り返したいのか？　こんなところまでずかずか乗りこんできて、しかも殺人があったことを知っていても居座るなんて、相当な心臓だな」
「そういう女なんだよ」くぐもりがちに野々村君が答えた。
「とにかくあの通り男好きのする容姿だから、すっかりみんな女王様扱いでさ。しかも人気もいちばんだったもんだから、怖いものなしでいままで来たんだけど——それが、貴子さんに出し抜かれちまっただろう。くやしくて仕方ないんだろうな。社主の娘とはいえ自分のほうが人気は上だと思っていたのに、あっというまに追い抜かれて、しかも自分の男だと思っていた芳川君まで奪られちまって」
「芳川さんはどう思ってるんだ？　もっときつく撥ねつけてやればいいのに」
僕もいいかげん腹にすえかねていた。
「さあなあ。芳川君がどう思っているのかはわからないが、沢松艶子のほうはいっとき、だいぶのぼせ上がっていたみたいだからなあ。結婚の噂が出たのは、貴子さんよりゃ沢松艶子のほうが早かったんだぜ」
「本当かい」
「そうさ。だから貴子さんとの婚約が発表されたときは、陰口叩くやつだっていたぜ。顔と身体しかない女より、身体に金がくっついてる女のほうが大いに得だろう、ってな」
「汚い話だな……」

「嫌な話さ。だけど、言いたがるやつはいつでもいるもんだ」
野々村君は肩をすくめた。テーブルのはしではあいかわらず、三者三様のうんざりするようなやりとりが繰りひろげられている。
「それでは皆様、この席で、旦那様の御遺言状を公開したく存じます」
皿がみんな下げられてしまうと、蜂谷氏が前に進み出てきてそう言った。
後ろからおずおずと、弁護士の小笠原氏が進み出てきた。あいかわらず折りカバンを胸にかかえ、しきりに額をこすりながらきょろきょろ目玉を動かしている。
「――そこで、申しわけございませんが、芳野堂家とご血縁のない方はご退室をお願いいたします。ほんの三十分ほどのことかと思いますので」
そういえば、偉雄氏の事件のあとで貴子さんと僕たちはすでに中身を見ていたが、内容の正式な公開はまだなのだった。僕と野々村君はすばやく目を見交わし、にやりと笑った
野々村君は、さっと立ちあがって向かいの席の伊原氏を呼んだ。
「承知しました。さて伊原さん、あっちへ行って上等の酒でも一杯いただきましょうか。あんなことのあったあとなんだ、お身内だけにしていろいろ話し合わせてあげるのが筋ってもんじゃありませんかね」
その時、僕はおやと思った。伊原氏の表情が、ほんの一瞬だが、なんとも嫌な、邪悪な凶相にみえたのだ。しかし、またたきの間にそれは消えて、

「あ、そうですな。これは失礼を」と伊原氏はナプキンをたたんで席を立った。
「僕もはずしたほうがいいかい」と、芳川さんが貴子さんに囁いた。
「まあ、何をおっしゃるの、貴方はあたくしの旦那様になる方なんですもの、ここにいて当然だわ。出ていかなければならないのは、ほかにもいます」
燃えるような目で彼女は一点を睨みつけた。
今朝までなら間違いなく僕がその視線の犠牲になっていただろうが、もはや、僕のことなど貴子さんの眼中にはなかった。貴子さんの目は、正面で悠然とデザートを食べている沢松艶子にのみむけられていた。
「さあ、出てお行きなさい、艶子さん。今からあるのは本当に、身内だけの会なのよ。これ以上、あなたがこの席にいることは、あたくしたちに対する犯罪だわ。それでもなお居座るとおっしゃるなら、小笠原先生におねがいして訴えてもらいますからね」
「あら、そんなことしなくってもちゃんと出ていきますわ。どうもご馳走様」
にやにやしながら沢松艶子はスプーンを置き、椅子をひいて立ちあがった。怒りに蒼白になっている貴子さんを気持ちよさそうに見おろし、ふんと鼻を鳴らして言った。
「ねえ、女優としての実力じゃなくて、お金で人を買うというのはどういうことかしら。それって、もしお金がなかったとしたら、とってもみじめなことじゃなくって……」
「それどういうこと、艶子さん」

貴子さんの声は危険なくらいに高く、鋭かった。

「さあ？」

沢松艶子は甘い声で首をかしげてみせ、

「わからないわ、でも貴子さんならおわかりじゃないかしら。あたくしなにしろお芝居に夢中でしょう、いつだってミュウズのとりこなの、芸術の声しか聞こえないの……だからとても、貴子さんのようにはかしこく考えられやしないわ、ねえ、虚彦さん」

芳川さんにしなだれかかり、あごに手をあてて口づけを奪おうとする。

これはいくらなんでもひどい。芳川さんが手をあげて押しのけるより早く、貴子さんがさっと立って、音をたてて沢松艶子の頬を張りとばした。

むち打つような音がひびき、沢松艶子はよろよろと後ずさった。

貴子さんは手をあげたまま、凍りついていた。激怒のあまり白い顔は、まるで仮面のように——彼女の父がつけていたあの笑う仮面のように、奇妙なかたちにひきつっていた。

「出てお行き。売女」

平坦（へいたん）な声で貴子さんは言った。

「おまえの顔など二度と見たくない。その汚い手で、あたくしの大事な人に触れないで。早く、出てお行きなさい」

「畜生。殴ったね」

沢松艶子のほうも変貌（へんぼう）していた。赤くなった頬を押さえて貴子さんを睨みつける目は般若（はんにゃ）のようにつりあがり、厚ぼったい唇から牙（きば）のように白い歯がむきだされていた。
「この一発は高くつくよ。おまえなんぞにあたしの男を横取りさせてたまるものか、見ておいで、もうすぐおまえはすべてを失うんだ、その時になって泣いても遅いんだよ」
「出てお行き！」
貴子さんは絶叫した。
沢松艶子は昂然（こうぜん）と頭をあげ、散らばったバッグとこまごました中身を威厳を持って拾い集めた。くっきり手形の残った顔で僕たちにむかって太陽のように微笑み、
「ではみなさま、ごめんあそばせ」
言い残して、しゃなりしゃなりと食堂を出て行ってしまった。
あとには蒼白の顔で震える貴子さんと、無表情な芳川さんが残った。うつむく貴子さんの肩が、どこか、うちひしがれた少女のように小さく見えた。

遺言状の中身はもうすでに述べてあるのでくわしくは書かない。つまり、遺言状が最初に人目に触れた瞬間からまる三日の間、この別邸のある島から一歩も出てはならないし、誰かを島に呼び込むこともならないという条件だ。
これに違反した人間は、芳野堂家の財産に関するあらゆる相続権を失う。分配に関する

指示は入っていなかったが、それについては、三日間が過ぎたのちにあらためて別の遺言状が公開され、そこで指定されるということだった。

僕はこの遺言状に不気味な思いを抱かずにはいられなかった。異常なその要求に対してももちろんそうだが、まるで芳野堂伝衛門は、一族が島に集まっているときに自分が死ぬのを見越して、この遺言状を作っていたように見える。

もし、彼の死が自殺だとすればそれも不思議ではないのかもしれないが、では、僕――ややこしいが、つまり、妾腹の息子の七瀬和弥――を、わざわざ呼び寄せておいて自殺するというのはどういうことだ。

ただ、ほかの家族を集めるための口実にすぎなかったのか？

だが、口実ならストレートに「遺言状の公開」でもよかったはずだ。

そもそも、彼はなぜ七瀬和弥を捜し出そうと考えたのか？

本物の七瀬和弥は、いったいどういう経緯で誕生し、失われ、見つけ出されたのか？

芳野堂伝衛門とは、いったいどういう人間だったのか？

彼はなぜ仮面をつけ、人目を避けて、こんな島に引きこもるようになったのか？……

ここまで書いた分を読み返してみて、だいぶいろいろなことが入り乱れているのに気がついた。ここで一度、いままでのことを整理してみようと思う。……

一九二九年、つまり昭和四年十月二十二日未明、新興の映画制作会社新世界キネマ社の社主である芳野堂伝衛門は、瀬戸内海に浮かぶ島の別邸で急死した。

死因は毒入りのワイン。死体を発見したのは、三人目の妻の絢子夫人。

翌二十二日、その日、一族に紹介されるため別邸に呼び寄せられていた妾腹の息子・七瀬和弥、到着。父の死を聞いて昏倒（こんとう）し、夕方、目覚めた時点で僕と入れ替わる。

同日夜、夕食後サイレント映画『玻璃ノ薔薇』鑑賞中に、新世界キネマの社長にして芳野堂家の長男・偉雄が何者かに喉を切られて死亡。仮面をつけた怪人が目撃され、伝衛門の死体が消える。怪人は伝衛門と同じデザインの仮面をつけていた。

被害者の偉雄氏のすぐ後ろにいた映画監督の芳川虚彦は、左の頬になにかうすい布のようなものが触れたのを感じている。

翌二十三日、午後の定期船で女優の沢松艶子が到着。長女で女優である芳野堂貴子との間にトラブル。芳川虚彦に関することのよう。彼女は何か知っている？　あらためて遺言状が公開され、確認される。

できごとの流れは以上でいいだろう。次は人だ。

一、七瀬和弥

今のところ、僕だ。本物の七瀬和弥に関してはほとんど情報がないままだが、とりあえ

ず、芳野堂伝衛門の見失われていた息子であるらしい。なぜ探されたのか、呼び戻された理由もまだ不明。

二、芳野堂伝衛門

この事件の鍵(かぎ)は彼にあるとしか思えないのだが、彼に関する情報もまだ少なすぎる。彼が自殺したにせよ、そうでないにせよ、彼がよみがえって人を殺すために徘徊(はいかい)していると思わせたがっている何者かがいるのは確かだ。それは誰だ？　個人的には、彼が仮面をつけるようになった事情と何か関係しているような気がする。関東大震災で顔に火傷(やけど)……本当だろうか？　もっとこみいった事情があるのでは……

三、芳野堂偉雄

死亡。新世界キネマ社を傾けかけていたらしい。傲岸(ごうがん)、かつ女好きとの話。あの性格では敵も多かっただろうが、ここでの死の原因はやはり遺産争いがもっとも考えやすいが、そうすると——

四、芳野堂貴子

偉雄の死でもっともストレートに得をするのは彼女だろう。芳川虚彦との結婚、そしてそれぞれの仕事での飛躍を考えれば、少しでも多くの遺産を手に入れたいはずだ。

しかし、彼女の怯(おび)えかたはいささか常軌を逸している。父親に殺される、あるいは危害を加えられると信じるようなトラウマが彼女にはあるのか？

五、沢松艶子
思ってもいなかった飛び入りだ。彼女は芳川虚彦をなんとか貴子から取り返そうとしているようだが、食堂で口にしていた思わせぶりな言葉が気にかかる。
六、芳野堂加奈絵・茉莉絵
彼女たちは関係ないとは思うがいちおう書いておく。なにしろまだ十七歳なのだ。茉莉絵はおとなしく、人なつこいのか僕にも笑顔を見せるが、加奈絵のほうはほとんど近づいてこようとしない。他人に対してかなり強い警戒心？　姉妹の仲もあまりよくはないように見える。加奈絵のほうは音楽留学をしたいらしい。
七、芳野堂絢子
あやうく忘れるところだったが、現在の芳野堂伝衛門夫人（未亡人）。まだ一度も顔を見ていない。夫の死体を発見したショックで寝込んでいるという話。彼女に話を聞くことができれば、伝衛門の人となりも少しはわかるかもしれないのだが。
彼女が伝衛門の死体を発見した。もし彼の死が他殺だった場合、親族の中で唯一この島にいた彼女にも、ワインに毒を入れることは可能だったはず。
そういえば、偉雄氏の死の現場にいなかった人間は、右記の人々では彼女ひとりだ。
事件後しばらくして貴子さんたちと二階にあがったとき、ばあやの喜久代といっしょに部屋にいるのを確認している。もし、彼女にも犯人の嫌疑をかけることができたとして、

この場合、喜久代は不在証明(アリバイ)の証人になるだろうか？　彼女に芯(しん)から忠実だというから、ならないだろう。考える必要があるかもしれない……。

八、その他

偉雄の妻の蓉子、息子の偉哉、執事の蜂谷、弁護士の小笠原、メイドのナオミ（？）

彼女はいったいどういう存在なのか？

親族以外の人間として、先に書いたライバル女優の沢松艶子、兵庫県警の刑事伊原（伝衛門の古い知り合いという触れ込み）。

弁士の野々村海道（貴子の友人）、これもすでに名前の出た、貴子の婚約者で映画監督の芳川虚彦。

今、島にいる人間はこれで全部だろう。

こう書き並べてみると、今のところ、偉雄氏の死に関してもっとも納得できる動機を持つのは貴子さんしかいないように思える。とにかく、わかっていることが少なすぎるので速断は禁物だろうが、動機を遺産争いといういちばんわかりやすいものにした場合、今のところは彼女以外、偉雄氏を殺す動機のある人間はいない。遊戯室で、偉雄さんの斜め後ろに座っていた彼女なら、暗くなった瞬間にハンドバッグか何かから刃物を取り出して喉(のど)を切るのは不可能ではない。

しかしそうすると、あの伝衛門の死体の消失の理由がわからないが……偉雄殺しは貴子さんのしたことであったとして、それらの細工はまた別の人間のやったことなのか？　それなら、彼女があれだけ怯えているのも説明がつく気がするが。

黒衣の怪人は、自分から目をそらさせようとした貴子さんの差し金であったとしても、そこに、なにか他人の手が加えられて、思いもよらない加工が加えられた。誰かが自分の犯罪を知り、しかも、そのことを口外せず、さらに恐ろしい演出を加えようとしている。そのことに関して、貴子さんは怯えている。そういうことなのだろうか？

しかし、まだ何もかも推測にすぎない。伝衛門の死のあとの五つの死、すでに一つ目の死は訪れた。あと四つの死が続く、僕はそれを知っている。僕はそれを目の当たりにし、生き残り、全てをこの手帳に書きつけなければならない——

——しかし、ほんとうにそれでいいのだろうか。

今、僕は少しそんなことを思っている。

僕は、次に起こる死をただ書きとめるのではなく、食いとめるほうに動かなければならないのではないか？

——前のほうで、殺人というのは小説などで読んで想像していたのとはまったく違うと書いた。

ここで起こっていることは、文字で書かれたフィクションではない、現実だ。本にかか

れた被害者はページをめくればいつでも生き返るけれども、ここで、僕の目の前で死んだ偉雄氏は二度と生き返りはしない。

手帳をきちんと埋めるために、五つの殺人全部がちゃんと起こるように、僕たちは祈らなければならないはずだけど、僕は今、迷っている。

人命うんぬんをとなえるつもりはない。でも、殺人があるのを知っていて防ごうとしないのは、僕にはやはり間違っているように思えてならない。

手帳を埋めれば未来に帰れる、そう思ってやっていることだけど、それが確実だって保証も、本当にはないんだ。

五人の人間が次々殺されるのを見送り、なおかつ、未来へも帰れなかったとしたら――いや、もし帰れたとしても、それが五人を見殺しにした結果だとしたら――、その時、僕たちは平気でいられるんだろうか。

君はどう思う、尚美さん？……

……今、何か音がした。

ガラスの割れるような音だ。

また鳴った。風の音がひどい。

外はものすごい嵐だ。青白い稲妻が、霰（あられ）まじりの暴風に翻弄（ほんろう）される木々を亡霊のように

照らし出す。誰かが、叫びながら廊下を走ってくる……。

【一九二九年十月二三日・午後十一時五十二分】

時間がないので簡潔に書く。

沢松艶子が殺された。

さっき、彼女の部屋のベッドの上で死んでいるのが発見された。死因は絞殺。細い紐（ひも）のようなもので首を絞められたらしい。

貴子さんの姿がない。部屋はもぬけの空だ。

これから僕と野々村君、芳川さん、伊原氏で外を探してみる。

手が震えてうまく書けない。続きはまたあとで。

【一九二九年十月二四日・午前十時十一分】

すっかり寝坊してしまった。
しかしそれは僕だけではないらしく、屋敷の中は今朝からひっそりしている。外は洗われたようにいい天気だが、昨晩あったことを考えると暗澹たる気持ちにならずにはいられない。二人目の死、そして一人が消えた。
犯人は、やはり貴子さんだったのだろうか？
昨晩僕たちは、皆して沢松艶子の部屋へ駆けつけた。ドアは大きく開かれ、騒ぎを聞いて集まった人々が恐ろしげに首を伸ばしてのぞき込んでいた。
「どいて、ちょっとどいて……」
人をかき分けてのぞき込んだ瞬間、僕は、酸っぱいものが喉にこみあげるのを抑えられなかった。
沢松艶子はピンク色のうすいネグリジェ姿で、ベッドの上に仰向けに倒れていた。
ヘッドボードのほうに足をむけ、ドアに頭を向けてのけぞった格好で、首に、書類を綴じるのに使うのに似た細い紐がふかぶかと食いこんでいた。助けを求めるようにのばした手が床へ垂れさがっていた。ベッドの下から口の開いた旅行カバンが顔を出し、着替えの

衣類や、なまめかしい下着類がはみ出していた。

窓が半分開いてゆれている。僕は部屋に走りこみ、窓から首を突き出して下を見た。はげしい風雨がまともにぶつかってきて、目を開けているのもむずかしい。額に流れる雨をはらって見おろすと、しぶきでまっ白になった地面が見えた。

この二階の部屋からだと、地面までの高さは七、八メートルはあるだろう。手がかりになりそうな雨樋(あまどい)や庇(ひさし)も近くにはなく、犯人が誰にせよ、ここから飛び降りたというのは考えづらそうだ。もし飛び降りていたとしても、足跡などの手がかりもこの雨であっという間に流されてしまうにちがいない。

僕は窓を閉めた。雨の音が遠ざかり、室内は急に不気味な静けさに包まれた。ずいぶん高価な品なのだろうネグリジェが窓から吹きこんだ雨で濡(ぬ)れて透け、臍(へそ)や乳房があらわに見えた。目が飛びだし、ゆがんだ口から青黒い舌を吐いた恐ろしい死に顔に、あの、肉感的な美貌(びぼう)のおもかげはなかった。

「い、いったい誰が、誰が……」

「誰がといって、そりゃあ、貴子さんでしょうな」

後ろから、吐き出すように言ったのは伊原氏だった。

芳川さんがくるりと振り向き、とめるまもなく伊原氏の胸ぐらをつかみあげた。体格的にはずっと貧相な伊原氏は、手もなく芳川さんにつりあげられて悲鳴をあげた。

「き、き、君、乱暴はよしなさい。私しゃあただ、一番すなおに考えられる犯人の名前を言っただけだ。沢松艶子と彼女が喧嘩(けんか)していたのはあんただって見ていたはずだろう、彼女は夜中になって腹にすえかねて、そして——」

「何がすなおだ。何が犯人だ。あの人が、こんな酷(むご)いことを平気でできると思うのか。貴様、取り消せ、今の言葉を取り消すんだ」

芳川さんが怒鳴って腕をゆするたびに、吊り下げられた伊原氏はたよりなくぶらぶら揺れた。彼はまた悲鳴をあげた。

「芳川君、落ち着け、落ち着けったら、……とにかく、貴子さんの様子を見に行こう。もしかしたら今日のことで気落ちして、部屋にこもっているだけかもしれないじゃないか」

野々村君の必死の取りなしにようやく芳川さんは手を放したが、尻(しり)もちをついて咳(せき)こんでいる伊原氏を、今にも殴りつけそうな顔で睨(にら)みつけている。

「皆様——」

廊下の向こうから蜂谷氏が足早にやってきた。あいかわらず不安げな小笠原弁護士もいっしょだ。

「あ、蜂谷さん、沢松さんが大変なことに」

「存じております。それについて、小笠原先生がなにか妙なものをご覧になったそうでして」

と、小笠原弁護士を振り返る。
全員の注目をあびて、小笠原弁護士はびくりと後ずさりした。だが、気を取り直したように唇をなめると、
「……ええ、私、下の蜂谷さんのお部屋で今後のことについて相談をしていたんですが、急に、どこかでキャッという声が聞こえたのと、つづいてガラスの割れる音がしたもんでして……あわてて、蜂谷さんといっしょに部屋を出て、こちらへ参ります途中に……」
「途中に？」はげしい口調で芳川さんが先を促した。
「何を見たというんだ。言ってみろ」
「そ、それが」
小笠原氏は何度も唇をなめまわしたあげく、ようやく言った。
「黒い、黒いマントのようなものを着た、小柄な人の影を。……」
つづいた一瞬の沈黙を、埋めるかのようにまた雷鳴がした。青白い雷光が、無惨な殺人現場をフラッシュでもたいたようにさっと照らし出した。
「黒衣の怪人の影！」
ため息でもつくように野々村君が唸(うな)り、身を乗りだして、
「そ、それで、そいつ、どっから来てどっちのほうへ。あなた、そいつの顔は見ましたか。やっぱり仮面をつけていたんですか」

「いえ、それが……一瞬のことでしたから……ただ」
「ただ？」
「そいつは——どうやら、貴子お嬢さんのお部屋のほうから、走ってきたような、気が——」
芳川さんが、ものも言わずに踵（きびす）を返した。僕たちを突きとばさんばかりの勢いで、貴子さんの寝ている、テラスつきの寝室へと走る。僕たちも、あわててあとを追った。
「貴子さん！　貴子さん！」
ドアを叩（たた）き、さかんにノブを回すが、中からの返事はなかった。
誰の胸中にも、氷のような不安が広がりはじめていたと思う。どうしてこんなひどい騒ぎの中、貴子さんは起きてこないのだろう？　睡眠薬でも飲んでぐっすり寝入っているのだろうか？　それとも、もしかしたら——もしかしたら——……
「らちがあかない。蜂谷さん、ここの鍵（かぎ）は」
苛立（いらだ）った様子で芳川さんは振り返った。
「少々お待ちくださいませ」
蜂谷氏は、腰から常時携帯しているらしい鍵束をはずすと、中から選りだした合い鍵を芳川さんに差し出した。ひったくるように取って、鍵穴に差しこむ。
ドアが開いた。

「貴子さん！」
芳川さんの叫び声は、どっと吹きつけてきた雨風に呑(の)まれた。
中庭に面したテラスのフランス窓が全開になっている。風にあおられたカーテンが大きくはためき、雨が絨毯(じゅうたん)にたまって大きな染みを作っていた。
上掛けのはねられたベッドには、誰の姿もなかった。
「貴子さん！……貴子さん！」
叫びながら芳川さんが部屋に入っていく。
ベッドはまだ仄(ほの)かに温かく、寝ていた人間がここをでてまだそれほどの時はたっていないようだった。鏡台には輸入品らしいクリームや乳液、口紅などがきちんと並べられ、ハンドバッグが口を開いたままスツールの上に置かれている。念のため大きなクローゼットや、ソファや机の下などを覗(のぞ)いてみたが、部屋の主は煙のように消えていた。血痕(けっこん)その他、恐ろしい痕跡も見あたらない。
「おやっ、こいつは」
ベッドの下をのぞいていた野々村君が、叫び声をあげて何かを引き出した。かかげて見せたものを目にして、芳川さんがするどく息を吸いこむ。
「そ、そりゃあ、仮面じゃないか。いったいどこに」
「このベッドの下だよ。ベッドのマットレスの、すぐ下に押し込んであったんだ。こいつ

は、サテンだな」

野々村君の手の中で仮面はぐにゃりと歪んだ。張りのあるサテン地を切って目と口を開け、厚紙の芯を入れてあるらしい。

もし、これがあの偉雄氏の死の場面に登場した怪人のものなら、僕と野々村君の考えはある程度正しかったことになる。だがそれが、貴子さんの部屋にあるということは——

「おい、こっちへ来てみろ」

テラスへ出て行った伊原氏が大声で呼んだ。

「見ろよ、縄ばしごが下がってる！　ここから逃げたんだ！」

どやどやとテラスへ出てみると、猛烈な風の中で、真新しい縄ばしごが地面へと伸びて揺れているのが見えた。テラスの丈夫な石の手すりは、縄を固定するのにかっこうの手がかりだったろう。芳川さんの喉から低いうめき声がもれた。

「これで決まったな」

どこか勝ちほこった調子で伊原氏が言った。

「やっぱり、あの黒衣の怪人は芳野堂貴子の変装だったんだ。彼女は自分の遺産の取り分を増やすために兄の偉雄を殺して、さらに、自分と恋人との間に割りこんでこようとした沢松艶子を殺した。一人殺せばあとは同じだと腹をくくったんだな。だが、沢松艶子に騒がれて、人に気づかれたんで、それで——」

芳川さんが獣のようにおめいて伊原氏に殴りかかった。
「待って、待つんだ、芳川君」
その鉄拳が伊原氏の横っつらに食いこむ寸前に、僕と野々村君がしがみつくようにして彼を押しとどめた。伊原氏は得々とした顔はどこへやら、後ろへ飛びのいて壁に張りつくようにしておののいている。
「今はそんなことをしている場合じゃない。事情がどうであれ、こんなひどい天候の中で女性一人がふらふらしていたら命が危ない。とにかく、貴子さんを探さなくちゃ。真相をつきとめるのは、彼女を連れもどしてきてからのことでもいいだろう」
「ああ……」
懸命に耳もとで叫ばれて、芳川さんはぎくっとしたように頭をあげた。
「そうだ……彼女を探さなくちゃ。彼女がこんなことをするはずがない……貴子さんが、こんな……こんな――」
「あなたも来てくださいよ、伊原さん」
芳川さんの袖をしっかりつかんで出ていく途中で、僕は振り返って伊原氏を睨んだ。
「私？　いえ、私は、ちと身体が弱いもんで――」
「何を言ってるんですか、あなた、刑事でしょう。いくら休暇中だからって、女性一人が行方不明になったんだ、捜索に手を貸すのは人として当たり前じゃないですか。早く支度

をしてきてください。十五分たったら迎えに行きますから」
たび重なる彼の無神経な発言に、いいかげん僕も腹にすえかねていたのだ。不服そうに唇をとがらせている伊原氏にはそれ以上構わないでおいて、僕は自分の部屋へ走った。
きっかり二十分後、僕たちは服を着替えて下のホールに集合した。むっつりした伊原氏もいちおう顔を揃えていた。蜂谷氏が出してくれたゴム長靴と合羽(かっぱ)をてんでに身につけ、カンテラを手に、外へと走り出る。
たちまち、小石を投げつけられているような豪雨が頭上になだれ落ちた。ゴム引きの合羽いちまいではものの役にも立たず、じきに下着まで気味悪く水がしみ通ってきた。風もいよいよ強く、松林の向こうから、ドウドウと腹に響く音が聞こえてくる。海がひどく荒れているのだろう。
「すごい波の音だな」ぼそっと野々村君が言った。
「もし、彼女が海のほうへ行っていたら――」
「身投げでもするっていうのか？　彼女が？」
「おい、君まで芳川君みたいに目をむかないでくれよ」
野々村君はちょっとたじろいだ。
「僕は何も悪意で言ってるわけじゃない。もし、自殺する気がなかったとしても、気が動転してやみくもに走り回るうちに海岸へ出て、足をすべらせることだってあるだろう。こ

の天気だ、そんなことになったら、まず助からないぜ」

僕は口をつぐみ、こっそりと芳川さんを見て、今の会話が耳に入っていないのを確かめた。今の彼に、そんな話を聞かせるのは酷だろう。

芳川さんは僕たちのことなど眼中になく、カンテラを掲げて振りまわしながら、血走った目であたりの闇をすかしている。影でもいいから、婚約者の姿をつかまえたいと思っているのか。

「貴子さん！」

悲痛な声で芳川さんは呼んだ。

「貴子さん、どこにいるんだ？　僕だ、虚彦だ！　出てきてくれ、貴子さん、貴子さん！　頼むから、返事をしてくれ……」

「二手に分かれよう」と僕は言った。

「僕と芳川さんは屋敷の裏へ行ってみる。野々村君と伊原さんは、表から桟橋近くへ降りていってみてくれ。ただし、海にあまり近づきすぎるなよ。君たちまで波にさらわれちゃ、元も子もない」

「おっと合点、……さ、行きますぜ伊原うじ。妙齢のご婦人が雨ん中濡れて震えてるんだ、守ってやるのが男子の本懐ってもんじゃあありませんか、さ、さ、さ、……」

相変わらず軽口をたたきながら野々村君が伊原氏を引っぱっていく。二人が砂利道を降

りていくのを見送って、僕は芳川さんを振り返った。
「じゃ、僕たちも行きましょう、芳川さん」
けれども、その言葉は途中でとまった。雨の中、唇を半開きにしてうつろに宙を見つめる芳川さんの顔は、悲嘆をそのまま形にしたようだったからだ。
「僕のせいか」
かすれた声で彼は呟(つぶや)いた。雨音でかき消されたその声は、やっと僕の耳に届くか届かないかくらいに小さかった。
「僕が、独立の話なんかしたからいけなかったのか。少しでも多く金が必要だと——機材を買うためにも、役者を揃えるためにもと、金——多くの金を——貴子さん……」
「しっかりしてください、芳川さん」
彼の腕を揺すぶって、僕は大声をあげた。芳川さんがはっとしたようにまばたき、目の焦点が僕の上に合う。
「今はとにかく、貴子さんを見つけることが先決なんです。考えこむのはあとでもできます。犯人だったにせよそうでないにせよ、死んでしまったらおしまいなんだ」
「和弥君、しかし」
「あなたは、貴子さんの婚約者なんでしょう」雨風に負けないように、僕は必死に声をしぼった。

「だったらあなたが、彼女を信じてあげなくてどうするんです」

芳川さんはびくりと肩を震わせ、まじまじと僕の顔を見つめた。それから下を向き、震えるような長い息をついた。

「ああ――そうだ――そうだった……」

しぼり出すように言うと、冷たい手で僕の手をしっかりと握りしめた。「有難う、和弥君」

僕は黙って手を握りかえし、先に立って歩き出した。一呼吸おいて、芳川さんがついてくる足音が聞こえた。

「貴子さん！　おうい、貴子さん！」

「どこにいるんだ、貴子さん！　返事をしてくれ！……」

かわるがわる貴子さんを呼んで歩きながら、僕は、これが三番目の死者になるのだろうかと思って、耐えられない気がした。

彼女が黒衣の怪人に扮（ふん）して人を殺したかどうかはまだわからないが、それが事件の真相だとはどうしても思えないのだ。キネマ屋敷の連続殺人、偉雄氏が死に、沢松艶子が死に、そして、貴子さんが消えた。多くの謎は未解決のまま、これで終わるはずがない。

なにかある！　この先に、まだ何かが起こる！

血の凍るようなそんな予感を、僕はどうしても振り払うことができなかった。

やがて僕たちは屋敷の外周を回って、裏手からしばらく行ったところの、海を見おろす断崖(だんがい)にたどりついた。
ここも大荒れで、風に乗って塩辛いしぶきが容赦なく顔に吹きつけてくる。
「あまり近づくと波にさらわれますよ。引きあげましょう」
袖で顔をおおって、僕は言った。
「いや、ちょっと待ってくれ。風が弱まってきた」
芳川さんは天へ顔を向けて、呼吸をはかるように目を細めている。
「君はここにいてくれ、和弥君。ちょっと行って、下を覗いてくる。この下は確か、磯になっていたはずだな」
「駄目です、危険ですよ」
僕の言うことなど、芳川さんは聞く耳を持たなかった。僕を静かに押しのけると、地面に張りつくように身をかがめて崖(がけ)っぷちへ近づいていく。
放っておくわけにもいかず、僕も、もし危険な気配が少しでもあったらすぐに引き戻せる程度の距離を置いてあとに続いた。地面を手と足でしっかりつかみながら這(は)うように芳川さんは進んでいき、崖にたどりつくと、地面の出っぱりをしっかりつかんで慎重に頭を崖からつきだした。
その口から、あっという声がもれた。

「どうしたんです、芳川さん」
「磯に――磯に、誰かが倒れている」
僕は息をのんだ。
まさか。危険ということは頭から吹き飛び、僕は芳川さんのそばへ夢中で這い寄って、いっしょになって崖下を覗いた。
まっ暗でなにも見えなかったが、その時、すさまじい雷がとどろいて、稲光が荒れる海を白く照らし出した。波に洗われる岩の上に、一人の人間が、長々と手足を投げだしてうつぶせになっている姿が一瞬、はっきりと照らし出された。
「ほんとうだ。人だ」
「まさか、貴子さんじゃ」
「わからない。でも、いずれにせよ、あんなところに放っておいたんじゃ、いつかは波にさらわれてしまう――」
――たとえまだ生きていたとしても、という言葉は胸の奥に飲みこんだ。
「芳川さん、僕はここで見張っていますから、あなたは伊原さんと野々村君を呼んできて、屋敷からロープを持ってきてください。みんなで引っぱり上げてみましょう」
「いや、見張りなら僕がする。君が行ってきてくれ、和弥君」
「駄目ですよ。あなたをここに一人で置いておいたら、絶対に一人で降りてあれが貴子さ

んかどうか確かめようとするでしょう。いけません、見張りは僕がします。あなたは早く、ロープと人手を連れてここに戻ってきてください」

芳川さんはつかのま僕を見つめた。

つと視線を外し、わかった、と呟くと、さっと起きあがって水しぶきを跳ね散らしながら今来た道を駆け戻っていった。僕はしっかりと地面にしがみつきなおし、ひらめく稲光に、間歇（かんけつ）的に照らし出される下の磯の人影をじっと見おろし続けた。

芳川さんにとっていいことなのかどうかわからないが、時間がたつにつれ、下にいる人間は貴子さんではないことがだんだん見えてきた。女性にしては体つきががっしりしているし、手足も長い。はっきりはしないが、どうも髪も短いようだ。

そうだ、あれは男性だ。近くの海で難破した人が流れついたのか？

そう考えているうちに、野々村君たちを連れて芳川さんが戻ってきた。肩に、太い麻のロープを数束かけている。

「和弥君、無事か？　下の人はどうなっている」

「僕は無事です、流れついてる人もね。そのロープ、そっちの木に巻きつけてくれよ、野々村君。降りるのは誰が降りる？」

訊（き）くまでもないようだった。芳川さんはすでに、自分の腰にロープを巻いていた。

「気をつけてくれよ、芳川君。君まで行方不明になってくれるのは真っ平御免だぜ」

「波が来たら、無理はしないで岩にしがみついていてじっとしていてください。さいわい、ちょっと風が弱くなってきたみたいですが」

実際、嵐はもう山を越えたようだった。小石をばらまくようだった雨は普通にポツポツと合羽を叩くだけになり、空の高みで不気味にとどろいていた雷も、少しずつ形を潜めはじめている。木々のざわめきも心なしか静かになってきたようだ。

ロープをつけた芳川さんはカンテラを腰にくくりつけ、ゆっくりと崖を降りていった。僕たちが息を殺して待つなか、やがて、ロープがはげしく引かれた。

「そら来た、引け、引け」

僕たちは三人で、力いっぱいロープを引っぱった。ずしりとした重量がかかり、きしみながらロープがあがってくる。頭が見え、つづいて、腕が伸びて、肩で息をしながら芳川さんがごろりと地面に身を投げだした。ロープを放して野々村君が駆け寄る。

「大丈夫かい、芳川君、……ありゃ、こいつ、貴子さんじゃないじゃないか。うわっ、血だ」芳川さんの背にくくりつけられてあがってきた人物に触って、飛びすさった。

「生きてるのかい、この人」

「生きてる」息を切らせつつ芳川さんは言った。

「だが、知らない男だ。近くで難破でもしたらしいな」

見つけたのが貴子さんでないことに安堵していたのか落胆していたのか、疲労にこわば

った顔からうかがい知ることはできなかった。
ロープをほどくと、意識のない男の身体はごろりと横に転がった。鼻に手をあてると、しっかりと息が通っていた。潮に濡れた髪がべっとり頬に張りつき、切れた額から流れた血が顔の半面を赤く染めている。
カンテラに照らし出されたその顔を見て、誰かがするどく息をのんだ。
振り向いてみて、驚愕もあらわに身を引いているのが伊原氏であることを知ったとき、僕はひどく奇異な感じがした。
「どうしたんです、伊原さん。このひとが誰か、ご存じなんですか？」
「い、いや、知らん」
のど仏を上下させながら伊原氏は言い、とつぜん、ごまかすような笑みを浮かべて、
「なに、ただちょっと、昔知っていた相手に似ていたものでな。……さあ、貴子さんでないなら、こんな奴に用はないだろう。放っておいて、貴子さん探しを続けようじゃないか。うまいぐあいに風も収まってきたことだし、こんな時に、溺れそこないの世話なんぞしている場合でもなかろう」
「なんてことを言うんですか、あなたは」
僕はむかっ腹を立てた。野々村君も同調して、
「そうですぜ、たとえ目当ての貴子さんじゃなくても、命からがら陸地に泳ぎついた人を

捨てていこうなんてえ非人情がよく言えますね。いや、いいですよ、あなたに頼もうとは思いませんから、伊原うじ。——和弥君、そっちの足をもてるかい。僕が肩を抱えるから、一、二の、三で持ちあげておくれよ、いいかい、そら、一、二の」

伊原氏は苦虫をかみつぶした顔で、僕と野々村君が謎の漂流者を運ぶのを見守った。芳川さんはもう見るからに疲れはてていて、彼もこのまま捜索を続けるのは無理だと思われたので、思わぬけが人もできたことだし、説得して、みんなでいったん屋敷に引きあげることにした。

伊原氏も言うまでもなく、いっしょになって引きあげてきた。横について歩きながら、僕たちが運んでいる漂流者の男をちらちら見やり、あわてたように目をそらすしぐさがなにか奇妙だった。彼はこの男を知っているにちがいない、と僕は思った。

だが、それならそれで、どうしてあんな知らないふりなどするのだろう？

疑問を心の中で転がしながら、僕たちは漂流者の男を連れて屋敷へもどった。玄関ホールに運び入れ、僕の部屋から剝(は)いできたシーツと毛布を臨時に敷いて寝かせる。

ざっと身体を調べたところ、うまいぐあいに骨はどこも折れていないし、水も飲んでいないようだ。岩にぶつかったせいか、あちこちに擦り傷や打ち身がある。額に大きな切り傷があって、これが一番大きな怪我だった。どういう状況で難破したのかわからないが、

たぶん、船から投げ出されたひょうしに船縁（ふなべり）に額を打ちつけ、それで気を失ったおかげでかえって水を飲みこまずにすんだのだろう。傷はまだじくじくしていたが、端のほうからもう固まりかけていて、これ以上出血はしなさそうだった。呼吸も心拍もしっかりしていて、命に別状はないらしい。

「とにかく、ぬれたものを脱がせて、体温を確保してやらなきゃならないだろうな。……野々村君、君、どこか部屋が開いてるか知らないかい」

「僕に訊いたってわかるもんか。蜂谷さんはどこに行ったんだ？　やあ、いたいた」

奥から出てきた蜂谷氏を見つけて、野々村君が勢いこんで声をかけた。

「蜂谷さん、ごらんの通りなんです。貴子さんは見つかりませんでしたが、この人が溺れかかって流れついてるのを見つけましてね。ちょっと着替えとか薬とか、そういうものはどこにありますかね。今すぐどうってほどの容態でもないようですが」

「申しわけございませんが、私、お手助けはいたしかねますな」

蜂谷氏の言葉はつめたかった。

「なんだって？」野々村君が気色ばんだ。

「おい、いいかげんにしろよ。伊原うじといい、現在目の前で人が死にかかってるっていうのに、あんたがたは見て見ぬふりをするのかい」

「私は芳野堂家の執事でございます。主の家に関わりのないお方は、私の職分からは外れ

る道理でして」
　蜂谷氏はにべもない。野々村君はじだんだを踏まんばかりに、
「それとこれとは話が別だろう、人助けに職分もクソもあるもんかい。いったいこの家の人間はどうなってるんだ？　畜生、あんたたちはみんなそうだ、人のことなんかちっとも考えないで、自分たちの都合しきゃ考えねえんだ……」
　野々村君は満面に朱をそそいで僕を振り返った。
「いいよ、もうあんたにも頼まねえや。和弥君、君はまっとうだな？　確か喫煙室に洋酒の瓶が並んでた、あれを取ってきてくれよ、飲ませてみよう」
「わかった」
　答えて僕が立ちあがりかけたとたん、蜂谷氏がさっと前へ回って通せんぼをした。これには僕も、いいかげん逆上しそうになった。
「何をするんです。通してください」
「よくお考えになったほうがよろしいですな、和弥様。旦那様の御遺言状には、なんと書いてございましたか」
　蜂谷氏は爬虫類を思わせる目つきで僕を見返した。
「それは……三日間の間、島から足を踏み出したものは遺産相続の権利を失う、と」
「さよう、それから、こうもございましたな。同じく三日間の間に、よそから他人を島に

引き入れた人間もまた、相続権を失う、と」
後ろではっと息をのむ音が聞こえた。野々村君と芳川さんだ。
伊原氏はわれ関せずといった顔で、ニヤニヤしながら成りゆきを見守っていた。
「和弥様がこの男を助けるということは、和弥様がこの男を島に連れ込むということになりますな。そうすると、和弥様はこの時点で、芳野堂家の財産に対するすべての権利を失われることとなりますが、それでよろしいのですかな」
蜂谷氏の視線を、僕は真正面から受けとめた。ほとんど人間的な感情のうかがえない、蛇のような目だ。腹の底から這い上がってきた悪寒を飲みこんで、僕は一言いった。
「どいてくれ」
蜂谷氏を押しのけて喫煙室へ入っていった。
蜂谷氏はほとんど表情を動かさなかったが、伊原氏が面白くてたまらないというかのように、小さく口笛を吹いたのが耳に届いた。僕は気にもとめなかった。笑う奴には笑わせておけばいいのだ。どっちにしろ僕は本物の七瀬和弥ではないのだし、もし和弥本人としてここにいたとしても、あんな人々の管理のもとにある財産など、指を触れるのもけがらわしいという気持ちで腹の底がかっかしていた。
喫煙室の壁のキャビネットからウイスキーの強そうなのを選んでいると、後ろからいきなりすっと手が伸びてきた。驚いて振り返ると、芳川さんだった。芳川さんは僕の頭越し

に数本の瓶を取ると、疲れたような笑みを浮かべて僕を見た。
「君はあちらへ帰っていたまえ、和弥君。あの男を崖から引っぱり上げて、島に連れ込んだのは、僕だ。君には関係のないことだ」
「芳川さん、でも、あなたは——」
「いいんだ」
力なく頭を振って、芳川さんは瓶を小脇にかかえ込んだ。
「僕はもともと、貴子さんと結婚する予定だった男でしかないんだし。……金なんて、財産なんてどうでもよかった——いや——きっと、そう、これは罰が当たったんだ。だから、いいのさ。君は安心して、あっちで野々村君といてくれ」
止める間もなく芳川さんは酒瓶を持って出ていった。あとについてホールに戻ると、芳川さんが男の頭を支えて、その口元に瓶の口をあてがっているところだった。伊原氏は、ひどくいまいましげにそのようすを眺めていた。蜂谷氏は言葉どおり、一切手を貸すことなく手を後ろに組んで直立しているきりだった。
「そこで、何かございましたか」
階段の上から声がした。ふり仰ぐと、階段の途中の踊り場に、紅茶道具一式をのせた盆を捧げて、和装のしわだらけの老女がひとり立っていた。確か、六条喜久代とかいう、現夫人絢子さんの世話係のばあやだ。

「ああ、お騒がせしてすみません。ちょっと事故にあった人がいて、今、応急手当てをしているものですから」

「事故か何か存じませんが、奥さまがお休みの時に騒がれるのは困ります」

切り口上で言い、ゆっくり階段を下りてくる。「奥さま」の、夜のお茶を運んでいった帰りのようだった。

だが、階段を下りきって横の床に寝かされている漂流者の顔にふと目をとめたとたん、その干し柿めいた顔がおもしろいほどにひきつった。

「あ、こ、こ、この方は。……」

「どうしたんです、おキクさん。あなた、この人をご存じですか」

「あ。いえあの、なんですか」

途中ではっと気がついたらしく、何食わぬ顔をよそおったが、見るからにそわそわとして落ち着かぬようすだった。

「いいえ、あまりたくさん血が出ていて、びっくりしてしまいまして――まあ、見れば立派な男の方ですのに、ひどい怪我をなすってお可哀想な。……あの、なんでしたら私、上へ参って寝床をおつくりいたしましょうか。こんなところにお寝かせしておいて、熱をお出しになったらたいへんでございましょ」

「やあ、ほんとですか。助かります。このお屋敷にもまともな人情をお持ちの方がいたん

ですな、いや失敬」ちらりと蜂谷氏たちを睨んでおいて、「ついでに毛布をあと何枚かと、薬がありゃあ出してやってもらえませんかね。それに、包帯とか、乾いた肌着かなんかも必要でしょう。とにかく上へ運ぼう。和弥君、すまんが、あともうひとがんばり手伝ってくれよ」

「いや、その役は僕がやる」

芳川さんがさりげなく僕を抑えて進み出た。「あ、そうか」と野々村君は頭をかき、それから温かい口調で、

「和弥君、君はもう寝たまえよ。どうなったかはあした話してやるから。なあに、君がしてやったことはちゃんと五割増しにしてこの御仁に話しといてやるから、あとでうんと恩に着せてやるがいいぜ」

あたふたするおキクばあやを先に立てて、意識のない男をかかえた二人が二階に消えていくのを見ながら、僕はぼんやりと立ちつくした。

どういうことだ？

伊原氏に続いて、おキクさんまであの男を知っているようなそぶりを見せている。それでいて、それは他人には口外できないような種類のことらしい。

伊原氏も、おキクさんも、彼についていったい何を知っているのだろう。

そして彼は、あの謎の漂流者は、いったいどういう因縁から、嵐の夜にこの島に流れつ

くことになったのだろう――。

ともあれ、それからは起きていても仕方がなかったし、確かにくたくたでもあったので部屋に戻って眠った。疲れすぎていたのか、今度は夢も見なかった。

目が覚めてからベッドの中でいろいろと考えをめぐらせてみたが、断片的な情報が入り乱れているばかりでいっこうに納得のいく構図が見えてこない。

黒衣の怪人の正体は貴子さんだったのか？

偉雄氏を殺し、沢松艶子を殺したのも彼女なのか？

彼女はなぜ、どこへ、姿を隠してしまったのか？

あるいは殺人犯は別にいて、貴子さんはその協力者、あるいはただ利用されただけにすぎないのか？

新しく登場してきたあの男は、事件に何か関係があるのか？

二人の死。芳野堂偉雄、そして沢松艶子。

つづく三人目は、いったい誰が、どうやって死ぬのか……？

考えるうちに頭が痛くなってきたので起き出して、この手帳をまとめた。よく晴れたので午後からは外に出て、貴子さんの行方をさがしてみることにする。

またあとで書く。

【一九二九年十月二四日・午後四時五十一分】

自分の無力さに吐き気がする。
どんな力が僕たちをここに連れてきたのか知らないが、呪えるものなら呪ってやりたい。できるのは、ただ見守るだけなのか。目の前で人が殺されていくのに、さらに多くのものが死ぬことを僕は知っているのに、それをとめる力は僕にはない。尚美さん、応えてくれ。無性に君の声が聞きたい。僕たちを連れてきた力は、いったい僕にどうしろというんだ。こちらの世界で何が起こっているのか、君には見えているのか？
貴子さんが死んだ。
失踪したほぼ直後に、殺されていたのだろうという話だ。しかも、あんなおそろしい姿で、あんなおそろしい場所に死体をさらされて――
いや、よそう。
それよりいつものように、事実を順番どおり書いていくことにしよう。
でなければ頭がおかしくなってしまいそうだ。この事件はまったく狂っている。
この手帳を書くことが、僕の心を少しでも鎮めてくれればいいのだが。

午後から貴子さんを探しに出ようと思っていたことは前の節にも書いた。実際、探しには出たのだが、いうべきほどの収穫はなく空手で屋敷に戻らねばならなかった。芳川さんは言うまでもなく、野々村君も目の下に隈を作りながら、三人で手分けしてせまい島のすみずみまで探してまわったが、貴子さんの姿はおろか、手がかりらしいものさえなにひとつ見つけることはできなかった。

「芳川さん。いったん戻りましょう、あなたまで倒れてしまいそうだ」

ほとんど血の気をなくした芳川さんを見かねて、僕は声をかけた。芳川さんは抗議しようとしたが、野々村君が押しかぶせるように、

「そうだな。めぼしいところはだいたい探したようだし、少し戻って休憩しよう。あの溺れそこねた男もそろそろ目をさますころだし、あの人が海辺で貴子さんらしい人を見かけなかったかどうか訊いてみるのも悪かないだろう。芳川君もそれでいいね」

芳川さんはそれでも何か言おうとしたが、ふいにがっくりと頭を垂らして口をつぐんだ。秀麗な容貌は一夜のうちに衰えて、見るからに胸の痛むありさまだった。どんな自責の念が彼の中で荒れ狂っているかは想像に難くなかった。

芳川さんは、貴子さんが婚約者の自分のために殺人を犯したと信じているのだ。自分をりっぱな監督にするために、遺産の取り分を少しでも多くしようと実の兄を殺したと。

同時に、もう彼女が生きていないことも直感していたにちがいない。ややあって、顔を

あげた芳川さんの目には悲壮な覚悟があふれていた。
「わかった。屋敷へ戻ろう。二人ともすまない、つきあわせてしまって」
「なあに、野暮は言いっこなしさ。あんがいあの流され男が耳寄りな話を持ってきてるかもしれないじゃないか。奴の枕元へ座って、俺が助けてやったんだからと大きく出てみりゃあいい。きっと何かしら吐いてくれるぜ、吐かなきゃ、どうするか見てろ」
芳川さんはかすかに笑ったが、それはまるで泣いているような声だった。僕たちは言葉少なに屋敷へ戻り、それぞれの部屋へ散って、服を着替えた。
着替えを終えて顔を洗い、下へ降りて何か飲むものでももらおうと部屋を出たとき、僕はふと、中庭の薔薇の植え込みに目をひかれた。
僕の割りあてられた部屋はちょっとした離れになっていて、廊下から屋敷の中庭が見えるということは前に書いたと思う。その、ヨーロッパ風の美しく整えられた薔薇のアーチの下に、誰かがぽつんと立っているのが見えたんだ。
尚美さん？
一瞬、そう思った。ほっそりした後ろ姿はどう見ても女性のものだったからだ。
僕はあわてて階段を駆け下り、外に飛び出した。母屋をまわって中庭へ走る時間がもどかしくてならなかった。
なんというか、君の姿が、僕にとっては一種の気付け薬みたいに思えたんだね。勝手な

話ですまないとは思うが、このときは正直、君を助けるうんぬんより、あまりにもおかしな状況にほうり込まれていたので、前に自分がなじんでいた世界の匂いのするものが恋しくてたまらなかったんだと思う。

けれども、その思いは裏切られることになった。廊下から見えた薔薇のアーチの下に駆けつけたとき、そこにいたのは君よりもずっと幼い、セーラー服の少女だった。

「誰？　そこにいるのは……」

夢みるようにふりかえったのは、例の、双子の姉妹のひとりだった。

目つきに険がないところを見ると、妹の茉莉絵ちゃんのほうだろうと見当がついた。

「――そこにいるの、茉莉絵ちゃんかい？　もしかして驚かしたならごめんよ、窓から姿が見えたものだから……」

しどろもどろな弁解には応えず、茉莉絵ちゃんは「ああ……」と胸を押さえてため息をついた。

それから僕を見あげて、嬉しげににっこり笑った。

「ようやっと来てくださったのね、お兄さま。茉莉絵、ずっとここで待っていたのよ。和弥兄さまが茉莉絵に会いに来てくださるの」

「僕を？」

僕がとまどったことは言うまでもない。僕はそれまで、彼女たち芳野堂家の双子姉妹と

は一度もまともに口をきいていなかったし、ましてや、こんな場所で待ち合わせするようなどんな約束も交わしていなかったはずだ。

「僕を待ってたって、それどういう意味？　そんな約束はしていなかったはずだけど」

「だって、茉莉絵はお兄さまのお姫さまで、お兄さまは茉莉絵の王子さまなんですもの」

当然という口ぶりで言って、茉莉絵ちゃんは雲を踏むような足取りで近づいてきた。僕の手を取って、甘えるように頬をすり寄せる。

すべすべした頬が手の甲に触れたとたん、理由もなく僕はぞっとした。彼女の心を傷つけないようにさりげなく手を引きながら、

「でも、僕と茉莉絵ちゃんは、おとといの夜に会ったばかりじゃないか。そんなことを言うのは、なんだかおかしいね」

「嘘よ、嘘よ、茉莉絵はもうずっと長いこと和弥兄さまの帰るのを待ってたのよ。なのに、そんな意地悪言うなんて……」

いやいやをするように身をよじって、茉莉絵ちゃんはきつく僕にしがみついてきた。

正直、困惑した。茉莉絵ちゃんのほうは少し精神に問題があると言った、ナオミの言葉が頭を走りぬけた。心を病んだ孤独な少女が、新しく目の前に現れた兄に対して夢のような憧(あこが)れを抱いている、そういうことなのだろうか、これは？

しかし、どこかひっかかるものを感じた。それが何なのかわからないままに、僕は茉莉

絵ちゃんに押されるようにして薔薇の茂みに連れこまれていた。

上から見ていたときはわからなかったが、そこは、蔓薔薇をうまく鉄枠に這わせてあずまや風に仕立てた植え込みだった。枠の下には円形のベンチもしつらえてあり、僕を座らせると、茉莉絵ちゃんもすぐわきにぴったりと寄りそって座った。季節にあわせて薔薇は植え替えられているらしく、あずまやの蔓薔薇には小さな赤薔薇が開き、ここから見える多くの植え込みにも、ピンクや黄や白の秋の薔薇が今をさかりと咲き誇っていた。

「また、あそこへ連れてってくださるわねえ、お兄さま」

つよい薔薇の香りに包まれて、うたうように茉莉絵ちゃんは言った。

「あそこって、どこへだい」

「アルカディアですわ。エルフランド、茉莉絵とお兄さまの妖精のお国ですわ」

ますますわけがわからなくなってきた。

きっと僕はとほうに暮れた顔をしていたと思う。茉莉絵ちゃんは僕の困惑ぶりにはいっこうにかまわず、その国がどんなにすばらしいところか、何もかもがたのしく美しくてやさしく、どんなおとぎ話もかなわないようなりっぱなお城と、馬と、すてきな魔法に満ちているかを喜々として語ってきかせた。

ファンタジーに興味のある人なら面白い話かもしれなかったが、あいにくそんな趣味のない僕にはひたすら居心地が悪いばかりで、どうにかして彼女を傷つけないように話をや

めさせて、解放してもらうかを考えるのに必死だった。
「あら茉莉絵ちゃん、あんたそこにいたのね」
僕の祈りは思わぬ人のおかげでかなえられることになった。薔薇の茂みががさりと揺れて、顔を出したのは茉莉絵ちゃんとうり二つだが、少し目つきのきつい少女——姉娘の加奈絵ちゃんだった。
「また他の人をつかまえて夢の話なんかしてんのね。しょうのない子」
姉の顔を見たとたん、茉莉絵ちゃんはあわれなほどしおれかえった。それまでうっとりと僕の肩に頭をあずけていたのに、むち打たれたように飛びあがり、小さくなって震えている。
「加奈絵ちゃん」僕はかなりばつの悪い思いをしていたが、黙っているのもおかしい気がして、声をかけた。
「茉莉絵ちゃんを怒らないでやってくれないか。僕は別に気にしていないから」
「あらいいのよ、和弥さん。茉莉ちゃんて変な空想癖がありますの、それでみんな迷惑してますのよ。あなただって迷惑しないはずないわ」
つんと顎をそらして彼女は言った。異母姉の貴子さんの仕草を思わせる、権高な動作だった。母親は違っても、やはり姉妹ということなのだろう。それにしても、こうしてあらためて双子それぞれを並べてみると、まったく同じ目鼻立ちなのに中身の違いでこれだけ

変わるものかと不思議なくらいだった。

「空想なんかじゃないわ、あたし、あたし、……」

「まあ、なあに、むきになって。そうやって、しょっちゅう夢みたいな事いっているんだわ。少しはおとなにならなければいけないのに」

とうとう茉莉絵ちゃんはわっと泣きだし、あずまやを飛びだして母屋のほうへ駆けていってしまった。見送った加奈絵ちゃんは、妹を泣かせたことを後悔するようでもなく、ばからしそうに鼻を鳴らして出ていこうとする。

「加奈絵ちゃん、どうしてあんな言い方をするんだい。妹さん、泣いてただろう」

「かまうもんですか。うんと泣けばいいのよ、あんな子」

加奈絵ちゃんの言葉は姉とは思えないほどに冷たかった。

「だって、お母さんを亡くして、それ以来二人だけの姉妹なんだろう? もちろん、貴子さんや偉雄さんもいただろうけど、年は離れているし……」

「あんな子。妹だなんて思ったことないわ」

僕は絶句した。加奈絵ちゃんの目にその時ほとばしった光は、どんな大人の諭しも慰めも通用しないようなはげしいものだったからだ。

「それに、こういう話もあなたとはしたくありませんの。失礼」

さっと身をひるがえしたかと思うと、もうそこには誰もいなかった。薔薇の香りのただ

よう緑のあずまやで、僕は狐につままれたような思いとともに取り残されていた。

「――追っても無駄でしてよ。だってあの子、世の中の人たちはみんな自分の敵だって思いこんでいるんですからねえ」

甘い声が横からした。

僕は、そちらをふり向く前に誰がいるかをほぼ予想していた。黒いワンピースに白いエプロン、メイド姿のナオミが紅い唇を光らせてベンチのふちに肘(ひじ)をついていた。

「ナオミ、君はいつここへ？　もしかして、さっきからずっとそこで見ていたのか」

あんな場面をのぞき見られていたと思うと、恥ずかしさのあまり身が縮む思いがする。くってかかった僕を、ナオミは吠えつく子犬を構うかのように軽くあしらって、

「だってあたしは、和弥様のお世話をするために居りますもの。いつも、いつでも、お近くに控えているんですわ。だからお怒りになっちゃいやあよ、あなた」

小首をかしげてしなを作ってみせる。君と同じ顔に見つめられてそう言われると、怒りが急速に萎(な)えていくのを感じた。振りあげた手を、力なく僕はおろした。

「ナオミ、君はいったい何者なんだ？　今いたと思ったら、次の瞬間にはいない。とてもただの使用人とは思えないことをたくさん知っていて、思わせぶりを言うくせにあくまでメイドのふりをしつづける。ほとんどの使用人は島を出ていったはずなのに、どうしてまだ君はここにいる。君は誰だ？　尚美さんと君は何か関係があるのか？　いったい、君は

僕にどうしろというんだ?」
「あたしは、ナオミでしてよ」
無邪気な顔をしてナオミは言いはった。
「和弥様にお仕えするのが役目ですの。だってそれがお仕事だからですわ。あら、でも、あたしの気持ちがただお仕事からだなんてお思いにならないでね。和弥様のこと、あたし大好き、少しでも、お力になってあげたいわ……」
「ごまかすな」
鼻声でしがみついてこようとするナオミを、強引に僕は引きはがした。
「僕の知っている尚美さんは、そんな真似をするような女性じゃない。彼女は今、僕には触れられないどこかの空間に閉じこめられて、助けを求めているはずなんだ。君があの彼女と同一人物のはずはない。それなのにどうして君は、僕の知っている尚美さんと同じ顔と、同じ名前を持っているんだ……」
「それはあたしが『選択された可能性の女』だからですわ」
ひどく謎めいた言葉を、こともなげにナオミは口にした。
「なに……? 選択……?」
「あたしは選ばれてここにおりますのよ。和弥様のお世話をいたしますの。だって、誰も助けないんじゃ和弥様、お困りになるでしょう。そちらをご覧になって。あの、白い薔薇

の茂みの、ずっとしたのほうよ」
ナオミは白い手をさしのべてあずまやの外の庭をさした。
毒気を抜かれた僕は、言われるままに視線を移した。白い薔薇の咲き乱れる茂みがあずまやの右手の正面をいろどっていたが、ナオミの示す手の先を見ると、その下に、割れて黒くなった煉瓦や石材が転がっているのが見えた。
「あれが、どうしたっていうんだ」
「あれが、加奈絵と茉莉絵の姉妹の母親が死んだ場所ですわ」
ナオミの声はそんな内容を告げるときでさえぞっとするほど甘かった。僕はぎょっとして焦げた煉瓦（れんが）の散乱する地面をすかし見た。
気をつけて見ると、その周囲だけ土の色が違い、芝生の生え具合や薔薇の生育具合もほかとは少し差がある。一度なくなってから、今の姿に修復されたのではないか。焦げた煉瓦や石材は、片づけきれないまま茂みの下に隠れるよう放置されたのだろうか。
「百合絵が誰のせいで死んだか聞いて伝衛門は恐れおののいたと言いますわ。ずっと心に秘めていた恐れが現実になった思いがしたのでしょうね。『玻璃ノ薔薇』の企画を彼がたてたのはそれから少ししてから。まるでものに憑かれたような熱中ぶりで。第三夫人の絢子と結婚話が持ちあがったのは、制作がちょうどはじまったころだったとか」
「どうして君がそんなことを知ってる。どうして僕にそんなことを話すんだ」

「あたしはナオミ、あたしは選択された女、あたしは、こうであるかもしれないナオミ――」

あっという間もなくナオミの身体が押しつけられてきた。ゆたかな胸の弾力を感じたかと思うと、ぬれたように輝く真紅の唇が、ぎょっとするほど近くにあった。

「あなたの尚美はなんにも知らない」ナオミは囁いた。

「――あなたの尚美はこんなことだって、しないでしょう」

いきなり目の前が真っ暗になった。唇にやわらかいものが押しつけられ、濡れた熱いものがぬるりと口のなかに押しこまれてきた。

一瞬の間のあと、叫びながら僕は身をもぎ離し、ナオミを地面に突き倒した。ナオミはスカートを乱して石の上に横座りになり、うすい笑みを浮かべて僕を見た。ピンクの舌がちろりと現れて唇を舐め、その全身に、ふと白い陽炎がたったような気がした。

「あら、乱暴なすっちゃいやだわ、和弥様」

「君は何だ」僕は情けないほど動揺していた。息を乱しながら、僕はただ一つのことばを繰り返すことしかできなかった。

「君は何だ。君は何だ！」

「さあ、それより、どなたかお屋敷のほうでお呼びになっているようですわよ」

ナオミは何事もなかったような顔で屋敷のほうに視線をむけた。誰かが大きな声で、和

弥の名前を呼んでいる。

「ほら、お立ちになって、いってらっしゃいましな。お待たせすると、悪いですわよ」

「君は、いったい――」

細い手に手際よく埃をはたかれ、そっと背を押して送り出される。僕は操り人形のように、ふらふらと庭へさまよい出た。背中をむけたあずまやの中で、ナオミの姿がすでに消えていることは、賭けてもよかった。

「おうい。和弥君」

廊下の窓が開いて、そこから身を乗りだした野々村君が手を振っていた。

「どこにいたんだ？　例の溺れそこない君が目を覚ましたぜ。早く、あがってこいよ」

僕は熱に浮かされたような足取りで歩いてもどった。目の焦点の定まらない僕を、野々村君は心配そうに見やった。

「茉莉絵ちゃんたちと何を話してたんだい。二人とも、すごい勢いで走っていったけど」

「いや、別に何も」

内心どきっとしたが、ナオミとのことは見られていないらしい。つとめて何でもない顔で、「茉莉絵ちゃんが何か夢の話をしてくれていたんだけど、加奈絵ちゃんに見つかって叱られちまったよ」

「ふうん……」

野々村君は妙な顔をしていたが、ややあって気を変えて、

「ま、いいや。例の御仁が君に礼を言いたいそうだぜ。君が音頭をとらなきゃ、あのまま海の底でフカの餌になるところだったと言ってやったら大将、えらく感激してね」

「助けたのは芳川さんだよ。僕じゃない」

「馬鹿だなあ、あんなのは蜂谷の旦那(だんな)の前だけの方便だってのわかってるだろう。さ、来いよ、お待ちかねだぜ」

野々村君に引っぱられて、僕は問題の人物の病室になっている部屋へあがっていった。前の廊下まで来るとちょうどドアが開いて、中から、汚れ物を抱えたおキクばあやがひょっこり顔をのぞかせた。僕たちを見て驚いたように目を大きくした。

「やあ、ばあやさん、彼氏おのぞみの和弥君を連れてきたぜ」

野々村君が陽気に声をかけたが、おキクさんはおどおどと視線をそらして頭を下げ、顔を伏せたまま逃げるように廊下を去っていった。野々村君はぽかんとして、

「なんだい、ありゃ。前には俺たちのことなんざ鼻も引っかけなかったってのに、変われば変わるもんだなあ」

「あの人が彼の世話をしてくれてるの？」

「うん、そうだ。何がお気に召したんだか、随分とかいがいしく面倒を見てくれたよ。や

っぱりこういうとき男手じゃ駄目だね、ちっとも勝手がわからない」

　そう言いながらドアを形ばかりノックして開け、

「ご気分はどうです、片桐さん。七瀬和弥君をおつれしましたよ」

　片桐光太郎——。

　これが〈彼〉なのか、というのがまず頭に走った考えだった。尚美さんの祖父にして、手帳を二十一世紀の僕に伝えた人物——。

　部屋に入った僕を、彼は真正面からじっと睨みつけていた。

　髪に櫛を通し、寝間着に着替えた彼はひどく若く見えた。男にしては色が白く、青ざめて見えるほどの肌に血のにじんだガーゼや絆創膏がべたべた貼りつけられている。額に巻かれた包帯を長めの髪がなかば隠し、目の上までもかぶさっていた。

　これはあとで聞いたことだが、彼の曾祖父の代にロシアへわたって財を築き、あちらでめとった妻を連れて帰国した人物がいたそうで、そうすると彼には八分の一のスラヴの血が流れているわけだ。昭和の日本人にしては長い手足や、彫りの深い顔立ち、何より、ふとした挙措にまつわるふしぎな翳りは、その陰鬱な血のなせるわざなのだろう。わずかに碧のかった目で、少女めいて濃いまつげの下から嘗めるように見あげられると、足の裏からくすぐったくなるようなむず痒い感覚が走った。

ベッドのヘッドボードに背をもたせて身体を起こし、毛布の上で軽く手を組んでいる。まったくの無表情の顔からは、少なくとも野々村君のいうような感謝だとか、感激だとかいう感情はみじんも感じられなかった。

かわりに感じたのは、そう、敵意だ。

まるで親の仇（かたき）を睨みつけるような、という形容がぴったり当てはまる、射るような眼光がまともに僕をつらぬき通した。

「ああ、あなたがそうなんですか。——どうも、助けていただいてありがとうございます、七瀬和弥さん」

まったく視線を動かさずに彼は言った。吐き捨てた、といいたいほどの、するどい口調が言葉の内容と合っていない。

「どういたしまして。あんなことになっている方を、放っておくなんてとてもできませんから。それにしてもどうして、あんなところに倒れておられたんですか」

「すみません。淡路の親戚（しんせき）へ遊びに来ていたんですが、明日は帰ることになっていたので最後にゆっくり釣りでもしようと船を出したのが間違いでした。あれよあれよという間に嵐に巻きこまれてしまって、気づいたときにはボートが転覆していた。もしあなたがたに見つけてもらえなければ今ごろ命はありませんでした、感謝します」

まったく声に抑揚がない。下手な俳優が、気に入らない台詞（せりふ）を棒読みしているような調

子だ。

その間も、僕の顔にあてた視線は一向にゆるまない。野々村君もいささか鼻白んでいるようで、ベッドの上の人物と僕とを交互に見ながら妙な顔をしている。

「とにかく、無事で何よりでした。今は事情があってここは外部との連絡が取れない状態なんですが、あさっての夕方には定期船が来るそうですから、それまでここで、ゆっくり養生なさってください」

「ええ。ありがとうございます」

病人と見舞客の会話というより、剣客同士のつばぜり合いといったほうがふさわしい雰囲気だった。最後までよそよそしい空気のまま、僕は片桐光太郎のもとを辞した。

部屋を出るとき、入れかわりのようにおキクさんが戻ってきて、一礼して中へ入っていった。扉を閉めるまぎわ、まるで自分の息子を心配するような顔で、気づかわしげにベッドわきに跪く(ひざまず)おキクさんの姿が目に入った。

「まったく、妙な男だなあ！」

階段を下りながら、憤慨したように野々村君が拳(こぶし)を振りまわした。

「口ではありがとうございますなんて言っておきながら、あんなふてくされた顔をしてるなんておかしいじゃないか。おまえたちなんぞに助けてもらいたかなかったって面だぜ。ありゃあもしかして、入水(じゅすい)自殺するつもりだったんじゃないかな。うっかり死にそこね

ちまったんで、助けてやった僕らに八つ当たりしてやがるのさ」
「いや。僕は、そうじゃないと思うな」
考えこみながら僕は言った。何が合わないといって、自殺という言葉ほど片桐光太郎に不似合いなものはないだろう。ほかの誰が絶望しようと、彼だけは最後の最後まで目的をあきらめることはない、あれは、そういう目だ。
「——僕は、彼はなんらかの目的を持って、あえてこの島へやってきたんだと思う」
「なんだって。それじゃ、僕たちに助けられたのもあいつの計算のうちだっていうのかい」
「いや、それはわからない。でも、彼がただ偶然でここへ流れついたとは僕にはどうしても思えないんだ。今、ここで起こっていることにどういう関わりを持っているかはまだはっきりしないが——」
「注意しておいたほうがいいってことかな」
「うん。そのようだ」
僕は身震いした。
彼、片桐光太郎はこの先、いつかの時点で僕の手帳を受けつぎ、未来の二十一世紀へと受け渡していく。それまでには、どういういきさつがあるのだろう？　彼は、このキネマ屋敷の連続殺人について、どういう役割を果たすべき人物なのだろう？……

下に降りると、ホールに置かれたソファに芳川さんが座って頭を垂れていた。組み合わせた手に額をあずけ、身動きもしない。テーブルの上には氷の溶けかかったウイスキーが、手もつけられないまま置いてあった。

「芳川さん。大丈夫ですか」

「ああ……。君たちか」

芳川さんは頭をあげて僕たちを見あげ、深いため息をついてソファに寄りかかった。

「疲れたよ。……君たちも呑むか。さっき蜂谷さんに持ってきてもらった」

そばのワゴンに氷を入れたバケットとグラス、マドラー、レモンに洋酒の瓶がそろえられていた。僕たちはてんでに飲み物を作って近くの椅子に座り、しばらく黙って、芳川さんの慰めようもない気持ちを静かにわかちあっていた。

「芳川君。あまり気に病むなよ。貴子さんは大丈夫だよ」

「いいんだよ、野々村君。……僕はもう、彼女は生きていないと思う」

「芳川さん！」

「――彼女は、とても誇り高い人なんだ、和弥君」

グラスを割れんばかりに握りしめながら、芳川さんは言った。目をとじて、しぼり出すように言葉を続ける横顔に、認めたくない現実を自分自身にも言い聞かせようとする、悲

痛な意識がかいま見えた。
「彼女が犯人であっても、そうでなかったとしても——こんな恥辱をこうむって、平気でいられるような女じゃない。本当に関係がないなら、どんな疑いをかけられようと彼女は堂々と受けとめる。逃げだしたりなんかするはずがないんだ」
ごくりと喉を鳴らすと、芳川さんはゆっくりと顔をおおった。
「こんな所へ来なければよかった」
ふるえる声で彼は言った。
「彼女が行こうといったとき、止めていれば——金のことなんか問題じゃないと、あの時、はっきり言ってやっていれば」
「貴子さんは、お金のことをきにしていたんですか？」
芳川さんの心をこれ以上傷つけたくはなかったので、僕はできるだけそっと質問した。
顔をおおったまま、芳川さんはうめくように答えた。
「ああ。君も見ただろう、沢松艶子のことを。彼女と僕が、しばらくの間関係を持っていたのはほんとうだ。貴子さんは、そのことをとても気に病んでいた」
きっと、ずっと誰かに吐き出したくてたまらなかったのだろう。堰を切ったように、次々と言葉が流れだして止まらなくなった。
「貴子さんは『玻璃ノ薔薇』で人気が出る前、美しいことは美しいけれど、人形のようで

色気やぬくもりに欠けるとずっと言われ続けていた。そのことが、彼女にとってはひどい劣等感になっていたんだ。

人気の点で沢松艶子におくれを取っていたのも、それが原因みたいなものだった。小さいころから一度も父親に褒められたことのないのが、貴子さんをいつも苦しめていた。女優になったのも、本当のところは伝衛門氏に自分のことを認めてもらいたかったからじゃないかと思うよ。あんなに美しいのに、彼女は、男性にとって自分は魅力のない女なんだとずっと思い続けていたんだ」

一息に酒をあおって、芳川さんは続けた。

「だから、僕が沢松艶子と別れて彼女と婚約したときにも、心底からは信じることができなかったんだろう。貴子さんは僕を、芳野堂家の財産と権力をもってつなぎ止めようとした。僕が独立して映画会社を起こす資金を提供すると言いつづけ、満州に土地を買って、向こうで大々的に出す広告費も映画制作費も、全部自分が出すと主張した……」

「中国？　あちらに移るつもりだったんですか、あなたがたは」

「日本の映画界ではもう新興会社のはいる余地はあまりないからね。……近々、政府は清朝の生き残りをたてて、中国の一部に新しい傀儡国家を作るつもりらしい。そこなら政府や軍の肝いりも受けられるし、新しい会社が食いこむ余地もあると自信を持っていた。そういう頭の良さもある女だった」

一九三二年に、日本政府は中国東北部に、清朝最後の皇帝溥儀(ふぎ)を擁立して満州国を建国した。ここには満州映画協会、略して満映という映画制作会社が設立されて、国策映画を多く作ることになったから、貴子さんの読みもまんざら外れていたわけではない。
「あなたは、どうだったんです。彼女のお金について、心は惹かれなかったんですか」
「おい……」
野々村君が怒ったように僕をつついたが、芳川さんは悲しげにほほえんだだけだった。
「正直、それに惹かれなかったと言ったら嘘になるだろうな。僕は、できあいのメロドラマや安っぽい時代劇より、もっとスケールの大きなものを作りたかった。アメリカや、ドイツで作っているような、大がかりなセットと豪華な俳優、凝った脚本と美術を投入した、華麗な一夜の夢としての映画を……。
そのためには、なんとしても独立して雇われ監督の立場から脱することが必要だった。貴子さんは僕に、そのための手段を提供すると申し出てくれた。確かに最初は、そのことがきっかけだったことは認める。
だが、彼女自身を愛していたのも本当だ。高慢で冷たい、人形のような外見の下に、とても傷つきやすい、寂しがりやな女性が隠れていた。そのことに気づいたとき、僕は、彼女から目を離せなくなっていた」
芳川さんはうつむいた。

「金が魅力じゃなかったとは言わない。だが、金か彼女か、どちらかを選べと言われたら、僕は彼女を選んだだろう。
映画なんかどうにでも工夫して作れる。金だって稼げる。
でも、貴子さんはどんなものとも替えがきかない。とりかえしがつかないんだ」
うつむいた顔から静かにすすり泣きがもれてきた。
かける言葉もなく、僕たちは口を閉ざして座りつづけた。ややあって、涙を恥じるように普段の顔つきを取りもどした芳川さんは、おだやかに先を続けた。
「もし彼女が偉雄氏と沢松艶子を殺したのだとしても、その場合、原因を作ったのは僕だ。彼女にそんなことをさせたのは、僕の責任なんだ。
だが、誰もその責任を追及してはくれないだろう。だからせめて、僕は、僕を罰しないといけないんだ。それが、彼女に対する僕のつぐないなんだ」
「……しかし、そうすると——」
いきなり、まったく別の声が階段の上から降ってきた。
僕たちは驚いて上を見あげた。長身の人影が、うっそりと踊り場から見おろしていた。
「あんたか」
野々村君が怒りの声をあげた。
「ひょっとして、立ち聞きしていたのか？　失礼な奴だな！」

「失礼は重々お詫びします。だが、いくつか気になる点がある」

彼はゆっくりと階段を下りてきた。

簡素なシャツと黒っぽいスラックスに着替え、黒い革靴を履いていた。血の気のない額に、乱れた髪が散りかかっている。見知らぬ他人の家にいるにもかかわらず、その動作には一種の威厳があり、怒鳴りつけようと口を開きかけた芳川さんを黙らせるだけの力を持っていた。

片桐光太郎はかすかに足を引きずりながら階段を下りきり、僕たちの前に立った。

「芳野堂貴子さんが兄の偉雄氏を殺したのは遺産争いで理解できるとします。しかし、沢松艶子はなぜ殺されなければならなかったのでしょうか?」

「そんなの、決まってるじゃないか」

野々村君がぶつくさ言った。僕たちはみな、この不思議な人物の異様な存在感に圧倒されていたのだ。

「貴子さんは恋人の芳川さんに言い寄られるのががまんできなかったのさ。彼女は女としての自分に自信がなくて、色っぽい沢松艶子に恋人が心を動かすんじゃないかと思って嫉妬したんだ」

「いや、そうじゃない。もうひとつあった」

あの時の会話を思いだして僕が言った。

「沢松艶子は、『見ておいで、もうすぐおまえはすべてを失うんだ』と言っていた。あの時はただの脅し文句だと思っていたけれど、ひょっとして、彼女は何かを知っていたんじゃないか？　貴子さんにとっては致命的な傷になるような、なんらかの醜聞（スキャンダル）を」
「そして、それに関して彼女には相当な自信があった」
片桐光太郎が平然とその先を続けた。
「彼女はずいぶんと強引にこの島に乗りこんできたそうですね。もし、つかんだ情報に自信がなければ、貴子さんの親族ばかりが集う場所、しかも、こんな不便な島などに、彼女のような怠惰な暮らしに慣れている女優がわざわざ乗りこんでくるでしょうか。
また、貴子さんも、たとえ沢松艶子が恋人に言い寄ったとしても、莫大（ばくだい）な財産という大きな切り札をにぎっている自分が負けるとはよもや思わないでしょう。ましてや、殺しなどという大きなリスクを背負う所行を、その程度のことで行うとは考えにくい」
「待ってくれ、あんた、どこまで知ってるんだ？　誰にそんな話を聞いた？」
たまりかねて芳川さんが一歩前に出た。だが片桐光太郎は意に介さず、
「もしそのリスクを冒すことが必要と考えるなら、それは、彼女が沢松艶子に対して持っている、絶対的なアドバンテージを失うと感じたときしかありえない。
――沢松艶子が、いったい芳野堂貴子に対して何を握っていたのか調べる必要がありま す。彼女の遺産相続権を根こそぎ奪いさることができるような、どんな証拠を握っていた

のか、を」

僕たちはあっけにとられて目を見交わした。

僕たちは四人で沢松艶子の使っていた部屋へ向かった。

あとで考えると、僕はともかく、芳川さんや野々村君までがどうして彼、片桐光太郎の言葉にしたがって行動する気になったのか不思議な気がする。

だが、尚美さん、もし、君が実際に片桐光太郎という男の前に立ったとしたら、きっと僕たちの行動もわかってもらえるにちがいないと思う。なんというか、理屈ではない吸引力というか、妙な説得力が彼にはあって、いつのまにか彼の手伝いをするのが当然のような気にさせられてしまうんだ。あんな相手に会ったのは初めてだった。

沢松艶子の部屋は施錠されていたが、蜂谷氏が鍵を持ってきた。片桐光太郎の影響力は、驚いたことに彼にまで及んでいるようだった。やってきて鍵を差し出したが、少なくとも、喜んではいないように見えた。たいていは僕たちのことなど眼中にないような顔をしているのに、このときの蜂谷氏は、少しばかり身をかがめて様子をさぐるような目つきで片桐光太郎を見あげた。

「鍵をお持ちいたしました」

「ああ、ありがとう」無造作に受けとり、「使い終わったら返しに行きますよ」

「承知いたしました。――失礼ですが、片桐様」

ほとんど聞きとれないくらいに、蜂谷氏の声が低くなった。
「──あなた様と奥さまとは、いったいどういうご関係で？」
数瞬の間があった。
息づまるような静寂のあと、
「さあ、どうかな。それについては、君のほうがくわしいんじゃないか、執事さん」
冷たい口調で言い捨てて、片桐光太郎は鍵をあけ、足を引きずりながら部屋の中へ入っていった。
あとについて入りながら、僕と野々村君は驚いた顔をそっと見交わした。
「奥さんだって！　この男、絢子夫人の知り合いなのか？」
「じゃあ、蜂谷の旦那（だんな）がイヤイヤ頭を下げてるのは絢子夫人に命令されたわけだな、こりゃおかしいや。おキク婆さんが親身になって世話を焼いてたのがうなずけたよ」
「だけど、知り合いなんだったらどうして最初っからそのことを言わないんだろうな。あんな妙なやって来かたをして？」
「うん、そりゃあ、ちょっとわからないけど……」
僕たちがこそこそ話しているのを聞きつけたのか、片桐光太郎はちらりと振り返ったが、それ以上の注意は払わず部屋の光景に視線をもどした。
そこは沢松艶子が運び出されたままの状態になっていた。彼女の死体は偉雄氏同様、傷

むのを防ぐために気温の低い地下室に運びおろされていたのでここにはなかったが、ハンドバッグやカバン、化粧道具、服などは置きっぱなしになっている。椅子に投げるようにかけられたスカートや、床に散らばった派手な外国製らしいランジェリーが、持ち主の自堕落な性格を語っているかのようで正直、居心地が悪かった。

「あ、おい君」

僕たちがまごまごしているあいだに、片桐光太郎はさっさと行動を開始していた。ベッドの下から旅行カバンを引きずり出して中身をぶちまけ、一つずつたんねんに調べていく。扇情的な小説の載った雑誌や、出演作の台本、ハンカチやちり紙、あぶらとり紙など女性らしい小物類のいちいちまで、手にとってためつすがめつしている。

中には、男性にとってはちょっと顔の赤くなるような品物もあったが、そんなものでも彼は眉(まゆ)一つ動かさなかった。大きな、指の長い手は機械のような正確さで動き、実入りのなかった品物を右へ左へと積みあげていった。

カバンにはめぼしいものがなかったようで、すっかり探りおえた空カバンを押しのけると今度はハンドバッグに移った。

言いわけじみるけれど、僕たちが手を出しかねていたのは、探るべき品が死んだ人間の持ち物だったという点もあった――なんとなく、死者を冒瀆(ぼうとく)するような気がして、自分からは手を触れる気になれなかったのだ。

だが、片桐光太郎に関するかぎり、そんなデリカシーなどまるで存在していないようだった。彼は小さなビーズ細工のハンドバッグから口紅やコンパクトを取りだしてテーブルに並べていき、財布を取り出して留め金を開いた。

中身を一瞥し、かすかに眉をひそめて、取りだした一枚の紙を芳川さんに渡した。

「いずれにせよ、彼女はかなり執念深い女性だったようですね」

芳川さんは渡された紙を開き、頬をこわばらせた。

それは『玻璃ノ薔薇』の映画チラシだった。出演者とスタッフの名前が並び、主演の貴子さん演じる花売り乙女の可憐な表情が大きく刷り出されている。

その乙女の白い顔が、真っ黒に塗りつぶされていた。太い筆でひと塗り、というのではなく、鉛筆で、紙を突き破らんばかりにぐるぐると何度も塗りつぶしてあるのだ。黒鉛の粉で、粗いざら紙の表面が黒光りするほどになってしまっている。

ぞっとするのは、助監督として載っている芳川さんの名前の所まで、同じように執拗に塗り消してあることだった。スペースはせまくても、そこにこめられた憤怒と憎しみは、塗り消された花売り乙女の顔とまったく同質のものだった。

もし、貴子さんから芳川さんを奪い返したとしても、それが芳川さんへの愛情からではなかったことは一目瞭然だった。彼女はただ、男にトップ女優の自分が袖にされたということが我慢ならなかっただけなのだ。若いライバル女優と、自分から去っていった男への

怨念(おんねん)をつのらせる沢松艶子を思って、僕たちは慄然(りつぜん)とした。

財布にはそれ以上なにも見つからなかったらしく、きちんと閉じてわきへ置き、片桐光太郎は作業を続けた。

やがて、バッグの中のものはすべて取り出された。それでも彼はあきらめず、空っぽになったバッグの内側を、撫(な)でるように手でさぐった。

注意深い表情で手を動かしていたが、ある一点にきたとき、ぴたりと手を止めた。しばし何かに耳をかたむけるように目を細めていたが、「すみません」と声をあげた。

「そちらに出した化粧道具の中に、まつげ用の小さなハサミがあったと思います。こっちへ貸してもらえませんか」

野々村君がさっと手を出してハサミをとり、彼に渡した。僕たちはすっかり魅了されて、彼が何を見つけたのか早く見たくてたまらなかったのだ。

片桐光太郎はハサミをバッグにつっこむと、内張りのラシャ布を音をたてて裂いた。ハサミを置き、中から、二つに畳んだ茶封筒を引っぱり出す。

バッグの内側に縫い込めてあったのだ。僕たちはわれさきに、片桐光太郎のもとへ集まった。封筒を開く手元に、先を争って首をのばす。……

「切り抜きだ！　ずいぶん古いな」

真っ先に手を出してつまみ上げたのは野々村君だった。

それは茶色く日に焼けた新聞記事の切り抜きで、赤鉛筆で新聞の名前と日付が書き込まれていた。『諏訪万朝報　明治二十六年十二月六日』とある。

「諏訪……。長野だな。信州か」

「記事の内容はなんだ？」

その文章自体はなにしろ明治時代のもので、漢語調のめっぽう読みにくいものなのでここに写すのは控えるけれども、だいたいの内容は次のようなものだった。

明治二十六年十二月一日深夜、長野県諏訪の山間にある一小村が、鉄砲をたずさえた何者かの襲撃によって皆殺しにされ、全滅した。

犯人は前もって何丁もの銃を用意して村内に隠しておき、とっかえひっかえ撃って、おとなの男を皆殺しにしてから、女子供や年寄りまでも一人ずつ殺していったという。もともと小さな村のことで、全員集めても二十人ばかりしかいなかったらしいが、殺人者は、銃では死にきれなかったものをいちいち確かめて丁寧にナタで頭を砕いたり、喉を切ったりしてとどめを刺していったようだ。

山中のこととて発覚が遅れ、三日ほどして通りかかった行商人が、血みどろの村を発見してあわてて警察に通報した。

警官隊が駆けつけたとき、生き残っていたのは村の畑のわら小屋の中にもぐりこんでいた七歳の少女一人だけだったという。

事件の衝撃に少女は泣くばかりで、なにひとつ有力な情報は得られなかった。捜査をしようにも生存者がいないために犯人の見当もつけられず、あたりの山狩りが行われているが、いまだにそれらしい人間は発見されていないという。

だが、ここから記事は異様な内容を語っていた。

この殺戮（さつりく）を受けた村の名前を聞いたとき、周囲の村の人々は、いちように忌まわしげな顔をして唾（つば）を吐いたという。

『あそこは物狂いの村じゃけ……』と憎々しげに言ったという村の老爺（ろうや）の談話があった。話によればその村は、代々凶暴な犯罪者を生む血筋を伝えていて、よその村からは呪われ者として忌み嫌われているのだという。

とくに、その村の中心になっている家の血は非常に濃く、数代に一度、身体のどこかに八重咲きの花のような形をした痣（あざ）を持つ子が生まれる。

その子は、人の形をしているがその実、血を好み、残虐な殺しをもてあそぶ肉体を持った悪鬼であって、一度その血に目覚めたが最後、周囲に血の旋風を巻きおこして、その命が絶たれるまで飽くなき殺戮にふけってやまぬと伝えられている、らしい。

だから今回の殺しも、その呪われた血を負った者が、欲望のままに周囲を相手に大殺戮にふけった結果にちがいないのだというのが、その老爺の力説するところだった。この老爺の説に関して文章子は、

『嗚呼愚ナル哉開化ノ世ニシテ救ヒ難キハ蒙昧ナル田夫ノ迷信ヲ信ズルニ有……』

と大いに慨嘆し、呪われた血うんぬんの話を一蹴している。

最後に生き残った少女について、一度に親も、住む場所もなくした彼女は、関西のほうに住んでいる親戚の家にひきとられることになるようだとつけ加えていた。全体的にはそれほど大きな記事でもなく、書き方からしても、二十一世紀のゴシップ誌に近いたぐいの、あまり高級でない新聞だったのだろう。

「これが芳野堂家となんの関係があるんだ？　もう四十年近く前のできごとじゃないか」

「待って、村の名前はなんというんだ？」

「村の名前かい、ええと——」

指でたどっていってぴたっと止める。

「ああ、これだ。——『翳谷村』」

このときの、僕の驚きを想像してもらえるだろうか。こんなところで耳にするとは思わなかった『影谷』の名前を聞いて、僕はあやうくあっと声をあげるところだった。

影谷貴史、〈和弥〉ではない、本当の僕の名前——僕の名字と、同じ名前の村が、明治時代に、皆殺しにあっている？

しかも、その村は狂気の血を引くとして、周囲の人々からは忌み嫌われていた？

落ちつけ、と声を出さずに僕は呟いた。

名前が同じだったからといってなんだというんだ。ただの偶然の一致にすぎない。思いもかけないときに自分の名前が出てきたので、びっくりしただけさ。
そう、ただ、それだけのことだ……
「あれ、どうしたんだい、和弥君。顔色が悪いぜ」
「いや。なんでもない」
片桐光太郎がするどい目で僕をうかがっていた。背筋を這う気味の悪い汗を振りはらうように、僕はわざと大きな声を出してもう一つ出てきた品をとった。
「こっちは……写真だな。これも古い」
「あれ、これは、偉雄氏と貴子さんじゃないか。よく似てる」
芳川さんが身を乗りだした。
映っているのは詰め襟の、何かの制服らしきものを着た二十歳前後の青年と、十二、三歳くらいの女の子だった。
そう言われてみれば似ている。女の子の、つんとした人形のようにととのった顔立ちは貴子さんの幼いころの写真といわれても納得できるものだし、青年のほうの、傲慢そうにねじ曲げたうすい唇も偉雄氏のものと言えばいえる。
「しかし、二人の昔の写真というにはちょっと古すぎないか。これには、日付は入っていないんだな」

「入っていないみたいだな。しかし、ここに持ってこられているということは、何か芳野堂家に関係のある人々の写真なんだろう。ほかには、どんなものが？」
「調査会社への手紙と、料金の領収書が」
片桐光太郎が言った。
「この封筒も、調査会社の名前の入ったものですね。沢松艶子はその――」
と新聞の切り抜きをさし、
「四十年前の事件に関して、調査員を雇っていろいろ調べさせていたようです」
「四十年前……」
野々村君がむずかしい顔をした。
「いくらなんでも古すぎらあ。もしかして、そう、たとえばの話だよ、芳野堂伝衛門がその虐殺事件の犯人だったとしてだね――」
「おい、そりゃちょっと飛躍しすぎじゃないか」
「だから、たとえばと言ってるじゃないか。……伝衛門が昔そういう重犯罪を起こしていたとしても、四十年もたっちゃ警察だって手が出せないだろう。
そりゃ映画なんて人気商売だから、会社の看板に傷がつくのは困るけど、だからといって貴子さんの遺産相続権とはつながらないよ。だいいち証拠もないことだし。そんな話を暴露したところで、なんの役にも立たないと思うなあ」

「それに、彼女は新世界キネマ社の専属女優です」
横から片桐光太郎が指摘した。
「自分を売り出してくれる会社が没落しかねない醜聞（スキャンダル）を流すことは、彼女にとって、損ではあっても得にはならないはずですね」
「じゃあ、やっぱり貴子さん個人に関することを調べていた、と考えるほうがいいのか」
「だが、四十年前だぞ？　彼女が生まれる二十年近く前の話と、貴子さんと、いったいどういうつながりがあるっていうんだ」
僕たちは顔を見合わせ、考えこんだ。
「……この封筒には、報告書が入っていません」
封筒を探ってみていた片桐光太郎が言った。
「中身から見て、ここには、調査会社の報告書が入っていたはずです。この切り抜きや写真は、それに付随する資料として同封されたものでしょう。沢松艶子は、その報告書を貴子さんに突きつけて、芳川さんと別れて遺産は残すか、それとも遺産をとりあげられて芳川さんからも捨てられるか、どちらかだと迫ったのではないでしょうか」
「じゃ、報告書はどこにあるんだ？」
「決まっている。彼女が捨てたんだ。貴子さんが」
沈んだ調子で芳川さんが呟いた。

「沢松艶子を殺したときに、彼女から奪って、持って逃げるか処分したんだろう……」
「そうかもしれません。しかし、念のために、二つの死体を見ておきたいですね。それに、芳野堂伝衛門の死体が消えたという、彼の書斎も」

まったく、片桐光太郎は何かの魔法でも知っているかのようだった。彼がひとこと言うだけで、これまで蜂谷氏の手によって固く閉ざされていたドアが次々と開いていった。これまでさんざん、蜂谷氏の慇懃無礼さに神経を逆撫でされてきた僕と野々村君は、ひそかに快哉を叫んだくらいだった。

これまで、けっして見せてもらえなかった、偉雄氏と沢松艶子の死体も、地下室に降りて調べることを許可された。

もっともこれは、あまり気持ちのいい体験ではなかった。コンクリートの土間の上に寝かされた、喉を裂かれた死体と首を絞められた死体というのは、なんともいえず鬼気迫るしろものだ。

白く濁った目に、天井の裸電球がぼうっと反射しているのを見るとしだいに息苦しくなってくる。いくら十月も末で、空気の冷たい地下室でも、時間のたった死体からただよう死臭にはさすがに胸が悪くなった。僕は思わず口を押さえた。

「気分が悪いですか？」

ぎょっとした。片桐光太郎がいつのまにかそばへ来て、あのかすかに碧(みどり)のかって見える目で、じっとこちらをのぞき込んでいるのだ。

「当然でしょう。今まで、こんなに人間の死体なんてものとお近づきになった経験なんてありませんでしたからね。あなたは、慣れてらっしゃるんですか？」

聞きかえしてやったのは半分いやみのつもりだったが、片桐光太郎は、まばたきひとつせず僕を見返し、やや間をおいて、

「ええ。いささか」

と平然と答え、また沢松艶子の青黒い顔の上にしゃがみ込んでしまった。

片桐光太郎は偉雄氏の喉の傷口を調べて、鋭い刃物を、前を向いた状態で見て左から右へとないで切ったと判断した。

「そうすると……こう……後ろから、こう手を回して切ったことになるのか」

人に後ろから抱きつくような格好をして、野々村君が真似をしてみせた。

「そうですね。たいていの人は右利きですから、右手に刃物を持って肩越しに手をのばし、左前方から右の後方へとかき切ることになるでしょう。正面から斬りつけると力が入らず傷が浅くなりやすいし、急所の頸(けい)動脈も狙いづらい」

「芳川さん……」

芳川さんが真っ青な顔をしてうつむいている。僕は心配になって駆け寄った。あの時、

貴子さんも偉雄氏の後ろの席にいた。
「いいんだ。いいんだ、和弥君。僕は大丈夫だ」
今にも倒れそうなようすで、無理に笑ってみせる。
「いつかは知らなければならないことなんだ。僕は平気だ。大丈夫だ」
そんな顔をして、何が大丈夫だ。
「片桐さん」
僕はきっと後ろを振り返った。片桐光太郎が見つめ返す。
「何か？」
「少しは気を使っていただけませんか。あなたはこういう事態に慣れているのかもしれないが、われわれは素人なんですよ」
おい和弥君、と芳川さんが止めにはいる。僕はそれを振り切り、
「芳川さんは、恋人が行方不明になって、しかも今のところ彼女に……疑いがかかっているんです。もう少し、気を使ってやってください」
一瞬、あたりがしんとした。
言ってしまってから、なんて子供っぽいことを言ってしまったのだろうとほぞをかんだ。そもそもの発端となった、昭和の未解決事件の企画を立ち上げるときも、こんなふうに後悔したものだ。頭に血が上ると、あとで自分でも恥ずかしくなるような台詞（せりふ）を口に出して

しまうのは、治そうと思って治らない僕の癖だった。きっと、片桐光太郎は鼻で笑って済ませるだろう。
だが、彼はそうはしなかった。片桐光太郎は穴が空くほど、僕の顔を見つめた。
言われた内容というより、それを僕が言ったということに、なぜか驚いているように見えた。それから、小さく唇を動かした。
声は聞こえなかったが、（恋人……）と言ったように見えた。
顔をあげ、静かな口調で「わかりました」と言った。
「つい、事実を調べるのに夢中になっていたようです。あなたのお気持ちも考えずに、申しわけありませんでした」
「いえ……」
謝られた芳川さんのほうが、かえってあわてた。僕もめんくらった。片桐光太郎のその謝罪には、それまでの彼からは思いもよらないような暖かさがこもっていたからだ。
「そろそろ、出ましょう。最初の殺人があった部屋を見せてくださるとかおっしゃっていましたね」
偉雄氏が殺された遊戯室は、すでに僕たちが見てまわっているので、場所を示しながらそのことを説明するだけでほぼ事足りた。芳川さんも、進んであの時頬にスカーフのよう

な布がふれたことを話した。

　さっきの死体の前での一件から、得体の知れないこの人物が少しばかり近くなったような気がしていた。彼も、まんざら人情を知らない人間ではないのだ。

　遊戯室を出て、伝衛門の書斎へあがるべく、身体を揺らしながら階段をあがっていく彼の後ろ姿に、僕は、妙な信頼感を持ちはじめていた。

「遺骸（いがい）はこのベッドに安置されていたのですね。死因は何と？」

「ワインに入っていた毒のせいだと聞かされています。蜂谷氏から聞いた話で、僕たちが直接確かめたわけではありませんが……芳川さん、あなたは貴子さんからなにかお聞きになっていませんか」

「僕も和弥君とあまり差のない話しか聞いていないな。毒物は青酸カリだということだった。発見されたのは二十二日の早朝だったらしいが、死んだのは夜中の三時ごろだったと推定されたようだ。絢子夫人が見つけたときには、すでに遺体は冷たくなってこわばっていたそうだから」

「気温にもよるでしょうが、だいたい死後三時間から四時間たって発見されたということでしょうね。……これが伝衛門氏ですか？」

「え？　ええ。彼の肖像画だそうです。近年はいつも仮面をつけていたそうですから、そう以前に描かれたものではないと思いますが」

「ふむ――」

片桐光太郎は壁に掲げられた額に近寄った。鼻を近づけて匂いを嗅ぐような仕草をし、キャンバスの表面を軽くコツコツと叩いてみる。

「死体がないのがわかったのは偉雄氏が死んだ直後、……しかしそれまでは誰もこの部屋を覗いたものがいなかったから、いつ運び出されていてもおかしくはない。むろん、痩せ型とはいえ成人男性一人の死体を、誰にも見つからないように運び出すのはなかなか大変なことだったでしょうが」

「あるいは、自分の足で歩いていったのかだな」

野々村君がうそ寒そうに首をすくめる。

「自分の足で、だって？」

「貴子さんは伝衛門が生き返ったと信じてるみたいだったじゃないか。だったら、最初に毒物を飲んで死んだと思わせておいたんだけど、本当はそれは仮死状態になる薬かなにかで、しばらくして目をさまして自分で出ていったの……かも……」

だんだん声が小さくなっていって、最後は口の中で消えた。申しわけなさそうに肩をちぢめる。「ごめん」

「いや、それもひとつの可能性でしょう」

冷静に片桐光太郎が言ったので、びっくりして僕たちは彼を見た。

「もし、貴子さんが――むろん、これは彼女がすべての犯人だったと仮定しての話ですが――偉雄氏を始末し、沢松艶子を黙らせて自分の遺産相続権を安泰にするのだけが目的だったのなら、この芳野堂伝衛門の死体の消失はまったく余計な手間です。こんなことをすれば、ほかの人間の注意を必要以上に惹(ひ)いてしまうのは目に見えている。ふたつの殺人はともかく、この死体消失については、貴子さんの意志の外側でおきたことではないかと考えたほうがいいようです。

もっと言えば、伝衛門がよみがえって屋敷の人間を殺している、などというシナリオを書くつもりは、もともと貴子さんにはまったくなかった。

なのに、何者かが自分を利用して、そういう絵を描こうとしている。貴子さんは殺人事件そのものに怯(おび)えるより、誰かが自分のやっていることを知り、その上で、そこにおそろしい粉飾を施していると知ったことに震えていたのでしょう」

「でも、彼女の部屋からはあの怪人のつけてた面が出てきたぜ」

「ええ。しかし、そんなものを隠しておくことは、誰にでもできることですからね。むしろ、始末せずにいつまでも持っている方が不自然だ。見つけたのはどなたです？」

「それは……僕だけど」と野々村君。

「そう。じゃあ、あなただってできたわけですね。なに食わぬ顔で仮面を持ってはいって、たった今見つけたような顔をしてみんなに出してみせれば、それで格好はつく」

「なんだって」野々村君はさっと青ざめて怒鳴った。
「僕がこっそりこの事件に荷担してるとでもいいたいのか？」
「申しわけありません。そういうつもりではなかった」
口では謝りながら、片桐光太郎の目は眉を怒らせて憤慨している野々村君の様子を注意深く観察していた。
「ただ、そういう可能性もあるということを示唆したまでです」
「じゃあ――じゃあ、それは誰がやったんだ？」
焦れたように芳川さんが一歩前に出た。
「誰がこんな、因縁めいた話を演出しようとしているんだ。貴子さんが殺したなら殺したでいい、だが、彼女はけっしてこんなおかしな細工をするような女じゃない。彼女を利用して、こんな血みどろの絵を描かせている奴というのは、いったいどこのどいつなんだ？」
――それに答えようと片桐光太郎が口を開きかけたとき、いきなり、開いたドアから酔っただみ声が響きわたった。
「おい、貴様ら。そんなところで何をしているんだ？」
伊原氏だった。ひどく酔っているらしく、足もとが定まらない。片手にブランデーの瓶をさげ、身体を左右にゆっくり揺らしながら、濁った目でどろんと僕たちを見ている。

「なんでもないさ。本来ならあんたがしなくちゃいけないことを、僕たちがみんなでしているだけだ」

芳川さんが痛烈に言った。僕も、野々村君もうなずいた。

「やいやい、あんたの職分とやらを考えりゃあ、呑んだくれるより先にもっとしなきゃならないことがあるんじゃねえのかい、ええ、伊原刑事のおっさんよう？　まったくたいした旦那だな、仕事をする気がねえんならとっとと寝床へ転げ込んで、僕らの邪魔はしないでくれねえかい。へっ、まったく、刑事がきいてあきれらあ」

野々村君が勢いよくべらんめえでまくしたてる。

「なんだと、若造が」

伊原氏の顔が赤黒く染まった。

「なんにも知らないど素人が、適当なことを抜かすんじゃねえよ。なんの権限もないくせに、……おいそこの、風来坊」

片桐光太郎のほうへ顎をしゃくって、

「てめえ、知ったかぶった顔でいい気になるなよ。調べるようなふりして現場を引っかき回しやがったら、ただじゃおかねえからな。けっこう貴様が、ぜんぶの糸を引いてやがるんじゃねえのかい」

「片桐さんは、偉雄氏の死んだときには島にいませんでしたよ。沢松さんが殺されたとき

も」むきになって僕は言った。

「そんなの、わかるもんかい。ずっと島に隠れてて、事は済んだと逃げようとしてうっかり海にはまる、……はっは、情けねえ話だなあ、なあおい」

歯をむき出して伊原氏は笑った。

この中傷に、片桐光太郎は動じなかった。ただ青ざめた顔がいよいよ白く、透きとおるほどになり、その中で、碧のかった眸が昏い光を爛々と放ちはじめたばかりだった。

「おい、溺れそこない、てめえ、なんでこんなところに来やがった？　いったい何しに、こんなところへふらふら迷いこんで来やがったんだ？」

「――それは、あなたにお話しするような事ではないし、また、話す必要があるとも思いませんね」

よく通る声で片桐光太郎は言った。

「なんだと……」伊原氏はかさにかかって言いつのろうとしたが、片桐光太郎の視線にぶつかると、うっと声をあげて息をのんだ。

僕までが思わず身震いしたほど、それは冷ややかな、魂まで凍らせるような一瞥だった。萎縮して、脂汗を流しはじめた伊原氏をじっと見据えながら、「皆さん」と片桐光太郎は言った。

「案内してくださってありがとうございました。どうやら、これからこの刑事さんにきち

んとご挨拶をしなくてはならないようですので、しばらく彼と二人きりにしてくださいませんか。今後もここに置いていただくには、怪しい者ではないことを、この人に納得していただかなくてはならないようですし」

「納得！　納得だと！」

だらだら汗をかきながら、伊原氏がわめいた。

「誰が納得するものか、貴様、いったい何をしに来た！　とっととこの島から出ていくがいい、貴様など誰が信用するものか、誰が、誰が……」

吐きつけられる嵐のような罵詈雑言をあびながら、しかし片桐光太郎の横顔は、まるで彫像のように静謐だった。

片桐光太郎を残して伝衛門の書斎を出たあと、いったん部屋へもどって休むという野々村君たちに別れて、僕はぶらぶらと屋敷の正面へ出ていった。片桐光太郎と伊原氏がどんな話をしているのか非常に気にはなっていたが、あの時のあの雰囲気では、とても同席など言い出せそうにもなかった。

「なあに、大丈夫さ。もう僕たちがいたときから、あの男、片桐の大将に位負けしてたじゃないか」野々村君はそういって僕の肩を叩いた。

「しかし、まったく変わった男だな、あいつは。それは確かだよ。絢子夫人の知り合いら

しいが、いったい何を言われてきたもんだか」
　ああ、本当にそうだ。片桐光太郎、彼は、いったいこの事件でどういう役割を担っているのか？
　一人になってまわりが静かになると、どっと気疲れが襲ってきた。だが、さりとて部屋へもどっても落ち着いていられないのは目に見えている。
　庭でも散歩して、少し気分をほぐしてからもどろうと思って、中庭へ足をむけた。屋敷の角をまわると、カーテンの引かれた遊戯室の前のポーチに、小さな男の子がひとり、身体を丸めて座りこんでいるのが目に入った。
「あれは……」
　確か、偉哉君だ。死んだ偉雄氏の一人息子だ。
　僕が近づいていくと、びっくりしたように顔をあげて尻込みした。あまり人慣れしていない子らしい。できるだけ開けっぴろげな表情を作って、「やあ」と手を振り、まごまごしている偉哉君の隣に腰をおろした。
「ひとりで遊んでるの？　偉哉君はえらいなあ」
　恥ずかしそうにうつむいた。
　手には、はじめて紹介されたときにも持っていた、塗りの剝げた飛行機のおもちゃを持っている。ポーチの床には木でできた戦車だの、兵隊人形だの、砂を盛ってつくった陣地

だのが散乱していた。たった今まで、戦争ごっこの真っ最中だったらしい。
「その飛行機、かっこいいね。お父様に買っていただいたのかな？」
「……お兄さまは、飛行機、すきなの？」
消え入るような声だった。
「うん、好きだね。その飛行機はドイツのかな？　どことどこが戦っているんだい」
「こっちが日本で、こっちが、イギリスだの、アメリカだの、いろいろ。ぼく、大日本連隊の隊長さんなんだ、少尉さんなんだよ」
小さな胸をそらしてみせる。
白い開襟シャツの胸には、ブリキの勲章やリボンがいっぱいぶら下がり、おもちゃのサーベルがわきに置かれている。十歳になると聞いているが、それより少し幼い印象で、しゃべり方もちょっと舌足らずなところがあった。疳の強そうな細くつり上がった目が母親似だったが、笑うとふっくらした頬にえくぼができてなかなかかわいらしい。
「お兄さま、飛行機が好きなんだったら、ドイツの隊長さんをまかせてあげてもいいよ。ぼくたちこれからバルチック艦隊を攻撃しに、編隊をくんで北へ進軍するんだ」
「よしきた、そうしよう」
バルチック艦隊は日露戦争の時のロシアだと思うが、子供の遊びだ、かたいことを言う必要はあるまい。

僕たちはしばらく日当たりのいいポーチに額を寄せあって座り、それぞれ機銃掃射や飛行機の発着音、爆雷の破裂する音などを口まねしながら、空想上の巨大帝国の、空想上の最強戦艦を攻略するのに熱中した。

はたから見れば馬鹿みたいな光景だったろうが、僕にとってはこの一両日の血なまぐさい現実が少しずつ心身からそぎ落とされていくような気がして、ほっとできるひとときだった。

空想の戦争には、血が流れない。歴戦の勇士はどんな傷を受けても立ち上がり、不屈の闘志でもって敵を攻略する。目の前に広がる無惨な現実からはほど遠い空想に、僕はほとんど夢中になって遊んだ。

遊ぶあいまにおいおい聞いてみたが、父親の偉雄氏が死んだことは、偉哉君にはまだ伏せられている。急な仕事ができて、さきに会社へ帰ったと聞かされているらしい。

偉哉君も、さして気にしているようではなかった。もともと家にいることの少ない父親で、可愛がられた経験もあまりないようだ。母に似て身体の弱いことを責められ、無理に体操や武道を習わされて煙たく思っているふしも見える。

ただ母親のことは心配していて、あの日からずっと、部屋にこもって寝たきりなのだと顔を曇らせた。学校にもあまり行っていないので、こんなふうに誰かといっしょに楽しく遊ぶことはあまりないの、と頬を上気させている。

「ああ、おもしろかったねえ！」
　とうとう敵陣地のまん中に日本の旗を立て終えて、戦闘が一区切りつくと、偉哉君は目を輝かして僕に身をすり寄せてきた。
　すっかり気に入られてしまったらしい。こんなふうに、年上の人間にきちんと相手をしてもらったのは初めてだったのだろう。まるい頰を上気させて、はち切れそうににこにこしている。
「ああ、ほんとうにね。偉哉君は、いつもひとりで遊んでいるの？　こんなふうに」
「うん、そう」
　まだ名残惜しそうに、ぶーんと言いながら飛行機を飛ばしてみせる。
「お母さまは頭がいたいっておっしゃるから、ぼく、お騒がせしないようにいつも外であそぶんだよ。でも、いつもひとりだから、今日はとってもおもしろかった。お兄さま、あしたもまた遊んでくれる？」
「ああ、いいよ。時間があったらだけどね」
「よかった。ぼく、和弥兄さまって、もっとこわい人かと思っていたから」
「どうして？」
「だって、お母さまが和弥兄さまのこと、『逆らってはいけない』なんておっしゃってたもの。さからう、って、けんかする、っていうことでしょ」

心配そうに偉哉君は僕を見あげた。
「和弥兄さま、お母さまと、けんかなんかしないね？　お母さまのこと、怒ってなんかいないよね？」
「君のお母さま、そんなことを言っていたのかい……？」
僕はさっと身体が冷たくなるのを感じた。腹の底からいやな冷気がじわりと湧いてきて、背筋がふるえだす。
なにも知らない偉哉君は「うん」と無邪気にうなずき、
「おとといの晩に、寝るまえにぼくのお部屋にきてくださったけど、そのときとってもお顔の色がわるかったからどうしたの、ってきいたの。そうしたらお母さま、とてもびっくりした顔をなさって、いいえ、なんでもないのよってお答えになったけど、そのあと、貴子お姉さまがいらして、戸口のところで何かぼそぼそ話してらっしゃったの」
「偉哉君、君、それ聞いていたの」
「違うよ、聞こうとなんかおもわなかったよ。でも、聞こえたの」
偉哉君は唇をとがらせた。人の話を立ち聞きしたなどと思われることは、少年の自尊心にかかわるらしい。
「途中で、ドアを閉めてしまわれたからあんまり聞こえなかったけど、そのとちゅうで、『和弥さまに逆らってはいけない……』っていうのがきこえたの。貴子お姉さまはなんだ

か怒ったみたいにいいかえしてたけど。ぼく、あの方きらいだな」
はげしい口調で言って、あわてたように周囲を見回した。だれも聞いていないとわかると、ほっとしたように、
「お母さまのこと、とってもきつく怒るんだ。お母さまがかわいそうだよ」
「じゃあ二人は僕のこと、ずっと前から知ってるみたいに話してたんだね」
僕はもう気もそぞろだった。
「うん、そうだよ。だって和弥兄さま、ここんちの人なんでしょう?」
子供にとっては息子、といえば、ずっと昔から家にいるものということに相場がきまっているらしい。きょとんと目を見ひらいている偉哉君には、どんなに重大なことを自分が言ったかまったく考えもおよばないようだった。
僕はいそがしく考えをめぐらせた。蓉子夫人と貴子さんが、ここに呼び寄せられる以前から、七瀬和弥と知り合っていた?
それはむろん、僕と入れかわる前の、本物の七瀬和弥であるはずだ。そして蓉子夫人の言動からすれば、七瀬和弥は、貴子さんと蓉子夫人、少なくとも蓉子夫人に対して、ある一定の影響力を持っていたらしい。
それは、どんなものだったのだろう? そう考えて、僕は冷たい汗が流れるのを抑えられなかった。

『和弥さまに逆らってはいけない……』、その言い方には、相手に対する恐れというか、つよい畏怖(いふ)の気持ちがこもっていると思われる。蓉子夫人にそのように言われる七瀬和弥とは、どんな人物なのだ？

僕がはまりこんでしまったこの『七瀬和弥』とは、どういう事情を負った人間なのだ？もしかして彼こそが、貴子さんと蓉子夫人をそそのかし、殺人を犯させたあげく仮面の殺人劇を演出した張本人ではないのか？……

「和弥兄さま、どうしたの。戦争ごっこ、もうあきちゃった？」

黙り込んでしまった僕に、偉哉君が気がかりそうに腕をゆすった。

「ああ……偉哉君、悪いけど、僕は用事を思いだしてしまったんだ。ちょっと行かなくてはならないところがあるから、失礼するよ。また遊ぼうね」

「ええっ、そんなのいやだい」

偉哉君はみるみる泣き顔になった。顔をゆがめ、袖(そで)をにぎって放さない。

「偉哉君、ごめん、本当にすまないけど、どうしても行かなければならないところがあるんだ。放してくれないかなあ」

今聞いたことを、早く片桐光太郎に話さなければ——そんな考えで頭がいっぱいになっていた。彼ならこのこんがらがった話に道筋をつけて、うまく解き明かしてくれるだろうという気がする。

伊原氏と話している最中かもしれないが、かまうものか。あんな刑事の風上にも置けない輩は放っておいて、渡すべき相手に情報をわたさなければ——
「いやだい、いやだい。帰っちまっちゃ、いやだい」
しかし偉哉君は、いっこうに袖を放そうとしなかった。じだんだ踏んで必死の面持ちでこちらの顔をのぞき込み、
「ねえそれじゃ、和弥兄さまにぼくのないしょの遊び場おしえてあげるよ。ぼくだけの秘密の場所だよ、ほかの人、だれもしらないんだよ。お兄さまにだけ教えてあげるんだよ、だから、帰っちゃだめだ、だめだってばよう」
もはや泣き声になりながら、偉哉君は僕の手をぐいぐい引っぱって、中庭のほうへと連れだしていく。無理に手を払ったりしたら、その場で大声で泣きわめかれそうで、僕はついていくしかなかった。泣く子には勝てぬというのは本当の話なんだな！
——しかし、引っぱられていくうちに、最初のやみくもな衝動にあった大きな落とし穴に気づいて、僕は内心青くなった。
それは、七瀬和弥という人間は、ここにいるほかの人々にとっては、この僕、影谷貴史という本名を持った、未来からきた人間しかいないということだ。
七瀬和弥が貴子さんと蓉子夫人の二人と、何かよからぬ関係を持っていたようだという

情報は、とりもなおさずこの僕自身の頭上に、疑惑の雲を招き寄せることにしかならないのではないか。

もちろん僕——時間漂流者である影谷貴史——には身に覚えのない話だが、それを納得してもらうには、僕がはるか七十年近くの未来から、どういう理由でかこの時代へ落ちてきて、しかも七瀬和弥と入れかわってしまった別人だということをまず理解してもらわなければならないことになる。

とんでもない話だ。僕がそんな話を聞かされるがわだったら、馬鹿にされたと信じて怒るか、頭がおかしいと思うに決まっている。まっとうな人間ならみんなそうだろう。下手な言いのがれはよせと、ぶん殴られても文句は言えないところだ。

ジレンマに、僕は歯ぎしりした。せっかく重要そうな情報を手に入れたというのに、僕は誰にもそれを打ち明けることができないなんて。

とにかく今のところは、いつか役に立てられるときがあると信じて腹の底に収めておくしか方法がなさそうだ。僕はあきらめて身体の力を抜き、べそをかきかき袖を引っぱっている偉哉君に声をかけた。

「わかったよ、偉哉君。もう少しここにいるから、そんなに引っぱらないでおくれよ。袖がほつれてしまうよ」

「えっ、ほんとう?」

涙のにじんだ目で偉哉君は振り返り、ぱっと顔を輝かせた。
「よかった、ぼく、ほんとに和弥兄さまとあそびたいんだもの……。ほら、ここだよ」
うってかわって元気な声で、茂みのかげに走りこむ。
僕は思わず足をとめた。そこは、茉莉絵ちゃんに夢のようなエルフランドの話を聞かされた、あの小薔薇の茂る薔薇のあずまやだったからだ。
「どうしたの。早く、おいでよ」
偉哉君がふしぎそうに中から呼びかける。僕はごくりと唾をのむと、
「あ、ああ」
と返事をして、中に入っていった。
「ほら、和弥兄さま、これだよ」
中では偉哉君が、石のベンチの下に膝をついていた。ベンチの下に深く手をつっこみ、しきりになにか探っている。やがて「あった！」と歓声をあげ、同時に、どこかでごろごろと固いもののかみ合う音がした。
僕は目をむいた。立ち上がり、自慢そうに見つめる偉哉君の足もとに、大人ひとりがようやく通れるほどの四角い穴が、ぽっかりと口をあけたのだ。
「ひ、偉哉君、これ、君が見つけたのかい」
「うん、そうだよ」

度肝をぬかれたようすの僕を見て、偉哉君はすっかりご満悦だった。
「ぼく、身体がよわいでしょう。だからよく学校をおやすみして、ここのお屋敷にきてたの。でも、寝てばかりでつまらないから、よくお部屋をぬけだしてここでこっそりあそんでたんだけど、あの椅子の下に」
とさっき手をつっこんでいたベンチをさし、
「大事なコインをおっことしちゃったの。それで、手を入れて探してたら、なにか棒みたいなものにさわったの。そうしたら、この入り口がひらいたんだよ」
「そうだったのか……」
まだ動悸（どうき）がおさまらない僕をしりめに、偉哉君は慣れた動作で穴にもぐりこんだ。自分で持ち込んだのか、置いてあった蠟燭（ろうそく）に火をつけた。橙色（だいだいいろ）の光が幼い顔に躍る。
「さ、行こうよ和弥兄さま。ここ、とってもおもしろいんだ、兄さまだってきっと気に入るよ、ぜったいそうさ」
穴をくぐるとそこから数段のはしごがあり、そこを降りると、大人ひとりがやっと立って歩ける程度の、細い横穴が続いていた。壁は漆喰（しっくい）で固められ、ところどころに木の柱があって、ちょっとやそっとでは崩れそうにない頑丈な作りだ。床は土のままになっているが、よほど何度も行き来されたらしく、よく踏み固められてなめらかだった。

「偉哉君、君、いつごろここを見つけたの」
「もうずうっとせんにだよ。ぼく、初等学校にあがりたてのころだったから、六つくらいだったかな」
この床のようすは、偉哉君のような子供が何度か行き来しただけではこうはなりえない。少なくともひとりの大人が、長い年月にわたってしげしげと行き来しなければとてもこんな状態にはならないはずだ。
蠟燭で照らしてみると、壁のそこここや柱の角も、ちょうど手の触れそうなあたりがうっすら黒ずんでいて、一時はよほど頻繁に人が通ったことをうかがわせる。
「ほら、こっちだよ。のぞいてごらんよ」
偉哉君が足をとめ、蠟燭を持った手で自慢げに指さしてみせた。壁から、細く光がもれている。言われるままに目をあててみて、僕は息をのんだ。
そこは、例の遊戯室だった。ちょうど、ビリヤード台の影になっている位置に小さなのぞき穴が開いていて、そこから室内の様子を見渡せるのだ。
「偉哉君……、こんな穴、いくつもあるの」
「あるよ。このお屋敷、たいていのお部屋にこんな穴があいてるんだ。でもそのこと、だれもしらないんだ」
ぼく以外のひとはだれもしらないよ、と偉哉君はいたく誇らしげだった。

僕は屋敷の間取りを思いだしていた。母屋の部屋は、中心にある玄関ホールを囲むようにほぼ円形に配置されていて、すべての部屋が建物の外周の石の壁に接する部分があるように作られている。石の壁を二重にし、その中にこんな秘密の通路を通すということは、可能なのだろうか？

そう、可能なのだ。現にここに、僕たちの今いる通路がある。

もしかしたら、ひどく威圧的だと感じたこの屋敷の外観も、通路をはさんだ二重壁を作ったがために、普通以上に壁が分厚くなってしまったのが原因ではないのだろうか。そんなことも考えた。

しかし、どうしてこんな通路を造る必要があったのだ……？

偉哉君ははしゃいだ様子で、暗い通路を先に立って僕を案内してくれた。上り下りしたりゆるやかにうねったり、通路は広さを変えることなくどこまでも続くように思えた。

ところどころで足を止めて覗（のぞ）くと、この屋敷のあちこちの部屋の様子がはっきりと見てとれた。伊原氏の使っているらしい、乱雑な寝室が見えた。誰もいない空き部屋もあったし、本棚にずらりと本が並ぶ図書室や、女性のものだったらしいピアノの残る部屋や、あのおそろしい殺しのあった沢松艶子の部屋も覗けた。僕はもう、声も出なかった。

通路から部屋への出入りはできないらしく、扉らしいところはどこにもなかった。まあ、あればいくらなんでも気づいただろうが。

誰であれ、この通路を作った人物は、息を殺してここを徘徊し、だれにも気づかれることなく部屋やそこにいる人間の様子をのぞき見ていたのだ。

なんのために？

「あっ……」

急に偉哉君が立ち止まったので、あやうくぶつかるところだった。

「ど、どうしたんだい、偉哉君」

「しっ。聞いて、だれかいるよ」

声をひそめて囁くと、偉哉君は僕を手招きしてあるのぞき穴の前へ呼んだ。

ちょうど胸の高さに、小指でついたほどの小さな穴が一つあいている。そこから、低い話し声がもれてきていた。

『……いいや、そんな話じゃごまかされねえ。だから、なんで来たんだとさっきから訊いてるだろうが……』

「どうしたの？」

はじかれたように身をはなした僕に、偉哉君はけげんそうな顔をした。

「和弥兄さま、変なお顔してる。中にいる人、だれなの？　兄さまのお友だち？」

「ああ……、いや」

僕はぎこちなく答えて唇をなめ、長く息をついて、ふたたびゆっくりとのぞき穴に身を

かがめた。

そこから見えるのは、一時間ほど前にあとにしてきた芳野堂伝衛門の書斎だった。大きな書類机で視界はなかばかくれているが、室内にいる二人の人間のうちひとりがベッドに腰掛けているのでよく見える。

もうひとりは机に隠れていて見えないが、話しているのは、主にそちらのほうだった。酔っぱらいのだみ声が、ほとんど同じ事ばかりをくどくどと話し続けている。

伊原氏と――片桐光太郎。

『何度訊かれても、答えは同じです』

ベッドに座った片桐光太郎が静かに口を開いた。

『僕はここに、あなたを目当てにきたわけではありません。また、芳野堂家の財産に惹かれてきたのでもありません。僕が来たのは、あなたにはまったく関係のない理由からであって、それを話す義理は僕にはないし、あなたにも、話させる権利はない。それさえ果たせれば、あなたのことなどどうでもかまわないし、かかわるつもりもない』

『嘘だ。嘘だ』

固いものがぶつかる音と液体の跳ねる音がした。おそらく、酒瓶を机に乱暴に置いたのだろう。視界をさえぎる影からぬうっと伊原氏の背中が出てきて、今にも片桐光太郎につかみかからんばかりにのしかかった。

『言え。貴様、また俺の邪魔をしに来たんだろう。貴様は俺を恨んでいる、いいや、恨んでいないはずはないのだからな。
だが、俺とて貴様を恨んでいるぞ。恨んで恨んで、憎くて憎くてたまらないのだ。貴様は、あと少しで手にはいるはずだった俺の夢をみじんに砕いてくれた。しかも、あることないこと周囲に吹きこんで、うまうまと俺をはめやがって――』
『しかし、あなたは僕に、もうその代償を払わせたはずだ』
片桐光太郎の言葉はあくまでもおだやかだった。
『もう、それでよしとしませんか。黙ってこのまま、おとなしく引きあげてください。正直、今の僕には、あなたにまで注意を払っているほどの余裕がない』
『おう。代償か。そうだな』
にごった笑い声が響いた。聞くものの背筋を泡立たせずにはおかないような、悪意と猜疑をこねて突き固めたかに思える笑いだった。
『そういえばその左足は、俺がこの手で、ぶち砕いてやったんだったなあ――』
伊原が（もう氏をつける気も起きない）、こちらを向いていなくてよかったと心底思った。もし、あの笑い声を発したときの彼の顔を見ていたら、嫌悪感のあまり僕は吐いていたかもしれない。
その時、片桐光太郎がふと目をあげた。

すぐにその視線は伏せられたが、彼の目が、一瞬まともに僕たちのいるのぞき穴のほうを見つめていたのは絶対に確かだ。

厚い壁を通してまともに見られた気がして、僕は思わず身を引いた。そのとたん、偉哉君がすぐそばへ近づけていた蠟燭が指を嘗め、思わずあっと声をあげてしまった。

『おい、なんだ？　今、なにか声が聞こえたぞ』

伊原があたふたとあたりを見回して騒ぎ出した。

僕は偉哉君をせきたてて、あわててその場をはなれた。

物音を聞きつけられる危険のない距離まで離れてから、暗い中で可能なだけのいきおいで精いっぱい走り、数分後には、最初に入った薔薇のあずまやの入り口までたどりついていた。

「おもしろかったねえ！」

外の空気を吸うが早いか、偉哉君は大満足の面持ちで叫んだ。

「ぼく、すっごくどきどきしちゃったよ。ほんものの偵察兵みたいでしょう、兄さまどう？　兄さまもあそこ、気に入った？」

「ああ、まったくね」

まったく、とんでもないいたずら小僧だ。しかし、そのいたずら小僧のおかげで、思いがけないことがいろいろわかったのだから感謝しなければいけないのかもしれない。

「だけどね、偉哉君、さっきのこと、ほかのだれにも言っちゃいけないよ、いいね？　この通路のことも言っちゃいけない、わかるね」
「うんわかった、ぼく言わないよ。ぼく、兄さまにしきゃ秘密のこといわないんだ」
偉哉君はすなおにうなずき、でも、と首をかしげた。
「さっきの男の人たち、なんの話をしてたのかな。兄さまわかる？　なんだか、けんかしていたみたいだけど」
それは僕こそが聞きたいことだったが、この場では、さあ、わからないねとごまかしておくほかなかった。
片桐光太郎が伊原の夢を砕いた？　彼の足は、伊原によってへし折られたものだ？　よくわからない。二人が以前から知り合いで、たがいに憎しみ合っていることは確かなようだが……。
伊原は兵庫県警の刑事である。
片桐光太郎は、――犯罪者、なのか？
「偉哉君――」
僕は地面に膝をつき、偉哉君の肩に手を置いた。
「なあに、兄さま」
「偉哉君、君、いつもあんなふうにあの通路にもぐり込んでいるのかい」

「うん、よく来るよ。ここ、遊ぶところがなくてたいくつなんだもの」
「この二日間の間にも、入ったかな？」
きょとんとしながら偉哉君はうなずいた。
「なら――もし、なにか今みたいにだれか大人のひとの話を聞いたことがあったら、僕に教えてくれないかな。今の男の人たちの話でもいいし、ほかの人の話を聞いたことがあるなら、それを、僕に教えてもらえないか」
「和弥兄さまに？」
おどおどと左右を見回して、偉哉君は小さな声で答えた。
「いいよ、和弥兄さまはぼくの友だちだものね。……でも、ほんとに、ほかの人にいっちゃいやだよ？　この通路のこと、ぜったい、ぼくと兄さまだけの秘密なんだから」
「うん、そりゃもちろんわかってるとも。――それじゃ偉哉君は、ほかの人の話もあそこで聞いたことがあるんだね？」
偉哉君はじっと僕を見つめ、こっくりとうなずいた。
「それ、だれ？　あの男の人たちのどっちか？」
「ううん。ちがうの」
偉哉君の声はますます小さくなった。「お姉さま」
「えっ？　なんだって？」

「貴子姉さまと、それから、沢松なんとかっていう、いやな女の人……」

偉哉君はあの嵐の夜も、ひとりでこの通路に入りこんでいたのだった。

誰もが彼は子供部屋でおとなしく眠っているものと思っていたころ、このきかん気な少年は、ひとりで蠟燭（ろうそく）を掲げて壁の内側を歩きまわり、あちこちの部屋をのぞいては悦に入っていたのだ。

人の行動を物陰からこっそり覗くという行為は、こんな小さな子供にも麻薬にも似た中毒症状を引きおこすらしい。壁一枚向こうではごうごうと嵐が荒れ狂っていたにもかかわらず、偉哉君は顔をまっ赤にして、いたずらな妖精のように人の話に聞き耳を立てていたのである。

「それで、貴子さんと沢松さんは、どういう話をしていたんだい」

「あのね――あの――」

僕があまり熱心に聞くので、少しこわくなってきたらしい。多少尻込（しりご）みしながら、

「ほんとに、ぼく聞く気なかったんだよ。でも、歩いていたら、聞こえちゃったんだもの。姉さま、怒らないよね？　和弥兄さまも、怒ったりしないでしょう？」

「ああ、怒らないよ、怒らないとも。それで？　どんな話だったんだい？」

「あのね――」

下を向いて、ますます小さな声で、偉哉君は言った。
「ぼくの父さまと、それから貴子姉さまは、どっちも、芳野堂家の子供じゃないんだって
――」
それを聞いたときに感じたのは、衝撃というより拍子抜けだった。最初の夫人の緋沙子さんは、なんだ、そんなことだったのかという言葉が頭をまわった。最初の夫人の緋沙子さんは、
奔放な女性だったと聞く。彼女と、だれか愛人との間に生まれた子供、そういうことなのか。父親側と血のつながりがないがゆえに、遺産相続の権利を喪失すると、沢松艶子は主張しようとしたのだろうか。
しかし、戸籍上ではきちんと偉雄・貴子の兄妹は芳野堂家の長男と長女として記載されているのだろうから、今さら血のつながりがどうとか言いだしても無駄なのではないか。養子ということもあるのだから、実際血のつながりがどうかということより、法律は戸籍や遺言状のほうを重視するだろうに。
沢松艶子のにぎった証拠とやらはたんなる妄想なのか？
しかし、そんな気抜けする思いは、偉哉君の次のひとことでたちまち吹き飛んだ。
「あの女の人は貴子姉さまに、お前は薔薇の形のあざがないから、芳野堂家とのつながりはないんだって言ったよ。……ほんとうにお爺さまの、芳野堂伝衛門の血筋なら、身体のどこかに八重咲きの花の形の――ちょうど、薔薇の花みたいな形のあざがあるはずだって、

言ってた。それが芳野堂家の、血筋に伝わるしるしなんだ、って」
「な、な、なんだって」
僕はつい偉哉君の肩に置く手に力をこめたらしい。偉哉君は顔をしかめて、
「痛い、痛いよ兄さま」
「あ、ああ、ごめんごめん。しかし、八重咲きの花……薔薇(ばら)みたいな形のあざ……沢松さんは確かに、そう言ったんだね」
「うん、言ったよ。そうして、その薔薇は悪魔のしるしなんだって。ええとね、『あざがなくておまえは幸せだ、殺人狂の血をひいていないから――』」
しだいに血の気が引いていく僕に気づかず、偉哉君は眉根(まゆね)にしわを寄せて、一生懸命その時の沢松艶子の言葉を思いだそうとしている。
「『でももし、おまえがあくまであの人と別れないというなら、私は、あの人に、おまえが殺人狂の血をひく娘だということで話をする。そんなことを聞いたらあの人だって、おまえのことなんか怖くて触れもしなくなるに決まっている。でも、芳野堂の娘でない、お金も持っていないおまえなんて、やっぱりあの人は見向きもしなかろう。
どっちにしても、おまえはあの人と別れなければならない。あの人と別れてもお金は残るか、お金も、あの人も両方失うか、好きな方を選ぶといい……』」
映画の家に生まれた子供のおかげか、その記憶力は幼いながらみごとだった。つっかえ

ながらも長い台詞(せりふ)を暗唱しおえて、偉哉君は満足げににっこり笑った。

「そう、そんな感じのことを言ってた。貴子姉さまがだまっているんで、あの女の人はまた話しに来るといって帰ってしまったから、ぼくも眠くなってきてたし、お部屋へ帰って眠ってしまったんだけど。

和弥兄さま、これでいい？　意味、わかる？」

「ああ——ああ——」

僕は偉哉君の手を握りしめた。

「ありがとう、偉哉君。とてもよくわかった。偉哉君は賢い、いい子だね」

「いやだなあ、そんなの、たいしたことないよ」

偉哉君は身をよじって照れた。彼のふっくらした手を撫(な)でてやりながら、僕は目がまわるような勢いでいろいろなことを考えていた。

八重咲きの花——薔薇のあざ——

それが事件の鍵(かぎ)なのだ。あの古い新聞記事の切り抜きは、そういうことだったのだ。

沢松艶子はどこかから、芳野堂家にまつわる不吉な噂を聞きこんできた。ほぼ間違いないだろうが、芳野堂伝衛門は、あの新聞記事にあった虐殺された村の生き残りか、その血縁者のひとりだったのだ。

そしてその体内には、狂気の殺人者を生む血が流れている。その血は薔薇のかたちの烙(らく)

印（いん）となって、血を継ぐ人間の身体に花開く。

しかし幸か不幸か、多情な妻緋沙子のせいで、長男偉雄と長女貴子はどちらも伝衛門の血を継ぐことなく、狂気の呪いも受けずに普通の子供として生まれた。

だが、結果的にそのひとりは血の海に沈み、もう一人は、血塗られた手をして嵐の闇に姿を消すことになったわけだが。

だが、そうすると——ぼくは身を震わせた——あの仮面をつけた怪人と、消失した芳野堂伝衛門の死体が、急に不気味な色でクローズアップされてくる。

貴子さんは伝衛門の死体が消えたのを知ったとき、ひどく怯（おび）えていた。その時はまだ沢松艶子がいなかったから、殺人狂うんぬんの話は知らなかっただろうが、陰気な父の姿に、小さいころからなにか感じるものがあったのではないか。だからこそ、あれほど怯えたのではないか。

そして、その怯えは、沢松艶子が持ち込んだ脅しによって、確実なものになったのだ。

「兄さま。お屋敷のほうで声がするよ。だれか騒いでる」

偉哉君の声で、僕は現実に引き戻された。

屋敷のほうから一声、だれかが叫ぶ声がした。一つ、二つ、何人もがあわただしく走り回る気配がする。偉哉君が背伸びして手を額に当てた。

「なんだろうね、大きな声だなあ！　みんな、なにかあったのかな？」

「——偉哉君。もどろう」

僕は立ちあがって、偉哉君をそっと押しやった。

「なんだか様子がおかしい。君はお部屋へもどって、じっとしておいで。そのうち、誰かに行ってもらってあげるからね」

「いやだい、いやだい。ぼく、兄さまといっしょに行くんだい」

偉哉君は甘えるように足にしがみついてきた。

「兄さまといっしょだったらこわかないや。ねえ、ぼく、ついてっていいでしょう」

このとき無理にでも偉哉君を部屋へ帰らせなかったことを僕は今でも悔やんでいるのだが、その時の僕は、ふくれあがってくる胸騒ぎに押されるままに、とにかく早くもどることしか考えられなくて、

「よし、じゃあ、いっしょにおいで」

と、つい答えてしまったのだった。

偉哉君は喜んで僕のあとについてきた。表へ回るのは時間がかかりそうだったので、遊戯室のポーチのフランス窓をあけて、そこから直接入った。

声は玄関ホールのほうからしている。父親の血のあとを偉哉君に見せないようにしながら部屋を通りぬけて、僕は、先に立って遊戯室のドアを開け、ホールに足を踏みいれた。

「みなさん、どうしたんです？　また、何か……」

僕を迎えたのは、耳にしみるほどの沈黙だった。
伊原がいる。蜂谷氏も、野々村君も、芳川さんも。加奈絵と茉莉絵の姉妹も。
それから、片桐光太郎も。
それまでの騒ぎがぷつんと途切れ、だれもが、恐ろしいものを見るような目つきで、僕を見ている。
僕は狼狽した。
「ど、どうしたんです、いったい。何が起こったんです。どうしてみんな、そんなに真っ青な顔をしてるんですか――」
「和弥君」
喉にものの詰まったような声で、野々村君が言った。「上を見ろ」
僕は視線を上にあげた。
――そして、見た。
「ねえ、何があるの？　ぼくも見たいよ」
後ろから、偉哉君がせっかちにねだった。
見せてはならない。そう思いながらも、あまりの恐怖と衝撃に、僕は動くことができなかった。
「見たいんだったら――」

麻痺してしまった僕をじれて押しのけ、偉哉君はむりやり前へ出ようとした。
いけない。
そう思った瞬間、その思いが形をとったように、だれかが音もなく近寄ってきて、さりげなく偉哉君を抱いて目隠しした。
「君は、こんなものは見なくていいんだよ。坊や」
片桐光太郎は言った。
「さ、おいで。お部屋まで、連れていってあげよう」
口をとがらせかけた偉哉君だったが、その人物の静かな声を聞くと、不思議に抵抗せずに、おとなしくその場を連れだされていった。
「……貴子さん」
偉哉君と片桐光太郎の姿が消えると、だれかが、呻くように呟いた。
「どうして——いったい、なんでこんな姿に……」
まるで、その声が聞こえたかのように、ゆっくりと、ゆっくりと、その人物の顔が、ずれ始めた。
顔。その、黒衣をまとった人物の顔、ホールを睥睨する、巨大な薔薇窓に寄りかかるようにして立った、黒衣の怪人のその顔が——
少しずつ、少しずつ下へとずれていき、やがて、粘った赤いしずくを引きながら、かす

かなぺしゃりという音をたてて、床に落ちた。
それと同時に、黒衣の胴体もぐらりと傾き、どうっとホールに落ちてきた。
誰かの絶叫が響きわたった。
芳川さんだった。引きちぎらんばかりに髪をつかみ、獣のように身を震わせながら、とめどなく絶叫している。
僕はよろめく足を踏みしめ、彼女に近寄った。
どうして。なぜ。
そこに転がった肉体に命がないのは一目瞭然だった。素肌にまとった黒いマントが乱れ、沢松艶子と同じように、深々と食いこんだ細紐のあとがのぞけている。
だが、顔。その顔は。
顔は眠っているかのように、静かに床の上にあった。
だが、その顔に、中身はなかった。
芳野堂貴子の美しい顔は、美しさをそのままに皮を剝がれ、その皮は、赤剝けになった顔面に、そっとかぶせられていたのだ。
まるで、仮面のように。
「ああ、貴子さん！」
ひび割れた声で芳川さんが叫んだ。

「貴子さん、貴子さん、ああぁ、貴子さん！　貴子さん……！」

死者は、だが、答えない。皮をひき剝かれた女のデスマスクは、テラテラと濡れた赤黒い肉の面に、むきだされた眼球と白い歯を光らせて、永遠の嘲り笑いを放っているばかりだ——。

【一九二九年十月二五日・午前零時〇二分】

貴子さんがあんな状態で発見されて、しばらくはだれも、自分が何をしているかわからない状態だった。今は、階下は静かだ。半狂乱になった芳川さんは蜂谷氏が持ってきた鎮静剤で眠らされ、部屋に運ばれた。貴子さんの死体はほかの二つの死体同様、地下室に運ばれて安置された。片桐光太郎はその姿を黙然と見守っていた。

すべての始末が終わると、だれもが語る言葉もなく、顔を見合わせることもないまま、ひとりまたひとりと散っていった。僕もまた、蹌踉(そうろう)として部屋にもどったが、ショックのあまりペンを手に取ることもできなかった。

貴子さんを殺した犯人が別にいる――。

それは思っていたよりずっとはげしい衝撃だった。芳川さんの手前、口には出していなかったが、もうほとんどの人間が無意識のうちに貴子さんこそ偉雄氏と沢松艶子の殺人犯人と認定していたのだ。僕も含めて。

姿なき『七瀬和弥』や、消えた伝衛門の死体の問題はあったにしても、あくまでそれは殺人のバックグラウンドとしての存在にとどまっていた。実行犯が貴子さんであるとする以上、貴子さんさえ見つかれば、あるいは殺人のくわしい事情が理解できさえすれば、解

決できる問題だと心のどこかで思っていたのだ。

しかし、その考えは打ち砕かれた。あの衝撃的な死体発見のあとで語られた事実によって、実は、背景だと思いこんでいた部分こそが事件の主人公であったことが明らかになったのだ。芳野堂伝衛門、七瀬和弥、狂疾の血、薔薇のあざ。僕たちはずっと、間違ったものを追いかけていたのだ。本体だと思って追いかけていたのはたんなる影にすぎず、仮面が、僕たちをまどわしていた――。

とにかく、あのあとのことを書くことにする。

……夕食も喉をとおる気がしなかったので、食事にも降りていかずに部屋にいた僕に、誰かがドアをノックした。出てみると、げっそりした顔の野々村君が、それでも彼一流のひょうひょうとした態度で立っていた。

「なんだい、まさか、また何か――」

「違うよ。伊原の旦那が、とうとう腰をお上げになったのさ」

名前を口にするのも嫌だというふうに、野々村君は吐き捨てた。

「キク代ばあやをおどしつけて、とうとう絢子夫人を引っぱり出すことに成功したんだそうだ。みんな居間に集まってる。君も来いよ。貴子さん殺しの犯人、芳野堂伝衛門について泥を吐かせてやるんだって、奴さん、えらい鼻息だぜ」

そうと聞いては部屋にたれこめているわけにもいかなかった。僕はあわてて服を着て、

野々村君といっしょに下に降りた。
居間はこれまで入ったことはなかったが、玄関扉の正面に位置する気持ちのいい洋間で、僕が入っていったときにはもう、薬で眠っている芳川さんと、偉哉君と蓉子夫人の親子をのぞいたすべての人間が集まっていた。隅の二人掛けのソファに加奈絵・茉莉絵の双子姉妹がいて、茉莉絵ちゃんが、こっそり僕にむかってにっこりしてみせた。ソファや椅子が円を描くように並べられ、てんでに皆が座っている。僕が最初にここへ来た日、紹介されたときのことを思いださせる光景だった。
この集まりを仕切るつもりらしい伊原が、大いばりで正面にふんぞりかえっている。蜂谷氏もそばに控えている。彼がよく許可したものだと思う。もしかしたら、あまり隠すとよけいに腹の底を探られるのではと考えたのだろうか。あいかわらず、腹の底の読めない無表情だ。
一つだけ、見慣れない顔がまじっていた。
ソファの円形の中心におかれた肘掛け椅子に、その人は格好のいい頭をうなだれて、じっと身をあずけていた。
とっさに連想したのは、竹久夢二描くところの美人画の女だった。
すばらしい美人だ。それには違いない。
だが彼女には、生きた人間らしい生気がまるでなかった。しんなりと、骨などないかの

ように首をかたむけ、どこを見るでもない目を宙に向けている。黒目がちの大きな瞳には顔に錐で開けた穴のように、光がなかった。

暗いワイン色のドレスを身につけ、耳にささやかな真珠を飾っている。ほとんど外に出ないせいか、病的なまでに色が白い。組み合わせた手が、置物のように動かなかった。アップにした豊かな髪が軽くほつれて、細いうなじにかかっている。白い瓜実顔に真紅の口紅がくっきりと映えて、雛人形の女雛のようだった。

「皆さん、お集まりですかな。それでは、始めましょうか」

伊原がいやらしい調子で唇を動かした。その言葉が終わるのと同時に、扉が開いて、片桐光太郎が音もなくすべり込んできた。

扉を閉め、ちょうど伊原と相対する位置に、向かい合ってもたれかかる。伊原はぴくりと眉を動かしたが、さらに声を大きくして、

「——さて、絢子夫人。あなたは、芳野堂伝衛門氏の未亡人でいらっしゃる」

「はい。さようでございます」

細い、震え声で絢子夫人は答えた。ガラスの鐘が震えるような声だった。

「伝衛門氏が書斎において服毒死されたとき、死体を発見なさったのはあなただった。これも、間違いありませんかな」

「はい。間違いございません」

伊原の大きなだみ声の前では、夫人のか細い声は風に吹かれる柔毛のように頼りなかった。彼はますます居丈高になった。
「その時の状況を、話していただけますかな」
「はい。……夫は、寝る前にいつもワインを一杯飲むのが日課でございました。わたくしはいつも、時間になると厨房（ちゅうぼう）へ行って、その時その時の好みのワインを選ばせ、グラスに注がせて夫の書斎へ届けるのが日課でございました。その夜も同じように、ワインをメイドにもたせて部屋に運ばせ、わたくしもしばらくその場で家のことや何か少し話をしまして、一時間ほどで自分の部屋にひきとりました」
「それは、何時ごろのことでしたかな」
「決まりの時刻は九時でしたから、……十時か、十時半くらいのことと存じます」
絢子夫人はいった。夫の死を語れと命じられているのに、実に淡々とした口調だった。すべての感情が揮発してしまったような――自分の語っている内容にすら気がついていないかのような、うつろな声だった。僕はそっと身を震わせた。
「ご自分の部屋、というと、夫婦の寝室は別に？」
「はい。……わたくしは、実家のほうに芳野堂家からお金の援助をするという約束で、この家に嫁いだものですから」
身売り同然にこの家に来たのだという事実を、あっさりと絢子夫人は語った。

「夫のほうでは、わたくしのことはさほど気にかけていなかったように思います。もう若くもございませんでしたし、家事やなにかの采配や、人前に出るときにそばに置く者が欲しかっただけではないでしょうか」

「ほう、それでは、あなた方はほんとうの意味での夫婦ではなかったということですな」

伊原は舌なめずりせんばかりだった。

「それではさぞ、おさびしかったことでしょうな？　伝衛門氏はお年でも、あなたはまだお若い。しかも、美しい。さぞかし寝苦しい夜もあったことでしょうに――」

下卑たセリフは、蜂谷氏の大きな咳払いでさえぎられた。伊原は一瞬、目を血走らせて蜂谷氏を振り向いたが、ここで腹を立ててはことが前に進まなくなると気づいたのか、自分もわざとらしい咳払いをし、話をつづけた。

「……ええ、では、……その、届けたワインを飲んで伝衛門氏は死んだ、と。そのワインは、メイドに持たせて運ばれたのですな？　その時、あなたもいっしょだった？」

「同行して、いろいろ用事や何かを話しあうことはよくございましたから……その夜も、そういうことだったのだと思います」

「ワインが運ばれる途中で、誰かが毒を入れたとは考えられませんかな？　たとえばそのメイドとか、あるいは、あなたとか……」

ガタンと後ろで物音がした。振り返ると、片桐光太郎が、顔色を変えて仁王立ちになっていた。伊原は鼻を鳴らして片桐光太郎を見返した。

しかし、絢子夫人はあくまで淡々と、

「いえ、それはないと思います。ご存じかもしれませんが、ここ一年ばかりの夫は、たいそう何かに怯(おび)えてとても猜疑心(さいぎしん)が強くなっておりました。運んでいったワインも、その場でわたくしが毒味いたしませんと絶対に口にしなかったのです。わたくしがその場にいたのは、そういう意味もございました。

その時いっしょにいたメイドは暇をとっておりますが、連絡先は控えておりますので、あとで蜂谷に訊(き)いてくだされればよろしゅうございます」

「ふむ、そうかな。それでは」

あてがはずれて伊原は残念そうに、

「そして、朝になってあなたは伝衛門氏が死んでいるのを発見した。どうしてそんな早朝に、ご主人の部屋へ？」

「その日は、そちらにおられる七瀬和弥さん――」

僕に一同の視線が集中した。

「――芳野堂家の新しい息子さんがいらして、このお屋敷で、皆さまに披露をいたしますことになっておりました。準備もいろいろございましたので、早くお起こしする手はずに

なっておりました。それで、いつもより早く、朝六時ごろに、ワインを運ばせたのと同じメイドをつれて書斎へ参りましたら、夫は、机の上に突っ伏したまま――」

さすがに絢子夫人は言葉をとぎらせた。しばらく間をおいてから、「なるほど」と伊原はためた息を吐き出すように言った。

「それで、あなたはどうしましたか」

「それでわたくしは、たいそう驚いてその場に昏倒いたしました。夫の遺体はその間に、執事の蜂谷が指揮をとって身体を拭ききよめ、衣服をととのえて、ベッドに安置したときいております。目がさめてから、わたくしの世話をしてくれております六条喜久代につきそわれて、ご遺体を検分いたしました」

「その時、伝衛門氏は完全に死んでいましたか」

「はい。身体も硬く、まるで石のようにかちこちになっておりました」

「そうするとですなあ、奥さん」

伊原はぐっと身を乗りだして、息がかかるほどの距離まで絢子夫人に顔を近づけた。

「あとになって、伝衛門氏の死体が姿を消したのは、いったいどういうことになるんですかな」

夫人はぼんやりと目をあげた。

「おっしゃることがよくわかりませんわ」

「つまりですな、あなたの夫、芳野堂伝衛門氏は、ほんとうは死んでいないんじゃないかってことですよ」
嵩にかかって伊原は言いつのった。
「死を確かめたと言っているのは、あなたと、あなたの使用人ばかりですからな。あなたが命令すれば、どんな嘘でもつくのかもしれない。芳野堂伝衛門氏は、ほんとうはまだ生きていて、どこかに隠れているのかもしれない。そうして、ほとぼりがさめたころに、姿をあらわしてとんずらをかこうと――」
「ちょっと待ってくれ」
たまりかねて僕は立ちあがった。
「荒唐無稽にもほどがある。伝衛門氏の死体を確認しているのは絢子さんだけじゃない、貴子さんや、偉雄氏も到着直後に父親の死体と対面したと聞いたぞ。だいたいどうして、伝衛門氏が死んだふりなんかする必要があるんだ。意味がないじゃないか」
「口を出すな。若造」
伊原はぎろりと目を光らせたが、気を変えたのか皮肉げな口調になって、
「貴様は知らんのかもしれんが、芳野堂家が持っている新世界キネマ社は、多額の負債をかかえて今や倒産寸前になっているんだ」
はっと息をのむ声がした。野々村君だ。メガネの奥の目を光らせ、驚愕の面持ちで口に

手をあてている。
加奈絵・茉莉絵姉妹も、自分たちが路頭に迷うような話を聞かされて、かたい表情で伊原を見つめていた。蜂谷氏と絢子夫人だけがまったく動じていなかった。
「失礼ですが」慇懃に蜂谷氏が言った。
「私しゃあこれでも刑事ですからね。いろいろと、裏の話も聞こえてきますのさ。……おや、そういやあ、あの弁護士先生の姿が見えねえようだが」
わざとらしく室内を見回してみて、歯をむき出してにやりとした。
「老婆心ながら申し上げますがね、弁護士なんて者にあまり気を許しすぎないほうが良うがすぜ。奴らあとにかく舌先三寸で、人を騙くらかしちゃそれでメシを食っている奴らですからな。あっはっは！」
僕はあわてて室内を見回し、気づいた。——弁護士の、小笠原潤吾の姿が見えない。
野々村君に眼で問いかけると、苦々しげな顔で、
「さっき、船着き場にあった手こぎのボートがなくなってたよ」と言った。
「あの弁護士先生、怖くなって逃げたんだ。……畜生！　自分の顧客を売りやがるなんて、そんなで法律家といえるのかい」
「小笠原先生からお聞きになったとおっしゃるのですな」

「おっと、悪くとられちゃかないませんな、蜂谷さん。あたしは公僕として、起こるべき犯罪を未然に防ぐ努力をしているだけですぜ」

おどけた調子で両手を振ると、さて奥さん、となれなれしげに絢子夫人に向きなおり、

「どうです、ひとつ、ほんとの事を話してくれませんかね、奥さん。あんたの旦那は、ほんとは死んじゃいないんでしょう？　もうすぐ自分の財産も事業も、ぜんぶパアになるのを予測して、ちょいと雲隠れをしているだけなんでしょう？　債権者どもの嵐から逃げ切ったら、ちゃっかり姿をあらわして、何食わぬ顔で生きてくおつもりなんじゃありませんかね？

いやあ、そうだ、それだとこの人殺し騒ぎが腑に落ちないな。じゃあこうだ。そう、あんたが旦那さんを殺したんだ。そうでしょう、奥さん？」

後ろではげしい音がした。

反射的に僕は立って、後ろから突進してきた者を背中で押しとどめた。

「だめです、片桐さん」

声を殺して僕はささやいた。相手は返事もせず、猛烈な勢いで前へ出ようともがく。

「やめてください。あいつ、さっきからあなたのほうばかりちらちら見て話をしてる。煽ってるんですよ。ここであいつに襲いかかりでもしたら、それこそ奴の思うつぼです。気を静めてください。静かにして」

片桐光太郎はしばらくわなわなと身を震わせていた。
だが、ひとつ、大きく息をつくと、強く目をつぶって頭を振った。目を開き、だれに押しとどめられたかに気づくと、ぎょっとしたように瞬いた。
「どうぞ」僕は椅子を立ち、片桐光太郎に勧めた。
あっけにとられたように僕を凝視する彼に笑ってみせて、
「座って、気を落ちつけてください。僕より、あなたのほうが必要でしょう」
昼間、長いあいだ動き回ったせいか、彼の引きずっている方の足が、服の上からもわかるほど痙攣を始めていた。痛みもあるにちがいない。
片桐光太郎はなおしばし僕を見つめていたが、やがて黙って視線をはずし、ゆっくりと腰をおろした。
僕はそのそばに立って、成りゆきを見守ることにした。その間にも、聞く耳が汚れそうな伊原の長広舌は続いていた。
「——財産をめあてに年寄りと結婚したはいいが、指一本触れてもらえずに身体はうずくし、町から離れてこんな何もない島に引っこもらなきゃならんし、おまけに、楽しみの財産ももうすぐ消えてなくなっちまうってんで、とれるものがある間にさっさと貰っちまおう、そう考えたんじゃありませんか？　そうして、どうせ手に入れるなら多いほうがいいってんで、旦那といっしょに旦那の子供も始末することにした、そうでしょう。なんせ生

さぬ仲の子供ばっかりなんだ、始末するのにも胸なんか痛みゃしない。犯人にあてるんなら、ちょうど、変人で有名な死んだばっかりの亭主もいることだし――」
「伊原様、申しわけありませんが」
「……そうですわ。子供たちを殺したのは、死んだわたくしの夫です」
蜂谷氏がさすがに声をとがらせて口を開きかけたその時、絢子夫人が、やはり平坦な口調で口を開いた。
「おっ、やはり」伊原はあさましいまでに歯をむき出し、喜々として、
「そうすると、やっぱりご亭主は生きておるんですな？　生きていて、すると、事業の失敗を子供に知られたくないってんで、ここに集めて無理心中をはかったと」
「いいえ、違います。わたくし、死んだ夫と申しあげました。生きている夫ではございません」
きっぱりと、絢子夫人は言った。
「夫は、芳野堂伝衛門は死にました。死んで、悪魔になりました。偉雄さんや、貴子さんを殺したのは、死んで悪魔になった、わたくしの夫にまちがいありません」
「そ、そ、そ、それは――」
一瞬の沈黙ののち、伊原の顔はたちまち怒りにどす黒くなった。

「奥さん、あんた、ふざけるのもいいかげんにしろよ。どこの世界に、幽霊が人を殺すなんて話があるんだ。それじゃあ何か、あんたの旦那は、死んで生き返って、悪魔になって闇雲に人を殺してまわってるって言うのかい。それが、あんたの言い分かい」

「そうですわ。だって、それ以外に考えられませんもの」

「この……」

「絢子さん」

伊原が叫び出す前に、僕はさっと身をそらして声をかけた。絢子夫人は夢を見ているような視線を僕に移して、「なんでしょう」と囁(ささや)いた。

「絢子さんはどうして、伝衛門氏が死んで悪魔になったとお信じになるんですか。生前の氏に、そのような言動が何かありましたか。

彼はどうして、仮面をつけ、人を避けてこんな小さな孤島の屋敷にこもるようになったんですか。芳野堂伝衛門とは、いったいどういう人物だったのか、ひとつ、この席で話していただけませんか」

「……承知しました」

短い沈黙をはさんで、彼女は答えた。

伊原は怒ってわめきたてたが、もうこの場の主導権は、彼ではなくて絢子夫人に移っていた。しばらくじたばたしてから、彼はふてくされたように口をつぐんで壁にもたれかか

った。

絢子夫人は焦点の定まらない眼を宙に向けて、ささやくように語り始めた。

「わたくしの夫、芳野堂伝衛門は、信州のほうの生まれだと聞いています。とても小さな、山あいの村で、村人のほとんどが血縁者であるような、そんな村であったそうです。

村の名前は——そう——『翳谷村』……」

それから先、絢子夫人が語ったことは、沢松艶子が持っていたあの古い新聞記事をほぼなぞるような話だった。

信州上諏訪に、狂気の血を継ぐと恐れられる村があった。

その村に生まれたものは、時として身体のどこかに薔薇の形のあざを持ち、そのあざを持ったものは血を好む殺人狂となって周囲の人間を残虐に殺すと恐れられた。その村は明治のなかば、何者かの手によって皆殺しにされ、死に絶えたとされた。

芳野堂伝衛門は、その村の生き残りだったのだ。虐殺をあやうく逃れた彼は、名前を変え、姿を変えて、大都市東京の雑踏の中へ身をまぎれ込ませた。

そこで映画産業に出合い、生まれつき才能があったのか、ぐんぐん会社を大きくしていった彼は、やがて興行界の大立て者にして新世界キネマ社社長・芳野堂伝衛門として、世間に認められるようになっていったのだった。

「……夫は、自分の村に伝わる呪われた血脈のことを知っておりました。けれども、身体のどこにも薔薇の形のあざは現れていなかったので、自分には、狂気の血は流れていないのだと信じて、安心していたそうでございます。

でも、あの、関東大震災がきて――」

関東大震災は一九二三年九月一日、東京を襲った大規模な直下型地震だ。東京は焼け野原となり、さまざまな流言飛語が飛びかって、たくさんの在日朝鮮人が虐殺されたり、略奪や暴行が横行したという。

「あの時、夫は顔に火傷（やけど）を負ったのでございます。……いえ、生命に別状はございませんでした。火傷自体もそれほどひどくはなくて、治療を加えれば、少し後が残るかもしれないが治るとお医者様はおっしゃってくださいました、でも――」

「でも？」

「夫が、怯（おび）えだしたのはその火傷ができてすぐのことなのです。火傷のあとが、しだいに、薔薇の形をしたあざに変わってきた――と」

僕は片桐光太郎と目を見交わした。

そんなことってあるのだろうか？　火傷のあとが偶然、そういう形に見えたのかもしれないが、それでも妙な話だ。

「しかし、そんなことがあるものでしょうか？　ただの気にしすぎではないのですか」

「ええ、わたくしも、それはただの考えすぎだから、お気になさらないほうがいいと幾度も申しました。

けれども、そう言えば言うほど、夫は意固地になっていくようでした。二年ほど前からはあざのできた顔を見るのが怖いと、寝るときですらも、仮面で顔をかくして生活しておりました」

あの書斎にかけられていた、仮面をつけた伝衛門の肖像――。

「ことに、この島のお屋敷に移ってきてからは、どんどんそれがひどくなって、来る日も来る日も『玻璃ノ薔薇』ばかり、くり返し見て日を過ごしておりました。

きっと、忘れたふりをしていても、狂気の血のことを夫はずっと恐れていたのだと思います。でなければ、自分の子供たちに狂気の血が引き継がれることを、あれほど警戒するわけがございません」

「警戒とは、どういうふうにです」

「この島のお屋敷は、もともと、子供たちが生まれたときに手に入れたものなのです。子供たちを世間から隔離して、狂気の兆候が現れないかどうか、見届けるために」

加奈絵と茉莉絵の姉妹がたがいにすがりつくようにして抱き合っている。偉雄氏と貴子さんが死んだ今、芳野堂伝衛門の――殺人狂になるかもしれない血を引き継ぐのは、彼女たち二人だけだ。相似形の二つの顔が、完全に血の気をなくしていた。

「……もともとの建物を改造して、壁を二重にし、部屋にいる子供たちの様子を見つからずに監視できるように工夫をしました。わたくしにもし子供ができましても、そうするつもりだと申しておりました。狂気の兆候が現れた子供は、すぐに始末しなければならないとも悲しそうに申しておりました。それが親の責任だ、父としての義務だと」

「では……偉雄氏と、貴子さんを殺したのは——」

「ここにこもるようになってから、夫はつねづねわたくしに申しました」

あくまで淡々と絢子夫人は言葉をつづける。

「『ああ、つらい、つらい。このような汚れた血を、子供たちに伝えてしまった自分に耐えられない。しかも、殺人狂の血を持った子供たちは、大きくなって堂々と世間を歩きまわっている。いつかあの血が目覚めて、人を殺し、自分をも傷つけるようになっては、世間にも申し訳がないし、何より、子供たち自身が可哀想だ。

いっそのこと自分は死んで、悪魔になりたい。悪魔になってしまえば、血を分けた子供を、この手で殺しても胸は痛まないであろう。そうだ、自分は悪魔になりたい。悪魔になって人間の肉体と、心とを捨て、無限の神通をもって、おのれが蒔(ま)いてしまった災厄の種を、芽を出す前に刈り取りたい、そうせねばならぬ……』」

絢子夫人の声が途切れても、室内はしわぶきひとつ立たなかった。

低い声で語られる芳野堂伝衛門の言葉は、そのまま、忌まわしい運命を負わされた者の、

幸福な生者に対する呪詛のように響いたからだ。ことさら退屈そうな顔を装っていた伊原さえ、気味悪そうに眉をひそめて絢子夫人をうかがっている。
「――すると、絢子さんは、服毒死した伝衛門氏が思い通りに悪魔となり、自分の血を引く子供をひとりずつ殺してまわっていると、そうおっしゃるのですね」
「ええ」
当たり前のようにうなずいて、絢子夫人は夢みるような瞳で一同を見回した。
「沢松艶子さんとおっしゃる方については、わたくし、なにも存じあげません。けれどももし、夫の怨念がまだこの屋敷に残っていて、誰かを殺そうとする理由があるとしたら、貴子さんと偉雄さんに関しては、わたくしは、それしか思いつきませんわ」
「嫌ああ！」
とつぜん、泣き叫ぶ声があがって、誰かががたりと立ちあがった。加奈絵ちゃんだった。血の気を失った顔が涙でくしゃくしゃになっている。
「どうして、どうしてあたしが殺されなきゃいけないの？　それも、お父さまに？　そんなの嫌！　殺されるのはあたしじゃないわ、茉莉絵ちゃんよ、いつだっておかしなことばっかり言って――人殺しはあたしじゃなくて、茉莉絵ちゃんのほうなのよ！」
「あ、加奈絵ちゃん」

あっという間に、加奈絵ちゃんは泣きじゃくりながら飛びだしていってしまった。
無理もない。いきなり、自分に殺人鬼の血が流れていると告げられ、しかも、異母兄姉を殺して悪魔となった実の父が、自分を殺しに来るかもしれないと言われたも同然なのだから、気が動転するのはあたりまえだ。
あとに残った茉莉絵ちゃんに、みんなの視線が集まった。
人殺し、と叫んだ加奈絵ちゃんの声がまだあたりに震動している。茉莉絵ちゃんはすっかりすくみあがって、小さな子供のように椅子の中で身体を丸めていた。
「ねえ、皆さん、ちょっと待って、落ち着いてくださいよ」
野々村君があわてて立ちあがった。
「茉莉絵ちゃんはまだ十七歳の女の子ですよ？　十七歳の女の子に、あんな大それた事ができると思いますか」
「野々村君の言うとおりだと僕も思います」
僕もそばから口添えして、
「偉雄氏が殺されたときは、彼女たち二人はうんと離れたところに立っていたのを僕は見ています。それに、貴子さんの死体、成人女性のけっして軽くはない身体を、あんな高いところに持ちあげるような真似が、十代の少女に可能だと思いますか」
「わからんさ。だれか、協力者がいたかもしれんじゃないか。——だいたい、実の姉妹に

人殺し呼ばわりされるんだ、それなりの理由があるんじゃないのか？」

伊原がぶつくさ言った。

「その件につきましては、私のほうからご説明させていただきます」

蜂谷氏が進み出てきて、伊原氏がくちばしをはさむ暇を与えずに、すらすらと説明をはじめた。

それによると、彼女たちの母親の百合絵夫人、つまり芳野堂伝衛門の二人目の妻が死んだのは、茉莉絵ちゃんのしわざだと加奈絵ちゃんは信じているというのだ。

「それ、どういうことなんだい？　あの女の子が、母親にナイフを突っ立てたとでも？」

「いえ、そうではございません。百合絵奥様が亡くなられたのは、加奈絵様と茉莉絵様といっしょに寝起きしておられた離れが火事になりまして、逃げ遅れたからなのですが、加奈絵様は、茉莉絵様こそがその火事の原因だと信じておられまして――」

その日、小さな茉莉絵がマッチをいじくっていて、母と姉に叱られたばかりだったのだという。火事のあった離れは、ふだん火の気のない場所だった。叱られた茉莉絵が、こっそり隠れて火遊びをしようとしたせいで、火事が起こって母親が死んだのだ――と、加奈絵はずっとそのように信じているというのだ。

「しかし、それは別に茉莉絵ちゃんがわざと母親を殺そうとしたわけじゃないだろう」

「それはもちろんでございます。私の見ますところ、茉莉絵様にも、もちろん加奈絵様に

も、狂気の兆候などというものはみじんも感じられません。お二方とも、たいそう良いお嬢様方でいらっしゃいます」

「まあ、それはそれでいいとしよう。しかし、ねえ、絢子夫人」

話がやっと一段落したと見て、伊原がまたねっとりした口調でわりこんできた。

「やっぱりあたしゃあ、旦那(だんな)さんの幽霊が人を殺しましたなんてえ話は納得できませんよ。ここかあ一つ、二人っきりでゆっくりお話ができませんかね。なにお時間はとらせやしません、他人の目があるところじゃあ、話しづらいこともおありでしょうしねえ……」

「駄目だ！」

今度は止める暇もなかった。はじかれたように立ちあがった片桐光太郎が、顔色を変えて伊原につめよった。

「駄目だ、そんなことは許さない！　彼女とおまえを二人きりにするなんて、そんなことは——」

「ほう、許さないとはどんな権限があって言っているのかな、片桐光太郎君」

待ってましたとばかりに伊原が飛びついた。

「君はここの家にとっては部外者だろうが。家族でもなく、警察の人間でもない君が、いったい何の権限で私にそんな口が叩(たた)けるのか言ってもらおうじゃあないかね」

「それは——」

勢いこんだ言葉は、結局口から出ることはなかった。苦しげに頰を震わせ、唇をかむ片桐光太郎を、心地よさそうに伊原は眺めた。
「話にならんな。さあ、みなさん、出てってくれませんかね。蜂谷さん、あんたもですよ。どうもあんたときたら、警察の捜査をいちいち妨害して困る。——さあさあ、みんな、早く早く」
「待ってください、伊原さん」
「なんだ、小僧？」
立ったまま呼びかけた僕に、伊原はギラギラする眼を向けてきた。もう手に入れた獲物同然と考えているらしい絢子夫人に覆いかぶさりそうにしながら、
「用があるなら早く言え。俺は忙しいんだ」
「僕は、義母(はは)の後見役として、ここに残ります」
強い調子で僕は言った。
「なんだとう」
伊原の表情がみるみる凶悪なものになった。凶暴さをむき出しにして僕につかみかかってくる。強烈に酒臭い。
力だけはあったが、前をほとんど見ていない突進は避けるのも楽だった。あっさり身をかわされて、伊原は無様に床にはいつくばった。

「き、きさま」
「いい加減にしてください。あなたは刑事かもしれないが、絢子さんはまだ犯人と決まったわけじゃないし、あなただって、後ろ暗いところがないわけでもないでしょう」
伊原は喉で音をたてた。正面きってそう言われると、一瞬反論ができなかったようだ。
「小笠原弁護士の件はもうどうでもいいです。だが、そのかわり、彼女をあなたの手に無防備なままほうり込むのはごめんこうむる。
偉雄さんが亡くなられた今、芳野堂家の男性は僕ひとりのはずです。絢子さんは、僕の義理の母だ。こんな状態の義母の後見をするのは、息子の役目だと思うんですが、あなたはどう思います、伊原さん」
「む……、む……」
なんとか威圧しようと口をパクパクさせるが、僕は少しもこわくはなかった。片桐光太郎が扉のところで足をとめて、じっとこちらを見つめている。
ちらりと僕が目くばせをすると、かすかに眼を細め、スーッと部屋を出て行ってしまった。やれやれ。僕は肩をすくめた。
「さあ、どうするんです、伊原さん？　許すんですか、許さないんですか。もっとも許してくれなくても、僕は勝手に残りますがね」

「和弥兄さま！」

ドアを閉めた僕に、横から誰かが飛びついてきた。

茉莉絵ちゃんだった。ずっと待っていたのか、寒そうに足踏みしながら、眼を輝かせて僕を見あげる。

「茉莉絵ちゃん、ずっとここにいたのかい？　お部屋へはかえらなかったの」

「だって、和弥兄さまにお会いしたかったんですもの。絢子さまのお話、もう終わったんですって？」

「ああ……」

僕はとっさに答えることができず、あいまいに返事をした。

僕がいたので、伊原は自分で考えていたようなことは何一つできなかったらしい。話にはけっして口をはさまないと約束していたので一度もしゃべりはしなかったが、第三者が目を光らせているということ自体が邪魔になったようだ。結局、あたりさわりのないことを二、三聞いただけで、しぶしぶ夫人を解放することになったのだった。

蜂谷氏に迎えられて居間を出ていく絢子夫人を見つめる眼は、目の前から御馳走（ごちそう）をかっさらわれた飢えた野犬の眼だった。殺されないうちに僕も席をあとにしたが、ひとりでソファにすわりこみ、全身から怒気を発散する伊原は真っ黒な蝦蟇（がま）のようだった。

「そんなことは、茉莉絵ちゃんは気にしなくていいんだよ。それより、さっきは怖い話を

聞かせてすまなかったね。怖がらなくてもいいからね」

「あら、怖がってなんかいやしないわ。だってお兄さまが、いつでも守ってくださるでしょう。さっき茉莉絵をかばってくださったお兄さま、とっても素敵だったわ」

「あれは野々村君が先だったんだけどね……」

「そんなこと、かまわないわ。茉莉絵にとっては、いつでもお兄さまが一番なのよ」

茉莉絵ちゃんはあっけらかんとしている。

加奈絵ちゃんの反応のほうがたぶん普通だろうと思うのだが、彼女は、どこまでも『お兄さま』を信頼していて、僕のそばにさえいれば大丈夫だと無邪気に信じているらしい。

「ねえ、お兄さま、どうしてあそこへ連れていってくださらないの？　あの、すばらしいお伽(とぎ)の国よ。茉莉絵、ずっと待っているのよ、薔薇のトンネルをぬけて、アリスみたいにウサギ穴をくぐって、まっ暗な闇の洞窟(どうくつ)を、どこまでもどこまでも……」

「待って、茉莉絵ちゃん」

はっとして、僕は茉莉絵ちゃんの腕をつかんだ。

「それ、君が行ったお伽の国への通り道なの。『薔薇のトンネルをぬけて、ウサギ穴をくぐって、まっ暗な闇の洞窟をどこまでも』って」

「いやあよ、お兄さま。あのころみたいに、まあちゃんて呼んでくださらなきゃ」

身体をゆっくり揺らしながら、茉莉絵ちゃんはうっとりと笑った。もう少し、夢の世界

に入りかけているようだ。

「そうよ、だって、お兄さまが連れてってくださったんじゃあないの。細い小路をいくつも抜けて、坂道をのぼって、絵の中のドアをくぐって……お馬だの、兵隊だの、ドレスだの宝石だの、魔法の呪文（じゅもん）だの……あんな素晴らしかったことないわ、お兄さま、またあそこへ連れてってくださるでしょう？」

「ああ、うん……そうだね」

子供を利用する後ろめたさを感じながらも、僕は訊（き）かずにはいられなかった。

「茉莉絵ちゃん、その……お伽の国だけど、それの出発点はどこだったかな？　それ、中庭の、あの薔薇のあずまやじゃない？　あそこの床に口を開いた、小さな穴をくぐるんじゃあなかった？」

「そうよ、どうして、今ごろそんなことお訊きになるの」

茉莉絵ちゃんはふしぎそうに首をかしげた。

「あそこがアリスの落とし戸だって、お兄さま、おっしゃったじゃないの。へんねえ。ご自分でおっしゃったこと、忘れるなんて駄目よ」

「ごめん、ごめん。じゃあそれ、いつごろのことだったか憶（おぼ）えてるかな？　その……〈和弥兄さま〉が最初に茉莉絵ちゃんに会ったのは、いつのことか」

「まあちゃんて、呼んでくださらなきゃいやだって言ってるのに」

茉莉絵ちゃんは口をとがらせたが、それでもちょっと考えて、
「そうねえ、たしか、茉莉絵が偉哉ちゃんより二つ三つ小さいくらいの年で、お兄さまが、ちょうど今の茉莉絵くらいに見えてたんじゃあないかしら……」
すると、双子の姉妹が七歳か八歳のころとして、だいたい十年前くらいになる。彼女たちの母親の百合絵夫人が、離れの火事で焼死したのと前後するころだ。
七瀬和弥は、自分——僕、影谷貴史と入れかわる瞬間まで、この屋敷に来たことはないと思っていた。そうではなかったのか？
それならなぜ、屋敷の人々は、いかにも新しく見いだされたようなふりで和弥に対面などと言うのか。伝衛門の隠し子である七瀬和弥の存在が知れたのはつい最近のことばかり思っていたが、そうではなくて、小さいころの茉莉絵と和弥が知り合うことができるくらいに昔からわかっていたのか？
「ねえ、お兄さまったらあ」
怒ったように腕をゆさぶる茉莉絵ちゃんに考えを中断させられた。
「どうなさったの、お兄さま。茉莉絵といるときは、茉莉絵のことしか考えちゃいや」
しかし、今は考えなければならないことがたくさんありすぎた。まつわりつく茉莉絵ちゃんを、心の中で手を合わせながらなんとか部屋へ帰らせたときは、申しわけないが正直

ほっとした。どうもああいう場面には慣れていない。
ウサギ穴……壁の通路……お伽の国。
もう一度、あの通路をよく調べてみる必要がありそうだった。偉哉君が、ベンチのどのあたりの下に手をつっこんでいたか思いだそうとしながら自分の部屋の前まで帰って、足を止めた。
誰かが僕の部屋の前に立っている。
長身の人影が、ドアに背をもたせて腕を組み、僕の戻るのを待っていた。
「片桐さん？　どうしたんですか、何か……」
言いかけた僕をきびしい目つきで黙らせ、顎(あご)をしゃくる。わけもわからないまま、僕はドアを開けて中に入った。
あとから片桐光太郎がするりと入ってくる。眼をぱちくりしている僕をするどく見据え、後ろ手にドアに鍵(かぎ)をかけた。
たった一言、彼は言った。
「君は、誰だ？」
「どうした。答えられないのか」
黙って突っ立っている僕をどう取ったのか、片桐光太郎ははげしく言った。

「僕は七瀬和弥という人間を知っている。いや、本当には知っているとは言えないが、奴がどういう人間かは昔から知り抜いている。だが君は、その僕の知っている七瀬和弥とはあまりにも違いすぎている。いったい、君は誰だ。こんなところで何をしている。なぜ、七瀬和弥のふりをしているんだ。答えろ」

「――あなたは、本物の七瀬和弥を知っているんですか！」

それは思わず出てしまった言葉だったのだが、片桐光太郎は、びっくりしたように身をそらした。まじまじと僕を見つめ、それから、苦笑するかのように唇のはしをゆがめた。

「どうやら、語るに落ちたようだな。よろしい、君は七瀬和弥ではない。では、本当は君は誰なんだ？　君にだって本来の名前と、素性があるだろう。話してくれないか。言っておくが、僕は君を告発しようとか、この家の人間に君のことを話そうとか、そういう気はまったくない。ただ、君のような人がいったいどういう理由でこの呪われた場所にまぎれ込んできたのか、その理由が知りたいだけなんだ」

「どこから話していいかわからないんですよ」

僕はすっかり途方に暮れていた。話すべき事はたくさんあるのに、いざ、話そうとするといったいどこから手をつけていいのか見当もつかないのだ。

また、話したところで、どこまで信じてもらえるのだろう。七十年も先の未来から来た人間だなどと言った時点で、馬鹿を言うなと切り捨てられてしまったら……。

「なんでもいい。とにかく、思い浮かぶことを何でも最初から話してくれ。まず、君はどこの誰だ。どうやってここへやって来た。どういう事情で、七瀬和弥として受け入れられることになったんだ」

「僕は……」

僕はつっかえながら、ゆっくりとこれまであったことを話し始めた。

自分の名前は影谷貴史ということ。自分が、七十年先の二〇〇三年に生きていた人間であること。仕事で〈キネマ屋敷連続殺人〉を調査することになり、片桐尚美という女性と二人で、かつてのキネマ屋敷の跡へ行ったこと。

そこで、頭上に梁(はり)が崩れ落ちてきて、あっと思ったらこの屋敷の部屋に寝ていたこと。わけもわからないまま、皆に七瀬和弥として扱われてきたこと――。

途中でこの手帳の存在を思いだし、読んでくれるように片桐光太郎に渡した。片桐光太郎は僕の話を黙って聞きながら、一枚ずつページを繰っていた。ときどき紙面から目をあげて、チラッと僕の顔を眺めたが、その目にどういう意味があるのかはまったく読み取ることができなかった。ほの暗い電灯の下では彼の瞳(ひとみ)はほとんど吸いこまれそうな黒に見え、とうてい、僕ごときの推し量れるようなものではなかった。

話しているうちに夢中になって、くどくどと何度も同じことを繰り返していることに気づいてはっとすることがたびたびあった。たぶん僕は、自分の話を聞いてくれる存在に飢

えていたのだと思う。この手帳はむろんあったし、尚美さん、君という存在を意識しないわけではなかったけれど、生きている人間を相手になにひとつ隠すことなく打ち明け話をするというのは、ずっともやもやを抱えていただけに、目くるめくような爽快感があった。
とうとう話し終えたときには、僕は息をきらせていた。片桐光太郎は閉じた手帳をゆっくりと手のひらに打ちつけながら、注意深く僕を観察していた。
「……もしかしたら、信じられない話だとあなたは思うかもしれない」
僕は言った。
「いや、きっとそう思うに決まっているけれど、とにかく信じてもらえませんか。僕だってまだ、自分がどうしてこんな所にいるのかなんてよくわかっちゃいない。でも、僕は何一つ嘘は言っていません。ほかはどうあれ、そのことは信じてください」
「そうだな。信じよう」
ちょっと間をおいて、片桐光太郎——もう、片桐さんと書いてもいいと思うけれども——片桐さんは、そう言った。
「僕はあるいは生涯で最大のペテンにかけられようとしているのかもしれない。あるいは、まったく正気なように見える狂人の前に座っているだけかもしれない。
しかし、君は信用に足る人物だという気がするし、僕はそういう時の勘は信じるようにしている。君がいつ、どこからやってきたにしても、少なくとも、悪い人間ではないと僕

は思う」
「よかった」
片桐さんに信用に足る人物といわれたのは嬉しかった。僕はほっと息をついて椅子に寄りかかった。
「ようやく吐き出せてすっきりしましたよ。誰にも本当のことが言えないっていうのは、つらいものなんですね。それで……。片桐さん？」
急に音もなく立ちあがった片桐さんに、僕はびっくりした。
「片桐さん？　何か――」
しっ、と片桐さんは口の前に指をあてた。
そのまま話しつづけろと、手まねで指示をする。意味がわからなかったが、僕はとにかく、何ごともなく話しているかのように会話をつづけるふりをした。
その間に、片桐さんは驚くほど静かにドアのところへ歩み寄り、むこうの気配に耳をすますように、額をよせて呼吸をはかっていた。
「ああ、つまり、そのことなんだが――そらっ！」
「うひゃっ」
片桐さんがいきなり開いたドアから、変な声といっしょに誰かが転がりこんできた。
「野々村君！」

あきれかえって僕は声をあげた。
「まさか、立ち聞きしてたのか？　まったく君って人は、どこまで知りたがりなんだ」
「いやあ、すまない。失礼した」
床に腰を落としたまま、野々村君は悪びれずに頭に手をやって照れたように笑った。
「だってほら、片桐さんが、ずいぶん深刻な顔をして君の部屋のほうへ行くもんだからさ。こいつあ見逃しちゃなるまいと思って、お二人が部屋へ消えてから、頃合いをはかってずっと出歯亀をきめこんでいたわけさ。いや面目ない」
「しょうがない人だなあ、本当に」
ため息をついて言ってから、僕はあることに気がついてぎょっとした。
「野々村君、君、僕たちの話をどこまで聞いたんだい？　まさか——」
「え？　ああうん、大方はね。君、本物の七瀬和弥じゃないんだろ」
「黙っていてすまない。自分でも、どう説明していいかわからなかったんだ。騙すつもりはなかったんだけど——」
「いや、いいよ、そんなことは気にしなくても。だいたい、僕は最初から騙されてなんかいなかったし」
目をくるくるさせて、野々村君はあっさりと言った。
「なんせ本物の七瀬和弥というのは、ほかならぬ、この僕のことなんだから」

「七瀬和弥！」

野々村君の爆弾発言には僕も驚いたが、片桐さんが放った怒号にはもっと驚かされた。

片桐さんは猟犬のような唸り声をあげると、野々村君の襟首をつかんで吊り上げた。

「く、く、苦しい。何するんです、片桐さん――」

「きさまが七瀬和弥か。よくも堂々と、僕の前で名乗りを上げられたな」

乱暴にゆすると、床をはなれた野々村君の足が頼りなくぶらぶら揺れる。

「やはりこの事件もきさまの仕業か。以前と同じように、また、ここでも血の嵐を巻き起こすつもりか。――言え、何が目的だ？　彼女に何をした？　他の、たくさんの人間と同じように、彼女もまたきさまの毒牙にかけるつもりか！」

「な、い、いったいなんの話なんですよう」

振りまわされながら、野々村君は目を白黒させて、

「僕はたしかに七瀬和弥だと言いましたけど、犯罪なんぞにはいっさいかかわりのない、ただの普通の一市民なんですってば。降ろしてください、息がつまる――」

「片桐さん、落ちついて。手を放してください」

僕も横から止めに入った。この片桐光太郎という青年が、冷淡な見かけによらずひどく直情的なところを持っているのを、そろそろ承知していていい頃合いだった。

「野々村君はそんな大それたことのできる人じゃありませんよ。降ろしてやってください、僕が保証しますから」

片桐さんは僕をすごい目つきで睨むと、投げ出すように野々村君を床に降ろした。

どっと床に落ちた野々村君は、そのままぺったり座りこんで肩で息をしながら、

「ああ、えらい目にあった。なにしろ、すごい力だな」

「野々村君、それほんとかい」

襟もとを整えている野々村君の顔を僕はのぞき込んだ。

「君が本当の、芳野堂家の息子の七瀬和弥……？」

「ああ、そうさ。もっとも、名乗って出る気はちっともなかったけどね」

よれよれになったカラーを悲しそうに眺めて胸ポケットにつっこみ、野々村君は、ずれた眼鏡を押し上げて僕たちを見あげた。

「野々村海道っていうのは、芸名だよ。芸名だけど、友だちやなんかもみんな仕事関係のつながりだから、誰も本名なんか呼びゃしない。僕も七瀬和弥なんて名前、普段はほとんど忘れてる。こんなことでもなきゃ、一生そのままだったろうさ」

「じゃあどうして、ここにいるんだ？　それも、野々村海道のほうで」

「そりゃまあ、僕の名前を騙って芳野堂に入りこもうとする奴がどんな奴なのか、興味があったしね」

がりがりと頭をかくと、僕を見てにやっと笑った。
「貴子さんから、先日、今まで所在のわからなかった弟が見つかった、名前は七瀬和弥で、今度の週末家族に披露会がある……なんて聞いたときには、耳を疑ったね。
そんな話、僕のとこには一度だって来たことあなかった。僕は間違いなく七瀬和弥のはずだ。じゃあいったい、今度見つかった七瀬和弥というのは、いったいどこのどいつなんだ？　いっぺん顔くらい見てやりたいと思うのは、人情じゃないか」
「どうしてその時、そいつは偽物だと名乗り出なかったんだ。芳野堂家といえば、大金持ちなのは当然知っていただろうに」
片桐さんの声はとがっている。まだ野々村君に気を許せていないのだろう。
「勘弁してくれよ。僕はね、可哀想なおふくろに子供が出来ちまったのも知らないで、のうのうとしてる親父なんぞの金に頼るさもしい根性はしちゃいないんだ」
むっとしたように、野々村君は声を強めた。
「おふくろは少々頭が弱くてね、子供ができたのも気づかないで過ごしちまって、気づいたときにはもう遅かったのさ。自分が小さな子供みたいな女(ひと)だったから、孕(はら)まされた相手がどこの誰かなんてわかっちゃいなかったんだな。
さいわい、近所の人たちが親切で、僕をとりあげてくれたけど、おふくろはそのまま死んじまって僕は天涯孤独の身さ。七瀬っていうのは、僕を育ててくれた長屋のおじさんと

おばさんの名字だ。自分の実の父親が芳野堂伝衛門だっていうのは、大きくなってから自分で調べた。調べたからってどうもしなかったけど」
「なぜ」
「なぜって、僕は養父と養母が大好きだからね」
即座に野々村君は答えた。返事には一点の迷いもなかった。
「僕にとって、父と母というのは七瀬の父と母のことなんだよ。それ以外に親なんかもっちゃいない。たとえどんなに金持ちだろうと、今の両親を捨てて、そっちに乗り換えるなんてことは金輪際あり得ないね。
だから実父のことは、調べたらそこで満足して放りっぱなしにしていた。けど、自分の偽物があらわれたとあっちゃさすがに無視もできない。それで、どんな悪い奴なのかと思って、貴子さんにくっついて様子を見にきたら」
と横目で僕をかるくにらんで、
「まったく君ときたらひどくぼんやりしてるし、お人好しだしものを知らないし、情にほだされるし人の言うことをすぐ信じるし――」
「悪かったな」僕はふくれた。
驚いたことに、片桐さんがくすりと小さく笑いをもらした。野々村君が目をむいたので、すぐに気づいて苦々しい顔になったが、それでも確かに彼は笑ったのだった。

たところなのさ」

「——で、まあ、お家乗っ取りの天一坊にはこいつ、どうも似合わぬようだぞと思ってい

と話を締めくくり、野々村君は晴れやかに笑った。

「そうか、だから最初からずっと、僕にくっついて回っていたのか。探偵譚うんぬんの話も、じゃあ僕に揺さぶりをかける手段だったんだな」

「そう言うなよ。ああいうものを書きたいと思ってるのも本当さ。だが、そうだね、推理ものにくわしいと思わせておけば、君も行動をつつしむんじゃないかと思って」

野々村君は頭をかいた。

「騙していたのは僕のほうだよ。すまなかったね、和弥君。いや、影谷貴史君と呼んだほうがいいのかな」

「いや、いいよ。僕ももうなんだか慣れてしまったし、和弥のままでいい。僕も君のことは、そのまま野々村君と呼ばせてもらうから」

「うん、そうしてくれ。そのほうが僕も落ちつく」

野々村君はうれしそうだった。彼もまた、胸にかかえていたものを吐き出してすっきりしたのだろう。

「片桐さん」

机に寄りかかってむずかしい顔をしている彼に、僕は言った。

「これで、僕たちの手の内はさらしました。今度は、あなたの番です。あなたはどうして、この島に流れついたんですか。あの夜、あそこにいたのは、偶然ではなかったんでしょう。この島での、あなたの目的はなんですか。七瀬和弥とあなたとは、いったいどういうつながりがあるんですか」

答えは無言だった。

「片桐さん！」

「……わかった。話そう」

重い口を、片桐さんはゆっくりと開いた。

「一か月ほど前のことだ。僕が雇われ店長をしていた、大阪の道頓堀(どうとんぼり)のあるカフェに、一通の手紙が届けられてきた……」

以下、片桐光太郎が語ったことを、僕の文と彼の言葉でまとめておく。

片桐光太郎は東京で生まれ、警察学校を出て、二十七歳の時に刑事に昇進した。ずいぶん早い昇進だが、それだけ、彼が優秀だったということなのだろう。彼は事件課に配属されて日夜、殺人や強盗といった凶悪な犯罪者を追う日々を送っていたが、昇進して一年たったある時、理不尽な悲劇が彼を襲った。

「その時の僕の上司が、大陸から大量の阿片(アヘン)を密輸入している集団と結託して、私腹を肥

やしていることに偶然気がついたんだ。彼は手入れや捜査上の秘密を流したり、奴らとつながりのある逃亡犯をわざと逃がしたりして、それで大金を受けとっていた。自分で阿片を売っていることもあったらしい。

僕はさんざん悩んだ末、そのことを署長に報告した。上司は退職を余儀なくされ、警察を去っていった。僕は正しいことをしたのだ、正義を働いたのだと自分に言い聞かせた」

しかし、と彼は辛（つら）そうに顔をゆがめた。

「辞めた上司は、密輸団といっしょになって僕のことをひどく恨んだ。ある日、町を巡回していた僕に、一台の自動車が猛スピードでつっこんできた。運転席に、歯をむき出して笑うかつての上司の顔があった。僕は車のボンネットに叩（たた）きつけられ、そのまま、意識を失った。目が覚めたときには、二週間が経っていた――」

「伊原さんですね」僕は静かに言った。

「気づいていたのか？」

「見ていればわかります。では、あの人は刑事ではなくて、もと刑事、なんですね」

「そうだ。しかし、そのことはまたあとで話そう。……」

長い入院をへて回復はしたものの、左足には障害が残った。普段の生活にはさしつかえないが、はげしい運動をしたり、体力を消耗したりすると痙攣（けいれん）と激痛が走る。刑事をこれ以上続けるのは無理と判断した彼は、退職届を出し、東京を出て関西に移った。密輸団だ

けではなく、タテ社会の警察の中で、たとえ悪人だったとはいえ上司を密告した形になった彼を、よく思わないものもたくさんいたのだ。

関西で彼は、警察に入りたてのころ世話になった老刑事のつてで、大阪の繁華街である道頓堀のカフェに雇われ支配人として入ることになった。すっきりとした容姿の彼を目当てに女性客が多く集まり、店は繁盛した。

そこに、一通の手紙が届けられた。差出人のサインを見て、彼は凍りついた。もう、二度と見ることもないと思っていた名前がそこに書かれていたからだ。

差出人の名前は、大道寺絢子。いまの名前は、芳野堂絢子……。

「絢子さんとはまだ警察学校にいたころに知り合った。彼女は女学生だったが、そのころから、彼女の美しさは群を抜いていた。大道寺家は堂上(どうしょう)貴族の血をひく名家で、彼女は、そこのひとり娘だった……」

そこまで語ると、片桐さんはしばらく沈黙した。

こみあげてきたものに、語る言葉が見つけられないようだった。ややあってから、何かをふるい落とすように頭を振って、先を続けた。

「もちろん、ただのいち警察官の卵と、名家の令嬢とがつりあうはずもない。会わなくなってから、十年以上が過ぎていた。彼女から連絡は一度もなかったし、僕からもとらなかった。彼女は家の要求に従順たるべくしつけられた娘だった。二人とも、違う世界の人間

なのだと思うことで、無理に自分を納得させていた。
そんな彼女から、初めて手紙が届けられたということに、僕はなぜかひどく不吉な予感がした――」
肌身離さず持っているその手紙を、片桐さんは僕たちに見せてくれた。許可を得て、以下にその一部を書き抜いておく。
『――片桐光太郎様、
かつての、わたくしの数々のご無礼、数々の罪を省みもせず、お手紙さし上げますことをどうぞお許し下さいまし。
わたくしは今、恐怖にさいなまれております。
自分が、自分でなくなってしまう恐怖です。わたくしは現在の夫、芳野堂伝衛門とともに、ある島の屋敷におりますが、そこには、何か得体のしれぬ恐怖が、わたくしを食いつくさんとしてりゅうりゅうと牙(きば)を研いでいるのです。
誰も、頼るものはありません。実家から連れてくるのを許されたものはほとんどなく、あなたさまもご存じの、キクばあや一人だけがわたくしの味方です。
けれども、ともすれば、そのばあやさえも遠ざけられてしまうのです。わたくしは孤独です。そしてその孤独のすきまを狙って、悪魔がわたくしを狙いに来るのです。
いつも恐怖は夜ごと、どす黒い翼でわたくしを覆いつくし、少しずつ、わたくしを変え

ていってしまいます。目を開けばそこには真紅の闇があり、見知らぬ者の笑い声が、わたくしを脅かします。

どう書けばよいのかわかりません。けれど、何か、とても恐ろしいものが、近寄ってくるのをひしひしと感じるのです。ああ、こわい、こわい、眠るのが怖い、けれど、眠らずにおればもっとおそろしい悪夢がやってくる。

――片桐光太郎様、

あなたさまとお別れしてから十年、わたくしは一日たりとて、心の休まる日はございませんでした。

実家の両親は、娘のわたくしを、ただ富家への人身御供として育てただけだったのです。表向きは名家を気取っていても、その内実は、今にも崩れ落ちそうな砂上の楼閣を必死に支えているばかり。わたくしがお金持ちのところへ嫁ぎまして、金銭的な援助を得ることしか頭にない、なさけない人たちなのです。

そうしてわたくしはその要求に抗しきれずに、あなたさまを裏切ってしまいました。

ばかな、ばかな絢子、いくじなしの絢子、――あの時、あなたさまの手を取っていれば、あるいは違った日々もあったかと、詮ないことを思うたびに涙があふれてまいります。

――片桐光太郎様、

今は、恥を忍んでお願いいたします。

どうぞ、この苦しめられているあわれな女をお救いくださいまし。夜ごとの恐怖を、わたくしの上から祓ってくださいまし。何かが起ころうとしております、なにか、とても怖いことが……ああ、光太郎様、わたくしは怖い。

——片桐光太郎様、

この手紙はばあやに託して、船で本土へ持っていってもらうことにいたします。執事の蜂谷がわたくしをきびしく監視しており、自由に外へ出るさえままなりません。

——片桐光太郎様、

どうぞどうぞ、お願いです。

もしもかつて知っていた女を思いだしていただけるなら、そうして、少しでも懐かしく思っていただけるのでしたら、どうか、よるべなき絢子をお救いください。あなたより他に、頼るべき方はおりません。どうかわたくしを救いに来てください。

どうぞ、どうぞ、あなた……お願いいたします』

上品なクリーム色の便箋は、下四分の一が水に濡れてふやけていたが、ほかはほとんど乾いていて字も読みとれた。

細い、綺麗な女文字が、かすかに震えながら切々と綴られている。あの人形のような絢子夫人が綴ったとは信じられないほど、真情にあふれた言葉がそこにはあった。

「これを見て、島へ来ようと思ったんですね」

「そうだ。だが、店の仕事の引き継ぎや、その始末で手間取ってしまって、出発することができたのは手紙が届いてから三週間もたってからだった」

僕は焦っていた。僕がつかない先に、彼女に何かあったらと思うといてもたってもいられない気持ちだった。

やっと淡路について、芳野堂家の屋敷のある島への船を探そうとすると、船はもう出ていったあとで、次は、三日たつまで島へは立ち寄らないという。しびれをきらした僕は、船宿で小さいボートを借りて、自分で島へ接近しようと試みた。

そして、あの嵐が来た……」

「で、僕たちに助けられたってわけだ」

野々村君がしみじみと首を振った。

「それにしても、よく目的の島へ流れつけたもんだ。執念ってえのはすごいや」

「事件の詳細を聞いたのは、おキクさんからだったんですね？」

「ああ。いつまでたっても僕が来ないので、もしかして駄目だったのかと気をもんでいたらしい。なぜもっと早く来てあげてくれなかったと、ひどく泣かれた。いや、こんなことになる前、絢子さんが不本意な結婚をさせられる前に、どうして、連れて逃げてあげてくれなかったかと、胸を叩いて……」

端整な顔が苦しげにゆがんだ。きっとその言葉は、人に言われるまでもなく、手紙を受

けとって以来ずっと彼の心にこだましていたのに違いない。
しかも、これだけではないのだ、とおキクばあやは言った。
『絢子さまはこちらに嫁がれてからも、あなたさまをお慕いしてずっと純潔を守りつづけておられました、……なのに、あの、獣のような男が――』
『なんだって、それは誰だ。言ってくれ、おキクさん』
『芳野堂偉雄。――あの、女好きの、犬にも劣る畜生が、……仮にも自分の現在の義母に邪心を起こして、絢子さまを――無理やりに……』
片桐さんの胸にもたれて、おキクばあやは泣き崩れた。
「芳野堂偉雄！　あいつが」
僕は思わず大声を出していた。
「僕は人の命は基本的に尊重するが、奴に対しては、悪いが同情することはできない」
片桐さんの目は冷たく燃えていた。
「絢子さんはそのために妊娠して、ひどく体調を崩した。物狂おしくなったのはちょうどそのころからで、異常なまでに暗闇を怖がり、闇の中から悪魔が襲ってくる、悪魔が、私の心を食いつくすと訴えたという。
そうするうちに、絢子さんは故意にだか事故だかわからないが、屋敷の階段から転げ落ちて、そのために流産した。完全に様子がおかしくなったのは、その日をさかいにだとば

あやは言っていた」
「どういう風に？」
「まず、まったく自分を身の回りに近寄せなくなったらしい。おキクさんは彼女が赤ん坊のころからずっとつきそっていたばあやで、彼女にとっては実の親よりずっと近しい存在のはずなんだ。
そのおキクさんが身辺に近づくことを許されず、しかも、絢子さんが居ない部屋で、あたかも彼女がいるように毎日ふるまえと命令されたという。絢子さん自身はどこかへ姿を隠してしまって、命令するのは、執事の蜂谷を通してだそうだ。
『それだって、絢子さまがおっしゃっているのかどうかわかりゃしません』というのがおキクさんの意見だったな。『もしかしたら、絢子さまはどこかに閉じこめられてしまって、あの蛇のような蜂谷が勝手に奥さまの命令と言って周囲をごまかしているのではありますまいか。……なんとかいたしたくても、こんなばばあの細腕一つでは、どうすることもできませず――』」
おキクさんの口調を再現してみせて、片桐さんは自嘲するように笑った。
「ただ閉じこめられているだけなら、僕はどんなことをしてでも彼女を解放してみせる。だが、心配なのは、それ以上の事態に陥っていた場合だ。先ほどの席でとにかく、生命に別状はないことだけは確認できたが、精神状態が心配だ。あの席での彼女は、明らかに

異常だった。ひょっとしたら、なんらかの薬物を使われているのかと思うが」
「そうですね。僕も、あの夢遊病者のようなようすは変だと思います」
「その場合、じゃあ監禁の犯人は蜂谷ってことになるかな？」
「今のところは、そう考えておくのが妥当みたいだけどね。……そういえば片桐さん、七瀬和弥のことをまだ話してもらっていませんよ」
僕は片桐さんに言った。
「七瀬和弥と、あなたはどういう関係なんです？　どうやら、ここにいる〈七瀬和弥〉君とは、また別の人物みたいですけど」
野々村君がしゃっくりのような音をたてた。
「七瀬和弥というのは、僕が警察にいた間、何度となく耳にした凶悪な犯罪者の名前だ」
片桐さんは言った。
僕と野々村君は顔を見合わせた。
「『耳にした』？　実際に、捕まえたことはないんですか？」
「ない。神出鬼没とは奴のことだ」
片桐さんはしぶい顔をした。
「残虐な殺人、強盗、強姦団、麻薬の密輸、誘拐、監禁……奴が手がけなかった犯罪の種類を数える方がずっと早いぐらいだが、不思議なことに、仲間はつかまっても首魁の奴だ

けはいつもうまうまと逃げおおせてしまう。煙のように消える、という表現がそのまま当てはまるんだ」

その当時の気持ちがよみがえるのか、片桐さんはほんとうに悔しげだった。

「実を言うと、僕の左足を奪ったその阿片の密輸団も、七瀬和弥の息がかかった集団だった。だから、間接的に、奴は僕の刑事生命を奪った仇（かたき）でもある」

「伊原さんのことは恨んでいないんですか」

「伊原？　ああ、あれは、恨むほどの価値もない男だ」

片桐さんは冷笑した。もとが整った顔だけに、そういう笑い方をするとぞっとするほど冷ややかな顔になる。

「彼に会ったのも七、八年ぶりになるが、あそこまで身を持ち崩しているとは思わなかったな。どうせ、あいかわらず犯罪社会に身を置いているんだろうが、大富豪の芳野堂家にお家騒動が起こりそうな匂いをかぎつけて、いいゆすりの種にしようと刑事のふりをして乗りこんできたんだろう。

もちろん、そこで殺人が起こることまでは計算の外だっただろうが」

「ニセ刑事だと、大きな声で言ってやればよかったんだ」

野々村君が憤然とした。

「もちろん、そうだ。だが、ここでは僕のほうが立場が弱い。騒ぎを起こせば、つまみ出

されるのは僕のほうだったろう。そういう意味で、あの時、君が絢子さんをかばってくれたのは実にありがたかった。感謝するよ、和弥君」
礼を言われて、僕は照れた。
「いえ、そんな――」
「さあ、これで、僕の話せることは全部だ」
片桐さんは言った。
「君たち二人のうち、まだ他に、他人は知らないような情報を持っている人はいないか？この際だから、すべてぶちまけてしまおう。
さっきの和弥君――影谷貴史君の話によれば、キネマ屋敷の連続殺人はあと最低二人、犠牲者が出ることになっているらしい。そうなる前に、できれば事件を食いとめたい。知っていることは皆、なにもかも話してくれ」
僕は勢いこんで、二重壁の通路の冒険、そして、偉哉君や茉莉絵ちゃんから聞き出したさまざまな情報をその場で語った。野々村君と片桐さんはそれぞれにじっと聞き入ってくれた。
「そうすると」と片桐さんが言った。
「十年前には、七瀬和弥と名乗る人物がこの屋敷にいた、ということになるな。――野々

村君、君は、十年前にこの屋敷に来たことがあるのか？」
「じょ、冗談じゃありませんぜ、センセイ。僕はその当時、東京は浅草通りの芝居小屋で、口上の見習いをしながら、父ちゃん母ちゃんと楽しくやってましたとも」
野々村君はあわてたように手を振った。
「だいたい、その頃の僕は自分が両親の実の子じゃないなんて夢にも思っちゃいなかったんだから。なんで、こんな屋敷なんかへ来てるもんですかい」
「だが、双子の妹の茉莉絵は、十年前に和弥と名乗る人物に会っているらしい」
考えこむようにあごに手をやって、
「それは、間違いなく〈七瀬和弥〉だと言っていたかい？」
「そうですね。彼女は『和弥兄さま』と言っていましたから、下の名前を和弥と名乗っていたことは間違いないようです」と僕は言った。
「実際にどういう素性の人物だったにしても、茉莉絵ちゃんに関しては、芳野堂家の隠された子供という身の上を装っていたんじゃないでしょうか。そして十年後、その身分に当てはまる形でやって来た僕を、彼女は無邪気に〈お兄さま〉と信じこんだようです。どうしてその人物が、そんな情報をにぎっていたのかはわかりませんが」
「アリスの落とし戸……アルカディア、エルフランド、お伽の国……」
小さく呟きながら指折り数えてみて、舌打ちし、

「どっちにしろ、またずいぶんとうまく少女を手なずけたものだな。芳野堂貴子と偉雄の妻の蓉子夫人が、〈七瀬和弥〉と関係があったというのも気になる。この〈七瀬和弥〉は、芳野堂家関係の女性の間に入りこみ、巧妙に網を張って動き回っているようだ」

いったん言葉を切って、

「そして恐らく、絢子さんもこの〈七瀬和弥〉の手に――」

「僕もそれを心配しています、片桐さん」

僕は身を乗りだした。

「あなたもきっと、島に来たときにその名前を聞かされてぎょっとしたでしょう。初対面の時、どうしてあなたがあんなに僕をきつい目で睨んでいたのかわかりましたよ。あなたは僕をその、憎むべき犯罪者である〈七瀬和弥〉と思いこんでいたんだから、敵視するのも無理はない。

あなたは、ここでもまた刑事時代に追い続けた〈七瀬和弥〉が動いているものだと思って愕然とした。そして、守るべき女性がその犯罪者の引きおこした殺人事件に巻きこまれていると知って、さらに衝撃を受けた。あなたは最初、僕こそがすべての黒幕で、殺人の犯人だと見ていたんでしょう、片桐さん」

「今はもう思っちゃいないよ。君は狂人かもしれないが、犯人じゃない」

皮肉っぽく彼は笑った。

「よかった。でも、そうすると、この三人目の〈七瀬和弥〉とは誰なのかという疑問が残りますね」

笑い返して、僕は頬をひきしめた。

「僕は思うんですが、偉雄氏殺しと沢松艶子殺しの実行犯は、やっぱり貴子さんじゃないかと思うんです。偉雄氏のほうには、妻の蓉子夫人ももしかしたら荷担していたかもしれない。いや、偉哉君が聞いたという会話を考えると、彼女もまた夫殺しに荷担したとしておくほうがたぶん正しいでしょう。

偉雄氏は女出入りが激しかったというし、僕は一度食事に同席しただけですが、蓉子夫人は粗暴な夫との生活にほとほと疲れ果てた様子を見せていました。

彼女が夫の事業の危機をどれくらい知っていたかはわかりませんが、借金と醜聞地獄にまきこまれる前に、まだ小さい偉哉君のためにも、あとくされなく夫と別れたいという望みを抱いていた。彼女のそんな気持ちが、遺産の取り分を増やすために兄が邪魔だった貴子さんと利害一致し、二人して犯行に走った——」

「だが、仮にも現在の夫と、実の兄だぜ。そんなにあっさり殺そうなんて思えるもんかな」

「もちろんそうだ」野々村君の指摘に、片桐さんが言った。

「だが、そこにうまくつけこみ、二人をそそのかして、恐ろしいことをやらざるを得ない

ような精神状態に追い込んでいった人間がいる――」
「つまり、それは彼女たちのみの発案ではなく、二人に殺人を示唆し、指揮をとった黒幕がいる」と僕は続けた。
「それが〈七瀬和弥〉で、すべての悪はこの人物にこそある。――僕はそう考えますが、片桐さん、あなたのご意見はどうです」
「僕も賛成だ」
片桐さんも頷(うなず)いた。
「芳野堂偉雄の喉(のど)の傷を調べた結果は、どう考えても妹の貴子か妻の蓉子が座っていた位置からの創傷としか考えられない。沢松艶子殺しについても、殺しの動機を持っているのは貴子以外にはありえなかった。むろん、動機の存在そのものは殺人の証拠にはならないが、それでも容疑者リストのトップにはあげられるだろう」
「でも、貴子さんは殺されちまったぜ」
横から、野々村君がおそるおそる口を出した。
「それには誰か、別の犯人が必要だろう？　自分で自分を絞め殺して、顔の皮までひっぺがして、ご丁寧に窓の上へのっかっとくなんてことできるはずもない」
「推測だけど、そこで黒幕の〈七瀬和弥〉が表に浮上してきたんじゃないかな」と、僕。
「〈七瀬和弥〉は、自分のコントロールをはなれて勝手に殺人を働いた貴子さんに対して

腹を立てた。それで、逃がしてやるとかなんとかおためごかしを言った上で、部屋から脱出させ、彼女の上にかえって大きな疑いがかかるようにした。

そして自分の所に逃げ込んできた貴子さんをゆっくり絞め殺し、見せしめのために顔をはぎとって、あんなふうに薔薇窓にさらしたんだとしたら……」

「一応のつじつまは合うな」と片桐さんが認めた。

「では、その〈七瀬和弥〉とは、いったい誰なのだ？」

「それは……」

「……執事の――蜂谷……？」

ほぼ三人ともが、同時にその名前を口にしていた。お互い、探るように目を見交わし、誰からともなく頷きあう。

「やっぱり、君もそう思うかい」

「うん。こうなると、彼よりほかに当てはまる人物はなさそうだ。

彼なら、十年前にもこの屋敷にいたっておかしくはない。小さい子供なんて、大人はたいてい同じように見えるものだ。服を着替えて、顔をちょっと作れば、いつもの執事とわからなかったなんてこともありうる話だ。伊原はいるけど、十年前になんてここにいたはずはないし、そもそも、彼はそういう器じゃないでしょう、片桐さん」

「ああ、そんなに思いきった仕事ができるような玉じゃないさ」

吐き捨てるように彼は言った。
「人を道具のように操るなんてなおのことだ。それに、奴は焦っている。あさっての午後には三日目が過ぎて、船がやってくるんだろう。外界と連絡ができるようになってしまえば、ニセ刑事の嘘がばれるのは時間の問題だ。その前にさっさと金をつかんで、とんずらしたかったのさ。
さっき、絢子さんを引っぱり出してあれだけ毒々しい芝居を演じてみせたのも、奴の焦りの表れだ。〈七瀬和弥〉の持っている、冷酷かつ周到な邪悪さなど、奴の中にはみじんもないよ、ばかばかしい」
「それにしてもなぜ、〈七瀬和弥〉——蜂谷は、わざわざにせの七瀬和弥——君のことだぜ、和弥君——を仕立てたり、絢子夫人にあんな狂気の血うんぬんなんて馬鹿話をさせたりしたのかな。殺しにもいちいち、黒衣の怪人なんて芝居がかったものを出して、伝衛門の死体までご丁寧に隠したりして」
野々村君が興奮したように言った。
「じゃあ、君は絢子夫人の話は信じていないってわけだ」
「当たり前だよ、これでもリアリストだぜ。学校だって出てるんだ、いまさら、あんなたわごとにつきあっちゃいられないよ。……そりゃまあ、いい気持ちのしなかったことは認めるけど」

ちょっと不気味そうに腕や手の甲を眺めている。なにしろあの話がほんとうなら、野々村君の中にもまた、薔薇の烙印(らくいん)を持つ殺人狂の血が隠れているかもしれないというのだから大変だ。

「わからないのはそこだな。——しかし、とにかく蜂谷を捕まえて吐かせれば、何もかもわかってくるんじゃないか。今、そんなことを話しあっていてもしょうがないよ」

「よし、じゃあ、さっそく蜂谷のやつを締めあげに行こうじゃないか」

勢いよく野々村君が立ちあがった。

「片桐さんとこへ来た手紙にも、執事の蜂谷が見張っていて外にも出られないって書いてあったんでしょう。奴が〈七瀬和弥〉であったにしろなかったにしろ、こりゃ悪党に違いはねえや。みんなで押しかけて、とっとと奴をひっくくっちまいましょう」

「待てよ、野々村君。そうしたいのは僕だって山々だが、今は、絢子さんが人質にとられているのも同然なんだぜ」

「あ……」

野々村君はしまった、というように口を押さえ、黙然としている片桐さんにすまなさそうな目を向けた。

「すいません、片桐さん、僕つい夢中になっちゃって……」

「いや」

片桐さんの顔は暗かった。
「しかし、そうなんだ。たとえ蜂谷が〈七瀬和弥〉で、奴を捕まえることに成功したとしても、絢子さんが殺されてしまったら僕にはなんの意味もない。
情けないことを言っていると思う。だが、放すべきでないときに彼女を放したせいで、あの女はこんな不幸を味わうはめに陥ってしまった。今度こそ、僕は彼女を救いたい。僕は、もう警察官ではない。犯罪者の逮捕は僕の仕事ではない――しかし、彼女を救ってやれるのは、僕のほかには誰もいないんだ」
「そうすると、先に絢子さんが閉じこめられている場所を見つける必要があるってわけか」腕組みをして野々村君は考えこんだ。
「それについてなんですが、片桐さん」
僕は言った。
「僕には一つ、どうもこれが手がかりじゃないかと思えるものがあるんです」
目を光らせて片桐さんは顔をあげた。
「言ってくれ、和弥君。どんなものでもかまわない」
「さっき話した茉莉絵ちゃんのお伽噺の件なんですが、彼女は、その〈七瀬和弥〉に連れられていったお伽の国への道筋を、僕にこう告げたんです。『薔薇のトンネルをぬけて、アリスみたいにウサギ穴をくぐって、まっ暗な闇の洞窟を、どこまでも――』と」

「薔薇のトンネル――ウサギ穴――闇の洞窟……壁の中の通路、か」
　かみしめるようにくり返して、片桐さんは目を細めた。
「つまり、その壁裏の通路のどこかに彼女のいわゆる『お伽の国』があって、そこが〈七瀬和弥〉のアジトなんじゃないかと考えるんだな」
「はい。そして、絢子さんはそこに閉じこめられているんじゃないでしょうか。屋敷の中の部屋に隠したところで、たかがしれているでしょう。おキクさんだって探さなかったはずはないんですから、きっと、ただ探しても見つからないような場所で、しかも、今日のようにいざという時にはすぐ連れてこられるような場所に、絢子さんは隠されているはずだと僕は思います」
「なるほど」
　しぼり出すように言って、片桐さんはゆらりと椅子から立ちあがった。
「では、行こう。事態は一刻を争うかもしれない。一秒でも早く、彼女を見つけ出して、助けてやらないと……」
「待ってくださいよ、駄目ですよ、片桐さん。あなた、足が痛むんじゃありませんか」
　僕はあわてて止めた。立ちあがる片桐さんの仕草はいかにも大儀そうで、はなれて見てもはっきりとわかるほど、左足の全体がわなわな震えている。かなり痛むらしく、顔も青ざめて、息を吸うたびちょっと止めるようにするのが痛ましい。

「だが、待てないんだ！」

叫ぶように片桐さんは言った。冷静ないつもの口のきき方とは打ってかわった、血の出るような必死の響きだった。

「わかっています。でも、そんな状態じゃ、あの通路はとても歩けませんよ。僕は入ったことがあるからよく知ってます。しばらく休んで、痛みを取ってください、でなきゃ、僕は入り口へなんか案内しませんよ」

一瞬、かみつくような表情で片桐さんは僕を睨みつけた。

だが、それはほんの一瞬のことで、徐々に表情をやわらげると、疲れたように笑いながら、握り拳で僕の胸をどんと叩いた。

「まったく、君のようなお人好しを犯人だと考えていた自分が信じられないな。……刑事の勘も鈍ったか。自分の不明を恥じるばかりだね」

「それだけ減らず口が叩けりゃ十分ですね。じゃあ、三時間ばかりたったら、下のホールに集合しましょう。でもくれぐれも、無理をしないでくださいよ」

人には休んでおけと言いつつ、自分は興奮のあまり横になることもできずに、一気にこのメモを書き上げた。そろそろ、待ち合わせの時間だ。

しかし、たった二日足らずのつきあいというのに、野々村君や片桐さんのことをずっと

昔からの友人のように感じてしまうのは不思議だ。それだけじゃない、この時代そのものが、とても懐かしい感じがする。まるで、家に帰ったような感じだ。

この忌まわしい事件さえなければ、もっと彼らとの交流も楽しめるものになったろうに、残念だ――と、そんなことさえ思ってしまう。

あと少しの辛抱だ、尚美さん。

事態はしだいに核心に近づいてきている、そんな気がする。影はいまだに薄れる様子を見せないが、その闇が晴れ、この事件の真相が見えたとき、僕は、僕たちは、無事に未来にもどれるのだろうか。

――いや、きっと戻れる。戻れるとも。

次にペンをとるときには、二十一世紀のビルの風景を見ていることを期待して。

【――年十月二五日・――時――分】

今はいつだろう。そして、ここはどこだろう。

僕が見ているのは一九二九年のキネマ屋敷なのか、それとも、二〇〇三年の崩れゆくキネマ屋敷なのか。僕にはもう見当がつかない。

燃えあがる島の別邸がある。噴き出す炎の熱が頬を焼く。その炎の照り返しを受けて、僕は必死でペンを走らせる。

僕はどうしてこんなところにいるのだ？

ペンを動かすことだけが、今の僕を支えてくれるように思われる……

ホールに降りようと部屋を出たとき、いきなり、廊下の明かりがいっせいに消えた。部屋の電気も同様だった。僕は狼狽（ろうばい）して廊下の窓に駆け寄った。外も同じだった。あかあかと、夜間も明るく照らされていた屋敷はとつぜん真の暗闇に沈んで、真っ黒な影として星空の下にわだかまっているのだった。

不吉な予感に突き動かされて、僕は階段を駆け下りた。部屋にあった、卓上オイルランプをカンテラがわりにかざし、途中の踊り場までさしかかると、同じように、ランプをか

かげた野々村君が階段の上に姿を見せた。
「おい、いったいどうしたんだ？　停電か？　まっ暗だな」
「わからない。発電機がどうかなったのかも。あ、片桐さん、もう大丈夫なんですか」
身体を左右に揺すりながらやって来た片桐さんは、疲れたようすだったが、足の痛みはだいぶましになったらしい。僕たち同様、部屋の調度品のランプを片手にさげて、風の匂いをかぐ猟犬のように、眉間にしわを寄せてあたりを見回している。
「停電か。どうも、様子がおかしいな」
「ですなあ。なんだか、気味が良くない。こういうとき、真っ先に飛び出てくるはずの、蜂谷の奴の姿もないし」
野々村君はランプを高くして周囲を照らすが、なにしろ、手元を照らすだけの小さな光しかないランプなので、いっこうにらちがあかない。
「ここの電気は、地下のボイラーで発電機を動かしてまかなってるって言ってましたよね」
「そうだな。そう聞いてる」
「行って、見てきましょうか。もしかしたら、ボイラーが故障して発電機が止まっただけかもしれない」
「いや、待て。一人では動かないほうがいい」

全身から針のような警戒の雰囲気をとばしながら、片桐さんが止めた。
「三人、みんなで行こう。下へ降りるぞ。足もとに気をつけて」
僕たちはてんでにランプをかかげて、そろそろと階段を下りていった。ホールは暗黒に沈んでいる。月のない夜で、高い薔薇窓だけが星の光を映してほんのりと白く浮き上がっている。
「ひゃっ」
階段を下りたとたん、いちばん先頭にいた野々村君が変な声を出してつんのめった。
「どうした、野々村君」
「何か踏んだ。なんだこりゃ、こいつは……うわっ、に、人間！」
「なんだって！」
僕と片桐さんはわれさきに残りの段をとびおり、身をかがめて、腰を落として震えている野々村君の足もとに光を集めた。
手が見え、腕が見え、胴体が見えた。
よじれた指が、断末魔の苦悶をしめして赤い絨毯を握りつぶしていた。
「これは……」片桐さんがうめくように言った。僕はこみあげてくる吐き気をのみこむのに必死だった。
「これは――伊原だ」

ニセ刑事の伊原が、背中のまん中にナイフを突き立てられ、白目をむいて死んでいた。
野々村君が踏みつけたのは、投げ出されたその指先だったのだ。
「い――いったい、誰が？　そ、そうだ、やっぱり犯人はあ――」
「危ない、伏せろ！」
どうしてその時叫んだのかわからない。かすかな硝煙の臭いを感じ、カチリという音を聞いたのは、どう考えてもそのあとだったように思うからだ。
僕は目の前の片桐さんに体当たりして床を転がった。一瞬おくれて、耳のすぐそばを熱い風がするどい音をたててかすめた。
頭上のどこかで、舌打ちする音がした。転げた拍子に手から離れたランプが転がり、絨毯に火がついてぱっと燃えあがった。
「消せ！　火を消せ、ランプを消すんだ！」
身を起こした片桐さんが怒鳴った。
「明かりを手にしていたら狙われる、消せ！　絨毯の火もだ！」
野々村君はすぐさまランプを吹き消し、僕は燃えている絨毯に飛びついて、火を踏み消した。ふたたびあたりは暗闇に沈んだ。目をふさがれたと同じ真の暗黒に、三人とひとりのはげしい息づかいが交錯した。
「あいつ――でしょうか」

「ああ。多分な」
片桐さんが囁き返したとたん、再び銃声がして足のすぐ横の床が弾けた。僕たちは身を低くし、じりじりと移動した。
頭上で衣擦れの音がした。
何者かが、息を殺してこちらを窺っている。放たれる殺気は首の後ろがびりびりするほど鋭く、冷たかった。
「玄関から逃げられませんか。外へ出てばらばらに散れば、なんとか――」
「無理だ。僕がもう試した。外から鍵がおろされている」
片桐さんの返事はそっけなかった。
「停電もおそらく計算の上だろう。われわれは思ったより、奴の脅威になっていたようだな。どうやら、今夜のうちに、始末をつけてしまう気になったらしい」
苦笑いする気配がしたと同時に、また銃声が響きわたった。今度はかなり外れたほうに当たった。野々村君がうひい、と声をあげて、僕たちのいる方へ這ってきた。
少しずつ、闇に目が慣れてきてみると、ホールを見おろす二階の床に、真っ黒な固まりがうずくまっているのが見えた。
細長い杖のようなものをかまえたそいつは、ホールの気配に耳をすまし、身動きや、物音が聞こえた方へ銃口を向けて、容赦なく撃ってくるのだ。

おそらく、猟銃か何かを持っているのだろう。僕たちは、執拗な銃撃に身をすくませながら、床の上をじりじりと移動していった。

「片桐さん。……僕、そっと階段のほうを回って、奴に組みついてみましょうか。こっちに夢中になっているから、気づかないかもしれない」

「駄目だ、危険すぎる。奴のいる場所より、このホールのほうが暗いから、奴は音と気配でわれわれの位置を探るしかなくなっているんだ。階段など上がっていったら、みずから奴の目に姿をさらすようなものだぞ」

僕の提案を言下に切り捨てながら、片桐さんはいそがしく何か考えているらしかった。相手の立っている二階の床までの高さを目で測り、口の中でなにか呟いている。

ホールからの高さはだいたい三メートルぐらいといったところか。……大階段がホールの両側を囲むように湾曲しているのだが、その左右が連結するあたりに奴がいるのだ。ちょうど居間へつづく扉の真上あたりにあたるそこは、天井の高いホールにベランダのように張り出した舞台になっていて、確かに射撃の足場には格好の立ち位置だった。

「よし」

とうとう、片桐さんが言った。

「野々村君、君、僕を肩に乗せて立てるか」

「えっ、ええ……できなくはないと思いますが」

「よし。じゃあ、今から三人で奴の立っている真下へ近づく」
いっそう声を低めて、片桐さんは僕たち二人に囁いた。
「くれぐれも、途中で気づかれないでくれ。
そして、真下へついたら、野々村君は僕を肩に乗せて、ゆっくり立ちあがる。言うまでもなく、このときも、気配はできるだけ消すんだぞ。
僕はそこから手をのばして、奴の足首をつかんで引く。
奴がバランスを崩したら、和弥君、君は階段を駆けあがって、奴に組みつき、銃を遠くへ放り投げてくれ。いいか。わかったな」
たがいの顔は見えなかったが、それぞれがしっかりとうなずいたのは確かめなくてもわかった。僕たちは肩を触れあいながら、じりじりとホールの奥へと向かった。
僕たちが話すのをやめたので、位置がつかめなくなったのか、階上の敵は闇雲に銃撃を放ってくる。だが、さいわいそれらは僕たちのはるか後方に外れ、這い進んでいく僕たちの気配を消してくれた。
野々村君が、片桐さんを肩に乗せる。ちょっとふらついたが、うまく立ちあがった。
片桐さんがゆっくりと敵の足もとに手をのばす。敵は、まったく見当違いの方向を撃つことに夢中で、少しも僕たちの企てには気づいていないようだ——
片桐さんが手をのばし、つかんだ。

階上の影がぐらりと揺れ、銃がはね上がって二本の腕が泳いだ。
「今だ!」
声を聞く前に、飛びだしていた。
階段を三段飛ばしてはね上がり、二階に着いた瞬間に、目の前にいた黒い影に力任せに体当たりする。
相手はあわてて銃を取り直そうとしたが、僕が思いきり肩からぶつかったので、くぐもった悲鳴をあげて後ろへ突き転ばされた。手から離れた銃を取って、力いっぱい放り投げる。ホールへ落ちていった銃が、ガチャリとにぶい金属音を立てるのが聞こえた。
「片桐さん! 野々村君! 明かりを!」
僕は叫んだ。
押し倒した相手は狂ったようにもがき、今にもはねとばされそうだ。下で野々村君がランプをともした。二人して、階段をはね上がってくる。
駆けつけた野々村君が僕を手伝って相手にのし掛かり、完全に動きを封じた。片桐さんはひどく息をきらせている。
「顔を見せろ、こいつめ」
野々村君がわめいて相手の頭巾(ずきん)を剝(は)いだ。
そこにはあの、伝衛門と同じ、ニタニタと笑う白い三日月形の口の仮面があった。

だが、それを取りのけてみると、あの、蛇のような目をした執事の蜂谷の顔が、ランプの光に不気味な陰翳（いんえい）をまとってあらわれた。
「やっぱりそうか」
息をきらしながら片桐さんが言った。
「やはり、きさまが〈七瀬和弥〉だったんだな。絢子さんはどこにいる？　答えろ」
「若造が」
はげしく身をもがきながら、蜂谷は獣のように吠（ほ）えた。
「軽々しく和弥様の御名を口にするな。あの方は〈神〉なのだぞ」
「和弥様？　〈神〉？」
必死になって相手を押さえていた野々村君が顔をあげた。
「おい親父（おやじ）さん、何を言ってるんだ？　あんたが〈七瀬和弥〉なんだろうが。和弥様ってどういうことだよ。あんたが貴子さんに偉雄さんを殺すように指図したんだし、勝手に沢松艶子を殺した貴子さんを殺して、見せしめに飾ったりしたんだろうが」
「は、は、は――」
蜂谷の顔は物凄（ものすご）かった。人としての仮面をすべて脱ぎ捨てると、ここまで人間というのは獣じみるのかと思うくらいに下卑た顔だった。唇の端に白い泡をためながら、蜂谷は歯をむき出して僕たちをあざ笑った。

「下衆（げす）には下衆の頭しかないようだな。きさまらごときの考えるところなど、和弥様のお考えには足もとにも及ばぬわ。あの方こそ神だ、全知全能の神であられる。あの方の目はすべてを見透かし、一瞬のうちに、あらゆる時と場所を移動なされる――」

くるりと目が白く裏返り、ごうっと蜂谷は吠えた。思わず身を引いた僕に、針で突いたように小さくなった蜂谷の瞳孔（どうこう）がひたと当てられた。

「きさまも、身の程知らずな――」

歯の間から毒でもしたたっているような声だった。

「和弥様の器として喚（よ）ばれたことを光栄に思っておればよいものを、このような、愚者どもと結託しおってかくも無礼なふるまいを――えい、今すぐにきさまは死ぬがいい、死ね、死んでしまえ。和弥様のしもべは私一人で十分だ。死ね死ね死ね死んでしまえ」

「和弥の――器？」

僕は愕然（がくぜん）として思わず力を抜いた。

「器――だって？　それは、いったいどういう――」

それがいけなかった。蜂谷は野獣の唸（うな）り声をあげると、咆哮（ほうこう）とともに僕を身体の上から投げ落とした。あわてて取りすがろうとした野々村君を突きとばして、だっと二階の廊下を、離れのほうへむかって駆けだした。黒い衣をひるがえしながら、たがの外れた哄笑（こうしょう）が闇のむこうへ遠ざかっていく。

「いかん、追うんだ！」
言われるまでもなかった。僕と野々村君は、同時に飛びだして駆けていく蜂谷のあとを追った。
「…兄さま？」
かすかに扉のきしむのを耳にして、僕ははっと足を止めた。
扉の一つが細くあき、おびえた顔の偉哉君が顔をのぞかせていた。
「いまの声、なに？　和弥兄さま、みんなで、何してるの？……」
「偉哉君、駄目だ、出るな！」
僕の声に怯えたのか、偉哉君は飛びあがってドアを閉めた。
「加奈絵ちゃんに茉莉絵ちゃんも、聞こえるかい？　もし目をさましてたら今すぐドアに鍵をかけて、僕が呼びに行くまで絶対に出るな、わかったね！　絶対にだ！」
返事はなかったが、聞こえたと信じるしかない。淡い星明かりをたよりに、必死に僕は走った。離れへとつながる渡り廊下の、曲がり角が近づく――。
きらっと閃光(せんこう)が走り、とっさに僕は飛びすさった。
後ろに続いていた野々村君がたたらを踏む。曲がり角のむこうから、のそりと蜂谷が顔を出した。
手に、大振りな狩猟用ナイフを握り、これ見よがしにひらめかしている。にたにたと笑

った口元は三日月形につり上がり、あの笑う仮面の表情を、もっと生々しくも邪悪に映しだしていた。

僕はじりじりと後ずさった。

「蜂谷さん、あんた七瀬和弥とどういう関係なんだ。あいつが〈神〉だなんて、どういうことだ」

「器などに話す必要はないわ。きさまはこの場で死ぬのだ」

歯をむいて蜂谷は唸ったが、じきに狼のような笑みを浮かべて、

「――俺はあの方に真理を教えられた。天命を見たのだ。あの方は天地のすべてを見通し、思うがままにあらゆる事柄を操られる。

俺は長年この家に仕え、くだらぬ主人に身も心も踏みにじられつつ生きてきたが、その欺瞞(ぎまん)を明かし、俺の目をひらかせてくださったのは和弥様だ。あの方こそ、真にこの世界の支配者であるお方だ。芳野堂伝衛門などという、塵にも値せぬ虫けらに、ついやした年月が今となっては忌まわしいわ」

「芳野堂伝衛門に毒を盛ったのも、七瀬和弥の指図であんたがやったことか？」

「違う、違う、あれはあの男が自分で服毒したのだ。自分でグラスに毒を入れ、恐怖に震えながら飲み干したのだ。和弥様がそうせよと仰せになったからな」

針で突いたように小さな瞳孔が、目まぐるしくぐるぐる回っていた。

「あの方には、だれも逆らえぬ。差しだせと命じられれば、命だろうと魂だろうと、差しださずにはいられぬのだ。この血の芝居の開幕を告げるものとして、和弥様は、伝衛門の命を要求された。そしてあの方の要求は、いつでも実行されずにはおかぬ」

「伝衛門の死体をどこかへ運び出して隠したのはなぜだ。それも七瀬和弥の命令か」

「おお、むろんだとも。……和弥様の考えられた趣向だ、呪われた血を持つ子供たちを、血の涙を流しつつ屠って（ほふって）ゆくよみがえった父親の悪魔の物語だ、……おお、『玻璃ノ薔薇』、『玻璃ノ薔薇』——」

言葉、形相ともに、常軌を逸していく蜂谷のありさまは物凄かった。喋らせるうちに隙が出ないかと僕は必死に左右を目で探ったが、少しでも動こうとすると、今にも飛びかかりそうにナイフをひらめかせて威嚇する。手のつけようがない。

「きさまは、あの物語を最後まで観なかったな、……観れば、和弥様のご趣向もすぐにわかったであろうに。……あの物語は、悪魔が滅されて終わるのではない、一般公開されたものこそ不完全な形なのだ、本来は、あそこでああして映されたように、別世界から飛び出し実体を持った悪魔があらゆる生命を殺しつくし、血の世界の上に立ちはだかって哄笑するための物語なのだ、……悪魔は死なぬ、そうして、神も悪魔も全知のお方にとっては同じものだ、あの方は不死であり、あらゆる場所に存在される——」

蜂谷の後ろで何かがちらっと動いた。だが、目を向けている余裕がない。

「あの時、スクリーンから飛び出してきたように見えた怪人は貴子さんだったのか？」
「愚かな女ども、……和弥様や、俺の手伝いがなければ満足に人も殺せぬくせに、和弥様のお言いつけも守らず、勝手に趣向はずれのあばずれなど殺しくさって」
白いよだれがだらだらと顎を伝いはじめた。
「これまで俺を犬のように扱いおったあの女を、ぞんぶんにいたぶってくれるのがどれだけ愉しかったか、とうていきさまにはわかるまい。和弥様の真のご意志を知らず、ただ夫を殺す兄を殺すとだけ考えていたあの女どもに、蘇りし悪魔の幻影を見せつけてやったのだ。怯える奴らにこれも和弥様のお指図と伝えて安心させ、他人の目をくらます工夫と教え込んで着せたあの黒衣と仮面、雨に濡れて震えながら逃げ込んできたあの高慢な女の厚い面の皮を、ひき剝いでやったときの胸の高鳴り……」
もう先を続けさせる勇気が出なかった。僕の脳裏に、黒衣に身を隠し、濡れそぼちながら走る貴子さんの姿が浮かんだ。
怯えきり、混乱しながら、それでも何とかしてもらえるとばかり思って逃げ込んだ先で、いきなり首に紐を巻きつけられ、絞めあげられた驚愕と苦痛、それから闇……。
美しい顔にナイフが入れられ、生皮の仮面がゆっくりと剝がされていく。それは主演女優である貴子さんのための残酷な演出であり、演出家の命令をきかなかった俳優への、容赦ない罰であったのだ。乙女の仮面の下に隠された、血まみれの悪魔の顔。

素顔をさらした殺人者の死体を、映画と同じく薔薇窓の前に立たせることで、演出家の意図は完成し、失われた完全性は回復された。血みどろの殺人人形劇、血と肉とを使った、暗黒のグラン＝ギニョルは――。
「にせ刑事の伊原を殺したのはなぜだ。被害者を伝衛門の子供に限るというなら、あの男だって趣向はずれのうちのひとりだろう」
「あの男は身の程知らずにも、和弥様にとりいろうとした。いらぬ秘密を探り出し、和弥様の新たなしもべとなり、下衆な欲望を満足させんと和弥様に不遜な要求をし、永遠の生命と、金と、すべてを思うがままにする力を自分に与えよと迫った。
そんなことは許せぬ！」
一瞬、蜂谷の目は真っ白に変わり、稲妻のような閃光がほとばしるかに見えた。後ずさった僕は背中が壁にぶち当たったのに気づいて全身を凍りつかせた。
「死ね。死ぬがいい。和弥様のしもべは、私一人しかいらぬ」
白いよだれがだらだらと顎を伝った。
「和弥君、さがれ！」
「あ、馬鹿！……」
野々村君が後ろから、がむしゃらに蜂谷に飛びかかった。
蜂谷は身をひねって、ナイフを振りまわした。あっと声が上がり、金気くさい臭いが流

れた。野々村君は肩を押さえてよろよろと後ずさり、壁にぶつかってうずくまった。
「野々村君、大丈夫か――」
だが、そちらへ戻ることはできなかった。今や完全に理性を失ったらしい蜂谷は、大声で笑いながらナイフを振りまわし、僕にむかって迫ってくる。刃をかわすので精いっぱいで、とても、組みつくことなど出来そうになかった。
「和弥君、伏せろ！」
背後から大声がした。あとを追ってきていた片桐さんが、拾ってきた猟銃をかまえて仁王立ちになっている。
考えるより先に僕は前方に身を投げ出し、身を低くした。銃声がとどろき、蜂谷が、ぐったりとくずおれる――
だが、そうはならなかった。
猟銃はカチリとむなしい音をたてただけで、沈黙していた。
片桐さんが愕然（がくぜん）として頭をあげる。
僕の頭上で、哄笑（こうしょう）がとどろいた。僕は動くこともできず、背中のまん中に向かって降ってくる、巨大な刃先を茫然（ぼうぜん）と見守っていた――
はげしい音がして、扉が壁に叩（たた）きつけられた。
僕の背をつらぬく寸前に刃ははね飛ばされ、壁に当たって転がった。

二人の人間が、おめき叫んで床の上でもつれ合っている。一人は黒衣をまとった人獣、もうひとりは、蒼白の顔をした、

「――芳川さん……！」

「きさまか。きさまが、貴子さんを殺したのか！」

芳川さんには、僕の声など耳に入っていないようだった。

きっと、僕を助けたという意識すらなかったに違いない。彼が飛びだしてきた部屋のドアはぶらぶらと揺れ、暴れまわる蜂谷に蹴飛ばされて何度となく壁に打ちつけられた。

「言え！　きさまが殺したのか、あの人を！　あの人に、あんなむごい仕打ちを働いたのは、きさまのこの手なのか……！」

蜂谷の頭をつかんで、壁や床にところかまわず打ちつける。

蜂谷の力も物凄かったが、恋人を奪われ復讐に燃える芳川さんの力がわずかに勝った。すさまじいばかりの格闘が繰り広げられたが、吠えたけりながらじたばたと暴れる蜂谷の抵抗はしだいに弱くなっていった。口からあふれる泡が、うすいピンクに、やがて、真紅に変わっていった。

気の遠くなるような時間が過ぎて、気がつくと、そこにはだらんと手足を投げだした黒衣の男と、その上で、喉を鳴らしている男のぜいぜいという声しか響いていなかった。血溜まりが、じわじわと廊下の上に広がりだしていた。

「よ、芳川さん――」
芳川さんは肩で息をしながら、目をあげて僕を見た。笑おうとするかのように唇を痙攣させ、立ちあがったが、急に、ぐらりと前にのめった。
重い音をたてて、ナイフが落ちた。その刃は血にまみれていた。
どっと倒れた芳川さんの脇腹に、じわりと黒く見える染みが広がるのを、僕は見た。
「よ、芳川さん？　芳川さん！」
「……いい――これで、いい――」
あわてて抱き起こそうとした僕に、芳川さんは、血の気を失った唇で呟いた。
「仇をとった――これで、彼女に顔向けできる――あの女に謝れる――」
「何を言ってるんですか、つまらないことを言ってちゃ駄目です！」
涙声になっているのが自分でも腹立たしかった。
「野々村君、君は無事か？」
「うん、皮を一枚ひん剝かれただけさ。いてててて、くそ、しみるなあ」
肩を押さえて歩いてきた野々村君はそういって強がってみせたが、こちらの傷もけっして浅くはない。裂かれたシャツの袖に、みるみるうちに赤い色が広がっていく。
「馬鹿者どもめ――」
芳川さんの腹部の傷にかがみ込もうとしていた僕たちを、地獄の底からあがってくるよ

うな声が凍りつかせた。後頭部を打ち砕かれた蜂谷が、自分の血の池に頭をひたしながら、こちらを向いてゲラゲラ笑っていた。
「馬鹿者どもめが――きさまらなどの好きにはさせんぞ。もうすぐ、ボイラー燃料の石油が爆発する。停電はその前兆だ。きさまらにはどうすることもできん。皆、死ねばよい。愚か者どもは皆、炎の中で死んでしまうがいいのだ」
「あ、あんた、馬鹿か！」野々村君が叫んだ。「そんなことをしたら、あんたの言う〈和弥様〉だって、死んでしまうじゃないか！」
「あの方は死なぬ――あの方はすべての時空に偏在する――あの方こそは神――全知全能の――神……」
最後はゴロゴロという呻きに変わり、今度こそ、蜂谷は永遠に動かなくなった。僕たちは引きつった顔をすばやく見交わした。
「本当でしょうか？　こいつの言ったことは……」
「わからん、だが、やりかねないな。どっちにしろ、この人はこのままでは危険だ。今すぐどうということはないだろうが、放っておいたら出血多量で死ぬぞ」
意識をなくした芳川さんに止血帯がわりのシャツを巻きつけながら、乱暴な口調で片桐さんは言った。
手を止めてしばし考え、上半身血まみれで、ふらふらしながら立っている野々村君にち

らりと目をやる。
「――野々村君」
決然と彼は口を開いた。
「君は、この人を連れて、すぐにこの島を離れてくれ」
えっ、と目を見ひらくのを、黙らせるように、
「小さい子供や、女性たちもいっしょにだ。ここはもう、弱い人々が安心していられる場所じゃない。ボイラーが爆発するのかどうか確かめている時間はないが、この人が、放っておいたら死んでしまうのは絶対に確実なことだ」
「そ、そんな！」
野々村君はあやうく倒れそうになった。
「で、でも、あんたはどうするんですよう？　逃げるなら、いっしょに――」
「僕はここで、やらなければならないことがある」
静かに呟くと、片桐さんは僕を振り返って、かすかに笑った。
「そう、それから、君も――だったな。影谷貴史君」
僕は驚いて背筋を伸ばしたが、すぐに、われに返ってしっかりと頷(うなず)いた。
「野々村君、片桐さんの言うとおりだ。片桐さんは絢子さんを助けなくてはならないし、僕はもとの世界に帰るために、この事件を最後まで見届けなくてはならない。

だけど君には、こんな狂ったサーカスに終わりまでつきあう義務はないんだ。芳川さんをつれて、島を出てくれ。子供たちが怖がってる。いつまでもこんな呪われた場所に、閉じこめておいちゃかわいそうだろう」

「だ、だって、船もないんだぜ？　たった一隻あったやつは、あのクソ弁護士が乗ってっちまって――」

「いや。船はある」

きっぱりと片桐さんが断言した。

「下で死んでいた伊原が、腰に鍵束（かぎたば）をつけていた。奴のことだから、身が危ないと感じたらいつでも行方をくらます手段は準備していたはずだ。僕が現れたので、身元が露見しないうちにこっそり逃げだすつもりだったんだろう。どこか、屋敷の近くの海岸を探してみろ。奴が用意した逃走用のボートが、絶対にとめてある」

「駄目だよ。そんなの、いけねえよ」

野々村君は立ったまま、ぽろぽろと子供のように手放しで泣きだした。

「ちくしょう、ちくしょう、なんでこんなことになっちまったんだよ。芳野堂なんてクソくらえだ。みんなみんな、クソっくらえだ。なんで、なんで――」

「泣いてる時間はないぞ、野々村海道」

厳しい声で言いながら、片桐さんは、野々村君の怪我をしていないほうの肩を、やさし

い手つきでそっとつかんだ。
「さあ、子供たちを起こしてきてくれ。女性たちも、早く集まるように言ってくれ。ボイラーが爆発するまでどれくらいの時間があるか、誰にもわからないんだ」

片桐さんの予想したとおり、ボートはあった。船着き場から少し南へ下がった、小さな入り江になった場所に、垂れさがった松の枝に隠すようにしてエンジン付きの小型ボートが係留されていた。
「ねえ、どうしたの、いったい何があったの」
ベッドにすくんで怯(おび)えていたところを連れだされて、偉哉君はむずかり泣きしながら僕の肩にしがみつこうとした。
「お母さまはどこへいらしたの。どうして、呼んでも来てくださらないの。和弥兄さま、ねえ、ねえ、ねえったらあ」
「ああ、偉哉君、お母さまは、お母さまはね――」
「まあ、坊っちゃま、お兄さまにそんなふうになすっちゃいけませんよ」
目を赤くしたおキクばあやが割って入って、偉哉君を抱き上げてくれた。しゃくりあげる偉哉君を肩に揺すりあげて、黙礼する。うるんだ目に、必死の祈りがこもっていた。
「どうか、和弥様、片桐様、絢子さまを――」

「わかっています。子供たちを、よろしくお願いします」
そう言いながらも、僕の心は暗く沈んだ。本土へ帰って、何もかも知る日がきた時、偉哉君はどんなにか大きなショックを受けるだろう。自分がいつのまにか両親に死なれて、身よりもない、さびしい孤児であることを知ったら。

「どうしたんだ、野々村君？」
ほんの三十分ほど前のこと蓉子夫人が寝ている部屋から勢いよく飛び出てきた野々村君に、けげんに思って僕は尋ねたのだった。
口元を押さえながら、野々村君は中を見ろ、と手まねで僕に伝えた。
ドアからのぞき込んでみて、僕は息をつめた。
ベッドは空っぽで、部屋のまん中に、大きなマネキン人形のようなものが宙にゆらゆら揺れていた。強い糞便臭（ふんべん）と、腐臭がつんと鼻をついた。
「死んで、二日はたってる」
ドアを閉め、あえぎながら野々村君が言った。
「たぶん、旦那（だんな）を殺した、そのすぐあとに死んだんだ。首を吊（つ）って」
神経の細い蓉子夫人には、夫殺しは良心に耐えかねる大罪だったのだろうか。どうして、まだ小さな偉哉君のことを思いだしてはくれなかったのだろう。……

偉哉君はしくしく泣きながら、おキクばあやに抱かれて船のほうへ連れられていった。
あとから、おどおどしたようすの加奈絵・茉莉絵姉妹がやってきた。
「お兄さまは、いっしょには来てくださいませんの」
茉莉絵ちゃんは心細そうだった。
「そうだよ、茉莉絵ちゃん。僕はここで、まだしなければならないことがあるからね」
「でしたら、茉莉絵もここに残りますわ。お兄さまといっしょでしたら、怖くありませんもの」
澄んだ目を大きく見張る茉莉絵ちゃんに、僕は、言うべき言葉をさがしてしばらく口ごもった。
「――ねえ茉莉絵ちゃん。お兄さまはね、もう二度と、茉莉絵ちゃんを助けには行ってあげられないよ」
「まあ、どうしてですの。茉莉絵、何かお兄さまを怒らせるようなことをしたかしら」
切れ長の目尻（めじり）に、みるみる涙が盛りあがった。
「いいや、そうじゃない。そうじゃないけどね、茉莉絵ちゃん、茉莉絵ちゃんにはお兄さまはいなくても、加奈絵ちゃんというりっぱなお姉さんがいるだろう。
だから、お兄さまはもう必要ないんだよ。茉莉絵ちゃんはもうこの島に来ることはないんだから、お兄さまのことも、もう卒業しなくては」

「いいえ、嫌よ、嫌よ。お兄さま、いつまでもいてくれなければ嫌」
茉莉絵ちゃんは僕にしがみついて泣きじゃくった。
「加奈絵ちゃん」
硬い表情でたたずんでいる加奈絵ちゃんに、僕は呼びかけた。
「茉莉絵ちゃんはこういう子だ。お姉さんの君がしっかりしてあげなくては、この子はこれからやっていけないだろう。昔、何があったのかは知らないけれど、もう許してあげてもいいんじゃないか。この先芳野堂家は、きっと大変なことになるだろうから」
加奈絵ちゃんはじっと僕の顔を見つめた。急に目を細め、泣きだしそうに顔をゆがめると、目を伏せて、茉莉絵ちゃんに歩み寄ってそっと手を取った。
「茉莉ちゃん、行きましょう。皆さん、遅くなると迷惑されてよ」
「そんなの嫌よ、嫌よ。茉莉絵、お兄さまといっしょにいるのよう……」
それでも茉莉絵ちゃんは、姉に手を取られて泣きながら向きを変えた。
「私なの」
加奈絵ちゃんが、ほとんど聞こえないほどの小さな声で言った。
「えっ？」
「私なの。……お母さまが、亡くなられた火事の原因――」
僕は答える言葉をなくした。加奈絵ちゃんは地面へ目を伏せたまま、

「茉莉ちゃんばっかり、あんまりお母さまが構うから。……茉莉ちゃんみたいにいたずらしてみれば、私も、もっとお母さまに構ってもらえるって——そう、思って——」
語尾が震えるようにかすれ、消えた。
ふりかえり、ふりかえりする茉莉絵ちゃんを抱きかかえるようにして、加奈絵ちゃんは足を踏み出した。うり二つの姉妹は連れだって、仲良く船へと降りていった。
「これで、全員だな。まもなく夜が明ける。野々村君、気をつけろよ。皆さんも、くれぐれもお気をつけて」
「人里についたら、すぐに救援を寄こすからな」
怒ったように野々村君は言った。操縦席の後ろには、毛布で身体を包んだ芳川さんが寝かされている。応急の止血が効いたのか、まだしばらくは保(も)ちそうだった。早く手当てをすれば、なんとか、命は助かるだろう。
「いいか、それまで無事でいろよ。死ぬんじゃないぞ、畜生め」
「別に死ぬために居残るわけじゃない。心配するな」
僕はそう言い返したが、片桐さんは何も言わなかった。闇に沈むキネマ屋敷を昏(くら)い目で見あげ、黙って潮風に髪をなぶらせている。
「すぐに戻ってくるからな！　待ってろよ！」
エンジンをかけながら、野々村君は叫んだ。

ボートは白い波をひきながら、抱き合う人々を乗せて夜明け間近の海に消えていった。

その姿が、完全に見えなくなってしまうまで見送ってから、僕は、片桐さんを振り返って、言った。

「――行きましょうか。片桐さん」

「ああ」片桐さんの声は落ちついていた。

「行こう」

誰もいなくなった屋敷は死んだような静けさだった。

僕たちのほかに、ここにいるのは死者だけだ。亡霊と、それから悪魔と。

『あの方は死なぬ――あの方はすべての時空に偏在する――あの方こそは神――全知全能の――神……』

蜂谷が死ぬ前に言いはなった謎の言葉が、呪いのようにまだ空中を飛び回っている気がした。

僕たちは言葉少なに、カンテラに燃料を入れ、ウサギ穴にもぐる準備を整えた。

片桐さんの足はまた痛み始めているらしかったが、彼は何も言わず、僕も言わなかった。

そういうことはもう関係ないのだと、どちらからともなく了解していた。足が痛もうがもげようが、命がなくなろうが、彼がやらなければならないことはただ一つしかないのだ。

「こっちです。——ここを、こう引っぱって」
例の薔薇のあずまやへ、僕は先に立って片桐さんを導いた。
ベンチの下に手をつっこみ、探り当てたレバーを引く。ごろりと音をたてて口をあけたウサギ穴を見て、片桐さんは口笛でも吹きたそうに目を丸くした。
「なるほどね、ウサギ穴か。ぴったりだな」
「この先です。道は、基本的には一本道だから、どこかに、スイッチか何かがあるはずだと思うんですが——」
偉哉君と来たときのことを思いだしながら、僕は先に立って闇の中の洞窟をたどった。うねうねと曲がりくねる通路は、上がったり下がったりしながら、屋敷の中の各部屋のそばを一つまた一つと通りすぎていく。
腐臭が、そして血臭が、この通路の中にもかすかに漂っていた。ホールに転がっている死体、二階の廊下に転がっている死体、ある一部屋に腐りながらぶら下がっている死体——そうした死体たちが、今は屋敷の主人として自己主張を開始している。
カンテラをかかげる手に、しだいに脂汗がにじんでくるのを僕は感じた。自分は、足を踏みいれるべきではない領域にいる、そんな気が強烈にしてきたのだ。
ここは死の世界、悪霊が支配する場所だった。絢子夫人の語った伝衛門の悪魔うんぬんの話も、今なら実感をもって信じることができた。ここには何かがいる。人として持ちう

るよりもはるかに邪悪で、冷酷で、狡猾な、恐ろしい何かが——。
「——ああ、ここで、行き止まりだ」
壁にぶつかって、僕は立ち止まった。
そこは偉哉君と二人で、片桐さんと伊原が話しているところを聞いた場所だった。伝衛門の書斎だ。のぞき穴に目を当ててみると、あの時と同じ、机に半分隠れた暗い室内が見えた。
「ここは書斎だな」
片桐さんも覗いて、そう言った。
「しかし、行き止まりとはおかしいな。……確かにここまでは一本道だったし、見落とすような分かれ道もなかったはずだが——和弥君、茉莉絵ちゃんは、正確にはどう言っていたのだったかな。手帳を見せてもらったとき、何か、ドアうんぬんの言葉があったように思うんだが」
「ちょっと待ってください」
カンテラを足もとに置いて、僕は、大切にポケットに入れてきた手帳をめくった。
「ありました。……『細い小路をいくつも抜けて、坂道をのぼって、絵の中のドアをくぐって……』」
「絵の中のドア」

片桐さんはあたりを見回した。
「伝衛門の書斎の覗ける場所。……ここには、伝衛門の肖像画があった。屋敷の中に、絵画といえるものがあったのは、確か、ここだけだった気がするが」
「そういえば、そうですね」
この屋敷では、彫刻や美術品はそこここに置かれていたが、不思議と普通の屋敷なら飾られているような風景画や、人物画などがまったく見あたらなかったのだ。
「あそこに机があるから、……肖像画の裏は、だいたいこのあたりか――」
しばらくあちこちを撫でさすっていたが、急に小さな叫び声をあげて、壁のある目立たないくぼみを押した。
ゴトンと音がして、今まで書斎と通路を隔てていた壁が、ぐるりと回転した。
同時に、目の前をふさいでいた土壁が、奥へむかって倒れた。あとに石を刻んだ階段が、上へ向かって伸びている。
「ここ、扉になっていたのか」
大きくひらいて書斎に出られるようになった壁に、僕は嘆声をあげた。
ちょうど、あの肖像画がどんでん返しのような扉になっていて、それが行き止まりの通路をさらに奥へと進めるスイッチにもなっていたのだ。
「この壁裏の通路は、伝衛門が子供たちを監視するために造らせたと絢子さんが言ってい

たからな。出入りするのにいちいち庭まで出ていくのは面倒だし、人目に触れる危険も大きい。どうせなら、書斎にも出入り口がないと不自然だ」

淡々と片桐さんは言った。

「この部屋を調べたとき、キャンバスを叩(たた)いた音がどうも妙だと思ったんだ。……先を急ごう。どうやら、ゴールは近いようだ」

階段はうねりながら続いた。

片桐さんの息がしだいに荒くなってくるので、僕は気が気ではなかった。はっきりと左足を引きずり、うめき声を漏らすのをこらえるかのように、白くなるほど唇をかんでいる。振りかえると、広い額にびっしりと汗の粒が浮いているのが見えた。片桐さん、肩を貸しましょうかともう少しで口に出すところだったが、危ういところで押しとどめた。そんなことを言っても、よけいに苛立(いらだ)たせるだけだ。

強靭(きょうじん)な精神力と守るべき女性への想いだけが、今の彼を突き動かしているのだろう。ままにならない足のことだけでも、彼にとっては十二分の苦痛なのだ。よけいな同情などして、その重荷を増やすべきではない。

暗い石の階段はさらに続き、やがて、上方から橙色(だいだいいろ)の光がさしてきた。明かりがついているのだ！　僕はぎしぎしいいはじめた膝(ひざ)を叱咤(しった)し、最後の数段を登り切った……

「――絢子さん！」

少し遅れてあがってきた片桐さんが、一声叫んで突進した。

そこはお椀を伏せたような天井の、小さな屋根裏部屋になっていた。

壁の端にすきまがあいていて、そこから、例の薔薇窓のものらしい凝った形の鉄枠が下方に臨めるようになっている。位置的には、玄関ホールの真上に当たるらしい。小さなランプが壁のそこここに灯されていて、とろりとした橙色の光で部屋を満たしている。

カタカタ……と、どこかで小さな音がしていた。見ると、おもちゃのような小さな映写機が壁ぎわに置かれていて、反対側のスクリーンに、映画を映していた。

見ると、『玻璃ノ薔薇』だ。『玻璃ノ薔薇』の、クライマックス近くのシークエンス、画面奥で待ち受ける主人公のもとへ、敵役の黒衣の怪人が歩いていく場面ばかりをくり返し映している。

部屋の中はひどく散らかっていた。車輪のついた馬のおもちゃや、小型の冷蔵庫ほどもある巨大なびっくり箱、ドレスを着た人形、ぬいぐるみ、サーベル、たくさんの積み木、自動車の模型やボールにラケット、毛糸細工に玉転がしに塗り絵に真鍮のラッパに……

お伽の国、と僕は呟いた。

ここだ。ここへ、茉莉絵ちゃんは〈お兄さま〉によって連れてこられていたのだ。

「絢子さん。絢子さん、しっかりしろ。僕だ。片桐だ」

片桐さんが声をあげて絢子さんをゆさぶっている。
彼女はこのおもちゃだらけのお伽の国のまん中の、大きなソファに女王様のように横たわっていた。
ソファは古かったが、下の部屋にあったどれよりも豪華な品で、つややかな木枠には流れるような唐草細工が彫刻され、どっしりしたゴブランの張り地には繊細な薔薇の模様が織り出されていた。
あの夜に着ていた暗いワイン色のドレスの裾(すそ)を床へ流して、白い顔でそこに収まっている絢子さんはそれ自体が等身大の人形のようだった。片桐さんはその上に身を伏せ、手をにぎりながら心配そうに呼びかけている。
ふと僕は壁に目をやった。
カタカタ……、カタカタ……、映写機が回り、妙にちょこまかした動きのサイレント映画がそこで上映されている。怪人は主人公のすぐ近くまで行きながら、次の瞬間また手前に逆戻りし、行ったと思ったらまた逆戻りする。
行って逆戻り……、行って逆戻り……、
僕はいつの間にか、その永久運動に魅せられたように見入っていた。
行って戻る、行って戻る、
行って戻る、行って……

——次の瞬間、画面の中で、黒衣の怪人がさっと身をひるがえした。

立ちつくす主人公を置き去りにし、マントをはためかせてぐんぐんこちらへ迫ってくる。

まるで、偉雄氏が殺されたあの時のように——

「片桐さん！」

ふいに、名状しがたい恐怖に襲われて僕は叫んだ。

ほぼ同時に、ソファの上の絢子さんの目がかっと開いた。

「……！」

何かを感じたのだろう、片桐さんは後ろへ身をそらそうとした。

だが、一瞬早く、伸ばされた手が彼の胸ぐらをわしづかみにした。

風にも耐ええないような繊手が宙をなぐように動いたかと思うと、片桐さんの身体は軽々と宙を飛んでいた。

壁ぎわに積みあげられたおもちゃの山に、片桐さんは激突した。

けばけばしい色の人形や鞠（まり）が飛びちり、壁に叩きつけられた片桐さんは、そのままずり落ちてぐったりとその場に横たわった。生きているようには見えなかった。

「うわっ来た来た。来たよお、俺の身体」

絢子さんは言った。

だが、それはガラスの鐘のようなかぼそい美しい声ではなく、にごった油のようにいや

らしい響きの、低い、男の声だった。
「ったく待ちくたびれたってえの。……あ、そういやこの待ちくたびれるっつうのもなかなか新鮮な体験だな。うんうん。いいねえいいねえ」
ゆらりと身を起こし、ソファに座る姿勢になった絢子さん――いや、絢子さんの姿をした何か別のものは、凍りつく僕を心地よさそうに眺め、荒々しい笑い声をたてた。
その声に比べたら、蜂谷の咆哮などまだまだ人の範疇に属するものだとわかった。これは――人ではない。人間的なあらゆるものを裏切り嘲笑する、まさに悪魔の笑い声としか言いようのない何かだった。僕は全身から力が水のように流れ落ちるのを感じた。
「あんた――あんたは、何者だ」
やっとしぼり出した声は情けないほどに震えている。
「絢子さんをいったいどうしたんだ。おまえは――何だ……」
「さあ、何者なんかねえ。俺自身が何者なのか、俺にもさっぱりわからないんだわ」
粗野な仕草で肩をすくめて顔をこすり、それから牙をむくような感じでにやりとした。大きく襟の開いたワイン色のドレス、その、綺麗に浮き上がった鎖骨の上に、くっきりと刻まれているのは――
幾重にも重なった花びらを持つ、赤い、薔薇の花のあざ。
「ま、この時間線、この時点でのてめえらには、とりあえず〈ナナセカズヤ〉と名乗っと

くのが、いちばん手っとり早いんだろうなあ」
「七瀬……和弥……」
からからに乾いた舌で、僕はくり返した。
「でも、それは、芳野堂家の失われた……妾腹の息子の名じゃ……」
「問題はそういう小さな部分にはないんだよ、バーカ。今、この時点、この瞬間に、お前と俺が同じナナセカズヤという名でつながれていることこそが、重要なんだっての」
ナナセカズヤは絢子さんの姿で大きく腕を広げた。
「わかるかよ？　この意味が」
汗びっしょりになりながらも、僕はかぶりを振るしかなかった。
「そうだろうな。じゃ、せっかくだ、説明してやろうじゃねえの。……まず、殺人狂の血を継ぐ村、翳谷村という存在があるとするだろ」
指を一本立ててみせる。
「ここに薔薇の形のあざを持った人間が生まれ、その人間は、ほぼ例外なく発狂して、血みどろの殺人に走る。そこまではいいか？」
僕に出来るのはうなずくことだけだ。
「だが、最初の誤解があるのはここのところだ。翳谷村の人間が受けついでいるのは、狂気の血なんかじゃあないのさ。

村に長いあいだ受けつがれ、煮つめられてきた血――それは、時空間を見通し、思いのままに時間を行き来することができる力、――だ」

「時空間を――行き来する――」

気味の悪い汗が背筋を流れ落ちる。

「……それはつまり、タイムトラベラーとしての能力――と、いうことか？」

「ピンポーン」

おそろしいほど現代人めいた口調でそいつは人差し指を振り、ゲラゲラと笑い転げた。

「正解だから、もう一つご褒美をくれてやるよ。

確かに翳谷村には狂気に陥って、殺人を犯すものが多い。

だが、それは狂気の血そのものが遺伝しているのとは違う。

それは時空を見通し、移動する能力によって引きおこされる二次的なものにすぎない。

言葉を変えていえば――」

立てた人差し指で、ナナセカズヤはまっすぐ僕を指さした。

「時空間を見る能力なんていうのは、どのみち人間の精神にとっては重荷にすぎるのさ。人間の感覚ってのは、基本的にはあくまで三次元の域内に限定されてるからな。精神のほうだって、それ以上の高次元に対応するようにはできていない。

だが、翳谷村の人間は、幼いときから日常的に自分のいる三次元の世界からさらに飛躍

した場所——平行する別の可能性世界や、四次元以上の高次の次元空間、七次元だの八次元だの、九次元だのをわけもわからず見て育つ。ということは」

くくく、とナナセカズヤは笑った。

「少しくらい頭がおかしくなっていても、まあ、無理のないことだと思わないか?」

「それと——そのことと、この連続殺人事件に、どういう関わりがあるんだ」

「そう、それだ」

指をピストルの形にしてウインクし、ナナセカズヤはソファの上にあぐらをかいて座りこんだ。

「まず、こうだ。

——ある時、この時空視能力者の村である翳谷村の血をつぐ人間の腹に、一人のサラブレッドが生まれたと思ってくれ。

彼は母親の胎内にいるときからほぼ完璧(かんぺき)な時空視能力を持っていた。居ながらにして、自分と世界のあらゆる時間軸、世界線を目のあたりにすることができた。

目の前の現実だろうが二百年先の未来だろうが、一万年もの過去だろうが、こいつにとっては同じことだった。同次元の時間軸の、違う世界線上に存在する平行世界——いわゆる、パラレルワールドって奴だな——も、お茶の子さいさいで覗(のぞ)き込めた。

覗くだけじゃなく、干渉することだって自在だった。干渉することによって、またさら

に平行する無限の可能世界線が生まれていくのを見るのがそいつの楽しみだった。それまでの血筋の能力者じゃ、別次元を見通すことはできてもいじることまではできなかったから、ま、よっぽどえらい力を持って生まれたもんさ」

「そいつは肉体的には胎児だったが、まだ感覚が三次元世界に馴(な)らされていないおかげで、意識はきわめて明瞭(めいりょう)だった。やがてそいつの精神は肉体をはみ出し、広がれるかぎりの時空に薄く伸び広がって存在するようになった。

だがそこで、アクシデントが起こった」

「アクシデント……？」

「力はあっても、まだ子供だったんだな。精神と肉体のつながりを薄くしすぎて、そいつは、肉体を失った。

胎児である自分の肉体を、うっかり別の時空間へ、流してしまったんだ」

僕はなにも答えることができなかった。頭ががんがんと鳴っている。時空視能力者？　サラブレッド？　肉体を失った？……

「それで肉体は消えたわけだから、そいつのことはただの流産として処理されて終わった。誰も、世界最高の時空視能力者が生まれていたことなど気づきはしなかった。

――だが、精神のみになったそのサラブレッド本人だけは、別だ」

ナナセカズヤの目はあやしく輝きだしていた。ソファを立ちあがり、ゆっくりとこちら

　果物の腐ったような匂いがした。僕は身動きもできず、そいつのやわらかな手の愛撫を受けた。絢子さんの肉体をまとった怪物は、うっとりと僕に頰を寄せると濡れた舌でぺろりと僕の顔を嘗めあげた。
「あ、絢子さんは、いったいどうしたんだ」
　震える声を、僕はむりやり振り絞った。
「い、居間で話を聞いたときは、彼女にそんなあざはなかったはずだ。それに彼女は翳谷村の生まれじゃない。その血を持ってたのは、伝衛門のはず――」
「誰が本当だって言ったよ？」
「……え？」
「――嘘さ。ただの」
　絢子さんの顔がにたりと笑った。
「芳野堂伝衛門は確かに翳谷村の出身者だ。だが、能力者の血と薔薇のあざを持っていたのは、奴じゃない。それは、芳野堂緋沙子だ。
　第一夫人の緋沙子こそ、あの呪われた村が最後に産んだ、悪魔の血の持ち主だった。芳野堂伝衛門は、たった七歳だった彼女の魔性に狂わされて、産まれた村の人々を皆殺

しにした、ただのかわいそうなあやつり人形さ」

そう――。

芳野堂伝衛門は、確かに翳谷村虐殺事件の犯人だった。

だが、彼に狂気を呼ぶ薔薇のあざを浮かばせる血は流れてはいなかった。

それを持っていたのは、緋沙子、当時たった七歳で、虐殺の唯一の生存者として新聞にも報道されていた、あの少女だったのだ。

薔薇のあざを持っていたがために周囲にうとまれ、ほとんど閉じこめられて育った少女は、その身につけた異能力とそれがもたらす奇妙な魅力を使って、自分の家で働いていた下働きの若者を、大人顔負けの媚態(びたい)でもってたぶらかした。

そして、監禁状態の自分を解放させるために彼を言いくるめ、村人全員を虐殺させて、自分はいかにもあやうく逃げ出したかのように、村はずれに隠れていたのだった。

幼い少女が虐殺の黒幕であるなどと疑う者がいるはずもなく、拘束をのがれた彼女は、これもまた人知れず逃げ延びていた伝衛門と再会し、成長したのちはその妻としての地位を得た。沢松艶子が持っていた、偉雄と貴子の幼いころかと思われた古写真、あれは、若き日の芳野堂伝衛門と、芳野堂緋沙子に他ならなかったのだ――。

伝衛門は、この魔性の妻に溺(おぼ)れきっていた。しかし、薔薇のあざに呪われていたとはい

え、緋沙子自身がかなり驕慢で残虐な性格であったことは疑いない。

富豪の妻という立場に隠れ、思うがままに享楽と血をむさぼる緋沙子を、はじめはかばい通す決意をしていた伝衛門だったが、彼女に惚れていた分だけ、積み重なる不貞と醜聞、ないがしろにされる自分に、しだいに耐えきれなくなっていった。

そして偉雄と貴子の、二人の子供が自分の子供ではないとわかったとき、伝衛門は決定的に正気の域を一歩はみ出した。

自分のために大虐殺の罪まで犯した夫への裏切りを、緋沙子は誇らしげにさえしていた。詰問する伝衛門を、彼女は種馬、さかりのついたオス犬のくせにと罵った。逆上した伝衛門は妻にとびかかり、気がついたときには、緋沙子は、彼女が犠牲にしてきた何人もの人間と同様、動かぬ死体となって横たわっていた。

事態がよじれていったのは、ここからだ。

不貞の妻でも、彼女が死んだあとでさえ、緋沙子の魔性の魅力からはのがれられなかった伝衛門は、最愛の妻を自分の手で殺した事実に耐えきれず、それは、自分のほうに原因があったのだといちずに信じこんだ——

すなわち、狂える殺人者の血を継いでいたのはほかならぬ自分であり、緋沙子は、そのいまわしい狂気にまきこまれたあわれな犠牲者にすぎない。

悪いのはすべて自分であって、自分と、自分の子供たちの中には、いつか花開くかもし

れない殺人狂の資質が眠っている。
呪われているのは、自分だ。
自分こそが、悪魔なのだ。
この思いこみこそがのちに、仮面をつけて島へと引きこもり、別邸に二重壁を作らせ、子供を監視させる行為へとつながったのだった。愛する女が悪魔であることに、彼の精神は耐えきれなかった。それくらいなら、自分自身が悪魔であると思いこんだほうが、よっぽど楽であったのだ。
「しかし、やっぱり心のどっかじゃ本当のことを覚えてたんだろうなあ。百合絵なんて妙な女にひっかかったあと、伝衛門は、死んだ緋沙子にどこか似ている女を見つけて、たちまち夢中になった。没落した名家の子、ってことになってたが、実は子供の生まれないことを外聞が悪いと気にした親が、こっそり養子斡旋人から引き取ってきた娘——
この、大道寺絢子、つまり芳野堂絢子——をな」
ぐいと親指で胸を差した。
そこには、したたるような真紅の薔薇が、わずかに息づく女の白い肌になまめかしく息づいている。
「それじゃ、それじゃ、絢子さんは翳谷村の——？」
「どうやら昔、村の外へ出た傍流の血だったんだな。もともと血の濃い村だったから、緋

沙子の家系とも多少は血のつながりがあったんだろうさ。
亡き妻を思い出させる女を見つけて、伝衛門は狂喜した。大枚の金とひきかえに、人身(ひとみ)御供(ごくう)同然に買い取ってきた女でも、奴にとっちゃ愛する女の形代だ。
下へも置かずに大切にしたが、そこは、昔の思いこみと罪悪感が邪魔をして、男として手を出すことはどうにもできなかった。
そうするうちに、美しい彼女に目をつけたのは長男の偉雄だった。母親の緋沙子の血を受け継いだ奴は、殺人にふけるほどの知恵も度胸もなかったが、残酷かつ淫乱(いんらん)なのは、母親にまさるとも劣らなかった。
偉雄は処女妻のまま放っておかれていた絢子を襲い、犯した。
そして、絢子の胎内で、翳谷村から流れ出した二つの血脈が、結合した——」
「——……おまえか」
うめくように僕は言った。
「絢子さんの子供。絢子さんが偉雄に強姦(ごうかん)されて孕(はら)み、しかし、流産した子供——身体を失い、産まれなかった子供——おまえが、そうなのか……！」
「さあてねえ？　そこらへんはよくわからねえのさ。なんせ、時間なんて低級なもんは、俺には関係なくなっちまってるんでね」
わざとらしく首をかしげて、怪物はくくくと喉(のど)を鳴らした。

「おい、笑い事じゃないぞ。その身体はおまえの実の母親のものなんだ、わかってるのか？　どうして母親に、そんなひどい真似ができるんだ！　ただでさえ惨い目にあって、傷ついている絢子さんに、どうしてそんな」
ナナセカズヤは顔をしかめた。
「うっせえなあ。いいじゃんかよ、だってこの身体とりあえず使い心地いいし、それに、俺だっていちおう親孝行とかしてみようとか思ってんだぜ」
「なに？」
「あのなあ、なんで俺が、殺す奴をまず偉雄に決めたのかわかってるか？」
僕は口を開きかけて途中で止めた。
絢子さんは、芳野堂偉雄に強姦された。恋人である片桐さんのために守り抜いていた処女を汚され、女として、もっともひどい辱めを受けさせられた――。
「それじゃ……おまえは……」
「ま、そういうことさ」
勝ち誇ったようにナナセカズヤは言った。
「俺はな、好き勝手に殺す奴を選んでたわけじゃねえんだよ。ちゃーんと、こいつの憎い奴、殺したい奴、殺しても飽き足りない奴だけ選んでたんだ。偉いよなあ、ちゃんと、母親の仇をうってやってんだからよ。

偉雄はもちろん殺す。自分をさげすみ、身売りした娼婦のように扱った貴子も殺す。自分を金で買った芳野堂伝衛門もやっぱり殺す。せっかく会えた恋人の前で、自分に露骨な口をきき、恥をかかせた伊原も殺す。……

みんなみんな、死んじまえってわけだ。俺としてはだれ一人、自分じゃ選んで殺しちゃいないんだぜ、まったくのとこ」

そこんとこぜひわかって欲しいんだがねえ、とあきれたようにナナセカズヤは首を振った。あまりのことに、僕は身動きもできなかった。

「——ああ、そうそう、サラブレッドの話がまだ途中だったよな」

しばらく一人で感慨にふけっていたナナセカズヤは思い出したようにそう言うと、芝居じみた陽気さでぽんと手を打って、すらすらと先を続けた。

「ま、そんなわけで、肉体を失ったおかげで、そいつには時間も空間もまったく関係なくなった。もし肉体を持って生まれればかつてない狂気のタネになっただろう完全な時空視能力も、完全な理性と思考力ともども持ち続けることができた」

蜂谷が口にしていた『時空に偏在する』、『すべてを見通す』というのも当たり前だ。時間も距離も気にせずに、知りたいことをいくらでも知り、他人の肉体を借りて現れ、あらゆる場所に同時に出現することのできる彼を、蜂谷が〈神〉と信じたことはある部分ではうなずかされることだった。

「だが、目の前に広がる時空間を見わたすたびごとに、そいつの苛立ちは募っていった。——どうして、自分にはほかの人間と同じ、三次元の肉体がないのか……」

ため息のように声を細らすと、ナナセカズヤはふと気づいたように、

「言っとくが、人間の精神が三次元むきに調整されているように、そいつの精神は今や、完全時空視能力に合わせて調整されちまってるからな。本来なら、おまえたち三次元生物にそいつの思考を理解することは不可能なんだ。もし理解しようとすれば、翳谷村の連中同様、狂気に陥るしか途がない。

俺が言ってるそいつの考えとか、思考っていうのは、そういう高次世界で生きてる者の思考を三次元の人間にわかるように翻訳して喋ってるんだと思ってくれ。まったく、めんどくせえったらありゃしねえ」

舌打ちして、さらに続ける。

「一度なあ、自分で作ってみようかと思ったこともあったんだよ。身体をさ。ここんちの娘で、ちょっとは資質があるかと思うやつがいたんで蜂谷通してちょっかいかけてみたけど、駄目だね、ぜんぜん駄目。やっぱ翳谷の血に勝るものはねえんだな。うざくなってきたから火つけそそのかしてみたら、もう一人のほうが火つけやがんの。あれはあれで楽しめたけど、結局は、なんの役にも立たなかったからなあ」

拳が震えた。

「それは……茉莉絵ちゃんのことか。彼女まで毒牙にかけようと――」
「あー、そういや、そんな名前だったかもな」
それ以上の感慨は、ナナセカズヤにはまったくないようだった。和弥兄さま――と無邪気になついてきた茉莉絵ちゃんの澄んだ瞳を思い出して、僕は、腹の底に溶岩のような怒りが堅くしこるのを感じた。
「――そこで、そいつはかつて失った、自分自身の肉体を探し出すことにした。今使ってるこの女の肉体については、ま、マイクとかスピーカーとかと同じようなもんで、実際の自分の身体として固定してるわけじゃねえからな」
おかまいなしに、ナナセカズヤは話を続けた。しなやかな絢子さんの肉体を、自慢そうに叩いてみせる。自分の母親の身体を。一度は自分がその中に抱かれていたことのある、美しい身体を。
「まあな、見つけること自体は造作もなかったんだよ。なにしろ、あらゆる次元、あらゆる時間、あらゆる可能性世界を覗き込める能力者なんだからな。石を一個足もとから拾いあげるのと同様だ。肉体は、あっという間に見つかった」
また、ため息をついた。
「しかし問題は、どうやってそれを自分の肉体として固定するかってことだった。時空の構成っていうのは、おまえらが口で言うほど簡単でも単純でもねえんだよ。どん

なものであろうと、ある時空にいったん存在を開始すれば、そいつはそこの時間線に組み込まれ、それ独自の時間軸を内包するようになる。
時間軸というのは、まあおおまかに言って、現在をゼロとして、過去と未来をはかる目盛りが前と後ろにずっと刻まれているようなものだととりあえず思っとけ。本来はそんなに簡単なものじゃねえが、てめえら程度の知覚力じゃせいぜいそこらがいいとこだろ。
この時間軸は、ほかの存在の内包する時間軸とたがいに干渉しあい、相互に影響を与えつつ、未来と過去方向にむかって伸張を続ける。
言い換えれば、人間同士がなにか話し合ったり、他の物に何かしたりすれば、そこにはそいつがしたこととの影響が残る。お互い気持ちが変化したり、今まで居たものがいなくなったりする、それが、相互に影響を与えあうってこった。
こういうふうに、世界を構成する大時間軸っていうのは、その時空に存在しているすべてのものの内包時間軸が、密接に絡まることによって成り立っている。
そうだな、言ってみれば、ウールの毛糸みたいなものだ。
親殺しのパラドックスというのを聞いたことがあるか。タイムマシンで過去に戻り、結婚する前の自分の親を殺すことができるかという問題だ」
知らなかった。
「——なんだ知らねえのかよ。……時間旅行の不可能であることを証明するためによく持

ち出される、有名な命題の一つだよ。

もしタイムマシンで過去に戻って、親を殺すことができたとする。

しかし、親が結婚しなければ、自分は生まれない。

生まれないから、当然過去へ戻って親を殺すことはできない。

殺されなければ親は結婚するから、自分は生まれる。

生まれたんなら親を殺せるから、自分は生まれない……な」

肩をすくめる。

「そういうことなんだ。大時間軸はいろんな固有の内包時間軸の絡み合い自体が本体なんだ。ある時間軸の中から、たとえば人一人、一本の繊維を別の時間に無理に引っ張ってこようとすりゃ、毛糸がよれたり、もつれたり、時には切れたりしちまう。

すなわち、そいつの内包時間軸を時間軸全体から引きはがすことによって、その時空そのものに巨大な亀裂(きれつ)が走りかねない。

つまり、パラドックスだ。

こういうことが起こるから、時間旅行というのは成立しないと考える立場もある。

その場合、時間を過去に、あるいは未来に移動するというのは、同じ時間軸上にいくつも平行して存在する、さまざまな可能性のヴァリエーション——さっき言った、パラレルワールドへと移行することに過ぎないと考えることになる。

そうすると、その平行世界からそこの自分の身体を引っ張ってくればいいのか？　いや、駄目だ。
そいつ――自分の身体を求めるサラブレッドにとって、それじゃあ意味がなかった。時間軸も、平行世界も、そいつにとってはなじみのおもちゃだったが、もしほかの世界から自分の身体を連れてこようとしたとしても、自分と同じだけの能力を秘めてる可能性世界の自分なんてものは、まず見つけられなかった。
いれば、すぐに気づいたはずだ。あらゆる次元と時間を見通す力、そいつは文字通りのオンリーワン、古今の人類において最高の時空視能力者だったんだから。
もしもちょうどいい別の可能性世界の自分が見つかったとしても、無理に引っ張ってこようとすれば、そっちの自分とまたあつれきが生じる。
そう、二本の毛糸が、絡みあっちまうんだな。しかもこいつは、下手をすると他の世界に波及することにもなるので、よけいにたちの悪いことにもなりかねない。
で、やっぱり、自分がもと産まれたたった一本の時空軸上で処理してしまうしかない。パラドックスを起こさないようにしようと思えば、方法はただ一つ。それは」
「やめろ……」
僕は後ずさった。
耳をふさぎたい。塞がなければ。

この先を聞いてはいけない、けっして聞いてはいけないのだという思いで、頭の中が真っ白に煮えくりかえっていた。
ナナセカズヤはかまわず続けた。
「目当ての人間が、その存在する時間軸および、内包する時間軸に織り込みずみの事実として、過去、あるいは未来にゆき——」
「やめろ、やめてくれ……」
「……そこで織り込みずみの干渉を起こし、織り込みずみの結果を得るように、仕向けるしかないってことさ！」
「——やめろおおおお！」
僕は絶叫した。
「なんで怒る？　楽しかっただろうが、ええ？」
ナナセカズヤの哄笑（こうしょう）が爆発した。
「準備にゃ苦労したんだぜ？　時間上を何度も行き来して、あっちに手を入れ、こっちをひねくり、そっちとこっちを掛けあわせて。キネマ屋敷なんて、凝った舞台を造ってやったこっちの身にもなってくれよ。
あんまり大きく手を加えりゃまたまたパラドックスの餌食だからな、せいぜい慎重にやったんだぜ？　おかげでえらく手がかかったが、なに、退屈しなくってよかったさ。

迷わねぇように、ちゃんとガイドまでよこしてやったろ？　あんな冴えねぇ女の代わりに、とびきり色っぽくて、かわいい女をよう？」

「ナオミか……」

ナオミ。『あたしは、あなたのお世話をするためにおりますの』と何度も言った。『あたしは、選択された可能性の女』とも。

「あんな程度ならちょいちょいとできるさ。ここにいるはずだった片桐尚美という存在の可能性を選択しなおして、おまえの望む、おまえに都合のいい、おまえ好みの女にしてやった、そいつがあれさ。多少は俺も口を借りてたがね。

まあ、おかげでおまえの連れてきた、女のもともとの可能性存在は入る場所がなくて弾かれちまって、時間軸の外がわで宙ぶらりんてはめになったようだけどな」

「違う……僕は、あんな彼女を望んでいない！　あんなものは違う――」

「やれやれ、今さら何言ってんだよ。ちょっくら高位次元から見おろしゃ、おまえの心のなかなんざもういいってな具合に丸見えさ。

なんで蜂谷が俺のことを、神だなんて呼ぶのかまだわかってねえな。ま、あのおっさんもいいかげんうざかったから別にいいけどよ。

……あのな、全知全能ってのは、見えねぇものはねえしできねぇことはねぇから全知全能って言うんだ。俺がほんとにそういうふうなのかは知らねぇけど、てめぇらよりよっぽ

どものがよく見えるし、いろんなことができるのは確かさ。
　だから今さら、俺の前でかっこつけんなよ。白けるからよ」
　僕にはもう、できることは何もなかった。この怪物に、心と魂の隅々までもすべて踏みにじられ、汚しつくされたと感じた。僕は死んだように横たわり、涙が、とぎれなく鼻筋を伝って流れ落ちていくのをただぼんやりと感じていた。
「実際よ、全知全能なんてのはしょうもねえもんだよな。なにやったって、どう遊んだって、それが当然なんだからさ。いいかげんに飽きちまったってばよ」
　うずくまる僕を歯牙(しが)にもかけず、どこかしみじみと述懐すると、さて、とナナセカズヤは腰を伸ばした。
「そろそろ始めっかなあ。……ま、三次元の身体なんて入ってみりゃけっこう退屈かもしれんけど、一応、俺の生まれたふるさと次元なんだしな。いっぺんくらい体験しとくのも、悪かないだろ」
「やめろ……」
　涙を流しながら僕は跪(ひざまず)いた。
　キネマ屋敷の連続殺人――。
　あれだけの悲劇を巻きおこし、いくつもの人の命を奪い、友人になった人たちに多くの涙を流させた、この事件。

　それが、この怪物、この悪魔に、僕という人間を引き寄せるただそれだけのために、準備され、存在していたなんて――。

「あ、そうそう、ナナセカズヤって名前は、まあなんだ、マーカーっつうか、おまえをひっかけるフックみたいなもんだと思っとけよ。

　おまえをここにはめ込むにあたって、前もって準備しといた空白(ブランク)ってえかな。犯罪者であるナナセカズヤが、誰にも捕まらなかったのは当然さ。そいつは俺が、おまえがはまりこむための場所をちゃんと明けておくためにばらまいておいた、不在のダミーなんだからよ。

　口裂け女とかおまえも知ってるだろ、ま、ああいう、都市伝説のノリだ。ああ、これこそ、悪魔ってのが正しいか。実在してても切り裂きジャックとか、殺人鬼ゾディアックとか、捕まらずに伝説になってる奴がいるだろ。

　ま、いくつかは、俺が手ぇ出した結果でもあるんだけどさ」

　笑い、笑い、笑い、笑い――。

「――もともとの七瀬和弥も、一応ちゃんとこの時空には存在してるから、尚美とナオミみたいにバッティングしないようにちゃんと手は加えといたけどな。

　じゃ、始めるか」

　反射的に逃げようとした僕の顔を、女の両手ががっしりとつかまえた。

よろめいた背が、巨大なびっくり箱につきあたった。箱がごろりと転がった。中でドスンと音がして、傾いた箱のふたが勢いよく開いた。
色とりどりのリボンやバネつき人形といっしょに、どろんと灰色の目を見開いた老人の死体が転がり出て、僕に覆いかぶさった。
芳野堂伝衛門の死体。
僕は絶叫した。
「さあ、行くぜえ。目えおっぴらいて、よおっく見てろよおおお……」
怪物のぐるぐる回る瞳が、僕の脳髄をまっしぐらにつらぬいて覗き込む——。

その時見たものはとても言葉では表現できない。
今となっては、残っているのはぐるぐる回る光の渦、百万もの色と音と味と感触と匂いの洪水、それから……
表現しようとすればするほど、イメージは遠くに逃げていってしまう。僕は信じられないほどの苦痛に狂い、快楽に泣き、怒りに燃え、悲しみに叫び、あまりのおかしさに笑って笑って笑いつくした。
入り乱れる光と影の中に、さまざまな光景が浮かんでは消えた。『耐えられないわ』と貴子さんがおろおろしている蓉子夫人に言っている。『これ以上あの男の言いなりになる

のは厭よ。あたくしはあたくしのしたいようにします。意味もわからずおびやかされるのはもう沢山。あなたはもう目的を達したのだからいいかもしれないけど』後ろでベッドの中の子供が、布団の影で大きく目を見開いている……。

『お兄さま、ずっといっしょにいてくださいましね』顔を輝かせて見上げる幼い少女に、微笑んで返す〈お兄さま〉の顔。だが、少年めかしてしわを隠し、白粉をぬったその顔は、鷲鼻の、冷たい目をしたいやらしい中年男のものだ――。

胸を抱いてうずくまる、一人の美しい夫人。引き裂かれた胸元から白く豊かな乳房がこぼれ、光るような太股には無惨な青黒いあざがいくつもついている。『何をふくれていやがるんだ。てめえだって、楽しんだだろうが』男の捨てぜりふ。ドアを閉めて男が出ていくと、夫人は汚された自分の身体を抱いて、声も出さずに号泣する――。

永遠と同じ長さだけその責め苦は続いた。あと一秒の半分でも続けば、僕はその場で死んでいたろう。

突然、水から浮上するように、僕は覚醒した。

がっちりとつかまれていた手が外れ、床に倒れた僕は身体を丸めてえずいた。

頭の中に割れたガラスが流しこまれているようだった。瞼の裏の閃光に目がくらみ、ほとんど何も見ることのできない僕の視界に、二つの、重なりあう身体が揺れた。

「きさま……」

絢子さんの顔をした怪物がうめいた。
その唇から、泡を立てて鮮血があふれ出す。
その後ろに、片桐さんがいた。
鋭くとがったおもちゃのサーベルを低く構え、それを、怪物の背中からななめに突き刺している。
血にぬれた切っ先がふくよかな胸から突き出し、ランプの光にぬれぬれと光っていた。
「きさま、きさま……わかってるのか、この女を殺したところで、俺は消えねえんだぞ——俺は時空に偏在する——俺はあらゆる因果を知ってる——俺は——俺は——」
「そんなことはどうでもいい」
かすれた声で言って、片桐さんはサーベルを抜いた。
あふれる血とともに、がっくりと絢子さんがくずおれる。サーベルが音をたてて床に落ちた。膝をついた片桐さんは、絢子さんを胸に抱いて、静かに呟いた。
「僕は、彼女を救うと約束した。約束を果たした。ただ、それだけのことだ」
「きさ……、ま——」
まるでラジオの混線のようだった。絢子さんは凶暴な顔と穏やかな眠りの顔を目まぐるしくくり返し、がちがちと牙をかみ合わせて片桐さんの喉に手を伸ばそうとした。
だが、その口からもれる怪物の声はしだいに乱れ、細くなり、やがて無意味な雑音とな

って、ぷつんと途切れた。
すべては――終わった。
「絢子さん」
腕に抱いた恋人に向かって、彼はやさしく囁(ささや)いた。片桐光太郎にこんな顔ができるとは思ってもいなかったほど、それはやさしい、溶けるような微笑だった。
「――、ああ、あなた……」
瞼が震え、開いた。うるんだ小鳥のような黒い瞳が、彼を見あげてにっこり笑った。
「あなた、やっぱり来てくださった。うれしい……」
ほほえんだまま、絢子さんの表情は動かなくなった。
もう、二度と動かないのは明白だった。
片桐さんは死んだ恋人の髪を梳(す)き、静かに、その上に身を伏せた。
どこかずっと下の方で、ズーン……と音がした。
一呼吸置いて、また、腹の底を揺るがすような轟音(ごうおん)がとどろく。ずっと近い。
「片桐さん、ボイラーの爆発が始まった！　逃げないと……」
「君は行け。僕は、いい」
絢子さんの身体を抱いたまま、片桐さんは顔もあげようとしなかった。
「何を言ってるんですか、あなたまで死んでどうするんです！　さあ、早く！」

あなたの悲劇は僕のせいだ。絢子さんの悲劇も僕のせいだ。
芳野堂家の兄妹の死、芳川さんの悲しみと苦痛、加奈絵ちゃんと茉莉絵ちゃんの不幸、親を亡くした偉哉君の不幸、すべて悲劇は僕のために用意され、行われたことだった。
僕はいったい、あなたに、あなたたちに、どうやって償いをすればいいのだろう。
片桐さんはあの、うっすら碧（みどり）のかった目で僕を見た。
そこには何の感情も浮かんでいなかった。まるで路傍の石ころでも見るような目に、僕は、ひるんだ。
「片桐さん……！——あ、」
その時、まっ赤な火柱が僕の目の前に吹き上がった。
片桐さんと絢子さんの姿は吹き飛ばされるように見えなくなり、気がつくと、僕は轟々（ごうごう）と燃えるキネマ屋敷の前に、たった一人で倒れていた。
誰もいなかった。
僕は——ひとりぼっちだった。
「……片桐——さん！……」
静かに海霧が流れてくる。
ポケットの中に手帳がある。ちらつく炎の光に包まれて、僕は溺（おぼ）れるものが浮き輪に飛びつくように手帳にしがみつく。ここまでにあったことを、無我夢中で書きとめる。今、

こうやってしているように。書くはしから流れてくる霧がページをぬらし、インクの文字をにじませていく。ついさっき書いた文字すら、もう判読することはできない。それでも書く。書かずにいられない。燃える薔薇(ばら)、炎を内包した、玻璃(ガラス)の薔薇が僕を見おろしている。まるで天使のように、火に包まれて、それが落ちてくる。書き終えた手帳を手に、さあ、今、炎を抱いたガラスの真紅の薔薇が、僕の頭上に舞いおりる……

【日付のない手記】

君は今、眠っている。
その間に、僕はノートを開いてこのメモを書く。
あるいは、書かない。
あるいは、半分書いてやめる。
いろいろな可能性の中から、書くという行為を選び取る。そしてその行為の結果が目の前に広がっていくのを、ただ、淡々と見守る……。
とりあえず以前の例にならって、すでに確定したことどもを記しておこうと思う。
僕と君は、無事に二〇〇三年に帰還した。
目が覚めたとき、君は崩れ落ちた石からわずかに外れた壁ぎわに倒れており、僕は、山形になった瓦礫（がれき）のすきまにちょうど挟まるようにして助かっていた。二人とも、軽い怪我ですんだ。宿へもどると、戻ってこない僕たちを大勢の人が心配していた。そんな場所へ行くからだと、宿のおばさんにたいそう叱られた。二人で恐縮した。食事をし、眠り、翌日いっしょに東京へ帰った。
僕はキネマ屋敷殺人事件をあきらめ、別の事件で記事を書いた。記事はそこそこ人気が

出て、単行本にもなった。単行本もそこそこ売れた。僕には多少の印税が入り、それを資金に、僕は、君に結婚を申しこんだ。……

そして、君は今、眠っている。

僕のこれまでの行為のすべてはその他の数多い可能性を切り捨てることで成り立っている。ひとつの可能性を切り捨てるたび、目の前に、ハープの弦のように広がっていく幾多の可能性世界を僕は幻視する。

そのうちの一つに僕は立っている。ひとつの行為を選び取るたびごとに、無数に枝分かれしていく世界の数々を、僕は観る。

そのうちのいくつかに、君がいる。あるいは、君はいない。

ある可能性で君は僕と腕を組んでヴァージンロードを歩いている。

別の可能性では僕に首を絞められ、ナイフで滅多刺しになって血まみれで死んでいる。

また別の可能性では君が僕に毒を盛って殺し、多額の保険金をえてほくそ笑む。

すべて、可能性の話だ。

あの怪物は最後に、僕にとりかえしのつかない一撃を与えていった。

本来この身体にはいるはずであった精神に一瞬なりと触れたことで、どうやら、この肉体の中にも眠っていた時空視能力が開花したらしいのだ。

僕は、可能性が見えるようになった。

ひとつの行動を起こし、一つの選択をするごとに、無限に拡がって枝分かれしてゆく、世界の線が見えるようになったのだ。

鬚谷村の時空視能力者たちがなぜ狂気に陥るのか、僕にはわかった気がする。

結局彼らは、そばにいるのが自分のいる世界の友人なのか、それとも、別の可能性世界にいる友人と同じ人物が見えているだけなのかわからなくなって、殺しに走るのだ。

殺せる相手は可能性世界の人ではない。なぜなら、殺しという不可逆の現象は、その時点で世界線に大きな分岐を強いるからだ。

その人物が殺された場合、そして、殺されなかった場合の二つに。

糸の中心にピンを刺し、そこから糸を二本に裂いていくとすれば、殺人はまさに、このピンを打つ行為に相当する。

そして少なくとも、殺人というピンを打つ以前にいたその殺された人間は、間違いなく自分の属する世界線に属している人間だというわけだ。

自分が頭がおかしいという気はあまりしない。

しかし、本当におかしい人間は自分がおかしいということを絶対に認めないらしいから、あんがい、僕は本当に頭がおかしいのかもしれない。

幾人ものナオミを、あらゆる瞬間に僕は見ている。

片桐尚美。

君は、本当に存在しているのか？

片桐光太郎は、あのキネマ屋敷とともに死んだのだとする。

そうすると、祖父が早くに死んで結婚しなかった場合、孫である片桐尚美は生まれえないから、僕とは出会う道理がない。

しかし、僕が片桐尚美と出会わずあの手帳を受けとらず、過去へ飛ばなければキネマ屋敷の殺人はなかったのだから、片桐光太郎は死なず、片桐尚美も生まれることになる。

しかし、片桐尚美が生まれ、僕に手帳を届ければ、キネマ屋敷は存在することになるのだから、片桐光太郎は死に、片桐尚美は生まれない。

パラドックスだ。親殺しのパラドックス。

あの屋敷で現れたメイド姿のナオミ、あれは君だったのか？　選択された可能性のナオミ。それは、君とは同一人物なのか？

影のようにさまよい、時空のはざまで助けを求めていた君は？

そして廃墟（はいきょ）で気絶した以外なにも憶（おぼ）えておらず、ただ、事故にあってあやうく助かったとだけしか思っていない君は？

すべては可能性の一部だ。

しかし、無視できない一部だ。

そうしてそのすべての可能性の君が、日々、僕の中でひしめき合っている。

僕は毎日その中の一つを選び取り、そのほかの可能性の君を抹殺してゆく。穏やかに、眉一つ動かさず、楽しげに、笑みまでうかべて。

君は今、眠っている。

だが、それが本当に僕の知っている君なのか？

それともただ名前と顔が同じだけの、白い腹をした見知らぬ女にすぎないのか？

見分ける方法はない。あるいは、ピンを刺せばいいのかもしれない。糸を二本に分けるピンを。殺人という名の、可能性のくさびを。

殺人という行為は人の歴史とともに存在する。

カインとアベルの例を引くまでもない。人は怒りから、恐怖から、欲望から、悪意から、好奇心から——またときにはこれといった理由もなく、人を殺してきた。

もし、その中に、自己を確認するための殺人という一項を含めるならどうだろう。

多くの殺人者が、殺しのあと、異常なまでの高揚感、一瞬のうちに自分が神になったような全能感を得たと語る。

それらは一見なんの理由もない行為に見える、だが、周到にねりあげられ、演出された

殺人は、常ならぬ祝祭の空間をそこに現出させる。
祝祭の、昂揚した光の中で殺人者は高らかに自らの存在をうたいあげ、うたかたの神の役割を引き受けて、足下に見おろす世界に、誇らしげにピンを突き立てる。
動物の中にさえ仲間殺しは存在する。だが、〈我〉という概念をもたない彼らは、自分自身の実在を実感するための殺しに走る必要はない。彼らは自分と自分の世界の同一性を悩まない。彼らは、ピンを必要としない。
必要とするのは、それを自覚し恐怖する理性をもつ人間だけだ。
つまり、殺人こそは、もっとも人間的な行為に他ならない。

あの怪物はすべての時空に偏在すると告げた。
その彼でさえ、自分自身を確認せずにはいられなかった。僕という、かつて自分の肉体であった存在を呼びよせることで。
——しかし、それは本当に僕のことだったか？
長い長い人の歴史に、殺された人また人の群れ。そのうちのどれだけがただ人の営為であり、どれだけが怪物の介入によるものか、見分けるすべはない。
しかし自分を全能であり、全知であると称する彼が、そのうちのいくつかを感知しなかったとは考えにくい。

眼下に広がる世界線に気ままにピンを突き立て、そこから無限に枝分かれする糸を確かめるのが彼の楽しみであり、永遠に死なないあの怪物の、自己を確認する唯一の手段なのだ。死もまた自己の存在を確認する一手段になりうる、だが、死を知らない怪物は、ただ他者の死でしか自らを測ることができない。

おもちゃで埋まったあの屋根裏部屋は、そのまま彼の心象風景だ。気まぐれにおもちゃを壊し、人形を投げつけることで母親に自分を認めさせようとする子供のように、彼は、必死に自分を示さなくてはいられないのかもしれない。

おもちゃは世界であり、人形は僕たちだ。有史以来、累々と積み重なるおびただしい屍の上に、存在しない母を求める赤ん坊の泣き声が響きわたる――……

そして、時のはじまりからその果てまでも横たわる彼の歪みは、同じく僕俺私あたしわたし我己自分……と呼ぶ自己を持つ、僕たちに共通の病だ。

他者を圧殺することによって、僕たちは自己を確認する。それによって他者とは違う自分を実感し、世界を望ましい形に改変することのできる神としての自分に酔い、手ごたえもなく流れる時間の上に、真紅のピンを打ちたてる。

人が人であることを自覚した瞬間に、彼の存在は始まった。

アウシュヴィッツ。南京大虐殺。ヒロシマ・ナガサキ。――

自我を持つすべての人間とその歴史のうちに、怪物の悪意は偏在する……。

結局のところ、彼は目的を果たしたのかもしれない。

全知全能である彼が、あの時、片桐さんの背後からの一撃を感知できなかったとは、どうしても思えないからだ。

すべては織り込み済みだった。

ひょっとしたら、あの時、片桐さんに刺された絢子さんが息を引き取ることも。

そして僕が、こうして無事に現代に戻っていることさえも。

深夜、君は眠っている。

僕は君の部屋のドレッサーの前に座り、君の口紅を取りあげる。

鏡の中に、さまざまな可能性が揺曳（ようえい）する。メイド姿の君があやしく微笑む。芳川虚彦の首を抱いた芳野堂貴子が、サロメのようにあでやかに舞う。長いナイフを手にした絢子が、眠る片桐光太郎をユディトのように見おろす。幸せそうに。

すべては可能性の一環だ。

僕は口紅をとり、その先を肌にすべらせる。鎖骨の上に、真紅の薔薇（ばら）が描かれる。

君は眠っている。

僕は、糸の上にピンを打つだろうか。

今日？　それとも明日？

君は眠っている。

——動かぬその姿態の中に百万の世界を内包して、君は今、静かに眠っている。

F I N.

ガラス　バラ
玻璃ノ薔薇
ごだい
五代ゆう

角川ホラー文庫　H97-2　13073

平成15年10月25日　初版発行

発行者――田口惠司
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8555
営業(03)3238-8521
〒102-8177 振替00130-9-195208
印刷所――暁印刷　製本所――コオトブックライン
装幀者――田島照久

ISBN4-04-371102-6 C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川ホラー文庫 好評既刊

弟切草（おとぎりそう）
長坂秀佳

弟切草……その花言葉は『復讐』。ゲームデザイナーの公平は、恋人の奈美とのドライブで、山中事故に遭う。二人がやっとたどり着いたそこは、弟切草が咲き乱れる洋館だった。それは惨劇の幕開けでもあった。大人気ゲーム小説化。

彼岸花（ひがんばな）
長坂秀佳

有紗、融（とおる）、菜つみの三人の女子大生は、偶然京都行の新幹線に乗り合わせ意気投合、一緒に市内観光をすることに。しかし三人の行く先々で現れる無気味な舞妓姿の〈お篠さま〉、そして彼岸花の意味は？　弟切草ワールド第二弾！

寄生木（やどりぎ）
長坂秀佳

新作ホラーの構想に悩む作家の元にある日、奇妙な電話がかかってくる。「その小説を書くのは止めてください。〈ヒトラーの賭〉はすでに始まっている」。ベルギーの古都を舞台にした恐るべき殺人ゲームとは!?　弟切草ワールド三部作完結。

角川ホラー文庫 好評既刊

たたらの辻に…
ささやななえこ

「たたらの辻にまりつきそうろう――」。急死した祖母の家で、二人暮しを始めた義理の姉弟の道子と清美。かつて〝たたら場〟だった祖母の家で、道子の身を次々と怪異が襲う――。鮮烈な官能と恐怖を描いた、傑作コミック集！

ミノタウルス
ささやななえこ

「重い足をひきずってやってくる、あれは――ミノタウルス」。殺人・行方不明者が相次ぐ、名門ロスター家。調査に赴いたカードとジョーカーを見つめる、ロスター夫人の視線、仮面の男の視線――。心の奥底を震わせる恐怖傑作集！

生霊（いきすだま）
ささやななえこ恐怖世界

ささやななえこ

良二に恋い焦がれる浅茅優子の怨霊が〝生霊〟となって、恋敵の真理子と明美を襲う「生霊」、すさまじい嫉妬から自殺した女子高生の呪いがとりつく「鉄輪」、死霊が籠り復活する「空ほ石の…」等、オカルト・サスペンスの傑作！

角川ホラー文庫 好評既刊

玩具修理者
小林泰三

玩具修理者は何でも直してくれる。独楽でも、凧でも、ラジコンカーでも……死んだ猫だって……。現実と妄想の狭間に奇妙な世界を紡ぎ上げ、全選考委員の圧倒的支持を得た第二回日本ホラー小説大賞短編賞受賞作品。

人獣細工
小林泰三

パッチワーク・ガール。そう。私は継ぎはぎ娘。その傷痕の下には私のものではない臓器が埋められている。……臓器がゆっくりと蠢動し、じゅくじゅくと液体が染み出してくる。私のものではない臓器。人間のものですらない臓器。

レフトハンド
中井拓志

製薬会社テルンジャパンの埼玉県研究所・三号棟で、ウィルス漏洩事件が発生した。漏れだしたのは通称レフトハンド・ウィルス。それは致死率100％の、全く未知のウィルス。第4回日本ホラー小説大賞長編賞受賞作。

屋根裏の散歩者
江戸川乱歩

世の中の全てに興味を失った男が見つけた唯一の楽しみ。それは屋根裏の散歩だった——人間が人前では決して見せない醜態を眺めるといういうみだらな快楽の虜になった男は遂に完全犯罪を目論むが……。表題作他、名作三編を併せて収録。

化人幻戯
江戸川乱歩

美貌の元侯爵夫人に思いを寄せる二人の青年。その一人がある日、断崖から墜落死した！　自殺か他殺か？　混迷する捜査の最中、残る一人も殺害されてしまう……。殺人の奥に潜む人間の狂気を描いた、傑作推理小説。他に五編を収録。

暗黒星
江戸川乱歩

奇人資産家・伊志田鉄造の一家を血の惨劇が襲う。化け物屋敷のような洋館で、殺人事件が次々と起こり、その犯人を追う明智小五郎もまた凶弾に倒れてしまう……。怪奇ロマンあふれる表題作のほか、「お勢登場」「目羅博士」等収録。

角川ホラー文庫
好評既刊

飯田譲治　梓河人
アナザヘヴン(上)(下)

東京を震憾させる連続猟奇殺人事件が発生。犯人は殺害した被害者の首を切り、脳を料理して食べていたのだ。飛鷹と早瀬——二人の刑事が事件の真実にせまったとき、恐怖の扉が開かれた!!　サイコサスペンス巨編。

西荻弓絵
ケイゾク/シーズン壱　完全版

迷宮入り事件を扱う警視庁捜査一課弐係。IQ199の東大卒の警部補・柴田純は研修生として配属になった。彼女と弐係の個性派ぞろいのメンバーが、風化した難事件の真相に挑む。『野々村光太郎　弐係の最悪な日々　谷シャンテ〜ね』収録。

ケイド・メリル
佐脇洋平　金山愛子＝訳
ブレア・ウィッチ・ファイル
魔女の娘／暗室

ブレア・ウィッチ伝説に関する映画を撮ろうと森に入り、消息を絶った大学生ヘザーの従弟ケイドは、その謎を探り、膨大な調査ファイルを手にした。映画『ブレアウィッチ2』の邪悪な呪いに、より深く浸れるオリジナル小説！

ゲームソフト「玻璃ノ薔薇」より

ISBN4-04-371102-6
C0193 ¥629E
定価：本体629円（税別）

焼けた薔薇、毒入りワイン、仮面の女そして狂疾の血。それは、古い革表紙の手帳に遺された言葉だった——。東日タイムズの影谷貴史は、昭和4年に起きた『キネマ屋敷連続殺人事件』を調べていた。5人の男女が殺されていながら、犯人も被害者も不明であるというこの事件の謎を探るべく、貴史は事件現場の島に向かった。だが、たどり着いた瞬間、光に包まれ、気づくと、74年前の事件の渦中にいた。人気ゲームを小説化した戦慄のサイコ・ホラー！

H
97-2
Y629

五代ゆう

玻璃ノ薔薇（ガラスノバラ）

角川ホラー文庫

角川ホラー文庫 五代ゆうの本

晴明鬼伝
玻璃ノ薔薇（ガラスノバラ）

ISBN4-04-371102-6
C0193 ¥629E
定価：本体629円（税別）
9784043711024
1920193006292

焼けた薔薇、毒入りワイン、仮面の女そして狂疾の血。それは、古い革表紙の手帳に遺された言葉だった――。東日タイムズの影谷貴史は、昭和4年に起きた『キネマ屋敷連続殺人事件』を調べていた。5人の男女が殺されていながら、犯人も被害者も不明であるというこの事件の謎を探るべく、貴史は事件現場の島に向かった。だが、たどり着いた瞬間、光に包まれ、気づくと、74年前の事件の渦中にいた。人気ゲームを小説化した戦慄のサイコ・ホラー！

カバー　泉文社

CAPCOM

ガラスバラ
玻璃ノ薔薇™

この秋、ミステリーはゲームで。



発売元：カプコン
標準価格：6,800円（税別）

サイコサスペンスアドベンチャー ゲーム
松岡昌宏主演の「玻璃ノ薔薇」を小説化！

野性時代 新創刊記念 **秋のミステリフェア**

今月の新刊◎角川ホラー文庫

秋のミステリフェア
GO!GO! ちょっくらぶ
角川文庫55周年

玻璃(ガラス)ノ薔薇(バラ)



この秋、ミステリーはゲームで。

愛の一冊フェア

山本文緒
結婚願望

銀色夏生
家ができました

柳 美里
ルージュ

中村うさぎ
暴走してもいーじゃないか。

小池真理子
薔薇いろのメランコリヤ

群 ようこ
二人の彼

北川悦吏子・柴門ふみ
恋をする人しない人

内田春菊
犬のほうが嫉妬深い

梅田みか
愛人の掟 3

萱野 葵
ダイナマイト・ビンボー

来月の新刊

11 毎月25日発売



角田光代
幸福な遊戯

酒井順子
入れたり出したり

山藍紫姫子
花夜叉

三浦しをん
ロマンス小説の七日間

司馬遼太郎
新選組血風録　新装改版

■角川海外文庫
カレン・エセックス　訳／那波かおり
クレオパトラⅠ（上）（下）

クリスチャン・ジャック　訳／山田浩之
自由の王妃アアヘテプ物語2
二つの王冠

✚ 物語力から、すべてが始まる。
野性時代
11月12日新創刊！

●都合により書名・発売日など変更される場合があります。

ちょっくらブンコしよう。
角川文庫
最新刊
毎月25日の発売です。
※定価はすべて本体表示（税別）です。都合により定価が変更される場合があります。ご了承下さい。

秋のミステリフェア

野性時代 新創刊記念

内田康夫
貴賓室の怪人「飛鳥」編
その時、豪華客船は巨大な密室と化した――！ 浅見光彦、世界の大海原へ。 590円



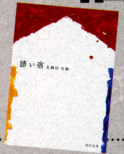

西村京太郎
十津川警部「裏切り」
歌舞伎町を陰で操る黒幕と十津川警部との息詰まる頭脳戦！ 514円



赤川次郎
黒い壁
統一前のベルリンを舞台に、人間の欲望と愛憎を描く！ 476円



有栖川有栖
暗い宿
“旅は極楽”のつもりだったが……。火村&有栖川が挑む驚愕の完全犯罪！ 552円



森村誠一
棟居刑事の「人間の海」
棟居刑事が、現代社会の裏側に生まれる人間ドラマに挑む社会派ミステリ。 552円



島田荘司
ハリウッド・サーティフィケイト
「虚構の街」で多発する猟奇殺人。なぜ女優の子宮は奪われた!? 952円



司馬遼太郎 他
縄田一男＝編
新選組興亡録
「誠」に生きた男たち、「新選組」の興亡を描くアンソロジー。 705円

新選組烈士伝
「義」に殉じた男たち、「新選組」隊士の運命を描くアンソロジー。 743円




いしかわじゅん
鉄槌！
不条理裁判に立ち向かう！ 629円



memo 2004 マイメモリー文庫
イラスト／MAYA MAXX
あなたの1年を好きなように綴れる本。便利な月間、年間カレンダー付き。 343円

佐藤大輔
凶鳥〈フッケバイン〉ヒトラー最終指令
ヒトラーが戦局を逆転するために怖れ、求めた凶鳥とは？ 590円

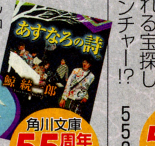


鳥飼否宇
密林
沖縄の原生林で繰り広げられる宝探しミステリ＋ネイチャーアドベンチャー!? 552円



角川文庫55周年記念書き下ろし作品

鯨統一郎
あすなろの詩
青春ど真ん中！ 本格ど真ん中!! 友情と殺意に満ちた本格ミステリ!! 629円



角川文庫55周年記念書き下ろし作品

霞流一
おさかな棺
魚まみれの驚愕トリック4連発！ 本格ミステリの躍り食いをご賞味あれ!! 629円



角川文庫55周年記念書き下ろし作品

角川ホラー文庫
五代ゆう
玻璃ノ薔薇
連続異常殺人事件の謎に新聞記者・影谷貴史が迫る！ 人気アドベンチャーゲームを小説化。 629円



角川海外文庫
ファインディング・ニモ 海の仲間のダイアリー
ディズニー映画史上歴代1位を記録！ かわいい魚たち満載のダイアリー。 476円
12月6日よりロードショー

リュック・ベッソン ジル・マランソン
入間眞＝編訳
ミシェル・ヴァイヨン
舞台はル・マン24時間レース！ 今、新たなヒーローが誕生する――。 629円
新春ロードショー



角川ソフィア文庫
川村裕子 訳注
新版 蜻蛉日記
現代語訳付き
I（上巻・中巻） 1000円
II（下巻） 952円



Present

「速聴」を紹介したビデオプレゼント

こちらのアンケートハガキで資料請求された方にもれなく、
「速聴」を紹介したビデオをプレゼントいたします。

該当する項目を○で囲み、空欄はご記入ください。

Q1 この「速聴」に関しての案内をご覧になった率直なご感想をお聞かせください。

・興味をもった　・もっと詳しく知りたい　・「速聴」を体験してみたい
・その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Q2 「速聴」によってどんな脳力を伸ばしたいですか。（複数回答可）

・集中力　・記憶力　・表現力　・判断力　・実行力　・決断力　・指導力
・その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Q3 Q2でお答えになった脳力を伸ばしたい理由をお聞かせください。（複数回答可）

・仕事の脳力向上と成功のため　・独立や転職のため　・資格取得のため
・語学習得のため　・人間関係の改善のため　・上がり症を克服したいから　・性格を改善したいから　・目標を達成するために必要だから
・物忘れやボケ防止のため　・その他（　　　　　　　　）

Q4 実現したい願望や達成したい目標がありましたら、お書きください。

・ある（具体的にお書きください）

・特にない
・その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Q5 これまでに自己啓発・脳力開発に関する書籍をご購読されたことはありますか?

A.　ある　　（書籍名／　　　　　　　　　　　　　　）
B.　ない

ご協力ありがとうございました。

郵便はがき

料金受取人払

新宿住友ビル内局承認

106

差出有効期間
平成17年1月
15日まで

★切手はいりません

163-0264

999

（受取人）
東京都新宿区西新宿2-6-1
新宿住友ビル36F 〒23号

スーパーリスニング・
インスティテュート・インターナショナル
「角川文庫 S03/10」2927係

ふりがな お名前		年齢	歳	既婚・未婚
		性別	男・女	
ご住所	〒 ☎（　　）			
携帯電話番号	（　　）			
お勤め先	会社名　ご所属 〒 ☎（　　）			
ご職業	1.会社役員　2.会社員　3.公務員　4.自営業（　　） 5.団体職員　6.主婦　7.学生　8.定年退職者　9.無職 10.契約社員　11.その他（　　）			

頭の回転が速くなる
大脳のツボを発見！

「最近、記憶力が落ちてきた」そう感じることはないでしょうか？ 人間、20歳を過ぎれば脳神経細胞の数がどんどん減っていくといいますから、仕方がないのかもしれません。しかし、がっかりする必要はありません。脳には可塑性という性質があり、刺激を与えれば衰えていく脳の働きを補うことができるのです。筋肉を鍛えると筋力が増すように、脳も速く聴くという刺激を受けることによって可塑性が生じ、脳力が増していきます。

実は人間の脳にはその1点を刺激するだけで、脳全体が活性化していくツボがあります。そのツボとは、目や耳から入ってきた情報を言葉として理解するために、重要な働きをしているウェルニッケ中枢です。私たちは、ウェルニッケ中枢で情報を再び唱え直す追唱という作業を行なって、言葉の意味を理解していますが、この追唱速度こそ、頭の回転速度だったのです。つまり、速く追唱できれば、それに比例して言葉の意味を速く理解でき、脳内で処理するスピードもこれまでとは比べものにならないほど速くなるのです。それは、言い換えれば頭の回転が速いということです。「速聴」は、このウェルニッケ中枢に高速音声を繰り返しインプットすることで、脳が一度に大量の情報に対応できるようにする脳力開発法なのです。

「頭がいい」と言われる人は、どこが違うのか?

「速聴」によって開発される脳力は、現在確認されているだけでも集中力をはじめ、記憶力、理解力など19の脳力があげられますが、ただ「聴くだけ」でこんなに多くの脳力が向上するのは、「速聴」ならではの大きな特徴だといえるでしょう。

「速聴」で脳の働きがレベルアップ！ 集中力や記憶力が驚くほど良くなる

さて、「速聴」の高速音声による刺激が脳を活性化させると、具体的にどのような脳力が開発されるのでしょうか。体験者にアンケート調査を実施しました。その結果、ほぼ全員が「集中力のアップ」を挙げています。高速音声を聴き取ろうとして自然と意識を集中するため、無理なく集中力が高まっていくのです。

さらに「記憶力が向上した」、「理解力が深まった」などはもちろん、考え方やヤル気といった性格面、行動面への好影響も見逃せません。

また、そのほかにも数多くの脳力の向上が報告されており、ただ「聴くだけ」でいろいろな脳力が同時に開発されるという点が、「速聴」の大きな特徴と言えるでしょう。

Column 仕事に人間関係に一気に差がつく 最新脳力トレーニング法

この刺激が脳に効く！ 短期間で驚くほど大きな変化

「速聴」は、速い音声を聴くだけで脳が鍛えられ、頭の回転が速くなるというシステム。何かを覚えたり特別な訓練をする必要がなく、集中してただ聴いているだけで効果があるそうです。体を鍛える場合のような苦痛も伴わないから、誰でもチャレンジできる脳力開発法だといえるでしょう。実際のやり方もいたって簡単。1日にわずか15分ほど聴くだけです。それだけで頭の回転が速くなり、脳全体が活性化。それによって多くの脳力がアップするのだからこんなに楽なことはありません。

速い音声を聴き取ろうとすれば、自然と意識を集中させるため、集中力がついてくる。集中力が高まれば、時間がかかっていた事務処理や報告書の提出なども、短時間で終わらせることができるようになる。人の話を素早く正確に聞き、理解できるようになれば、余裕を持って返答できる。冷静に物事を処理できるようになるので、観察力や洞察力にも磨きがかかる。苦手だったプランニングも、企画力や説得力が向上すれば、不得意分野ではなくなるでしょう。

体験者が証明する「速聴」の効果

体験者100人に聞く

集中力が高まった	95人
記憶力が向上した	92人
人の話がよく理解できるようになった	82人
本を読む速度が速くなった	79人
瞬間的に判断が下せるようになった	70人
考え方が前向きになった	62人
目的に対するヤル気が向上した	50人

「速聴」でどんな脳力がアップしましたか?
(複数回答)



10月30日 発売

プレイステーション2用ソフト
サイコサスペンスアドベンチャー

玻璃ノ薔薇（ガラスノバラ）

この秋、ミステリーはゲームで。

野性時代 新創刊記念
秋のミステリフェア



角川文庫